

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6

沼ヶ入遺跡（2次調査）

上ノ台館跡（1次調査）

川原田遺跡

馬場遺跡

新宿遺跡

2018年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財團
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 6

沼ヶ入遺跡（2次調査）

上ノ台館跡（1次調査）

川原田遺跡

馬場遺跡

新宿遺跡

序 文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めています。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、東日本大震災から被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた靈山道路と阿武隈東道路を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地や新たに発見された埋蔵文化財包蔵地が数多く確認されており、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、関係機関と協議を重ね、平成19年度以降、埋蔵文化財の範囲や性格を確かめるための分布調査を行い、その結果をもとに平成25年度から現状保存の困難な遺跡については記録として保存することとし、本発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路（靈山道路、靈山～福島）の建設に伴い、平成28年度に行った伊達市靈山町下小国地区に所在する沼ヶ入遺跡（2次調査）、上ノ台館跡（1次調査）、桑折町松原地区に所在する川原田遺跡、同町成田地区に所在する馬場遺跡、新宿遺跡の本発掘調査成果をまとめたものです。この報告書を県民の皆様が文化財に対する理解を深め、地域を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、桑折町教育委員会、公益財團法人福島県文化振興財团をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成30年2月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(靈山道路、靈山～福島)の建設に伴い、平成28年度に発掘調査を行った伊達市靈山町下小国地区に所在する沼ヶ入遺跡(2次調査)、上ノ台館跡(1次調査)、桑折町松原地区に所在する川原田遺跡、成田地区に所在する馬場遺跡、新宿遺跡の調査成果をまとめたものです。

沼ヶ入遺跡(2次調査)では、昨年度の1次調査で発見された中世屋敷跡のほぼ全体像が判明しました。また、交通の要衝に位置し、中世城館跡やその関連遺跡の分布が顕著な当地域にとって、貴重な新事例の追加になったと言えます。上ノ台館跡では尾根を分断する堀切と平場の一部が検出され、文献記録の無いこの城館跡の解明に具体的な手掛かりを得ることができました。

川原田遺跡では、平安時代の建物跡や井戸跡が確認されたほか、縄文時代の土器や石器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器などが出土しました。馬場遺跡では中近世頃と思われる陶磁器や柱の跡が見つかりました。また、新宿遺跡では、中世の堀や福島県内では調査事例の少なかった道路の跡が見つかるなど、重要な成果を得ることができました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にご協力いただきました国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市、桑折町ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人 福島県文化振興財団
理事長 杉 昭 重

緒　　言

- 1 本書は、平成28年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(靈山道路、靈山～福島)遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

沼ヶ入遺跡	福島県伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡	埋蔵文化財番号	0721300656
上ノ台館跡	福島県伊達市靈山町下小国字上ノ台	埋蔵文化財番号	0721300654
川原田遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字川原田	埋蔵文化財番号	0730100103
馬場遺跡	福島県伊達郡桑折町大字成田字馬場・稻山	埋蔵文化財番号	0730100105
新宿遺跡	福島県伊達郡桑折町大字成田字新宿・稻山	埋蔵文化財番号	0730100104
- 3 本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、本発掘調査を公益財團法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 5 公益財團法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査	菅原祥夫	文化財主査	渡邊春喜
文化財主査	植松晚彦(公益財團法人山形県埋蔵文化財センターより出向)		
文化財主査	廣川紀子	主　事	枝松雄一郎
		文化財主事	由井文菜
臨時のに、専門文化財主査	谷中　隆(公益財團法人とちぎ未来づくり財團より出向)、		
文化財主事	山田和史(公益財團法人東京都スポーツ文化事業団より出向)		
			が参加した。
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000・50,000の地形図を複製したものである。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

出土加工材・炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
--------------------------	---------------
- 9 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関等から協力・助言を頂いた。

伊達市教育委員会	桑折町教育委員会	桑折町まちづくり推進課	室野秀文
----------	----------	-------------	------

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「」、相対的に緩傾斜の部分には「」、後世の擾乱部や人為的な削土部は「」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (7) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 土器断面 禁忌器の断面は黒塗り、灰釉陶器はグレーとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で示した。
- (3) 網 点 は黒色処理を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。
- (4) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。
(例) 図1の2番の遺物…図1-2
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
(例) 1-2…図1-2
- (5) 遺物計測値 ()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存量を示す。

3 本書で使用した略号は、以下のとおりである。

伊達市	…DT	桑折町	…QR	沼ヶ入遺跡	…NGI	上ノ台館跡	…KN T
川原田遺跡	…KHD	馬場遺跡	…BBA	新宿遺跡	…SNZ	豊穴住居跡	…SI
掘立柱建物跡	…SB	柱列跡	…SA	井戸跡	…SE	木炭窯跡	…SC
土坑	…SK	溝・堀跡	…SD	道跡	…SF	性格不明遺構	…SX
遺物包含層	…SH	柱穴・小穴	…P	グリッド	…G		
遺構外堆積土	…L	遺構内堆積土	…ℓ				

4 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各編末に掲載した。

目 次

序章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	5
第3節 歴史的環境	8
第4節 調査方法	14

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	17
第2節 調査経過	17

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	19
------------------	----

　　調査成果の概要(19) 基本土層(19)

第2節 掘立柱建物跡	21
------------	----

　　3号建物跡(21)

第3節 土 坑	23
---------	----

　　10号土坑(23) 11号土坑(23) 12号土坑(23) 13号土坑(25) 14号土坑(25)

　　15号土坑(25) 16号土坑(25) 17号土坑(27)

第4節 溝 跡	27
---------	----

　　1号溝跡(27)

第5節 小 穴	27
---------	----

第3章 総 括

第1節 屋敷跡について	30
-------------	----

第2節 周辺遺跡との関係	31
--------------	----

第2編 上ノ台館跡（1次調査）

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	35
--------------	----

第2節 調査経過	35
----------	----

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	37
------------------	----

調査成果の概要(37)	基本土層(37)
第2節 木炭窯跡.....	37
1号木炭窯跡(39)	
第3節 土 坑.....	40
1号土坑(40) 2号土坑(41) 3号土坑(41)	
第4節 溝跡・平場.....	41
1号溝跡(41) 2号溝跡・1号平場(43)	
第5節 1号遺物包含層.....	44
概 要(44)	遺 物(44)
第3章 総 括	47

第3編 川原田遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況.....	51
第2節 調査経過.....	51

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層.....	53
調査成果の概要(53)	基本土層(53)

第2節 掘立柱建物跡.....	55
1号建物跡(55) 2号建物跡(59)	

第3節 柱 列 跡.....	60
1号柱列跡(60)	

第4節 井 戸 跡.....	62
1号井戸跡(62)	

第5節 土 坑.....	68
1号土坑(68) 2号土坑(68) 3号土坑(69) 4号土坑(69) 5号土坑(70)	
6号土坑(70) 7号土坑(70) 8号土坑(72) 9号土坑(72) 10号土坑(72)	
11号土坑(74) 12号土坑(74) 13号土坑(74) 14号土坑(75) 15号土坑(75)	
16号土坑(77) 17号土坑(78)	

第6節 溝 跡.....	78
1号溝跡(78) 2号溝跡(78)	

第7節 その他の遺構.....	80
1号性格不明遺構(80)	小穴群(81)

第8節 遺構出土遺物.....	85
-----------------	----

縄文土器(85)	弥生土器(86)	土 師 器(86)	須 恵 器(91)	灰釉陶器(91)
土 製 品(91)	石 製 品(93)			
第3章 総 括				96
第4編 馬場遺跡				
第1章 遺跡の位置と調査経過				
第1節 遺跡の位置と現況	99			
第2節 調査経過	99			
第2章 発見された遺構と遺物				
第1節 調査成果の概要と基本土層	100			
調査成果の概要(100)	基本土層(100)			
第2節 土 坑	102			
1号土坑(102)	2号土坑(102)	3号土坑(102)		
第3節 溝 跡	103			
1号溝跡(103)	2号溝跡(104)			
第4節 小 穴 群	105			
第5節 遺構外出土遺物	107			
遺 物(107)				
第3章 総 括	108			

第5編 新宿遺跡				
第1章 遺跡の位置と調査経過				
第1節 遺跡の位置と現況	111			
第2節 調査経過	111			
第2章 発見された遺構と遺物				
第1節 調査成果の概要と基本土層	113			
調査成果の概要(113)	基本土層(113)			
第2節 堅穴住居跡	115			
1号住居跡(115)	2号住居跡(116)			
第3節 土 坑	119			
1号土坑(119)	2号土坑(120)	3号土坑(120)	4号土坑(120)	
5号土坑(122)	6号土坑(123)			
第4節 道 跡	123			
1号道路(123)	2・3号道路(126)			

第5節 堀 跡	127
1号堀跡(128)	
第6節 溝 跡	130
2号溝跡(130) 3号溝跡(132)	
第7節 小 穴 群	132
第8節 遺構外出土遺物	139
第3章 総 括	140

付 編 自然科学分析

第1章 沼ヶ入遺跡出土炭化材の自然科学分析	
第1節 樹種同定	143
第2節 放射性炭素年代測定	145
第2章 上ノ台館跡出土炭化材の自然科学分析	
第1節 樹種同定	148
第2節 放射性炭素年代測定	154
第3章 川原田遺跡出土加工材と炭化材の自然科学分析	
第1節 樹種同定	160
第2節 放射性炭素年代測定	166

挿図・表目次

序章 遺跡の環境と調査経過

[挿図]

図1 一般国道115号相馬福島道路位置図	1	図5 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の 遺跡位置図	9
図2 道路工事計画図	2		
図3 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺地形分類図	6	図6 川原田・馬場・新宿遺跡周辺の 遺跡位置図	12
図4 川原田・馬場・新宿遺跡周辺地形分類図	7		

[表]

表1 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡一覧	10	表2 川原田・馬場・新宿遺跡周辺の遺跡一覧	13
-----------------------	----	-----------------------	----

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

[挿図]

図1 調査区位置図	18	図4 10~14号土坑・出土遺物	24
図2 遺構配置図・基本土層	20	図5 15~17号土坑	26
図3 3号建物跡	22	図6 1号溝跡・出土遺物	28

図7 小穴	29	図9 沼ヶ入遺跡と福田遺跡	32
図8 屋敷跡模式図	30		

第2編 上ノ台館跡（1次調査）

[挿図]

図1 調査区位置図	36	図6 2号溝跡・1号平場	43
図2 遺構配置図・基本土層	38	図7 1号遺物包含層出土遺物(1)	45
図3 1号木炭窯跡・出土遺物	39	図8 1号遺物包含層出土遺物(2)	46
図4 1～3号土坑	40	図9 上ノ台館跡縛張り図	48
図5 1号溝跡	42		

第3編 川原田遺跡

[挿図]

図1 調査区位置図	52	図16 土坑出土遺物	77
図2 遺構配置図	54	図17 1・2号溝跡・出土遺物	79
図3 基本土層	55	図18 1号性格不明遺構・出土遺物	81
図4 1号建物跡(1)	56	図19 小穴群(1)	82
図5 1号建物跡(2)・出土遺物	57	図20 小穴群(2)	83
図6 2号建物跡(1)	58	図21 小穴群(3)・出土遺物	84
図7 2号建物跡(2)・出土遺物	59	図22 遺構外出土遺物(1)	87
図8 1号柱列跡	61	図23 遺構外出土遺物(2)	88
図9 1号井戸跡(1)	64	図24 遺構外出土遺物(3)	89
図10 1号井戸跡(2)・出土遺物(1)	65	図25 遺構外出土遺物(4)	90
図11 1号井戸跡出土遺物(2)	66	図26 遺構外出土遺物(5)	92
図12 1号井戸跡出土遺物(3)	67	図27 遺構外出土遺物(6)	93
図13 1～6号土坑	71	図28 遺構外出土遺物(7)	94
図14 7～11号土坑	73	図29 遺構外出土遺物(8)	95
図15 12～17号土坑	76		

[表]

表1 小穴群一覧	84・85
----------	-------

第4編 馬場遺跡

[挿図]

図1 調査区位置図	99	図5 2号溝跡	105
図2 遺構配置図・基本土層	101	図6 小穴群	106
図3 1～3号土坑・出土遺物	103	図7 遺構外出土遺物	107
図4 1号溝跡	104		

[表]

表1 小穴堆積土 106

第5編 新宿遺跡

[挿図]

図1 調査区位置図.....	112	図10 2・3号道路・出土遺物.....	127
図2 道構配置図・基本土層.....	114	図11 1号掘跡.....	129
図3 1号住居跡.....	115	図12 1号掘跡出土遺物.....	130
図4 2号住居跡(1).....	117	図13 2・3号溝跡・出土遺物.....	131
図5 2号住居跡(2)・出土遺物.....	118	図14 小穴群(1).....	133
図6 1~4号土坑.....	121	図15 小穴群(2).....	134
図7 5・6号土坑・出土遺物.....	122	図16 小穴群(3).....	135
図8 1号道路.....	124	図17 小穴群出土遺物.....	138
図9 1号道路出土遺物.....	125	図18 道構外出土遺物.....	139

[表]

表1 小穴群一覧 136・137 表2 小穴堆積土 138

付 編 自然科学分析

[挿図]

図1 出土炭化材の顕微鏡写真(1).....	144	図13 マルチプロット図.....	159
図2 出土炭化材の顕微鏡写真(2).....	145	図14 出土加工材の顕微鏡写真(1).....	161
図3 暦年較正年代グラフ.....	147	図15 出土加工材の顕微鏡写真(2).....	162
図4 マルチプロット図.....	147	図16 出土加工材の顕微鏡写真(3).....	163
図5 出土炭化材の顕微鏡写真(1).....	149	図17 出土加工材の顕微鏡写真(4).....	164
図6 出土炭化材の顕微鏡写真(2).....	150	図18 出土加工材と炭化材の顕微鏡写真.....	165
図7 出土炭化材の顕微鏡写真(3).....	151	図19 出土炭化材の顕微鏡写真.....	166
図8 出土炭化材の顕微鏡写真(4).....	152	図20 暦年較正年代グラフ(1).....	169
図9 出土炭化材の顕微鏡写真(5).....	153	図21 暦年較正年代グラフ(2).....	170
図10 出土炭化材の顕微鏡写真(6).....	154	図22 暦年較正年代グラフ(3).....	171
図11 暦年較正年代グラフ(1).....	157	図23 マルチプロット図.....	171
図12 暦年較正年代グラフ(2).....	158		

[表]

表1 出土炭化材の樹種..... 143 表5 放射性炭素年代測定結果..... 156

表2 放射性炭素年代測定結果..... 147 表6 放射性炭素年代測定結果及び

表3 放射性炭素年代測定結果及び 暦年較正年代..... 156・157

暦年較正年代..... 147 表7 出土加工材と炭化材の樹種..... 161

表4 出土炭化材の樹種..... 149 表8 放射性炭素年代測定結果..... 168

表9 放射性炭素年代測定結果及び

曆年較正年代……168・169

写真目次

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

1 調査区遠景	175	8 14~17号土坑	179
2 調査区全景	175	9 17号土坑全景	180
3 3号建物跡全景	176	10 17号土坑断面	180
4 3号建物跡全景	176	11 17号土坑断面	181
5 3号建物跡検出	177	12 1号溝跡全景	181
6 3号建物跡	177	13 1号溝跡	182
7 10~13号土坑	178	14 基本土層、作業風景	182

第2編 上ノ台館跡（1次調査）

1 調査前状況	185	13 1号溝跡尾根頂部	192
2 表土剥ぎ	185	14 1号溝跡	192
3 調査区全景	186	15 1号溝跡西部検出状況	193
4 調査区遠景	187	16 1号溝跡西部	193
5 調査区遠景	187	17 1号溝跡作業風景	194
6 1号木炭窯跡全景	188	18 1号溝跡	194
7 1号木炭窯跡断ち割り全景	188	19 2号溝跡全景	195
8 1号木炭窯跡検出状況	189	20 2号溝跡	195
9 1号木炭窯跡	189	21 2号溝跡全景	196
10 1~3号土坑	190	22 1号遺物包含層	196
11 1号溝跡検出状況	191	23 1号遺物包含層出土遺物	197
12 1号溝跡全景	191		

第3編 川原田遺跡

1 調査区遠景	201	8 1号建物跡 柱穴(2)	205
2 調査区遠景	201	9 1号建物跡 柱穴(3)	206
3 調査区全景	202	10 2号建物跡検出	207
4 基本土層	202	11 2号建物跡全景	207
5 1号建物跡検出	203	12 2号建物跡 柱穴(1)	208
6 1号建物跡全景	203	13 2号建物跡 柱穴(2)	209
7 1号建物跡 柱穴(1)	204	14 1号柱列跡	210

15	1号井戸跡全景	211	27	遺構内出土遺物(2)	220
16	1号井戸跡全景	211	28	1号井戸跡出土遺物(1)	221
17	1号井戸跡	212	29	1号井戸跡出土遺物(2)	222
18	1~5・7号土坑	213	30	1号井戸跡出土遺物(3)	223
19	6・8~11号土坑	214	31	1号井戸跡出土遺物(4)	224
20	12~17号土坑	215	32	遺構外出土遺物(1)	225
21	2号溝跡	216	33	遺構外出土遺物(2)	226
22	遺構外遺物出土状況	216	34	遺構外出土遺物(3)	227
23	1号性格不明遺構	217	35	遺構外出土遺物(4)	228
24	小穴群検出状況	218	36	遺構外出土遺物(5)	229
25	小穴群全景	218	37	遺構外出土遺物(6)	230
26	遺構内出土遺物(1)	219			

第4編 馬場遺跡

1	調査区全景	233	5	小穴群	235
2	調査区全景	233	6	調査前風景	235
3	基本土層	234	7	出土遺物	236
4	1~3号土坑	234			

第5編 新宿遺跡

1	調査区遠景	239	13	2・3号道路	248
2	調査区遠景	239	14	1号堀跡(1)	249
3	調査区遠景	240	15	1号堀跡(2)	250
4	調査区遠景	240	16	1号堀跡(3)	251
5	調査区全景	241	17	2号溝跡	252
6	基本土層	241	18	小穴群(1)	253
7	1号住居跡	242	19	小穴群(2)	254
8	2号住居跡(1)	243	20	2号住居跡出土遺物	255
9	2号住居跡(2)	244	21	6号土坑・1号道路出土遺物	256
10	1~6号土坑	245	22	小穴群出土遺物(1)	257
11	1号道路(1)	246	23	小穴群出土遺物(2)	258
12	1号道路(2)	247			

序章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全5区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の2区間は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と靈山道路と靈山～福島の3区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成16年度から公益財団法人(平成24年10月以前は財団法人)福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成28年度は伊達市靈山町下小国地区、桑折町松原地区及び成田地区に所在する以下の5遺跡の本発掘調査を実施した。

◎伊達市靈山町下小国地区 灵山道路……沼ヶ入遺跡(2次調査)

靈山～福島…上ノ台館跡(1次調査)

◎桑折町松原地区 灵山～福島…川原田遺跡

成田地区 灵山～福島…馬場遺跡・新宿遺跡

公益財団法人福島県文化振興財団では、平成28年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約を受けて、遺跡調査部の職員6名を配置して発掘調査を実施した。4月当初は沼ヶ入遺跡、上ノ台館跡、川原田遺跡の発掘調査が確定していたものの、その調査面積は、川原田遺跡の3,700m²を除いて確定していなかった。したがって、以後の展開は、平成28年度の試掘・確認調査で要保存面積

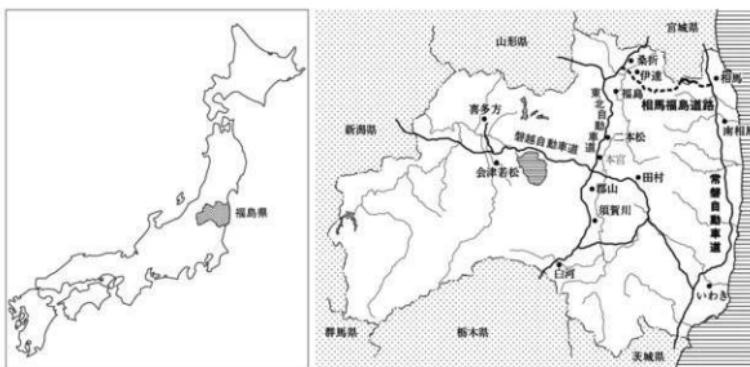


図1 一般国道115号相馬福島道路位置図

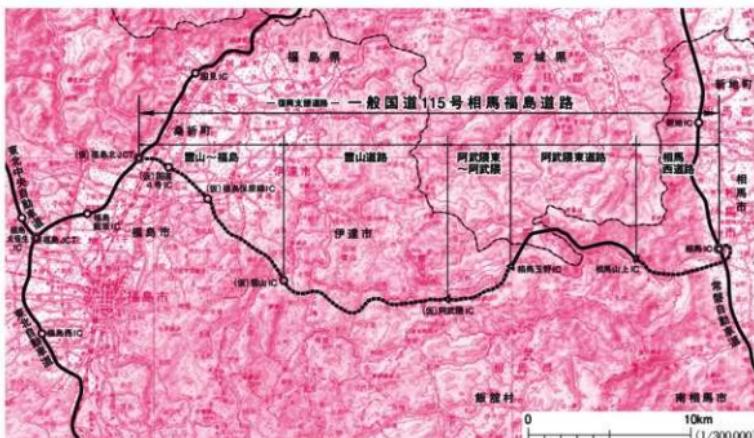


図2 道路工事計画図

が確定次第、順次追加していくこととなった。

以下では、伊達市と桑折町における調査について、別個に調査経過を記述する。また、以降の地理的環境・歴史的環境についても、両市町を別個に記述する。

伊達市雪山町下小国地区

4月19日に第1回連絡調整会議が開催され、調査の優先順位は沼ヶ入遺跡が高く、上ノ台館跡も条件整備が整い次第、沼ヶ入遺跡と同時進行で調査を進めることができた。また、今後の試掘・確認調査によって沼ヶ入遺跡の市道部分の要保存面積が出た場合は、本発掘調査が次年度以降になること、上ノ台館跡の伐採造成に伴う立会を福島県教育委員会が5月上旬に行い、北側要保存範囲の伐採は5月末までに終了することが決まった。

財團では、以上を念頭に準備を進め、上ノ台館跡の伐採と立会に関しては予定通りの工程で終了した。また、4月下旬の試掘・確認調査の結果を受け、5月16日付で県文化財課より沼ヶ入遺跡4,000m²、上ノ台館跡8,400m²の発掘指示が出された。

5月24日の第2回連絡調整会議では、沼ヶ入遺跡の調査期間を6月下旬～9月下旬とし、終了のめどが立ってから上ノ台館跡の調査を同時進行させること、プレハブ・駐車場用地は2遺跡の調査で共用することが決まった。

以上の経過を経て、6月27日から沼ヶ入遺跡の表土剥ぎを開始した。移転した家屋の基礎撤去に苦労したものの、7月8日には終了し、土坑、溝跡、小穴群の姿が見え始めた。作業員は7月5日から雇用し、表土剥ぎが済んだ場所から順次遺構検出を進めていった。

しかし、7月上旬は雨模様、中旬以降は蒸し暑い日が続き、作業が思うようにはかどらなかった。

それでも、益前には、調査区全体の70%の遺構検出を終了させ、残りの作業量が把握できる状態となった。

益明け後は、1次調査区で発見された2棟の掘立柱建物跡の延長方向に分布する小穴群を検討し、主屋と思われる廂付建物跡を確認することができた。これにより、中世屋敷跡の全体像が判明したことになり、貴重な成果になったと思われる。8月下旬は相次ぐ台風通過で雨水の浸水が危ぶまれたが、水はけのよい斜面地の調査区は大きな被害が無く、9月初旬に基本土層図の作成、遺構底面の最終確認を行った。

こうした経過を経て、9月7日に空中写真撮影を実施、9月9日に実質的作業を終了して、9月12日には現地引き渡しを行った。なお、調査区境界の市道下に範囲が延びる土坑が1基検出され、次年度の道路付け替え工事の際に、県文化財課が立会することになった。

一方、上ノ台館跡は6月上旬の確認調査の結果を受け、6月27日付で県文化財課より300m²の追加指示が出された。この場所は、排土置き場の予定地であったため、調査計画は変更を余儀なくされた。こうした経過を受け、表土剥ぎを8月1日から先行開始し、沼ヶ入遺跡の調査終了後の9月15日から東斜面300m²の調査を開始した。その結果、縄文時代後～晩期主体の遺物包含層が確認され、上ノ台遺跡の遺物包含層と一体的に形成されたものであることが判明した。10月4日には引き渡しを行い、排土置き場を確保した。

以降は、当初指示面積の上ノ台館跡8,400m²の調査に全力を傾け、北側から南側に向かって遺構検出を展開していった。調査区は起伏が激しい丘陵地のため、作業員の労災防止にはかなり気を配らなければならなかった。天候が安定していた10月中旬には、中世城館跡に伴う溝跡(堀切)、平場の一部、古代の木炭焼成遺構、縄文時代の落し穴の分布状況が見えてきた。その後は、強風に悩まされながらも作業は順調に進捗し、11月下旬にはほぼすべての遺構精査を終えることができた。とくに、溝跡は調査開始前に埋没しきらない窪地として観察されたが、発掘調査によって正確な規模と構造が判明し、重要な成果になったと思われる。

こうした経過を経て、11月29日に空中写真測量を実施、12月9日に一切の現地作業を終了して、12月13日には現地引き渡しを行った。

なお、下小国中組集会場を会場として、10月3日に「相馬福島道路遺跡発掘調査成果報告会」を実施しており、多くの地域住民の参加を得ることができた。

(菅 原)

桑折町松原地区・成田地区

平成28年度に本発掘調査を実施した伊達郡桑折町内に所在する遺跡は、松原地区の川原田遺跡、成田地区の馬場遺跡、新宿遺跡の3遺跡である。川原田遺跡は4月1日付で福島県教育委員会から3,700m²の本発掘調査指示がなされていたが、その他の遺跡は年度途中に行われた試掘・確認調査等の成果から調査が追加されたものである。

川原田遺跡の調査は、靈山町下小国地区的2遺跡よりも調査の優先順位が高いことが4月19日

の連絡調整会議において示された。そのため、他の遺跡に先行して調査を開始し、終了後は下小国地区の遺跡の調査に移行する計画で準備を進め、5月の連休明けにプレハブ・トイレを設置し、発掘器材を搬入して、16日から作業員の雇用を開始した。

5月末から表土剥ぎの作業に入ると、好天にも恵まれ、作業は順調に進んだ。連日30℃前後まで気温が上がることから、熱中症の予防に努めながらの作業となった。6月後半には表土下の遺物包含層の掘り下げに移り、21日には北東区の遺構検出に臨むことができた。

7月1日より重機による表土剥ぎが開始されると、ようやく調査が本格的に動き出した。しかし、表土剥ぎが進むにつれ遺物包含層が調査区全体に広がることが確認でき、その掘り下げ作業に労力が大きく割かれることが想定された。また、水田に利用されていた土地ということもあり、表土下の堆積土は粘性が強く水分を含むと滑りやすくなる一方で、乾燥して割れやすく、掘り下げ、検出作業などの進展を妨げた。

7月末には重機による表土剥ぎが終わり、8月の盆前までには調査面積の3分の1程度まで終了する見込みとなった。また、調査区の南部には遺存状態の良好な落し穴が散在し、調査区中央には柱穴とみられる小穴群が広がることが確認できた。

8・9月は例年なくゲリラ豪雨と台風の襲来が続いたため、調査区内の排水と復旧作業が繰り返されることとなり、作業効率は一気に低下した。

9月6日の連絡調整会議では新宿遺跡の調査を実施することが具体化した。条件整備が整い次第、川原田遺跡の調査を早めに終了し、新宿遺跡へ移行することが決定したため、その計画に沿って調査を急いだ。調査はなかなか進展しなかったが、数日の晴れ間を縫いながら作業を行い、ようやく9月末には遺物包含層の掘り下げを終えることができた。

10月に入ると天候が安定し、残りの小穴群の遺構精査に取りかかり、そのうちの一部から掘立柱建物跡2棟を確認することができた。また、調査終盤になって建物跡と同時期とみられる井戸跡も確認でき、井戸跡側部材の一部の取り上げを行った。7日には空中写真撮影を行い、18・19日にはプレハブを撤去して、11月2日には引き渡しを行って調査を終了した。

新宿遺跡の調査は、9月8日付けの福島県教育委員会の指示に基づき実施した。調査面積は1,850m²である。川原田遺跡から器材類や作業員等を円滑に移行できるように準備を進めた。10月13・14日に川原田遺跡から器材類を搬入し、プレハブ・トイレの設置を行い、17日には重機により建物基礎等の撤去に取りかかった。その後、19日から重機による表土剥ぎに着手し、すでに試掘調査で確認されていた道跡に直交して幅約3mの堀跡が確認できた。新宿遺跡の調査は、24日からは作業員による遺構の検出作業を進め順調に推移していた。

一方で、新宿遺跡の近接地の工事中の現場から遺跡が不時発見されたことから、工事計画と照らして本発掘調査が必要となった。その結果、10月27日付で福島県教育委員会より馬場遺跡600m²の本発掘調査の指示があり、急速、新宿遺跡から調査員、作業員を割いて調査に入ることとなった。馬場遺跡からは土坑、溝跡、小穴群が確認されたが、調査は速やかに終了し、11月8日には引き

渡しを行うことができた。

新宿遺跡の表土剥ぎは予定通り11月8日には終了し、調査区全体の遺構検出作業に取りかかった。17日には連絡所用のプレハブの引越しを行い、調査区に隣接して器材庫を設置し、連絡所に発電機を設置するなど、作業員の職務環境を整えた。調査は大きく分けて堀跡と、道跡の西側に広がる小穴群の精査を中心に行っていった。12月になると一段と気温が下がり、例年より降雨も多く、作業員の稼働率も低下していったことから、10名の作業員を補充し、22日までに小穴群と周囲の住居跡、土坑、溝跡の調査についてはほぼ終了した。

年明け1月10日より作業を開始したが、例年以上の降雪、積雪にみまわれ、除雪と排水を繰り返す中、堀跡の土量が想定よりも多く、調査は難航した。17日の連絡調整会議で1月末の引渡しが決まり、それに向けて26日に空中写真撮影を実施し、27日までに器材類を搬出し、翌週の31日に現地を工事側に引き渡した。

(廣川)

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置している。面積は13,782m²で、北海道、岩手県に次ぐ全国3番目の面積を有する。県土の約8割を山地が占め、南北に並行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地によって3地方に分割され、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。以下では、伊達市靈山町下小国地区、桑折町松原地区・成田地区的地区毎に記述する。

伊達市靈山町下小国地区

伊達市靈山町は中通り地方の北東部に位置し、大半が阿武隈高地の山中にある。地形は標高825mの靈山山塊を最高峰に、標高200m～500mクラスの山々が連なっており、その谷間には東北第2位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流(大石川、萩川、石田川、小国川など)が開削した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約1,100mmである。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・絹織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の2遺跡が所在する下小国地区は、標高532mの天井山北西麓から流れ出る小国川流域で、福島市と相馬市を結ぶ国道115号(中村街道)に面し、隣接の掛田地区は国道115号と国道349号が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考えるうえで、重要なと思われる。

次に、地質を概観する。下小国地区を含む靈山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山碎屑堆積物(靈山層、月館層など)が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物(岩石化していない礫・砂・泥など)が堆積し、斜面部



図3 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺地形分類図

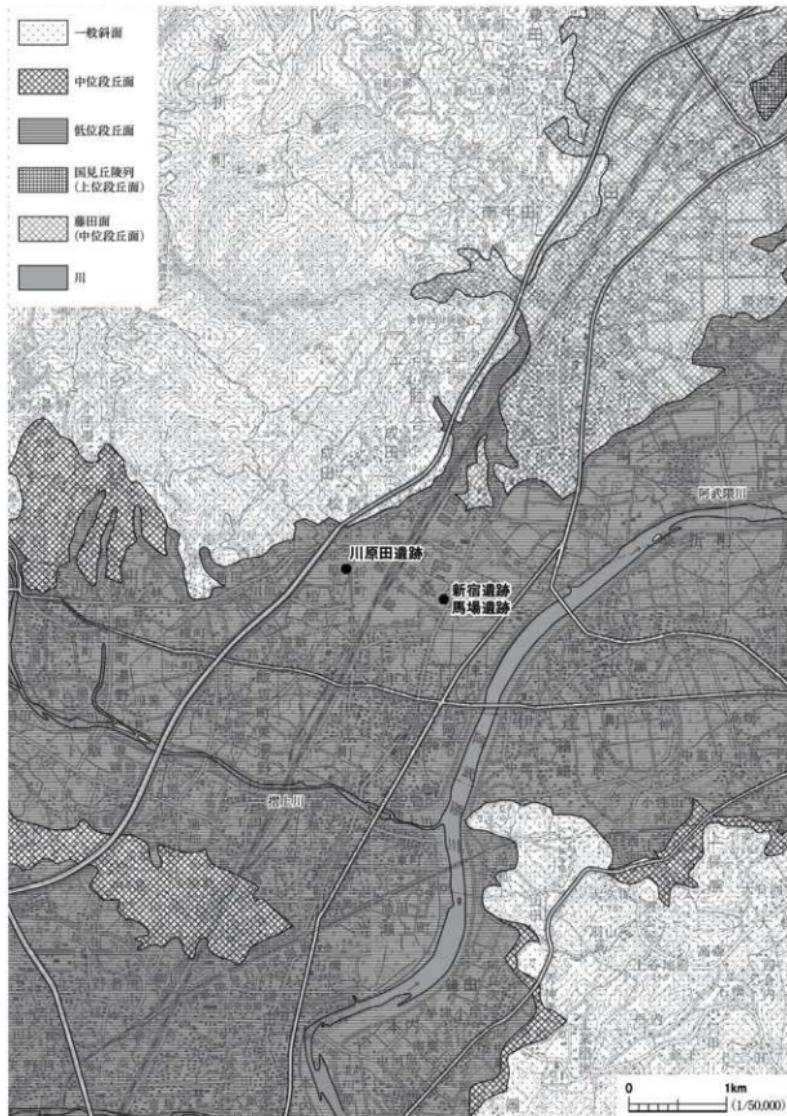


図4 川原田・馬場・新宿遺跡周辺地形分類図

などには、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物(火山灰を母材とする黄褐色土壤)層が散在するところもある。

(菅 原)

桑折町松原地区・成田地区

桑折町は、北緯 $37^{\circ} 51'$ 、東経 $140^{\circ} 31'$ の中通り地方北部に位置する。面積は42.97km²で、南から東は伊達市に、北は国見町に、西は福島市に、北西は宮城県白石市に接している。年間平均気温は13℃、年間降水量は1,166mmである。

地形は、町域西部に奥羽山脈の支脈である山地が連なり、町域南東辺には東北第2位の大河川である阿武隈川が北東に向かって流れる。また、大字北半田にある丘から国見厚櫻山にかけては、丘陵が断続的かつ一列に並び、国見丘陵列と呼称されている。

町域西部の標高が130~180mと、他地域より60~80m高く、概ね北西から南東に向かって傾斜している。町域最高点は北西部に位置する標高863.1mの半田山であり、最低所は阿武隈川が伊達市梁川町に流れ込む地点である。

町域全城は、全て阿武隈川水系に属する。町域を流れる阿武隈川の主な支流としては、産ヶ沢川、佐久間川、普蔵川、新堀川等があり、山地から土砂を運んで現桑折市街地が形成されている藤田面を堆積させたと考えられる。

藤田面の縁辺部は、阿武隈川等の浸食により急な段丘崖を成している。段丘崖には、小規模な開析谷が数多く発達しており、この段丘崖より下位が低位段丘面である。低位段丘面には、自然堤防が多数形成され、古来より繰り返されてきた阿武隈川の蛇行・氾濫の跡をうかがわせる。

次に、地質を概観する。町域西部の山地は、新生代第三紀の堆積岩を基盤としている。半田山周辺では、中期中新世~後期中新世の非アルカリ珪長質火山岩類が分布している。山地の縁辺部には、第四紀後期更新世の堆積段丘面である田中面、梅津面がある。

町域東部の低地は、山地側に分布している後期更新世の低位段丘堆積物層と阿武隈川沿いの後期更新世~完新世の海成または非海成堆積岩類が堆積する地層に、おおまかに分けられる。(枝 松)

第3節 歴史的環境

伊達市靈山町下小国地区

伊達市靈山町域及びその周辺では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観する。

旧石器時代 万田川遺跡(52)から、石刃と剥片が出土している。いずれも細石刃の出現以前のものとみられている。

縄文時代 縄文時代では、早期~前期の明確な集落跡はまだ発見されていない。現状では、早期後半の土器が靈山山頂から、前期前葉の土器が川向遺跡(8)から少量出土しているのみである。しか

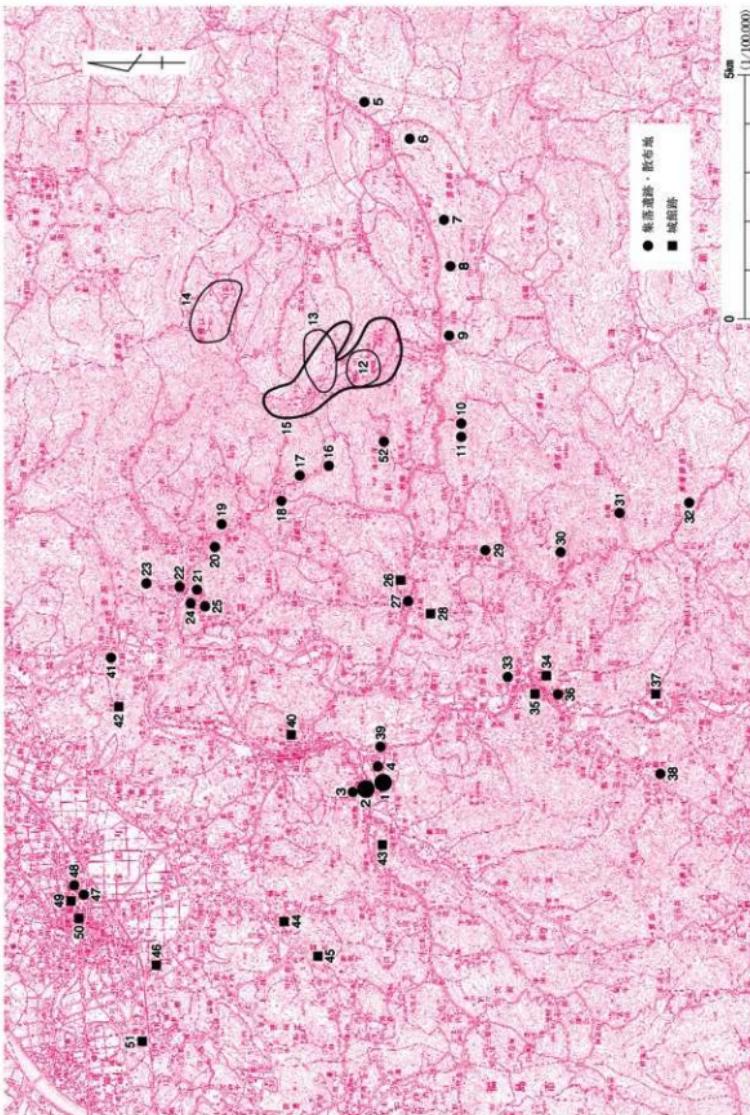


図5 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡位置図

表1 沼ヶ入遺跡・上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時期	No	遺跡名	所在地	種別	時期
1	沼ヶ入遺跡	靈山町下小國	集落/城館跡	中世	27	根古屋遺跡	靈山町石田	集落跡	縄文(後・晩)、弥生
2	上ノ台館跡	靈山町下小國	城館跡	中世	28	小館跡	靈山町石田	城館跡	中世
3	上ノ台遺跡	靈山町下小國	木炭窯、遺物包含層	縄文、中世以降	29	宝生原遺跡	月見町布川	環など	縄文、中～近世
4	福田遺跡	靈山町下小國	集落/城館跡	中世	30	坂場遺跡	月見町布川	製鉄開発	中世～近世
5	鍾ヶ岩遺跡	相馬市東玉野	木炭窯	近世初	31	砂場遺跡	月見町布川	製鉄開発	中世～近世
6	向山遺跡	相馬市東玉野	集落跡	縄文(早・盛)	32	古谷地遺跡	月見町月蓋	散布地	縄文(前・中)
7	庚申向A道跡	靈山町石田	木炭窯	縄文、近世	33	笈ノ内遺跡	月見町布川	集落跡	縄文(中)
8	川向遺跡	靈山町石田	集落跡	縄文(後・晩)	34	月見原跡	月見町月蓋	城館跡	中世
9	行合道B道路	靈山町石田	木炭窯	平安、中世末	35	段上原跡	月見町月蓋	城館跡	中世
10	熊屋敷B道路	靈山町石田	集落跡/木炭窯	縄文(後・晩)・中世	36	久保田遺跡	月見町月蓋	散布地	縄文(中・後)
11	照熱敷遺跡	靈山町石田	散布地	縄文(後・晩)	37	下千瀬藻原跡	月見町下手渡	障壁跡	近世後期
12	靈山寺山頂伽藍群	靈山町石田	寺院跡	古代～中世	38	三斗崎遺跡	月見町稚田	散布地	縄文(早～晩)
13	靈山寺玉置山上造瓦窯	靈山町石田	寺跡	古代～中世	39	行人田塚	靈山町下小國	絆塚、塚	中世～近世
14	靈山寺古當敷瓦窯	靈山町石田	寺院跡	古代～中世	40	懸田城跡	靈山町掛田	城館跡	中世
15	靈山城跡	靈山町石田	城跡	中世(南北朝期)	41	武ノ内道路	靈山町泉原	集落跡	縄文(中・後)、弥生
16	千石平遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	42	山田川大館	靈山町山野川	城館跡	中世
17	岩平B道路	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	43	小柄跡	靈山町下小國	城館跡	中世
18	家ノ入遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	44	根子解館跡	保原町所沢	城館跡	中世
19	小坂遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	45	富沢城跡	保原町富沢	城館跡	中世
20	橋本遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(中・後)	46	大鳥城跡	保原町上保原	城館跡	中世
21	津方遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	47	大地内A道跡	保原町大象	城館関係	中世～近世
22	宮福寺寺跡	靈山町大石	寺院跡	中世～近世初	48	西沼沢A道跡	保原町大象	集落/城館關係	古墳～近世
23	倉渡入遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(中・後)	49	保原城跡	保原町城ノ内	集落/城館跡	古墳～近世
24	松ヶ倉遺跡	靈山町大石	集落跡	縄文(中・後)	50	保原陣削跡	保原町宮下	障壁跡	近世
25	大石台遺跡	靈山町大石	散布地	縄文(後・晩)	51	高木御子(高木城跡)	保原町上保原	城館跡	中世
26	大船跡	靈山町石田	城館跡	中世	52	万田川道路	靈山町石田	散布地	旧石器

し、中期～後期になると遺跡数が増加し、橋本遺跡(20)、倉渡入遺跡(23)、松ヶ倉遺跡(24)、古谷地遺跡(32)、笈ノ内遺跡(33)、久保田遺跡(36)、武ノ内遺跡(41)などの集落跡が知られている。とりわけ、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の堅穴住居跡13軒、配石造構14基、屋外埋設土器74基、土坑113基が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕3基、土坑5基が検出されている。

続く晩期はさらに遺跡数が増加する反面、遺跡の規模は小さくなっていく。川向遺跡(8)、熊屋敷B遺跡(10)、熊屋敷遺跡(11)、千石平遺跡(16)、岩平B遺跡(17)、家ノ入遺跡(18)、小坂遺跡(19)、漆宝遺跡(21)、大石台遺跡(25)、根古屋遺跡(27)、三斗崎遺跡(38)、武ノ内遺跡(41)などが知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代 弥生時代になると、集落跡相は不明になる。しかし、根古屋遺跡(27)と武ノ内遺跡(41)では再葬墓が認められ、縄文時代晩期と地点をずらして継続したのは間違いない。根古屋遺跡で発見された弥生時代前期後半～中期前半の墓壙25基、土壙墓2基、土坑4基、人骨集積地2箇所、土器棺150個体は、東日本の代表的な再葬墓資料の1つと評価されている。

古墳時代 行合道B遺跡(9)から、中期後葉～後期前葉の土師器甕が出土しているが、集落跡は発

見されていない。

古代・中世 この時代を代表するのは、急峻な靈山山塊に営まれた靈山寺跡とその関連遺跡群(12~15)である。貞觀元年(859年)に、慈覺大師円仁が開基したと伝えられ〔靈山寺縁起〕、南北朝期の建武四年(1337年)に、北畠顕家が一時仙台平野から陸奥国府を移した当該遺跡群では、礎石建物群・溝跡・道路跡などの遺構とともに、土師器杯、須恵器甕、龍泉窯青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖などの多種多様な遺物が発見されている。

また、15世紀前半に創建された国指定史跡宮脇庵寺跡(22)は、伊達氏が再興した靈山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様は京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。さらに、広瀬川とその支流域に戦国期の城館跡が多いのもこの地域の特徴と言え、今回調査した上ノ台館跡(2)をはじめ、大館跡(26)、小館跡(28)、懸田城跡(40)、山野川大館跡(42)、小国城跡(43)がみられる。それらは、密接な関係を有していた可能性が考えられる。

集落跡では、行合道B遺跡(9)から9世紀末~10世紀初頭の堅穴住居跡1軒が発見され、山間部の貴重な古代の遺跡の事例となっている。しかし、中世の集落跡は未発見である。この他、行合道B遺跡(9)、熊屋敷B遺跡(10)から中世以降の木炭窯跡が発見されている。
(植 松)

桑折町松原地区・成田地区

桑折町では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要なものを概観する。

旧石器時代 平林遺跡(34)からは、後期旧石器時代前半期の石器が出土しており、県内最古の旧石器群の一つとされる。

縄文時代 中期の土器・土偶・石器等が出土した林泉寺前遺跡(54)や晚期の土器・土偶・石器が出土し、27基の配石遺構が確認された薩摩遺跡(8)等がある。なお、薩摩遺跡(8)は、隣接する二本木遺跡(11)と本来一体の遺跡と考えられる。

弥生時代 薩摩遺跡(8)や隣接する二本木遺跡(11)から少量の中期の土器が出土している。

古墳時代 町域北東の大字伊達崎から国見町塚野目にかけて、塚野目古墳群(36)が5世紀から7世紀初頭にかけて造営される。また、沖船場遺跡(25)や長者畑遺跡(20)等、阿武隈川の自然堤防上の伊達崎地区を中心に古墳時代の遺跡が分布する。

古代 奈良・平安時代に入ると、出土品が県指定重要文化財となっている大槻遺跡(12)をはじめとして、坊ノ内遺跡(60)、松原館跡(26)等で集落の一部が確認されており、集落の中心は山地に近い疊合地区に移っていくとみられる。また、町域南端、伊達市との境には、奈良・平安時代の須恵器窯跡である成田前窯跡(32)などの伊達窯跡群が分布する。

中世 中世の遺跡は、城館跡も含め多い。寺院跡と考えられる下万正寺遺跡(23)、中世前期の屋敷跡とみられる土井ノ内遺跡(69)、坊ノ内遺跡(60)が存在する。

桑折西山城跡(6)は、戦国時代の天文元年(1532年)、伊達氏14代稙宗が居城として築城した山城である。平場・堀切・土塁等の遺構がよく残っており、国の史跡に指定されている。また、この



図6 川原田・馬場・新宿遺跡
周辺の遺跡位置図

表2 川原田・馬場・新宿遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	川原田遺跡	松原字川原田	集落・住居	縄文・弥生・平安	41	大畠遺跡	伊達崎字大畠・百目木	散布地	奈良・平安
2	馬場遺跡	成田字馬場	集落	中世・近世	45	勝ノ日遺跡	伊達崎字東柳ノ日・西柳ノ日	散布地	古墳・平安
3	新宿遺跡	成田字新宿	集落・住居・道路	古代・中世・近世	46	樅遺跡	下郡宇守根・細河	散布地	古墳・平安
4	花水寺跡	平沢字花水	社寺跡	平安	47	下郡古船跡	下郡字古船	城郭跡	中世
5	駿河船跡	南平田字駿河船	城郭跡	中世	48	吉沼遺跡	伊達崎字吉沼・上郡字吉沼ノ口	散布地	古墳・平安
6	桑折山西城跡	万正寺字本丸・中館・西館・船表	城郭跡	中世	49	沖沢田遺跡	上郡字沖沢田・下沖沢田・石橋	散布地	古墳・平安
7	万正寺遺跡	万正寺字石業御・七曲・船ノ越	散布地	縄文	50	官前遺跡	上郡字官前	散布地	古墳・平安
8	鹿摩遺跡	南平田字鹿摩・北鹿摩	散布地	縄文	51	細町・塙田遺跡	上郡字細町・塙田	散布地	古墳・平安
9	伊達崎船跡	伊達崎字西船・東船	城郭跡	中世	52	中郡遺跡	上郡字西殿治町・西堀	散布地	古墳・平安
10	下郡小船跡	下郡字小船	城郭跡	中世	53	佐野遺跡	上郡字内守・佐野・下佐野・門下	散布地	古墳・平安
11	二木本遺跡	南平田字二木本	散布地	萬葉・中世・近世	54	林泉寺遺跡	上郡字林泉寺前・古音船	散布地	縄文
12	大槻遺跡	万正寺字大槻	散布地	平安・中世	55	文哲館跡	上郡字文哲館	城郭跡	中世
13	船ノ内・下郡船跡	下郡字船ノ内	散布地	縄文	56	左門衛館跡	上郡字左門衛館	城郭跡	中世
14	範夷内遺跡	下郡字範夷屋	散布地	弥生・古墳	57	古矢船跡	南平田字内坂・八幡台・白	城郭跡	中世
15	堂ノ前遺跡	下郡字唐	散布地	奈良・平安	58	制ヶ淵船跡	南平田字制ヶ淵	城郭跡	中世
16	平沢寺跡	平沢字一本松	塚	平安・中世	59	伝来寺跡	字下道場前	城郭跡	中世
17	平沢寺跡	平沢字山中・山田	散布地	旧石器	60	功ノ内遺跡	成田字功ノ内	散布地	平安・中世
18	常津船跡	万正寺字常津船・船ノ坂	城郭跡	中世	61	成田古船跡	成田字古船	城郭跡	中世
19	桑島遺跡	字桑島・東桑島・磐石	散布地	平安・中世	62	つじヶ丘天神	万正寺字天神森	社寺跡	中世・近世
20	長者遺跡	下郡字長者・古畑	散布地	古墳・平安	63	田植地遺跡	成田字中丸・東原前	塚	中世・近世
21	神十郎船跡	字船	城郭跡	中世	64	牛瀬・大久保遺跡	松原字牛瀬・大久保	散布地	縄文
22	桑折代官所・本道跡	字侍屋	その他	近世	65	町裏遺跡	字町裏	散布地	縄文・弥生
23	下万正寺遺跡	万正寺字下万正寺	寺社跡	中世	66	照野塚跡	伊達崎字宮ノ内	塚	古代・中世・近世
24	捕撃船跡	字庫場	城郭跡	中世・近世	67	下西船跡	伊達崎字下西	城郭跡	中世
25	沖船場遺跡	上郡字高畠・松木内・五郎内前	散布地	古墳・平安	68	万正寺中郡船跡	万正寺字中郡散	城郭跡	中世
26	松原船跡	松原字船	城郭跡	中世	69	土井ノ内船跡	成田字土井ノ内	城郭跡	中世
27	光福寺跡	字舞福寺	寺社跡	中世	70	坊ノ内船跡	成田字坊ノ内	城郭跡	中世
28	桑折・台遺跡	字台	窓跡	平安・近世	71	宮前船跡	上郡字宮前	城郭跡	中世
29	三反田遺跡	成田字三反田	散布地	縄文・弥生・平安	72	下郡山船跡	下郡字山ノ内	城郭跡	中世
30	一里塙遺跡	成田字一里塙	塚	中世・近世	73	中屋敷跡	伊達崎字中屋敷	城郭跡	中世
31	赤坂堂跡	字赤坂	窓跡	近世	74	中丸船跡	下郡字中丸	城郭跡	中世
32	成田堂跡	松原字成田前	窓跡	平安	75	御内内屋敷跡	谷地字御内内	城郭跡	中世
33	成田堂跡	或田字前削	窓跡	奈良・平安	76	大梅寺船跡	南平田字大梅寺	城郭跡	中世
34	平林遺跡	南平田字平林・蘭梅	散布地	旧石器	77	輪王寺船跡	南平田字材王寺	城郭跡	中世
35	大久保遺跡	万正寺字大久保	塚	中世・近世	78	東段船跡	字東段	城郭跡	中世
36	塙野目古墳群	伊達崎字木塙	古墳	古墳	79	鹿摩遺跡	字蘿摩	城郭跡	中世
37	日暮遺跡	下郡字日暮	散布地	縄文	80	大隅船跡	字西大隅	城郭跡	中世
38	下郡船跡	下郡字の麗	散布地	縄文	81	法円寺船跡	字北町	城郭跡	中世
39	寺山遺跡	成田字寺山・寺下	寺社跡	平安・近世	82	黒寺船跡	万正寺字下万正寺	城郭跡	中世
40	成田西船跡	成田字船ノ麗・松山	城郭跡	中世	83	舟本船跡	万正寺字倉本	城郭跡	中世
41	後原ノ馬場遺跡	伊達崎字後原ノ馬場	散布地	縄文・古代・奈良	84	上城船跡	平沢字上城	城郭跡	中世
42	猪ノ馬場船跡	伊達崎字前原ノ馬場・東原ノ馬場	城郭跡	中世	85	中城船跡	平沢字中城	城郭跡	中世
43	台跡	伊達崎字白	散布地	縄・古・平	86	元屋敷船跡	平沢字元屋敷	城郭跡	中世
					87	松原下船跡	松原字下船	城郭跡	中世

頃新たに、西山城麗の大槻遺跡(12)や二本木遺跡(11)に屋敷遺構が現れ、桑折町市街の元となる本町遺跡(22)に町屋状の建物がつくられるようになる。

近世 近世に入ると、本町遺跡(22)の南に隣接する地には、幕領代官所である桑折代官所(22)が置かれた。また、町域北部には、かつては佐渡金山、石見銀山とともに日本三大鉱山といわれた半田銀山がある。半田銀山の採掘は、昭和25年まで行われた。
(枝 松)

第4節 調査方法

沼ヶ入遺跡、上ノ台館跡、川原田遺跡、馬場遺跡、新宿遺跡の発掘調査では、原則的に(公財)福島県文化振興財団で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標IX系の座標を用いた。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10m単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に1・2・3…と算用数字、西から東にA・B・C…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA1・B2・C3…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土及び遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、竪穴住居跡・木炭窯跡・井戸跡・大型土坑の一部(方形竪穴状遺構)は4分割法、その他の遺構は2分割法を採用した。掘立柱建築物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用し、部分的には簡易造方測量し、現場で結線した。断面図については、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。さらに、調査面積が広く、標高差の大きな上ノ台館跡については、遺跡基底面の等高線の入った遺構配置図及び堀切の平面図をドローンによる空中写真測量で実施した。

遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。また、上ノ台館跡では、遺物包含層は確認調査のトレーンチを延長し、その土層断面の観察をもとに、遺物を層位的に取り上げた。

写真は35mm判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラを使用し、同一被写体の撮影を行った。また、沼ヶ入遺跡・川原田遺跡・新宿遺跡では、ラジコンヘリコプター搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録及び出土遺物については、報告書刊行後に(公財)福島県文化振興財団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。
(菅 原)

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

遺跡記号 D T - N G I
所在地 伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡
時代・種類 中世の屋敷跡
調査期間 平成28年6月27日～9月9日
調査員 菅原祥夫・渡邊春喜・植松暁彦
枝松雄一郎

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡に所在する。小国川南岸の河岸段丘上にあたり、伊達市中心部からは南東に約5km離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(中村街道)のルート沿いに位置する。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、東側に隣接して平成27年度調査した福田遺跡、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡(本書第2編)が位置している。

調査開始前の現況は、東向き緩斜面の荒地・畠地・旧住宅地である。調査区中央を東西に走る市道の両脇には、移転した家屋のコンクリート基礎がそのまま残っていた。
(菅 原)

第2節 調査経過

調査に係った作業日数は、延べ43日間である。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

6月第5週：27日(月)から重機による表土除去、器材の搬入を開始する。

7月第1週：表土除去を継続する。遺構の分布状況が見え始める。

7月第2週：5日(火)から作業員を雇用する。調査連絡所、調査区周辺の環境整備や器材の整理を行う。表土除去は継続する。

7月第3週：11日(月)に遺構検出を開始する。表土除去は継続する。

7月第4週：20日(水)には、表土除去は全て終了した。遺構検出を継続する一方、土坑や溝跡等の遺構精査を開始する。

7月第5週：遺構検出、遺構精査を継続する。28日(木)には、業務委託による測量基準杭打設を行った。

8月第1週：遺構検出、遺構精査を継続する。

8月第2週：遺構検出、遺構精査を継続する。11日(木)から17日(水)までお盆休み。

8月第3週：小穴群を検討した結果、主屋とみられる3号建物跡を確認。

8月第4週：相次ぐ台風接近のため、思うように作業進まず。遺構検出、遺構精査を継続する。

9月第1週：基本土層図の作成、遺構底面の最終確認を行う。

9月第2週：3号建物跡、1号溝跡、土坑8基、小穴19基の精査を完了する。7日(水)には空中写真撮影を行った。

9月第3週：12日(月)に県文化財課及び工事側の立ち合いの下、引き渡しを行った。
(菅 原)

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

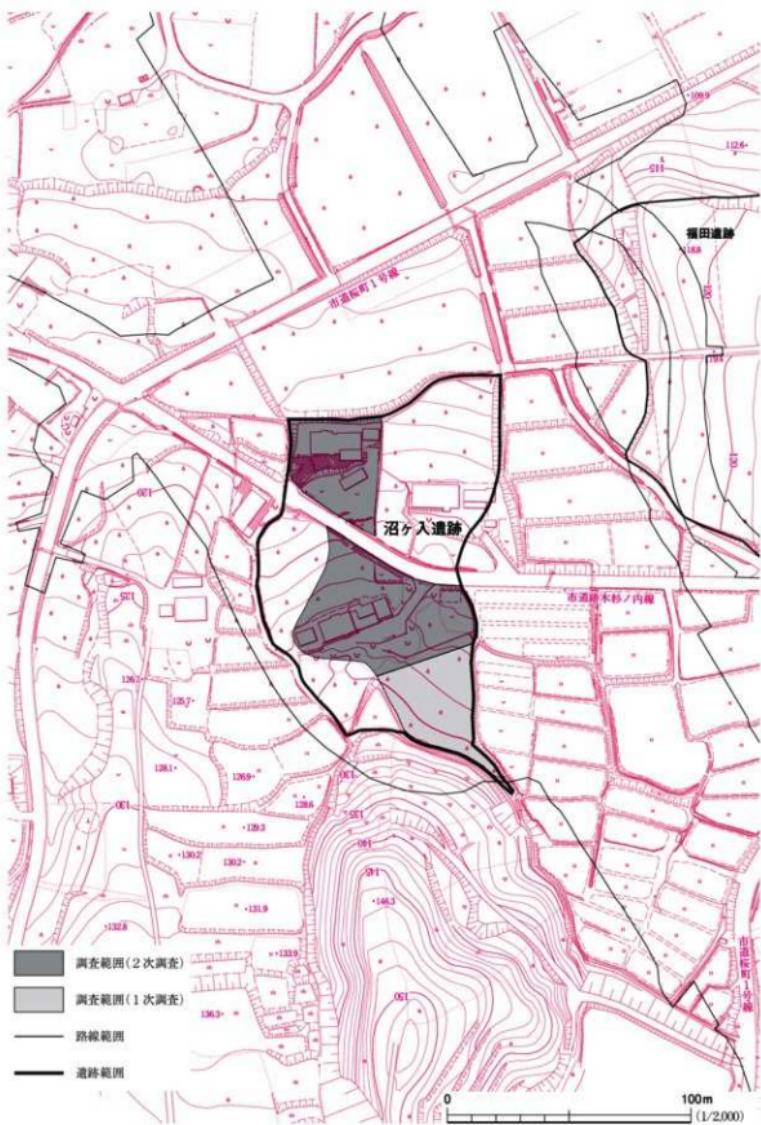


図1 調査区位置図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

2次調査区は北向きの緩斜面上に立地し、北西から南東方向に走る市道を挟んで、南北2つに分けられる。そこで、便宜上、南側を南区、北側を北区と呼称した。

南区は、隣接の1次調査区で中世の屋敷跡及び縄文時代の狩猟場が発見されたため、その範囲の広がりの把握を意識して調査を行った。その結果、1次調査区の掘立柱建物跡とほぼ主軸をそろえた廂付建物跡が検出され、屋敷跡の全体像を検出すことができた。しかし、縄文時代の落し穴は確認されず、範囲が斜面下位まで広がらないことが判明した。

一方、北区は遺構分布が稀薄で、埋没谷に堆積するLⅢ中からも遺物は出土しなかった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑8基、溝跡1条、小穴19基を数える。それらは營まれた時代と性格によって、次の3つに区分される。

- 中 世…3号建物跡、17号土坑、1号溝跡、小穴
- 近 世…10～12号土坑
- 不 明…13～16号土坑

基本土層（図2、写真14）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からLⅠ～VIに分層した。以下、各層について説明する。

- LⅠ 黄褐色土(10YR5/6)である。農地基盤整備に伴う盛土である。
- LⅡ 褐色土(7.5YR4/6)である。調査区の所々に分布する。層厚は15～35cmを測る。
- LⅢ 褐色土(10YR4/4)である。北区に分布し、埋没谷では層厚1m以上に達する箇所もある。本層上面が遺構検出面である。
- LⅣ にぶい黄褐色土(10YR4/3)である。LⅢとLⅤの漸移層で、主に南区北東部に分布し、LⅢの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は、15～30cmを測る。
- LⅤ 黄褐色土(10YR5/6)である。ややしまりのある基盤層で、調査区内で最も標高が高く、LⅢ・Ⅳの分布しない南区南部の遺構検出面である。層厚は30cm～1m以上を測る。
- LⅥ 黄褐色土(10YR5/6)である。礫を多量に含む基盤層である。 (菅原)

第1編 沼ヶ入遺跡(2次調査)

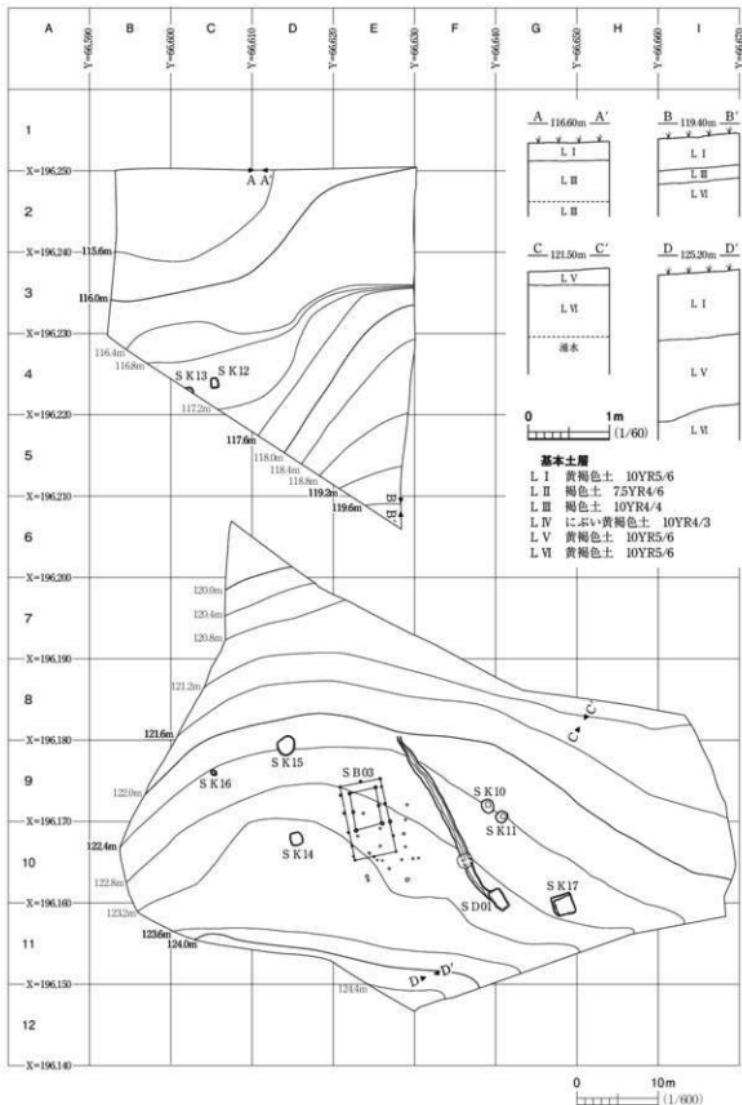


図2 遺構配置図・基本土層

第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、1棟確認された。位置関係や柱穴規模・柱間寸法などの特徴から、1次調査の2棟(1・2号建物跡)と関連するものと考えられる。

3号建物跡 S B 03

遺構・遺物 (図3、写真3~6)

本建物跡は、E 9・10グリッドのL V上面から検出された。切土壁近くに並ぶ1・2号建物跡の北延長線上に位置し、方向はそれらにはほぼ平行するN 12°Wを指す。構造は、1間×2間の身舎に2間×5間の廊が付く南北棟であり、身舎の位置は廊内の北側に偏る特徴が認められる。このことから、建物内部は北側が居住空間、南側が作業場空間に区分されていたと考えられる。

周辺には、小穴群が分布する他、東側6.5mに1号溝跡、西側7.0mに14号土坑が位置している。芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

◎身舎

【桁 行】

東側柱列(P 20-18) … 2.30m + 2.25m = 4.55m

西側柱列(P 15-17) … 2.40m + 2.35m = 4.75m

【梁 行】

南側柱列(P 15-20) … 3.30m

北側柱列(P 17-18) … 3.25m

◎廊

【桁 行】

東側柱列(P 13-8) … 2.00m + 1.80m + 2.30m + 2.10m + 1.00m = 9.20m

西側柱列(P 1-6) … 1.80m + 1.70m + 2.45m + 2.20m + 1.00m = 9.15m

【梁 行】

南側柱列(P 1-13) … 2.35m + 2.80m = 5.15m

北側柱列(P 6-8) … 2.60m + 2.45m = 5.05m

柱穴の平面形は円形基調を呈し、規模は、身舎が廊より大きく、深い。遺存状態は良好である。計測値は、身舎柱穴が開口部の径34~40cm、検出面からの深さ42~48cm、柱痕跡の径14~16cmを測り、廊柱穴は、開口部の径14~26cm、検出面からの深さ14~35cm、柱痕跡の径10~12cmを測る。以上の所見は、柱穴規模が1・2号建物跡に、柱間寸法が1号建物跡に類似しており、密接な関係がうかがえる。なお、P 6・7・9・15では、柱痕跡に炭化物が観察された。樹種同定の結果、P 9出土のものがイネ科で、それ以外はクリであった。遺物は出土していない。

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）

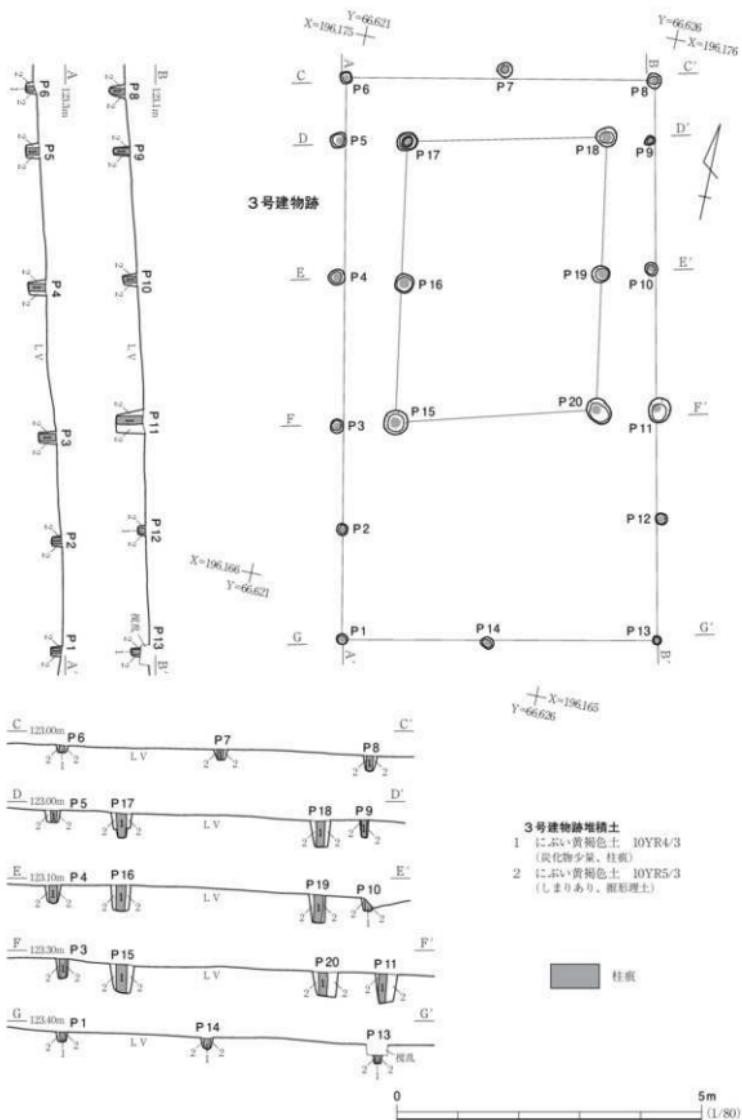


図3 3号建物跡

まとめ

本建物跡は、1・2号建物跡と共に中世屋敷跡を構成しており、規模・構造から、主屋に位置づけられる可能性が高い。年代は、P 6・7・9・15から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は13~14世紀頃であったが、本建物跡と関連する1号建物跡で出土した龍泉窯青磁及び中国渡来鏡の年代観から、15世紀と考えておく。

(菅原)

第3節 土坑

土坑は8基確認された。出土遺物や周辺遺構との関係から、中世、近世、時期不明のものに区分される。以下、番号順に述べる。

10号土坑 SK 10 (図4、写真7)

本土坑は、南区のF 9グリッドのL IV上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.70m、短軸1.44m、検出面からの深さは27cmである。重複遺構はなく、南東側70cmには、ほぼ同規模・同形態の11号土坑が認められる。

底面及び壁面は、鍋底状で、両者の境ははっきりしない。堆積土は2層に分層され、どちらも自然堆積土と考えられる。ℓ 1には炭化物が認められた。

遺物は、ℓ 2から陶器小片が出土した(図4-1)。色調は濃い赤褐色を呈し、外面には鉄釉が観察される。年代は、中世の可能性があるものの、特定できない。

本土坑は、近接の11号土坑と類似した特徴を備えたもので、営まれたのは11号土坑との関係から近世頃と思われる。

(菅原)

11号土坑 SK 11 (図4、写真7)

本土坑は、南区のG 9・10グリッドのL IV上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径1.46m、短径1.30m、検出面からの深さは43cmである。重複遺構はなく、北西側70cmには、ほぼ同規模・同形態の10号土坑が認められる。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味で直線的に立ち上がる。堆積土は自然堆積土1層で、特徴は10号土坑のℓ 1と共通する。このことから、本土坑は10号土坑と同時機能し、同じ状況下で埋没したものと考えられる。

遺物は、磁器碗が1点出土した(図4-2)。胎土・色調の様子から、大堀相馬焼と推定される。

本土坑は10号土坑と同時機能したと考えられ、営まれた時期は、近世頃に求められる。(菅原)

12号土坑 SK 12 (図4、写真7)

本土坑は、北区のC 4グリッドに位置し、L III上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、

第1編 沼ヶ入遺跡(2次調査)

短軸方向は北壁より南壁が若干長い。規模は長軸123m、短軸92cm、検出面からの深さは27cmである。重複造構ではなく、南北側2.0mに13号土坑が隣接している。

底面はほぼ平坦で、壁は直線的な急角度で立ち上がる。上部の崩れを勘案すると、当時は、ほぼ垂直に掘り込まれていたとみられる。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。

遺物は出土していない。

本土坑は、平面・断面形及び堆積土の特徴が、1次調査の3・6号土坑と共通する。このことから、状況証拠になるが、それらと同じ近世墓坑と推定される。

(普原)



図4 10~14号土坑・出土遺物

13号土坑 SK 13(図4、写真7)

本土坑は、北区のC 4 グリッドに位置し、LV上面で検出された。平面形と規模は、南西側が未調査の市道法面下に伸びることから、不明である。検出範囲では、東西1.00m以上、南北82cm以上、検出面からの深さ32cmの規模を確認した。重複遺構はなく、北東側20mに12号土坑が隣接している。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は不明である。

(菅原)

14号土坑 SK 14(図4、写真8)

本土坑は、南区のD 10 グリッドに位置し、LV上面で検出された。平面形は隅丸正方形を呈し、規模は長径1.57m、短径1.50m、検出面からの深さは56cmである。重複遺構はなく、東側7.0mに3号建物跡がある。

本土坑は、箱状に掘り込まれており、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。地山塊、焼土塊を多量に含み、一度に埋められている様子が明瞭にうかがえる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。

(菅原)

15号土坑 SK 15(図5、写真8)

本土坑は、南区のD 8・9 グリッドに位置し、LV上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径2.32m、短径2.10m、検出面からの深さは16cmである。重複遺構はなく、南西側9.0mに16号土坑がある。

底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。

(菅原)

16号土坑 SK 16(図5、写真8)

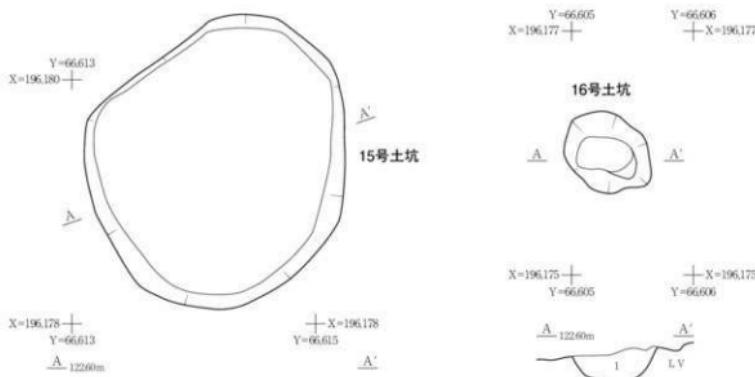
本土坑は、南区のC 9 グリッドに位置し、LV上面で検出された。平面形は不整形を呈し、規模は長径78cm、短径60cm、検出面からの深さは30cmである。重複遺構はなく、北東側9.0mに15号土坑がある。

底面及び断面は鍋底状をなし、両者の境ははっきりしない。堆積土は1層で、人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格は、不明である。

(菅原)

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）



1 黑褐色土 10YR3/2 (砂質炭化粒多量)
2 黑褐色土 10YR3/2 (砂質炭化粒多量, 地中植物生長)

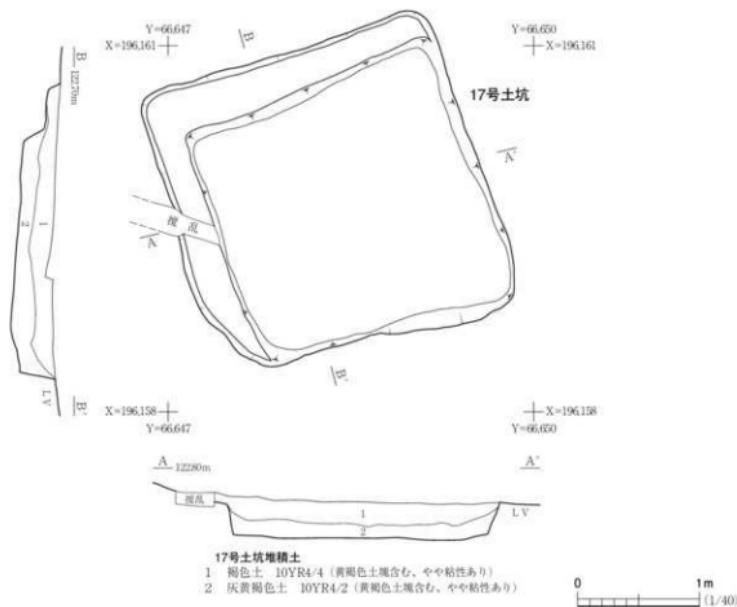


図5 15~17号土坑

17号土坑 SK 17 (図5、写真8~11)

本土坑は、南区のG 10・11グリッドに位置し、LV上面で検出された。平面形は正方形を呈し、北辺と西辺では、壁から約40cm内側の位置に段差がみられる。規模は長軸2.50m、短軸2.43m、検出面からの深さは50cmである。重複遺構ではなく、西側5.0mには、1号溝跡がある。

本土坑は箱状に掘り込まれ、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は2層に分層され、どちらも人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑の平面・断面形及び堆積土の特徴は、1次調査の1号土坑と共通する。このことから、中世の方形堅穴状遺構と考えられる。ただし、1号土坑にみられた廃絶後の窪みに焼石を投棄した痕跡は確認されなかった。

(菅原)

第4節 溝 跡

溝跡は1条のみ確認された。中世屋敷跡を構成した施設で、1号建物跡と密接に関連するものと考えられる。

1号溝跡 SD 01 (図6、写真12・13)

本溝跡は、南区のE 8・9、F 9~11、G 10・11グリッドのLV上面で検出された。重複遺構ではなく、西側6.5mに3号建物跡、東側3.5mに10号土坑、東側4.5mに11号土坑がある。溝跡は南東から北西方向に伸び、南東端は長方形の土坑状をなす。また、底面はその南東端から北西端へ傾斜している。このことから、いったん土坑状の掘り込みに溜めた水を、反対側へ排水する機能が想定できる。

全長は24.80mで、各部の計測値は、南東端の土坑状掘り込みが、長軸2.70m、短軸1.50m、検出面からの深さ20cm、その他が長さ22.10m、幅72~100cm、検出面からの深さ21~30cm、底面の比高差85cmである。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。ただし、 ℓ_3 は局所的な分布に限られる。遺物は、ロクロかわらけの底部片1点(図6-1)が出土した。平成27年度調査した福田遺跡2号溝跡出土のものと胎土・色調が類似している。

本溝跡は、出土遺物及び周辺遺構との関係から、3号建物跡に関連した区画溝兼排水溝と考えられる。

(菅原)

第5節 小 穴

小穴を19基確認した(図7)。南区のE 9・10、F 10グリッドのLV上面で検出され、それらの平面分布はまとまりがみられ、3号建物跡と一部重複するものがある。このことから、同建物跡に

第1編 沼ヶ入遺跡(2次調査)

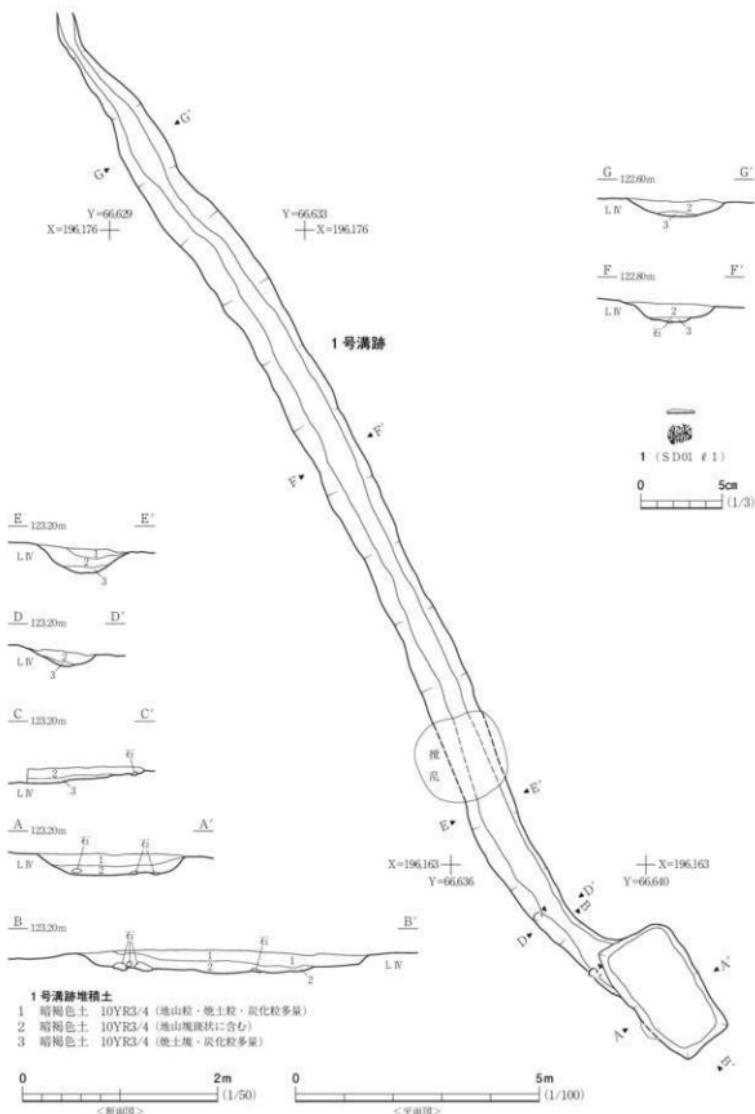


図6 1号溝跡・出土遺物

伴う柱穴、あるいは建て替えをした別な建物跡に伴う柱穴の可能性も推測したが、周囲を繰り返し遺構検査しても、他に組み合うものは発見されなかった。

各小穴の特徴をまとめると以下のようになる。

平面形：円形基調 深さ：検出面から平均23cm

断面形：円筒状 堆積土：にぶい黄褐色土 10YR5/3

大きさ：平均25cm 出土遺物：なし (植松)



第3章 総括

今回の2次調査によって、1次調査で発見された中世室町期の屋敷跡の全体像がほぼ判明した。そこで、以下ではこの点に焦点を絞って、調査成果の総括を行う。

第1節 屋敷跡について

【立地】小国川により形成された谷底平野に向かって、北側へ伸びる舌状丘陵の先端付近に立地する。微視的には東向きの緩斜面上であり、一部の斜面上位を掘削して、東西約60m×南北28mの敷地範囲を確保している（図8）。

【正面観と進入路】立地する地形から、正面観は東側に求められ、西側を見上げる景観となる。また、東西方向のほぼ中軸線上に浅い埋没谷があり、屋敷跡外からの進入路はこの自然地形を利用したと推定される。

【施設配置】屋敷跡には、正面観と進入路の基準に基づく計画的な施設配置が読み取れる。

A：正面観の基準（※ここでは東側を手前側と呼称する）

◎奥側……1～3号建物跡（すべての建物）



図8 屋敷跡模式図

◎手前側…1・17号土坑、1号溝跡（その他の施設）

B：進入路の基準

◎突き当り…2号建物跡（小型建物）

◎対称位置①…1・3号建物跡（大型建物）

◎対称位置②…1・17号土坑（方形堅穴状遺構）

【各施設の性格】

以上と構造の特徴をもとに、各施設の性格を推定してみる。

a：3号建物跡

大規模で、四面廻付の構造であることから、主屋に比定される。進入路の北側に配置した理由は、中村街道を意識したためであろうか。なお、本建物跡の斜面下位に掘削された1号溝跡は、主屋空間と屋敷地外（耕作地？）を区画するための施設（兼排水路）と考えられる。

b：2号建物跡

小規模で、正方形を呈することから、祠の可能性がある。

c：1号建物跡

長大な規模で、1m前後のきわめて狭い梁行寸法から、いわゆる「狹梁掘立柱建物跡」に該当する（川俣町教育委員会 1996）。具体的性格は不明であるが、進入路を挟んで主屋と対称位置にあり、類例が中世城館やその関連遺跡に限定されるため、上層クラスの屋敷地固有の重要施設とみられる。

d：1・17号土坑

中世の物流拠点にみられる「方形堅穴状遺構」に該当し（鈴木 2006）、土倉の性格が考えられる。進入路を挟んで正面手前側の対称位置にあり、2棟1組の関係が指摘できる。

【地鎮】

1号建物跡の北東位置の控柱跡から、貿易陶磁（龍泉窯青磁碗）、中国渡来銭（「至大通寶」・「永樂通寶」）を埋納した建物造営に伴う地鎮跡が確認された。北東の方角は、陰陽道の鬼門にあたり、貴重な事例と評価される。

【年代】

各遺構に重複がなく、分布が希薄なこと、出土遺物の年代観などから、屋敷跡の存続期間は15世紀のごく短期間に求められる。

第2節 周辺遺跡との関係

沼ヶ入遺跡と隣接する福田遺跡（図9）でも、方形堅穴状遺構が検出され、15世紀のロクロかわらけが出土している（福島県教育委員会 2016）。このことから、これらは同時存在だったと推測でき、小国川南岸の舌状丘陵先端にはさらに横並びで類似遺跡の分布が想定される。また、この沼ヶ入・福田遺跡を小国川対岸から見下ろす位置には上ノ台館跡（本書第2編）があるため、周辺地域の

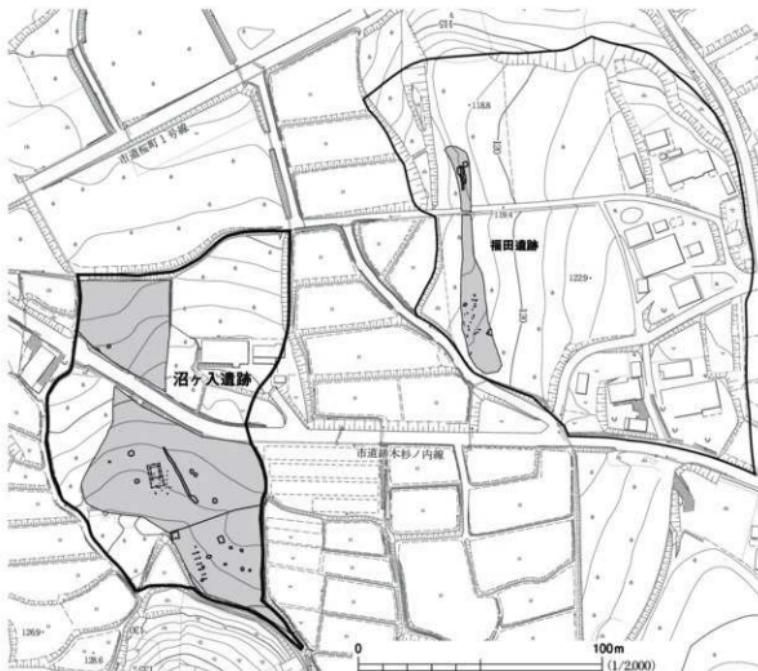


図9 沼ヶ入遺跡と福田遺跡

歴史的景観は、これらの調査成果を加味して行いたい。

(菅原)

引用・参考文献

- 川俣町教育委員会 1996 「梅庭遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
鶴谷和彦 1997 「中世の地鎮と銭貨」「出土銭貨」7 出土銭貨研究会
鈴木弘太 2006 「中世「堅穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号 日本考古学協会
福島県考古学会中近畿部会 1997 「かわらけ編年の再検討－11世紀～19世紀（その2）」『福島考古』38号
福島県教育委員会 2015 「福島県内遺跡分布調査報告22」
福島県教育委員会 2016 「一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告5」
雲山町 1992 「雲山町史 第1巻通史」

第2編 上ノ台館跡 (1次調査)

遺跡記号 D T - K N T
所在地 伊達市靈山町下小国字上ノ台
時代・種類 中世の城館跡ほか
調査期間 平成28年8月1日～12月9日
調査員 菅原祥夫・渡邊春喜・植松暁彦
枝松雄一郎

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

上ノ台館跡は、福島県伊達市靈山町下小国字上ノ台に所在する。地形的には、阿武隈高地山間部の小国川北岸にあたり、伊達市中心部からは南東に約5km離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(中村街道)のルート沿いである。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、北側に一部範囲が重複する上ノ台遺跡、南側の小国川対岸に沼ヶ入遺跡(本書第1編)が位置している。

調査開始前の現況は、起伏の激しい山林であり、遺構検出面の比高差は最大22mに及ぶ。今回の調査対象は、遺跡範囲の北半部である。

(菅原)

第2節 調査経過

調査に係った作業日数は、延べ72日間である。以下に、調査の経過について記す。

- 8月第1週：沼ヶ入遺跡の調査と並行し、1日(月)から重機による表土除去を開始する。
- 8月第2週～：8月11日(木)から17日(水)までお盆休み。あいつぐ台風接近に伴い、作業は思うように進まず、土砂流失対策等に追われるが表土除去を継続する。
- 9月第3週：14日(水)に器材を搬入。15日(木)に作業員による本格的作業に着手。優先する東斜面300mの遺物包含層の精査を開始。
- 9月第4・5週：表土剥ぎ、遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。
- 10月第1週：3日(月)に遺物包含層の精査を終了。近隣住民向けの成果報告会を実施する。4日(火)に県文化財課及び工事側の立ち合いの下、東斜面300mの現地引き渡しを行う。7日(金)に表土除去は終了。遺構検出、遺構精査を継続する。
- 10月第2週：斜面部での安全に気を配りながら遺構検出、遺構精査を継続する。
- 10月第3週：溝跡、平場の一部、土坑等の遺構の分布状況が見え始める。
- 10月第4週：遺構検出を継続する。1・2号土坑の精査を完了。1号溝跡の調査を開始する。
- 11月第1～3週：遺構検出、遺構精査を継続する。第3週には、1号木炭窯跡、1号溝跡、3号土坑の精査を完了する。2号溝跡の調査を開始する。
- 11月第4週：2号溝跡、1号平場の精査を完了する。溝跡の規模と構造が判明した。
- 11月第5週～：11月29日(火)に空中写真測量を行った。その後、器材の洗浄・整理・撤収作業、12月第2週 調査連絡所の清掃を行う。
- 12月第3週：13日(火)に県文化財課及び工事側の立ち合いの下、現地引き渡しを行った。(菅原)

第2編 上ノ台遺跡（1次調査）

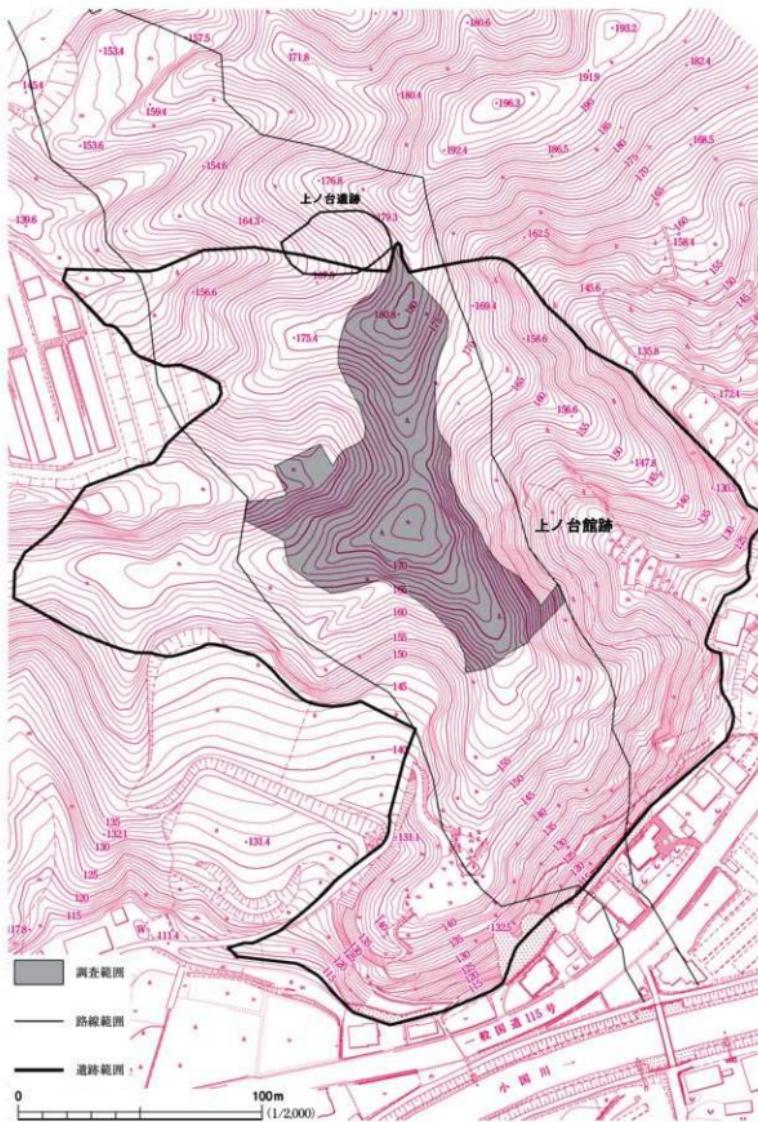


図1 調査区位置図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、館跡全体のほぼ北半にあたり、起伏の激しい地形である。調査開始前の地表面では、尾根を分断する埋没しきらない2条の溝跡(堀切)が観察され、確認調査によって東斜面の傾斜変換点に、縄文時代の遺物包含層が確認されていた。そこで、この所見を念頭に調査を進めた結果、平安時代を含む以下の遺構が発見された。

縄文時代…3号土坑、1号遺物包含層

平安時代…1号木炭窯跡、1・2号土坑

中世…1・2号溝跡、1号平場

基本土層(図2)

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～Vに分層している。以下、各層について説明する。

L I 表土及びその下の腐食土層である。調査区全体に分布する。

L II 黒褐色土(10YR3/2)である。遺物包含層に相当し、調査区中央東斜面の傾斜変換点に分布する。層厚は15～20cmを測り、遺物を包含する密度は、東に行くに従って濃くなっている。

L III 灰黄褐色土(10YR5/2)である。L IVの漸移層に相当し、各斜面の下位に分布する。層厚は16～24cmを測る。

L IV 黒褐色土(10YR2/2)である。本層上面が斜面下位に営まれた遺構の検出面となっている。層厚は8～35cmを測る。

L V にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)である。基盤層に相当し、尾根頂部に営まれた遺構の検出面となっている。調査区全体に分布しており、層厚50cm以上を測る。(昔原)

第2節 木炭窯跡

木炭窯跡は、平安時代に営まれた1基がある。底面中軸上に1条の溝を有する大型土坑タイプであり、平成27年度調査した上ノ台遺跡1号木炭窯跡と類似する。

第2編 上ノ台跡(1次調査)

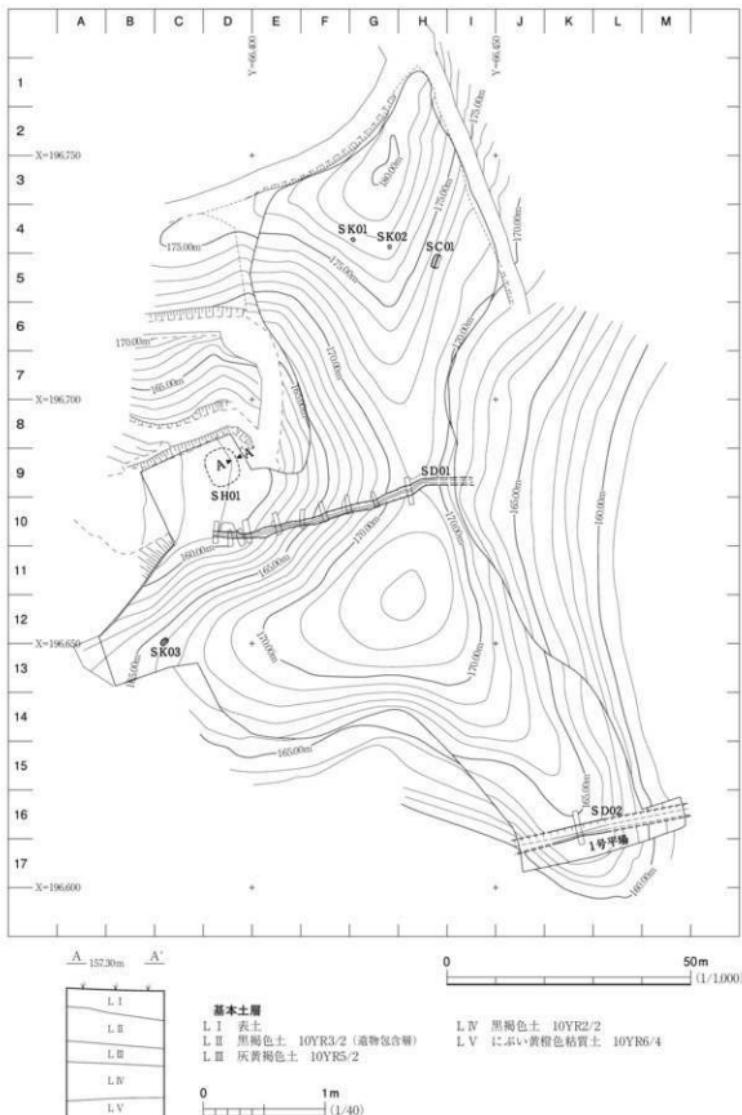


図2 遺構配置図・基本土層

1号木炭窯跡 S C 01

遺構・遺物(図3、写真6~9)

本木炭窯跡は、H 5グリッドのLV上面から検出された。調査区北部の東斜面上に営まれ、長軸方向は等高線に沿う。周囲には、西側9.0mに2号土坑、西側16.5mに1号土坑があり、それら尾根頂部の木炭焼成土坑と密接な関係が想定される。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.80m、短軸1.40mを測る。検出面からの深さは、斜面上位の西壁側で60cmである。一方、反対側の東壁は検出されず、東側の斜面下には炭化物の分布が広がるのみであった。底面は若干凹凸があり、斜面下位の東側へわずかに傾斜している。また底面中軸上の溝は、周壁直下から10cm離れた位置で掘り込まれており、幅20~22cm、底面からの深さ8~15cmを測る。

堆積土は3層に分かれ、このうち溝内に堆積した③は、底面を覆う①・②と明確に区別される。のことから、溝は少なくとも遺構廃絶時には埋まっていたと考えられる。

遺物は、底面に密着した状態でロクロ土器杯が出土した(図3-1)。これは、出土遺物に含まれることが稀な生産遺構の中で、貴重な年代決定資料になるとと思われる。底部外面に回転糸切り痕が観察され、体部下端は手持ちヘラケズリが施されている。また、底面上の所々に製品残滓の木炭片が認められた。出土炭化材の樹種同定の結果は、クヌギ節、コナラ節、クリであった。

本木炭窯跡は、底面中軸上に1条の溝を有する大型土坑タイプの窯である。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、13世紀前半の年代が示されたが、遺物の出土状況及びその遺物の特徴から平安時代と考えている。具体的な時期は、9世紀後半~10世紀前半に位置づけられる。

(菅原)

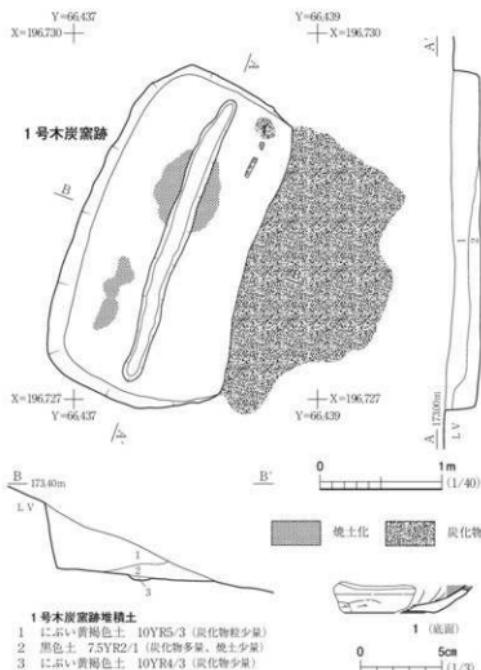


図3 1号木炭窯跡・出土遺物

第3節 土 坑

土坑は3基確認したが、縄文時代と平安時代の可能性があるものに区分される。

1号土坑 SK01(図4、写真10)

本土坑は、G 4 グリッドの L IV 上面で検出された。調査区北部の尾根頂部に営まれ、東側 65m には 2 号土坑、西側 9.0m には 1 号木炭窯跡がある。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 84cm、短軸 62cm、検出面からの深さは 18cm である。

底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は2層に分層され、 ℓ_2 は炭化物を多量に含んでいた。これは、壁面の酸化状態と対応し、本土坑が木炭焼成土坑であることを示している。出土炭化材の樹種同定の結果は、マツ属複雜管束亞属であった。遺物は出土していない。

本土坑は木炭焼成土坑と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、Modernとの年代が示されたが、堆積土の状況を踏まえた調査時の所見や周辺の1号木炭窯跡や2号土坑との関係から、平安時代など古い時期の可能性もある。

(首原)

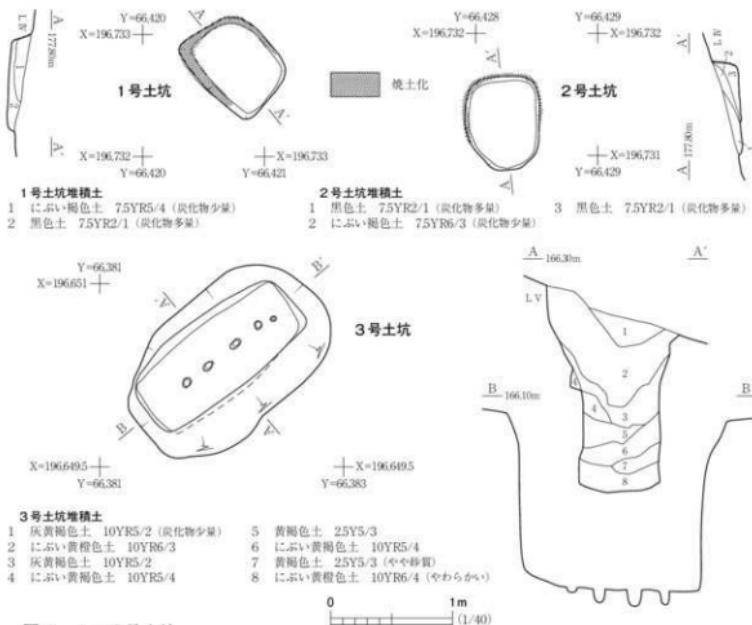


図4 1~3号土坑

2号土坑 SK 02 (図4、写真10)

本土坑は、G 4 グリッドのL IV上面で検出された。調査区北部の尾根頂部に當まれ、西側6.5mには1号土坑、東側9.0mには1号木炭窯跡がある。平面形は隅丸長方形を呈するが、南壁は丸みがある。規模は長軸80cm、短軸61cm、検出面からの深さは20cmである。

底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は3層に分層され、 ℓ 3は炭化物を多量に含んでいた。これは、壁面の酸化状態と対応し、本土坑が木炭焼成土坑であることを示している。出土炭化材の樹種同定の結果は、クリであった。遺物は出土していない。

本土坑は木炭焼成土坑と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果、7～8世紀頃の年代が示されたが、周辺の1号木炭窯跡との関係から、平安時代の可能性も考えられる。(菅原)

3号土坑 SK 03 (図4、写真10)

本土坑は、C 12・13 グリッドのL V上面で検出された。調査区西部の南東斜面落ち際に當まれ、北東側30mの傾斜変換点には1号遺物包含層がある。平面形は外側が楕円形、その内部に隅丸長方形が重なる状況を呈し、規模は外側が長軸1.8m、短軸1.10m、内部が長軸1.50m、短軸70cm、検出面からの深さは13～16mである。

底面は平坦で、壁は直立して立ち上がり、底面から90cmの位置で外側に広がる。また、底面は長軸方向に並ぶ5基の小穴を確認した。小穴の平面の規模は6～10cm、深さは5～12cmである。

堆積土は8層に分層され、いずれも自然堆積土と考えられる。このうち ℓ 1は、基本土層L IIの再堆積層と判断され、縄文土器の碎片を含んでいた。

本土坑は縄文時代の落し穴である。

(菅原)

第4節 溝跡・平場

溝跡は、中世城館跡に伴う2条を確認した。どちらも調査開始前の地表面では、埋没しきらない塗みとして観察されていた。このうち2号溝跡は、地形的に連続する1号平場と一括で説明を加える。

1号溝跡 SD 01 (図5、写真11～18)

本溝跡は、D～G 10、G～I 9 グリッドのL III～L V上面で検出された。調査区中央の尾根が括れた箇所を分断するかたちで、東西方向に伸び、西端は傾斜の緩い谷底で消失している。東端は調査区外に伸びるため不明であるが、急斜面の中で消失していると推定される。規模は、東西60m以上、幅0.65～2.56m、検出面からの深さ0.2～1.15mを測る。底面の最大比高は11.5mである。断面の基本形はU字形を呈し、西端付近では逆台形を呈していた。遺構空白地を挟んで南北側80mには、2号溝跡がある。

第2編 上ノ台跡（1次調査）

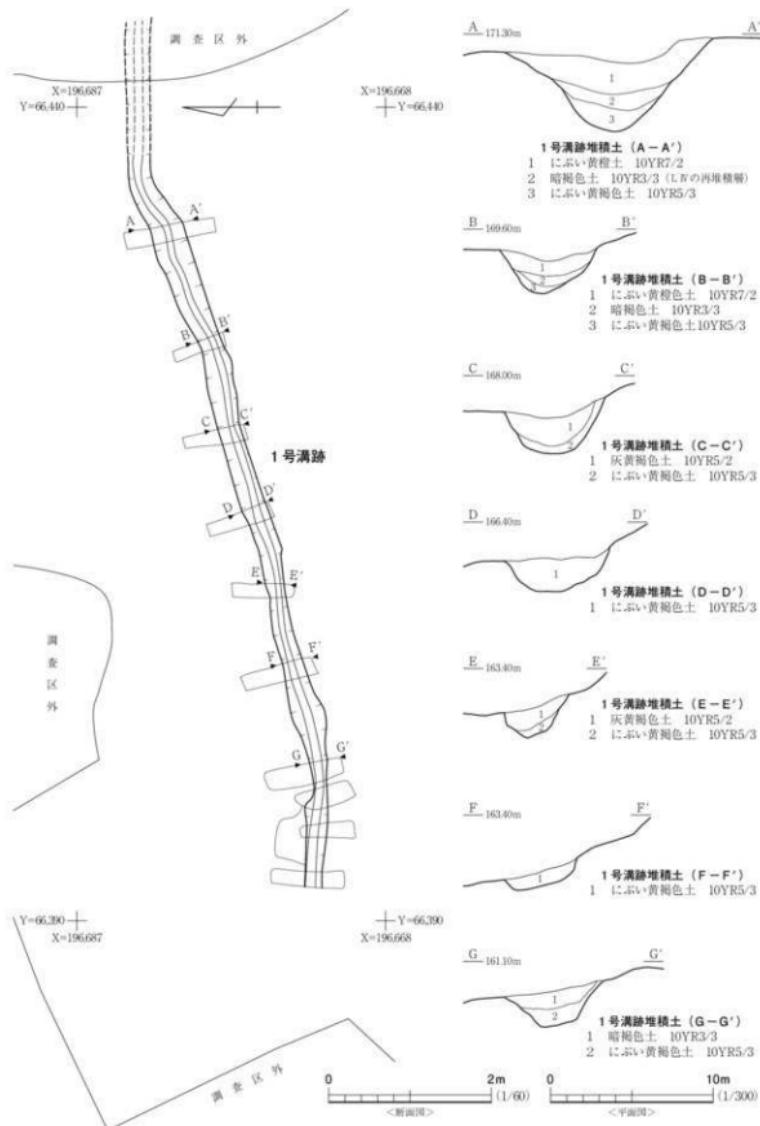


図5 1号溝跡

堆積土は最大3層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。尾根頂部ではLIVの再堆積層が認められ、掘削当時は周間にLIVが分布していたことが分かる。遺物は出土していない。

本溝跡は、中世城館跡に伴う堀切である。尾根の括れた箇所を分断し、2号溝跡と一体で機能したと考えられる。
(菅原)

2号溝跡 S D 02・1号平場 (図6、写真19~21)

本溝跡・平場は、調査区南端のJ～L16・17、M16グリッドでLIII・V上面から検出された。2号溝跡は、尾根が括れた箇所を分断するかたちで東西方向に伸び、1号平場は、これを境に6段ほど造成された平場の最上段に当たる。しかし、1号平場については今回南側の一部を検出したにすぎず、詳細は不明である。

2号溝跡は、東西40m以上、幅2.30～2.55m、検出面からの深さ35cm～42cmを測る。検出範囲における底面の最大比高は0.6mである。両端は、調査区外に伸びるため不明であるが、急斜面の中で消失していると推定される。断面は逆台形を呈し、1号溝跡に比べ掘り込みは浅いが、整っている。遺構空白地を挟んで北西側80mには、1号溝跡がある。

堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積土と考えられる。尾根頂部ではLIVの再堆積層が認められ、掘削当時は周間にLIVが堆積していたことが分かる。遺物は出土していない。

本溝跡・平場は、中世城館跡に伴う施設である。このうち2号溝跡は、尾根の括れた箇所を分断しており、南側に6段ほど造成された平場の北辺境界をなす。また、2号溝跡と一体で機能したと考えられる。
(菅原)

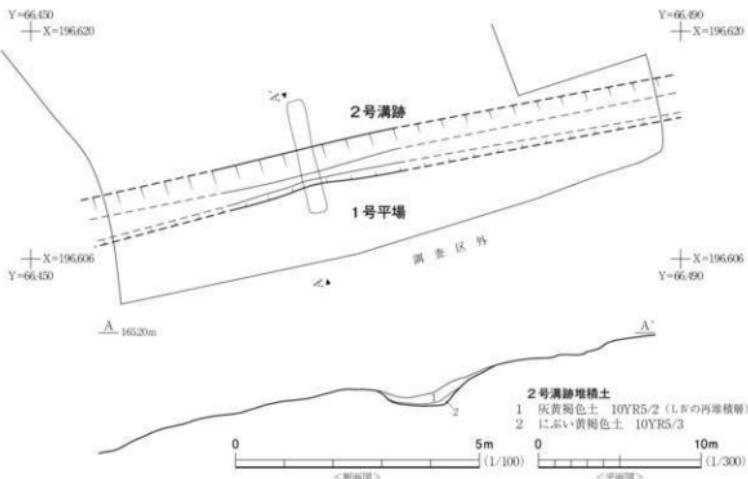


図6 2号溝跡・1号平場

第5節 1号遺物包含層

概 要

東斜面の傾斜変換点に形成されたL IIを、遺物包含層と認識した（図2）。遺物の平面分布はD 9グリッド内におさまり、出土地点はD 9グリッドでは東側に偏っている。南西30mには、縄文時代の落し穴に比定される3号土坑がある。

調査は、表土・腐食土を重機で取り除いた後、谷底中軸線に設定されていた試掘トレンチの土層断面を活用して、人力で掘り進めていった。出土したのは、縄文土器片212点、石器2点である。

縄文土器は、中期～晚期の資料で、石器は2点とも打製石斧である。出土量は少なく、周囲の状況をみても、縄文時代に該当する遺構は落し穴1基しか認められない。したがって、一定人數の定住生活に伴うものではないと考えられる。

また一方で、打製石斧が出土しており、剥片類がまったく出土しないという特徴は、昨年度調査した隣接する上ノ台遺跡のほぼ同時期の遺物包含層と共通している。両者はやせ尾根を挟んで一体的に形成された可能性が高いと思われる。

遺 物（図7・8、写真23）

縄文土器片25点、石器2点を図示した。縄文土器は、全体の器形がわかる資料はないが、いずれも深鉢形土器の破片とみられる。

縄文土器

図7-1～3は、中期後葉に比定される。1・2は口縁部片、3は胴部片である。いずれも沈線による区画内に縄文が認められる。地文の縄文は、3が単節縄文RLで、1・2は磨滅のため詳細は不明である。

図7-4～18は、後期に比定される胴部片である。4～16は、細い沈線を多条に施し、菱形状や三角形状の文様を描いている。地文の縄文は、単節縄文LRで、横方向主体に施している。これらの土器については、文様の施文方法、厚さ、胎土に金雲母を含むなどの特徴が共通し、同一個体の可能性も考えられる。

17・18は、無節縄文Lを施文した後、2条ないし3条の沈線を施している。

なお、4～16は後期中葉と考えられるが、17・18は細分時期の特定は難しい。

同図19～25は、後期後葉～晚期に比定される。いずれも粗製土器で、19・20が口縁部片、21～25が胴部片である。19～23は、櫛歯状工具による条線文を縱方向主体に施している。24・25は、無節R原体を軸に密に巻きつけた撚糸文が観察される。文様の施文方向は、24では緩ないし斜め、25では縱方向である。

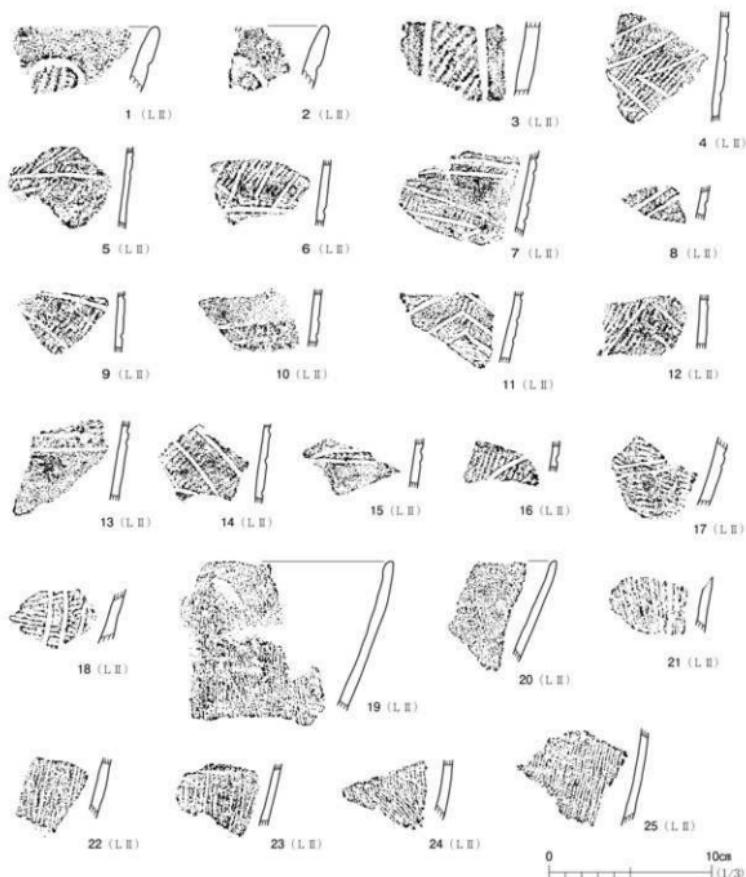


図7 1号遺物包含層出土遺物（1）

石 器

図8-1・2は打製石斧である。1は結晶片岩製で、両側縁が括れ、分銅形に近い形状を呈する。2は砂岩製で、側縁の片方は弧状、もう片方は直線的に調整が施されている。上部は欠損している。

(菅原)

第2編 上ノ台遺跡（1次調査）

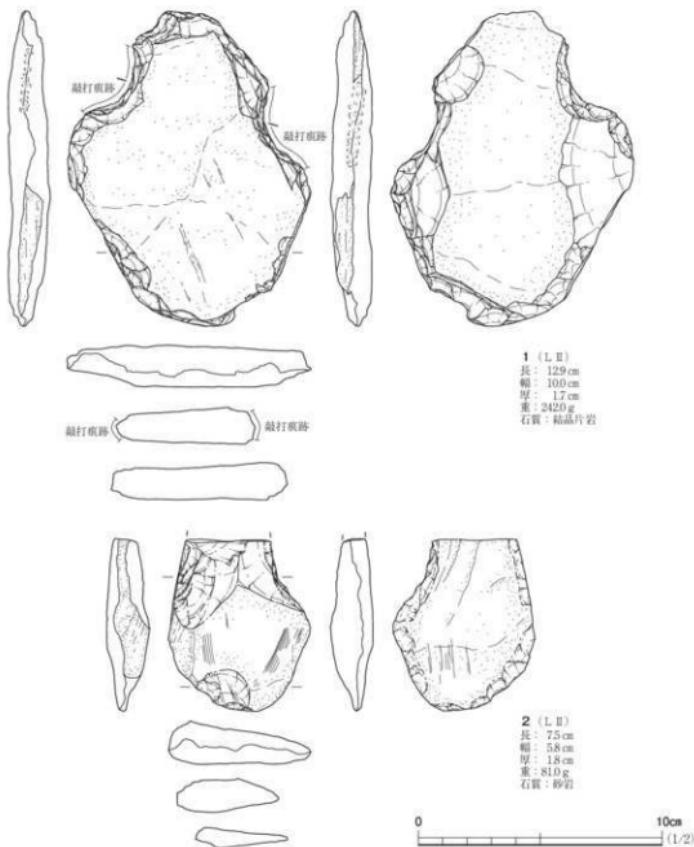


図8 1号遺物包含層出土遺物（2）

第3章 総括

上ノ台館跡は、平成24年度の分布調査(『福島県内遺跡分布調査報告21』)の発見を契機に、周知の遺跡となった中世城館跡である。城主や築造年代を示す史料は残っていないが、周囲には、懸田氏歴代の居城＝懸田城跡を筆頭に、複数の中世城館跡や福田・沼ヶ入遺跡を含む城館関連遺跡の分布が特徴的に認められる。したがって、本城館跡の知見が、今後の地域史解明に果たす役割は大きいと思われる。以下では、まず平成27年度作成の縄張り図を提示したうえで、今回の発掘調査成果と照合し、次年度調査の備えとしたい。

1 縄張り図の所見

縄張り図(図9)は、盛岡市遺跡の学び館の室野秀文氏に依頼して作成した。その際、次のコメントをいただいている。

- ◎城館内部は尾根筋の屈曲地点を境として、北半城と南半城に区別され、遺構様相が大きく異なる。
- ◎北半城は、遺構分布が稀薄である。尾根の括れた2箇所に堀切が観察できるものの、間に挟まれた約75mの区間にはまったく遺構が観察できない。
- ◎南半城はほぼ全面に甌塗状の平場が観察され、中村街道に接した南急斜面には、堅堀が観察される。このことから、城館の中心部は南半城と推測される。
- ◎南半城の各平場には、多くの建物が継続占地できる面積がなく、上ノ台館跡は恒常的な城館というより、一時的な砦や陣所のような性格が想定される。
- ◎存続時期は、他地域の類例から15世紀～16世紀の中に求められる。
- ◎所見は、あくまで地表面観察にもとづいており、今後の発掘調査成果によって補正しなければならない。

2. 発掘調査の所見

今回の調査は北半城が対象となった。縄張り図の所見と照合すると、次のように整理できる。

- ◎1・2号溝跡は尾根の括れた2箇所に観察された堀切、1号平場は2号溝跡に接した最上段の平場にあたる。また、1・2号溝跡の間は遺構空白帯であり、この点も縄張り図の所見と合致した。
- ◎1号溝跡の北側に想定された通路は、現代の尾根道であることが判明した。
- ◎城館範囲の北限は、1号溝跡と判断できる。
- ◎今回は出土遺物が無く、具体的な存続時期を知る手がかりが得られなかった。

次年度は、城館中心部の南半城が調査対象となるため、今回の成果と周囲の歴史的環境を踏まえ、地域史解明に資する検討を行っていく必要がある。

(菅原)

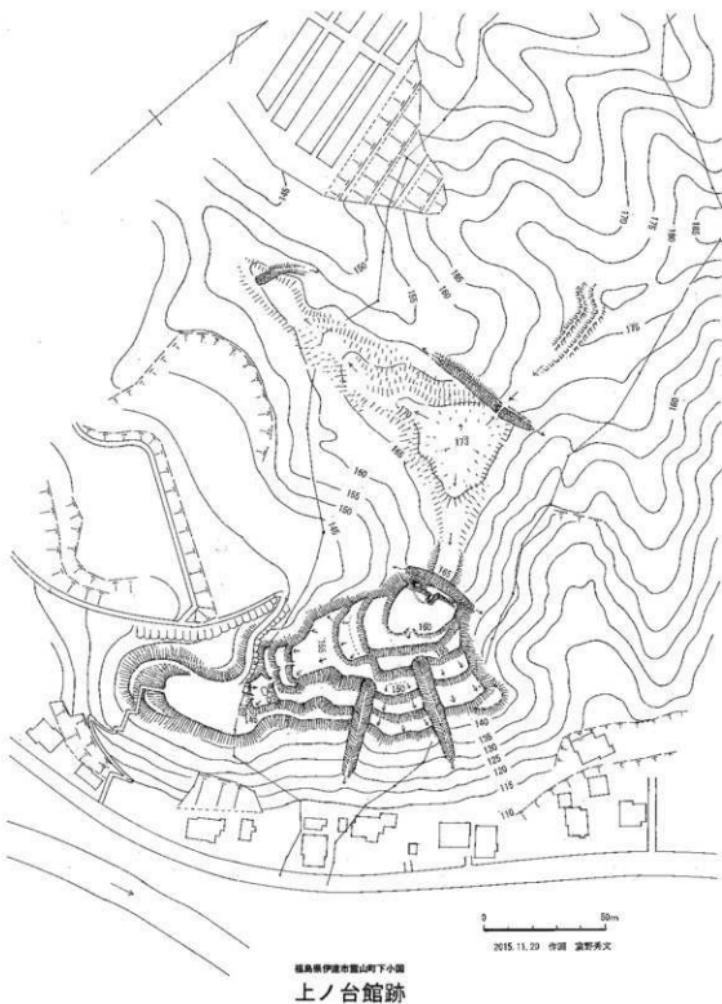


図9 上ノ台館跡縄張り図

第3編 川原田遺跡

遺跡記号 QR-KHD
所在地 伊達郡桑折町大字松原字川原田
時代・種類 繩文時代の狩場、古代の集落跡
遺物包含層
調査期間 平成28年5月16日～10月27日
調査員 廣川紀子・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

川原田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字川原田に所在する。桑折町松原地区は、行政区区分上では桑折町の南西端部分となり、西方では福島市飯坂湯野地区、南方では旧伊達町と接している。川原田遺跡は、東北本線の伊達駅から北に1kmほどのところに位置し、北側の丘陵裾部には飯坂地区から桑折町中心街へ抜ける県道124号線が通る。

遺跡の西側には東北自動車道路、東側には東北新幹線や東北本線といった主要幹線道路が配される。遺跡とその周辺の現況は、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた田園地帯である。地形的には標高80mほどの低位段丘上に立地し、同じ段丘上には平成29年度に調査が実施された館ノ前遺跡、日照田遺跡が存在する。

(廣川)

第2節 調査経過

川原田遺跡の調査は、4月6日付で福島県教育委員会より3,700m²の発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ106日である。以下に、調査の経過について記す。

- 5月第2週　　：12日(木)にプレハブ・トイレ、13日(金)に発電機を設置する。
- 5月第3週　　：16日(月)から作業員を雇用する。器材類の搬入、調査区の縄張りを行う。
- 5月第4週　　：調査区北部から表土除去を開始する。
- 6月第1週　　：表土除去を継続する。調査区北東部の表土除去を終えたところから遺物包含層の掘り下げを始める。
- 6月第2・3週：表土除去、遺物包含層の掘り下げを継続する。遺物包含層から出土する遺物は、土師器や須恵器が多いが、縄文土器や石器も認められる。
- 6月第4週　　：調査区北東部の遺構検出作業を始める。表土除去、遺物包含層の掘り下げの作業は継続する。
- 7月第1週　　：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する一方、調査区南部の表土除去を始める。
- 7月第2週　　：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。遺構検出では、落し穴を含む土坑数基、小穴群等を確認する。
- 7月第3・4週：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。小穴の検出数が増え始める。
- 7月第5週　　：26日(火)に表土除去作業を終える。土坑を中心に順次、遺構精査を行う。
- 8月第1・2週：遺構精査を継続する。小穴群の平面図作成を行う。
- 8月第3週　　：18日(木)から塗抹み明けの作業を開始。遺構検出、遺構精査を継続する。

第3編 川原田遺跡

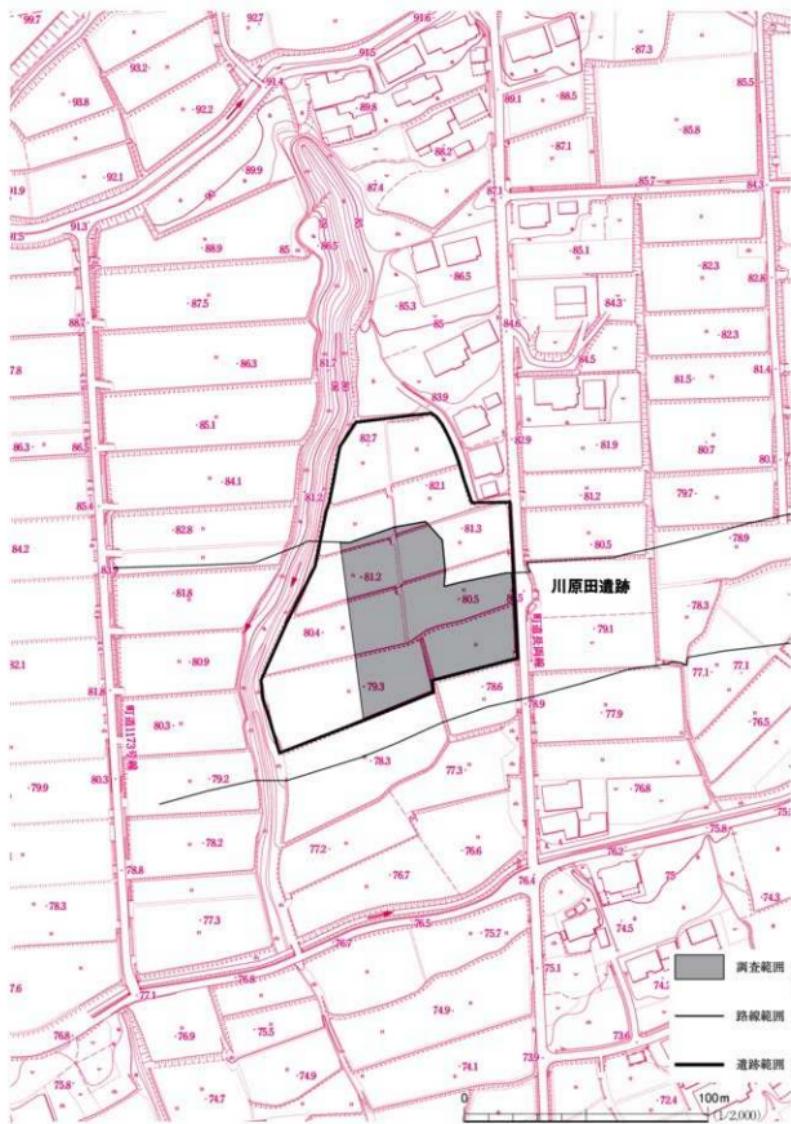


図1 調査区位置図

- 8月第4週～：遺構精査、遺構検出を継続するが、9月末まで台風やゲリラ豪雨の襲来、秋雨が長く続き、著しく調査が滞る。
- 9月第4週～：遺構検出、遺物包含層の掘り下げを継続する。23日(金)に基本土層図作成。
- 9月第5週～：27日(火)から地形測量を行う。28日(水)に遺物包含層の掘り下げを終える。
- 10月第1週～：7日(金)に空中写真撮影を実施する。
- 10月第2週～：掘立柱建物跡、柱列跡の精査を開始する。柱列跡では、柱材が遺存していることが確認された。
- 10月第3週～：20日(木)から1号井戸跡の精査に入る。井戸枠が残っていることが判明。
- 10月第4週～：27日(木)に1号井戸跡の井戸枠を取り上げ、全調査を終了した。
- 11月第1週～：2日(水)に県文化財課及び工事側の立ち会いの下、引き渡しを行った。(廣川)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

川原田遺跡の調査前現況は水田で、全体的な地形は北から南へかけて緩やかに傾斜している。なお、戦後直後の航空写真では、調査区内の中央を流れる水路が確認できる。

検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1列、井戸跡1基、落し穴7基を含む土坑17基、溝跡2条、性格不明遺構1基、小穴群である。また、調査区全体に遺物包含層が広がっていた。各遺構の時期は、出土遺物から概ね绳文時代と奈良・平安時代のものとみられる。

基本土層(図3、写真4)

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～IIIに分層した。

川原田遺跡は現況では水田となっており、圃場整備が繰り返されて水稻耕作が行われたものとみられ、それら耕作土を一括してL Iとした。L Iは水田耕作土に適した粘質土で、場所によっては1m以上堆積するところや、新旧耕作土として分層できるところがあり、2次的に混入された土師器・須恵器片が認められる。

L IIは、調査区内全体から確認できた遺物包含層である。L IIは、L II a 黒褐色土(10YR3/1)とL II b 暗灰色粘質土(10YR4/1)とに細分した。調査区の北部では、L II aは含有する遺物量が多く、L II bからは柱穴とみられる小穴が検出できたものもあった。しかし南部では、明瞭なL II bは確認されず、調査区内に流れる用水路の西側ではL IIからの遺物量も少なかった。全体的に炭化物、酸化鉄、白色凝灰岩を含み、L II a中では炭化物や凝灰岩が多く含まれていた。また、付近から産

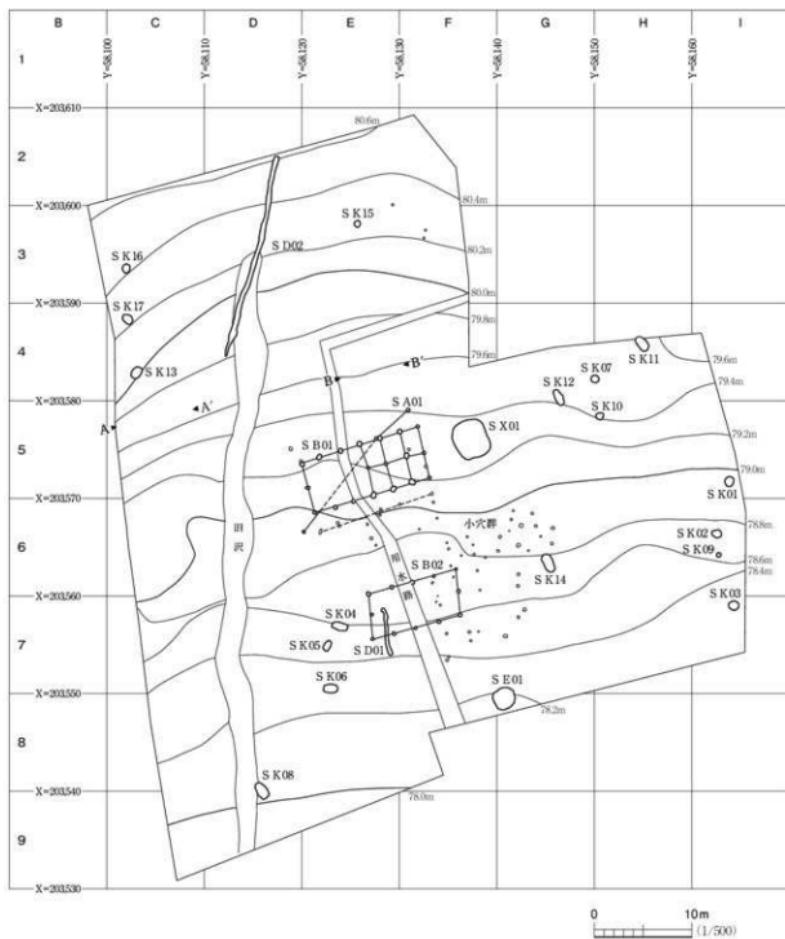


図2 遺構配置図

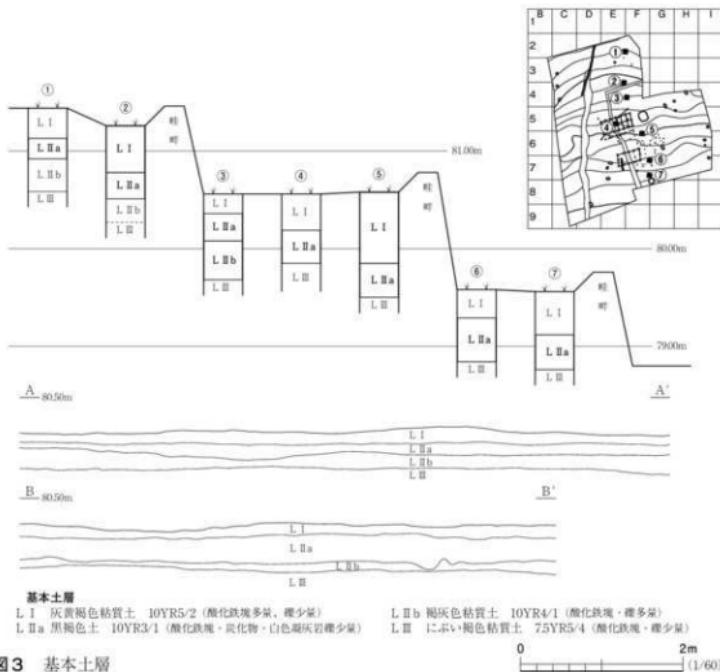


図3 基本土層

出される石英(玉髓)が一定量含まれていた。

L.IIIは、L.II下より調査区全体に確認される基盤層で、にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を基調とするが、しまりのある砂質土やグライ化が進んだ状態で認められたところもある。 (廣川)

第2節 掘立柱建物跡

今回の調査で発見された掘立柱建物跡は2棟で、桁行を揃えて配置されており、同時期に営まれたものと考えられる。また、それらの南東方向には、建物跡の柱跡とみられる小穴群が広がっている。また、建物跡の周辺からは古代の遺物が多く出土している。

1号建物跡 S B 01

遺構 (図4・5、写真5~9)

本遺構は調査区の中央となるD5、E5・6、F5・6グリッドにかけて位置する。南側に約10m離れて2号建物跡が主軸方向を揃えて並列し、東側に3m離れて竪穴状の窪地である1号性格

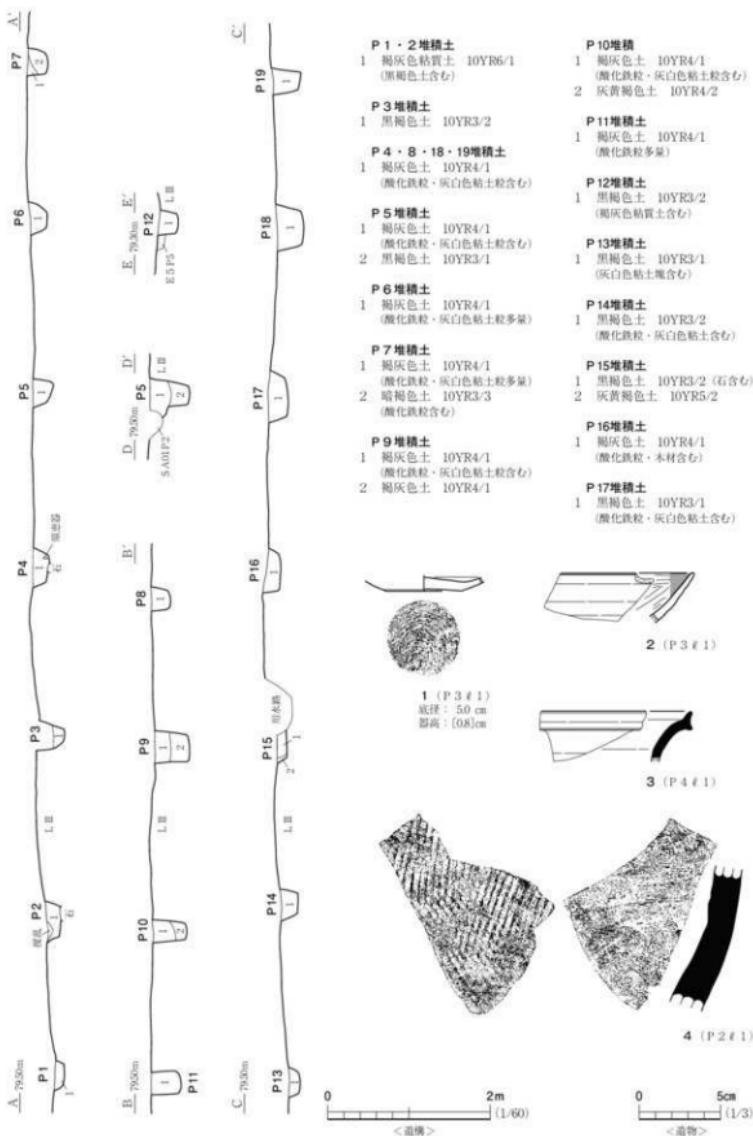
不明遺構が隣接する。また、本遺構のP5と1号柱列跡のP2が重複しており、1号柱列跡が新しい。本遺構の南東側には、同様の柱跡とみられる小穴群が広がっている。

本遺構はLⅢ上面より検出された。2間×6間の東西に長い建物跡で、主軸方向はN70°Eである。西側3間と東側3間とでは構造が異なっており、西側3間は土間、東側3間はP9～11が床東となる板間とみられる。規模は、東西幅が12.6～12.8m、その柱間が180～230cm、南北幅が5.2～5.4m、その柱間が250～270cmを測り、1間の長さは南北がやや長い。

それらを構成する小穴の堆積土はLⅡに近似しており、褐色土から黒褐色土を主体に1～2層



図4 1号建物跡（1）



に分層した。堆積土中からは円窓や木片が確認できたものもあるが、底面上にあるもののみ図示している。小穴の形態は楕円形状のものと、円形ないし隅丸方形のものとに大別でき、大きさは長軸で50cm以上のものと、30cm前後のものとに分けることができる。深さは10~50cm程度とばらつきがあり、P2、P5、P10、P15では2段掘りとなっている。柱痕は確認できなかったが、P1、P3、P4、P8、P16からは木片が認められた。樹種同定の結果、木片の樹種はいずれもクリと同定され、柱材の一部の可能性が高いと考えている。

今回の調査では判断できなかったが、本遺構の南側には長軸30cm前後的小ぶりの小穴が直線的に並んでいることから、本遺構に関連する庇の可能性も考えられる。図4には、これらの小穴を破線で結んで示した。仮に庇とすると、本遺構の東辺のP7、P8、P19と同規模となるため、南北・東西に2面の庇が付く2間×5間の建物跡となる可能性も指摘しておきたい。

遺物(図5)

遺物はP1~5・8・16から26点が出土した。それらは主に土師器・須恵器片で、そのうち4点を図示した。図5-1・2は土師器の杯で、どちらもP3から出土しており、2は壁際で確認された。1の底部には回転糸切り痕が認められ、内面は黒色処理されず、コテ当て調整で円滑に仕上げられている。2は内面にヘラミガキが施され黒色処理される。3は須恵器の長頸瓶の口縁部で、内面に薄く灰が被る。4は須恵器の大甕片で、外面には平行タタキ目、内面にはヘラナデが施されている。

まとめ

本遺構は、出土遺物から9世紀後半から10世紀前半頃のものと考えられる。小穴から出土した

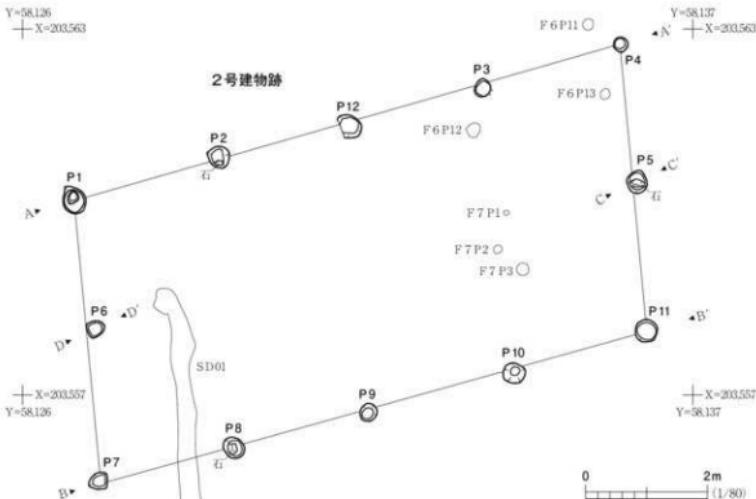


図6 2号建物跡(1)

本片の放射性炭素年代測定の結果も、8世紀から9世紀後半であり、伐採時期を考慮するとおおよそ一致してくる。本遺構は2号建物跡より一回り大きく、板間のある構造等から、同時期に存在した建物跡の中の主屋とみられる。

(廣川)

2号建物跡 S B 02

遺構 (図6・7、写真10~13)

本遺構は調査区の中央南寄りとなるE 6・7、F 6・7グリッドにかけて位置する。北側に約

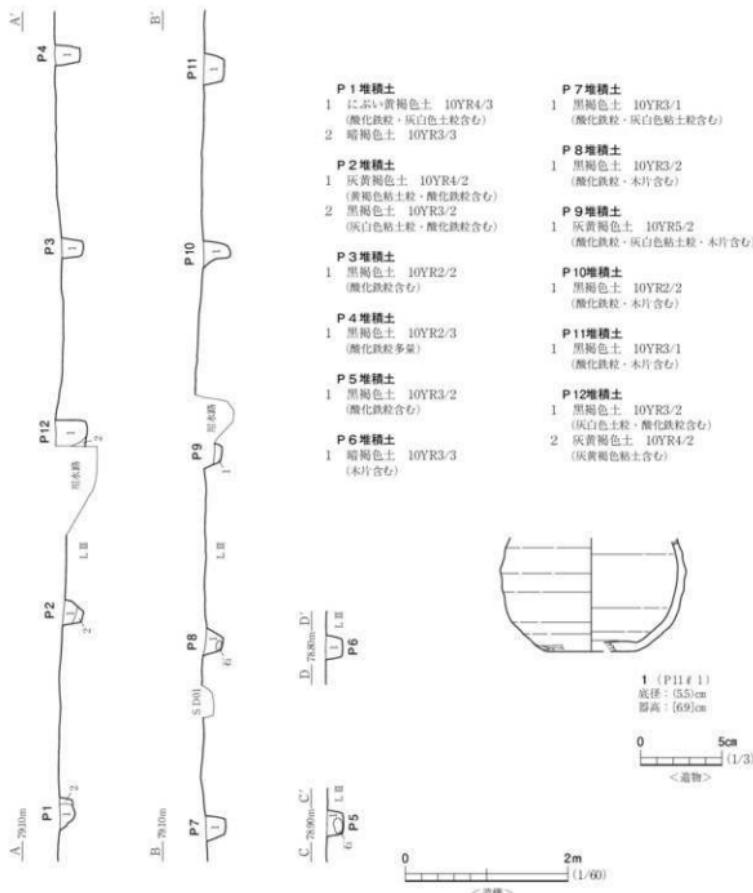


図7 2号建物跡(2)・出土遺物

10m離れて1号建物跡が並列し、約9m南側には1号井戸跡が配置される。本遺構の北東方向には同様の柱跡とみられる小穴群が広がっている。1号溝跡が本遺構内に延びているが、柱穴部分とは重複関係がなく新旧関係は不明である。

本遺構はL III上面より検出された。2間×4間の東西に長い側柱建物跡で、主軸方向はN 75° Eである。規模は、東西幅が9.3m、その柱間が220～250cmで最頻値230cm、南北幅が4.8m、その柱間が220～250cmで、柱間を結んだラインは平行四辺形となり4隅は直角ではない。

それらを構成する小穴の堆積土はL IIに近似しており、暗褐色土ないし黒褐色土を主体に1～2層に分層した。堆積土中には川原石や木片がみられ、底面上にある大きめの石は図示した。なお、柱材の可能性のある木片2点については樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っており、樹種はP 1出土のものがコナラ節、P 7出土のものがニレ属である。年代は、P 1が $1,150 \pm 20$ yrBP、P 7が $1,160 \pm 20$ yrBPという数値年代を得た。形態は楕円形状ないし円形をしており、大きさはP 4、P 6がやや小さく、長軸、短軸とも30～50cm内に収まっている。深さは浅いもので16cm、深いもので36cmを測る。遺存状態のよいものでは底面はほぼ平らで、周壁は直立して立ち上がる。

遺 物 (図7、写真26)

遺物は、P 1・11から主に土師器の甕とみられる小片10点が出土し、そのうち1点を図示した。図7-1は土師器の小型の甕である。外面のロクロ目が顕著で、底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。外面には煤が付着する。

ま と め

本遺構は、出土遺物から平安時代以降のものとみられる。P 1、P 7から出土した木片の放射性炭素年代測定の結果は、9～10世紀頃であり、矛盾しない。1号建物跡と軸を揃えて並列することから、同遺構と同時期に営まれたものとみられる。

(廣川)

第3節 柱 列 跡

今回の調査で柱列跡としたものは1列である。1号柱列跡の付近には同規模の小穴群の広がりが認められるが、他の小穴とは異なり柱材とみられる木質部分の立ち上がりが確認されたため、柱列跡として報告する。1号建物跡の柱穴との重複関係からは本遺構が新しく、柱材の良好な遺存状態からも他の小穴より後出することが推察される。

1号柱列跡 S A 01

遺 構 (図8、写真14)

本遺構は調査区の中央となるE 5・6、F 5グリッドにかけて位置する。他の小穴とは様相が異なり、柱材とみられる木質部分が検出面上から突き出した状態で確認された。それらをつなげると、1号建物跡の北東方向から南西方向へと延びている。本遺構のP 2が1号建物跡のP 5の一部を掘

り込んでいることから、本遺構は1号建物跡の廃絶後につくられていると判断される。

本遺構は1号建物跡と重複しており、1号建物跡P6から北東に約2m離れて位置するP1、1号建物跡P5と重複するP2、1号建物跡P13から南西に約2m離れて位置するP3で構成され、P1とP2間が約4m、P2とP3間が約118m、P1からP3の長さは約15.8mである。P3を起点にP1方向はN40°Eである。

本遺構を構成する小穴はLIII上面を掘り込んでつくられているが、柱材の一部はLII中から確認できた。遺構内堆積土はLIIに近似した黒褐色土であるが、P2、P3の底面上ではLIIIに起因する粘土塊が認められた。規模と平面形は、P1、P2が直径34cmの円形、P3は長軸33cm、短軸24cmの楕円形である。P1は遺存状態がよく、深さは39cmである。底面は平らで周壁は直立に立ち上がっており、底面から少し浮いた状態で直径15cm程度の柱材が約70cm残っていた。P2、P3にも直径18cmの柱材が確認でき、P2では底面から約50cmが残っていた。P1～3からは出土遺物がほとんどないが、P2からは内面黒色処理された土器器杯とみられる細片が出土している。

柱材3点については樹種同定及び放射性炭素年代測定を行ったが、樹種はいずれも柱材に多く用いられるクリと同定された。年代測定については、8世紀末から9世紀半ばと、1号建物跡よりもやや古めの年代観であったが、伐採時期や転用材の可能性を考慮すると問題ないものと考える。

まとめ

本遺構は、柱材が残されていることから柱列

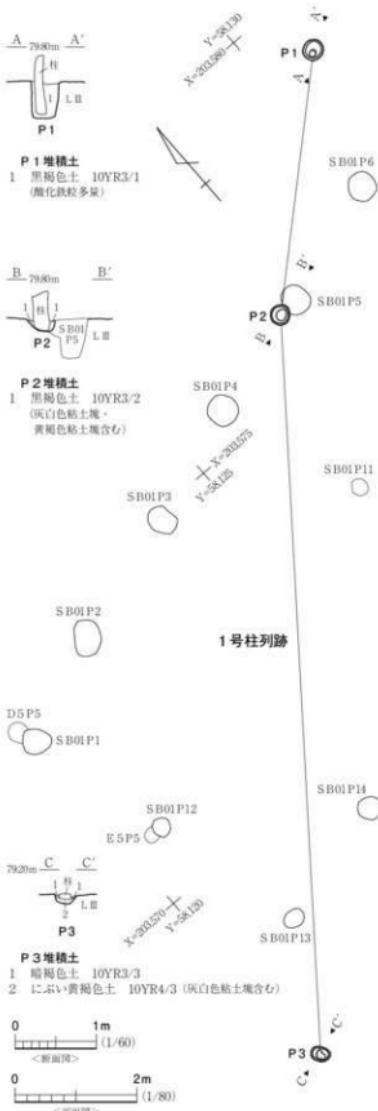


図8 1号柱列跡

跡として報告したが、その用途や構造については不明である。年代測定の結果から1・2号建物跡とはほぼ同時期のものとみられるが、本遺構が1号建物跡の柱穴を掘り込んでおり、柱材の遺存状態が良いことから、本遺跡で展開された古代の集落の終末期のものとみられる。

(廣川)

第4節 井戸跡

調査区南端より井戸跡1基を検出した。水田の用水路脇にあり、標高78.2mの等高線がめぐる調査区内でも低い地点となるため、調査期間中を通して水はけが悪かった。付近には他に遺構が認められなかつたが、やや離れて2号建物跡や、同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が存在し、それらと同時期に営まれたものとみられる。

1号井戸跡 S E 01

遺構 (図9・10、写真15~17)

本遺構は、調査区中央南端のF7・8、G7・8グリッドにかけて位置し、井戸枠の西側部分の部材がLⅡ中より突き出た状態で確認できた。重複する遺構はない。はじめ木質部分については水田の用水路に残されたしがらみ状のものを想定したが、サブトレーナーを設定した段階で、井戸枠の部材の一部であることが判明した。その後、井戸跡の調査に切り替え、遺存する井戸枠部分と掘形とを確認することができた。周囲の土壤が還元作用を受けてグライ化しているため不明瞭であるが、掘形はLⅢ上面から掘り込まれていると判断した。

遺構内堆積土は8層に分層した。 ℓ 1・2は腐植土をわずかに含んだ灰色粘質土で、 ℓ 1のしまりが ℓ 2に比べ弱いため分層した。いずれも井戸を埋め戻した土とみられる。 ℓ 3~7は、井戸枠の外側となる掘形内に水平に堆積しており、裏込め等の構築土とみられる。なお、 ℓ 4~7は灰色砂質土と灰色粘質土が互層となっており、 ℓ 4の上部には大小の円礫や木材片といった裏込め材が認められた。底面は ℓ 8とした拳大の円礫を含んだ暗灰色粘質土が水平に堆積している。 ℓ 8は、井戸枠設置後に充填された層と考えている。

掘形の平面形は隅丸方形で、開口部分が1辺約220cm、底面が長軸約140cm、短軸約130cmでやや東西軸に細長く、深さは約150cmである。主軸方向はN 65° Eである。底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がり、開口部分で広がっている。

遺存する西側部分の井戸枠は、掘形の開口部分から70cm程度内側に、西壁に並行するように設置されている。井戸枠部材は、両端に丸太材(隅柱)、その間に縦長の板材3枚(側板)が並列され、両端の隅柱の間には細長い板材(棧木)を横に通して側板を押さえている。隅柱の上端から1/3のところには、棧木用のはぞ穴が開けられている。また、側板の上方からは、その外側に沿って横長の板材が認められ、側板の上部構造のひとつとみられる。それら井戸枠部材はほぼ形状が保たれているものと考えられ、そこから復元される井戸枠は1辺約1mの方形で、4隅に隅柱を持ち、側板に

縦板を使用した構造のものと推測される。

遺存する井戸枠部材の西側部分では、3枚の縦板を組み合わせた側板部分では幅約90cm、長さ約160cmを測り、検出面下の約130cmが地中に埋められていたものとみられる。それら側板の板材は、裏込めに円礫や木材等を使用して、ほぼ垂直に立てられている。板材の表面には丁寧な加工が加えられており、そのうちの1枚は他の建物からの転用材とみられる。

遺 物 (図10~12、写真26・28~31)

出土遺物は44点で、堆積土中から土師器の杯類、須恵器の壺類等が出土し、の中にはウシとみられる獸骨が認められた。獸骨は長さ20.8cm、幅・厚さともに最大値18cmで、特徴的な形状からウシの中手骨の部分とみられる。それらのうち図示したものは土師器4点、須恵器片1点で、獸骨は写真で掲載した。他に、井戸枠部材7点を図示した。

図10-1~4は土師器の杯で、グライ化した土壤中から出土した。全体的に色調が褐灰色で、固くしまりがある。1は底部に回転糸切り痕が認められ、内面がコテ当て調整され、黒色処理は施されていない。内面には煤が付着する。2・3は内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。2の底部は手持ちヘラケズリで丸く仕上げられている。4は高台付杯で、内面が黒色処理される分厚いつくりで、高台の脚部はハの字状に開いている。同図5は須恵器の壺の体部である。

図11-12は井戸枠部材である。図11-1は桟木で、遺存する端部には加工痕が認められる。樹種はコナラ節である。

図11-2は側板のひとつと考えられる横板で、遺存状態の良い一方の側面は「ト」状に成形されており、釘抜き穴状の痕跡が観察された。樹種はハリギリである。

図11-3、図12-3は隅柱に使用された丸太材で、直径約10cm、長さ約130~140cmの同規模のもので、側面には部分的に加工痕が認められ、形を整えている。どちらも上端から約30~40cmのところに四角いほぞ穴が開けられており、図11-1の桟木が差し込まれていたものとみられる。図11-3には下端から約30cmのところにも、ほぞ穴を開けようとした痕跡が認められる。樹種は、いずれもクマシデ属である。

図11-4、図12-1は側板で、縦板3枚のうちの2枚である。これらは長さ140cm前後、厚さ4~5cmと同規模で、板目の木取りや表面の丹念な加工痕等が近似する。表面の加工痕からは、チョウナとみられる工具で縦方向に削られている様子が観察される。図12-1の端部の中央には切断残しとみられるわずかに突出した部分が認められる。樹種は図11-4がモミ属、図12-1がスギである。

図12-2は図11-4、図12-1と同じ縦板のうちの1枚であるが、他の部材とは異なり堅牢な柾目の木取りのものである。一部炭化しており、不要となった建物等からの転用材とみられる。樹種はハリギリである。

ま と め

本遺構は、出土遺物から9世紀後半から10世紀前半頃のものと考えられる。裏込めの構築土に含まれていた木片3点について放射性炭素年代測定を行っているが、8世紀後半から9世紀後半の

第3編 川原田遺跡

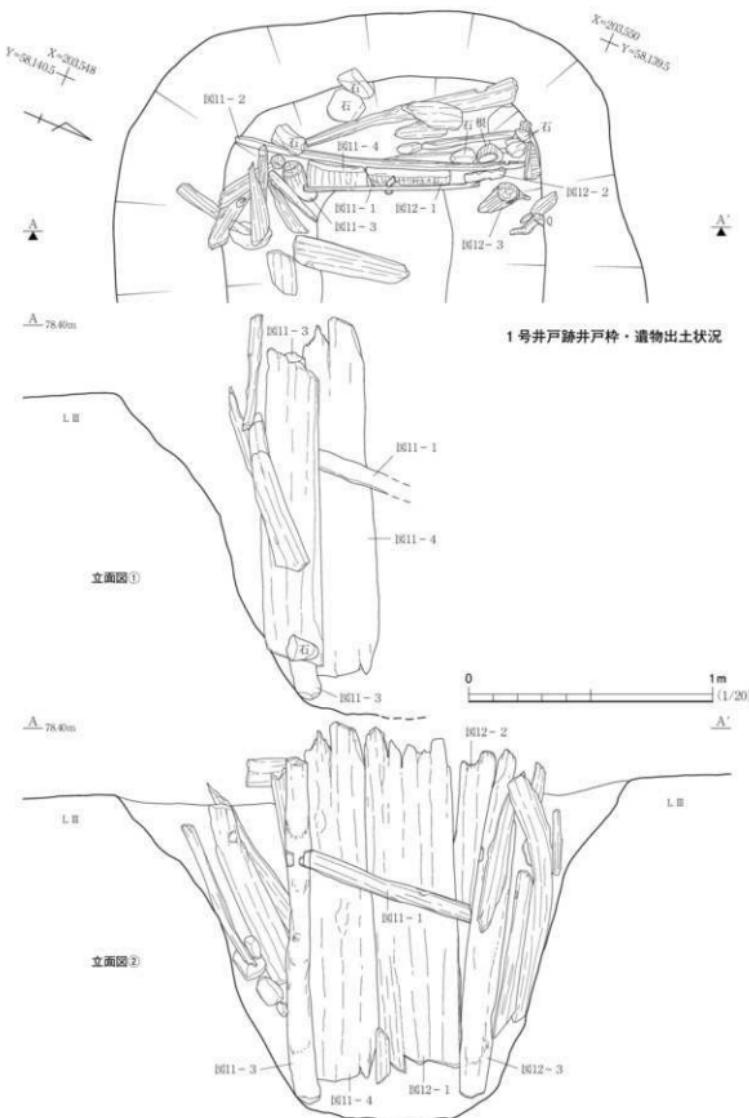


図9 1号井戸跡 (1)

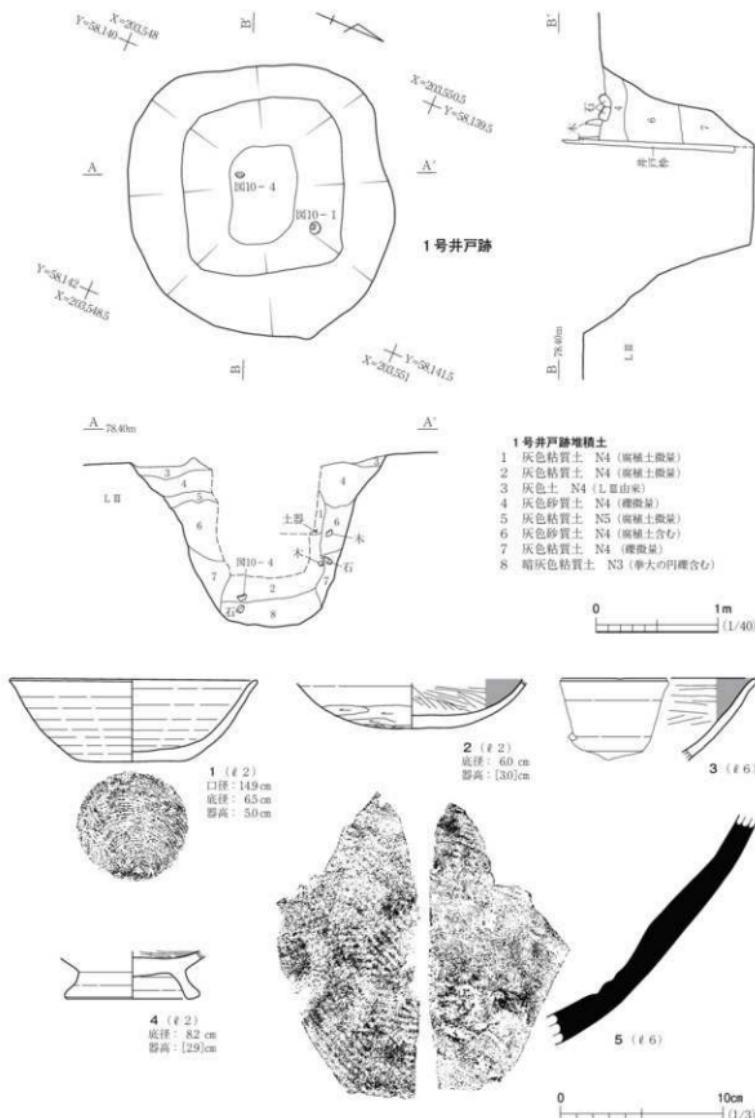


図10 1号井戸跡 (2)・出土遺物 (1)

第3編 川原田遺跡

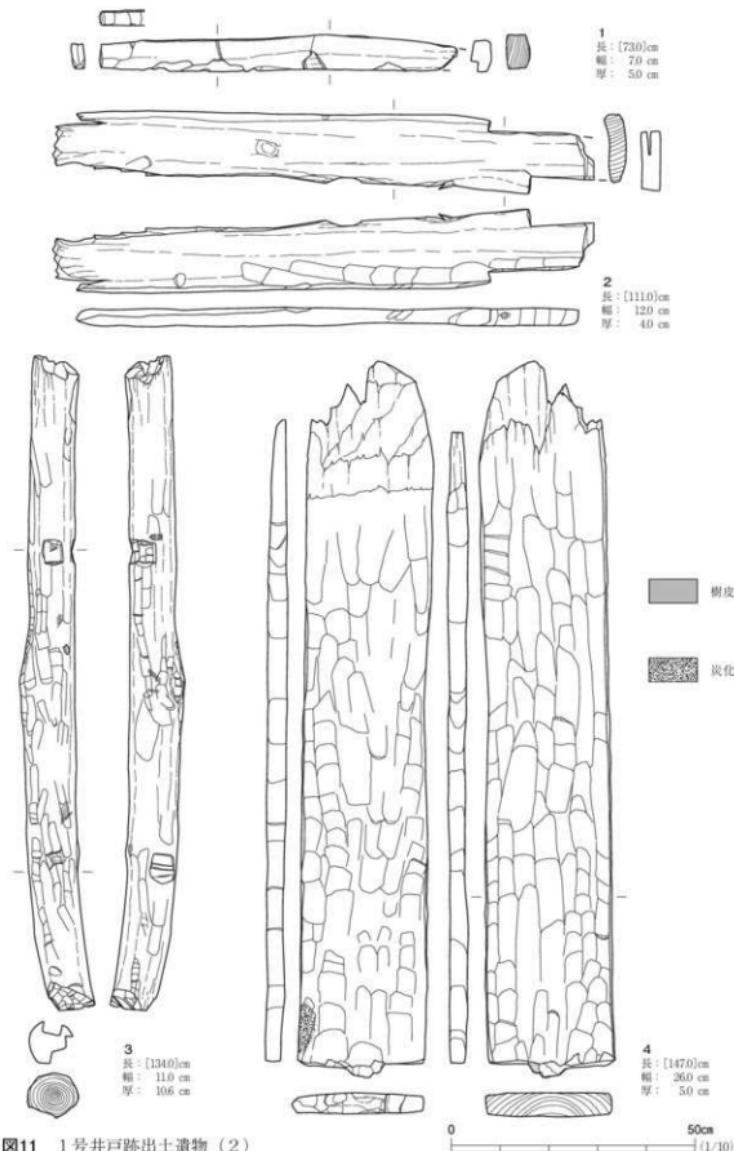


図11 1号井戸跡出土遺物（2）

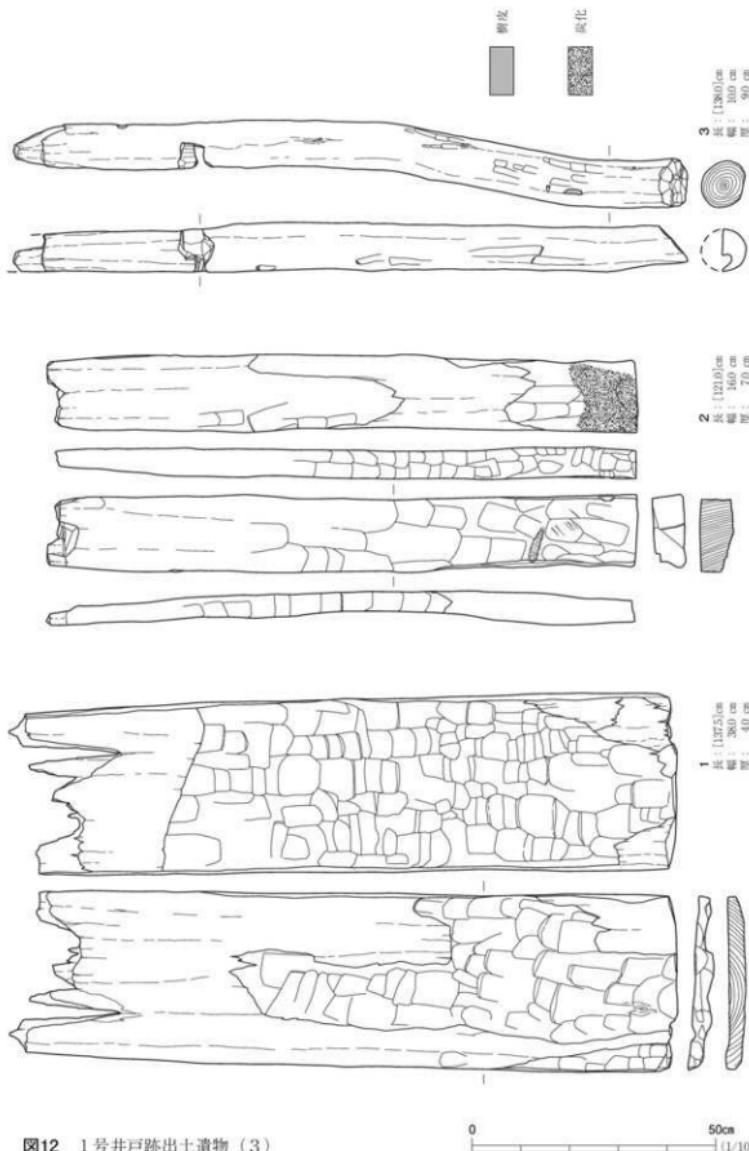


図12 1号井戸跡出土遺物（3）

年代が与えられており時期的に矛盾しない。井戸枠が残される井戸跡の検出事例では、建物跡数棟に井戸跡1基が組み合わされるようであり、本遺構も1・2号建物跡や付近の建物跡の柱穴とみられる小穴群と同時期に機能したものと推察される。

(廣川)

第5節 土坑

今回の調査で発見された土坑は17基である。4・5・6・8・11・12・14号土坑の7基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴とみられ、そのうちの8・11・12号土坑は底面までの深さが約170cmを測るなど、全体的に良好な遺存状態で検出された。それ以外の10基は性格等は不明であるが、出土遺物等から概ね古代以降のものと推察される。

1号土坑 SK 01 (図13、写真18)

本土坑は調査区東端のI 5グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から南西に4.5mほど離れて2号土坑が隣接する。

堆積土は3層に分層した。 ℓ 1は黒色粘質土、 ℓ 2・3は黒褐色粘質土で、 ℓ 2・3は、含有物の違いから細分した。それらはレンズ状堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104cm、短軸約90cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で28cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 25° Eである。

遺物は、 ℓ 1より縄文土器片3点、土師器片1点が出土したが、細片で、表面が磨滅しているため図示しなかった。出土した縄文土器は、付近より縄文時代晩期の資料を確認しているため、当該期のものへの可能性がある。

本遺構の具体的な時期や用途は不明である。

(廣川)

2号土坑 SK 02 (図13・16、写真18・26)

本土坑は調査区東端のI 6グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南に約1.5mには9号土坑、北東方向に約4.5mには1号土坑が配置される。

堆積土は黒褐色粘質土を基調とし、含有物の違いから2層に分層した。それらはレンズ状堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104cm、短軸約84cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で22cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 70° Wである。

出土遺物は土師器片16点、須恵器片9点が出土したが、ほとんどが細片でどれも検出面からのものである。中には、付近から出土した非ロクロ成形の杯や須恵器の大甕等と同一個体とみられるものも含まれていた。そのうち図示したものは、図16-1の須恵器のこね鉢1点である。器形は、底部から口縁部まで直線的に外傾する筒状のもので、底部が厚く、外側に張り出している。底部の周

縁は手持ちヘラケズリが施され、底面には細い串状のものを斜め方向から無数に刺突している。胎土は緻密で、堅牢である。

本遺構の用途は不明であるが、時期については、遺構周辺や検出面から出土した遺物から8世紀後半頃のものと考えられる。
(廣川)

3号土坑 SK 03 (図13・16、写真18・27)

本土坑は調査区南東隅のI 7グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約5m離れて9号土坑、2号土坑が配置される。

堆積土は黒褐色粘質土を基調とし、含有物の違いから2層に分層した。 ℓ 2は、壁際に三角堆積することから自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約104cm、短軸約98cmのおよそ円形で、検出面からの深さは最深で35cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 10° Wである。

出土遺物は土師器、須恵器片等8点で、そのうち図示したものは検出面から出土した図16-2の土師器杯と同図3の須恵器杯の2点である。2は非ロクロ成形の杯で、器形は平底で、口縁部がわずかに内湾する。外面には体部全体に横方向に手持ちヘラケズリが施されており、底部にはムシロ状の圧痕が認められる。3は底部周辺しか残らないが、回転糸切り痕が認められ、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がっている。

この2点以外は、表面や接合部分が磨滅して図示できなかったが、堆積土中からは同一個体の土師器の鉢ないし壺とみられる土器が出土している。

本遺構の用途は不明であるが、時期については、本遺構とその周辺から出土した遺物から8世紀後半頃のものと考えられる。
(廣川)

4号土坑 SK 04 (図13、写真18)

本土坑はE 7グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南側には、落し穴とみられる5号土坑、6号土坑が配置される。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は北から南にかけて緩やかに傾斜する。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸163cm、短軸82cm、検出面からの深さは118cmである。主軸方向はN 75° Wである。

底面の西端には橢円形の深い小穴が確認された。小穴の規模は長軸29cm、短軸23cm、深さは底面から3cmを測る。

堆積土は3層に分けた。 ℓ 1・2は、1~2cm程度の白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。 ℓ 3はグラウイ化している。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が確認されており、ほぼ同時期に機能

したものとみられる。

(由 井)

5号土坑 SK 05 (図13、写真18)

本土坑はE 7グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構と隣接して北側に4号土坑、南側に6号土坑が配置される。

堆積土は3層に分けた。ℓ 1・2は黒褐色粘質土であるが、ℓ 1は0.5～1cm程度の白色礫粒を多量、ℓ 2は1cm程度の白色礫細粒を微量含んでいる。ℓ 3は基盤層主体の土が堆積している。これららの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は歪んだ隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、長軸107cm、短軸65cm、検出面からの深さは62cmである。主軸方向はN 30° Eである。

底面の中央東寄りに楕円形の浅い小穴が確認された。小穴の規模は長軸38cm、短軸21cm、深さは底面から8cmを測る。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。同様の落し穴と考えられる4号土坑、6号土坑とは主軸方向が異なつており、本遺構の規模が小さいため、時期差があるのかもしれない。

(由 井)

6号土坑 SK 06 (図13、写真19)

本土坑はE 7グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の北側には4号土坑、5号土坑が配置される。

堆積土は3層に分けた。基本土層のL II bを由来とする黒褐色粘質土を基調とし、含有物や色調がやや異なっている。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。周壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、上端付近は外側に開いている。規模は、長軸145cm、短軸88cm、検出面からの深さは127cmである。主軸方向は、ほぼ東西方向に等しい。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内から複数検出している落し穴の一つであるが、そのうちの4号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。

(由 井)

7号土坑 SK 07 (図14、写真18)

本土坑は調査区東部のG 4、H 4グリッドにかけて位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南側約3mには同規模の10号土坑が、北東側約5mには11号土坑、南西側約3.5mには12号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、細かい白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。

平面形は長軸約84cm、短軸約78cmのはば円形で、検出面からの深さは最深で26cmである。底面

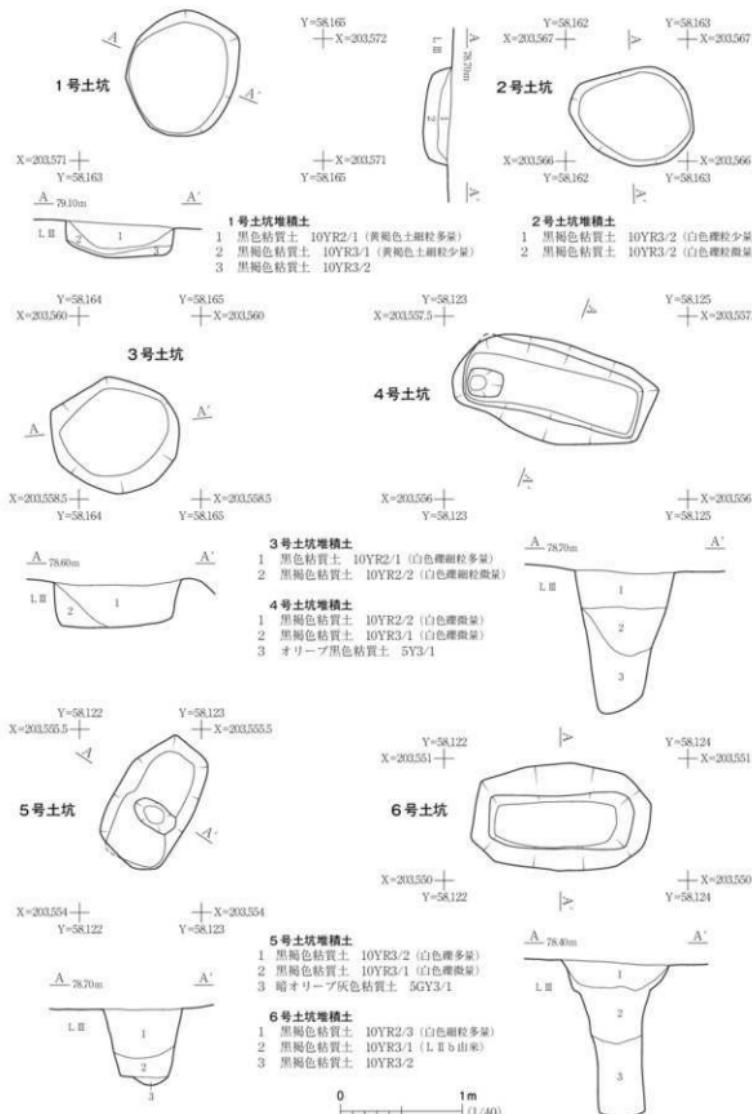


図13 1~6号土坑

は凹凸があり、周壁は直立する。

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。

(廣川)

8号土坑 SK 08 (図14、写真19)

本土坑は調査区南西隅のD 8・9グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。落し穴とみられる4~6号土坑の一群は、北東方向に約11m離れて配置される。

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は西北部分が平坦で南北方向は北側へ傾斜している。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸177cm、短軸104cm、検出面からの深さは166cmである。主軸方向はN 40°Wである。

堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は基本土層のL II b由來の砂疊を多量に含んだ黒褐色粘質土である。 ℓ 2はグライ化しており、細分できなかった。これらの層は、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、調査区東部に配置される11・12号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。

(由井)

9号土坑 SK 09 (図14・16、写真19・27)

本土坑は調査区南東隅のI 6グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約15m離れて2号土坑が配置される。

堆積土は2層に分層し、 ℓ 1の白色粘土をレンズ状に含んだ黒褐色粘質土を主体とし、 ℓ 2が周壁際にのみ認められる。断定はできないが、 ℓ 2の堆積状況から、 ℓ 2はなんらかの外枠の痕跡である可能性が考えられる。

平面形は長軸約48cm、短軸約46cmの円形で、検出面からの深さは最深で10cmである。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。

出土遺物は土師器・須恵器片等21点で、そのうち図示したものは図16-4の土師器杯と5の須恵器杯の2点である。それらは比較的底部が大きく、底部から直線的に外傾する逆台形型の器形である。4は、底部に回転糸切り痕が残り、底部の一部とその周縁を持ちハラケズリで調整されている。内面は放射状にヘラミガキが施され、黒色処理される。5は、底部の切り離しが回転ヘラ切りである。

本遺構の時期の詳細や用途は不明である。時期については、検出面から出土した遺物から8世紀後葉から9世紀初頭頃のものと考えられる。

(廣川)

10号土坑 SK 10 (図14、写真19)

本土坑は調査区東部のH 5グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本

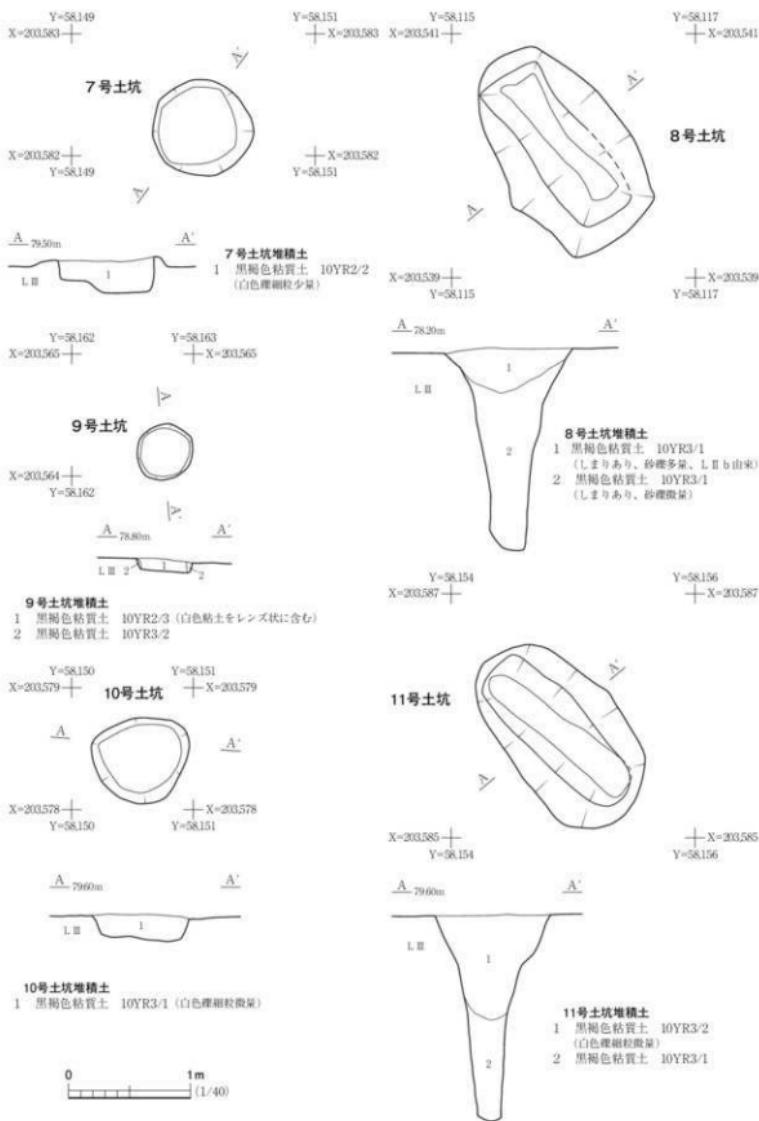


図14 7~11号土坑

遺構から北に約3mには同規模の7号土坑、北西に約3.5mには落し穴とみられる12号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、細かい白色礫を含んだ黒褐色粘質土である。

平面形は長軸約82cm、短軸約72cmの不整な円形で、検出面からの深さは最深で18cmである。底面には凹凸があり、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 55° Eである。

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。

(廣川)

11号土坑 SK 11 (図14、写真19)

本土坑は調査区壁際のH 4 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の南西側には7・10・12号土坑が配置される。

堆積土は2層に分けた。2層とも黒褐色粘質土であるが、ℓ 1は白色礫細粒を微量含んでいる。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

平面形は歪んだ長楕円形を呈し、底面は中央に向かって窪んでいる。周壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中間から上端に向かって開いている。規模は、長軸169cm、短軸97cm、検出面からの深さは168cmである。主軸方向はN 50° Wである。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、本遺構の南西方に約9m離れて位置する12号土坑とは規模や形状、主軸方向が一致している。

(由井)

12号土坑 SK 12 (図15、写真20)

本土坑はG 4・5 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構の東側には、7・10・11号土坑が配置される。

平面形は歪んだ長楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。周壁は底部から上端に向かって開いている。規模は、長軸171cm、短軸81cm、検出面からの深さは169cmである。主軸方向はN 35° Wである。

堆積土は2層に分けた。2層とも黒褐色粘質土であるが、ℓ 1は白色礫粒を微量含んでいる。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。調査区内からは複数の落し穴が検出されているが、本遺構の北東方に約9m離れて位置する11号土坑とは規模や形状、主軸方向が近似している。

(由井)

13号土坑 SK 13 (図15、写真20)

本土坑は調査区西部北寄りのC 4 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約5mには17号土坑、約9.5mには16号土坑が配置されている。

堆積土は黒褐色土を基調とし、含有物の違いにより2層に分層した。レンズ状堆積を示すことか

ら、自然堆積土とみられる。

平面形は長軸約126cm、短軸約94cmの楕円形で、検出面からの深さは最深で10cmである。底面はやや凹凸があるものの、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 30° Eである。

出土遺物が認められず、本遺構の時期や用途は不明である。

(廣川)

14号土坑 S K 14 (図15、写真20)

本土坑は調査区中央や東よりのG 6 グリッドに位置し、L III上面より検出面した。重複する遺構はない。周囲からは建物跡の柱穴とみられる小穴群が確認されている。

平面形は長楕円形を呈し、周壁は底部から上端に向かって開いている。南北中壁はオーバーハングし、底面はほぼ平坦である。規模は、長軸197cm、短軸99cm、検出面からの深さは154cmである。底面の南端には円形の深い小穴が構築される。小穴の直径は47cm、深さは底面から8cmを測る。主軸方向はN 25° Wである。

堆積土は2層に分けた。2層とも黒褐色土であるが、含有物の多寡により分層した。 ℓ 1は白色礫細粒を多量、 ℓ 2は白色礫細粒を微量含んでいる。 ℓ 2は還元作用を受けグライ化している。これらの層はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然流入土と考えられる。

本土坑は、形態から落し穴と考えられる。遺構の機能時期は縄文時代であろうが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。8・11・12号土坑とは規模や主軸方向が近似するが、他の落し穴に比べて、やや短軸幅が広く寸胴である。

(由井)

15号土坑 S K 15 (図15・16、写真20・27)

本土坑は調査区北部のE 3 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から西に約9m離れて2号溝跡が南北に延びる。

堆積土は単層で、基本土層のL II bを由来とする土を含む黒褐色土である。

平面形は長軸約68cm、短軸約62cmの不整な円形で、検出面からの深さは最深で18cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 10° Wである。

出土遺物は土師器片27点で、そのうちの土師器甕2点を図16に示した。どちらも底部から体部下半までしか残っていない。6は底部が小さく薄手のつくりで、外面には平行タタキが認められ、底部近くは縦方向にヘラケズリが施されている。内面の底部近くには縦方向にヘラナナが認められる。7は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のハケメが認められる。また、外面には煤やカマド設置に伴う粘土が付着している。また、底部外面にはカマド支脚の痕跡が円形に残される。

本遺構の用途は不明であるが、出土遺物から奈良時代から平安時代にかけてのものとみられる。調査区内からは確認できなかったが、7の土師器甕にカマドの設置痕跡があることから、周間に堅穴住居跡が存在し、集落が営まれていたことが推察される。

(廣川)

第3編 川原田遺跡



図15 12~17号土坑

16号土坑 SK 16(図15、写真20)

本土坑は調査区北西隅のC 3グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から南に約4mには17号土坑、約9.5mには13号土坑が配置されている。

堆積土は基本土層のL II bを由来とする黒褐色土を基調とし、含有物の違いにより2層に分層した。それらがレンズ状堆積を示すことから、自然堆積土とみられる。主軸方向はN 15° Eである。

平面形は長軸約94cm、短軸約78cmの不整な梢円形で、検出面からの深さは最深で22cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。

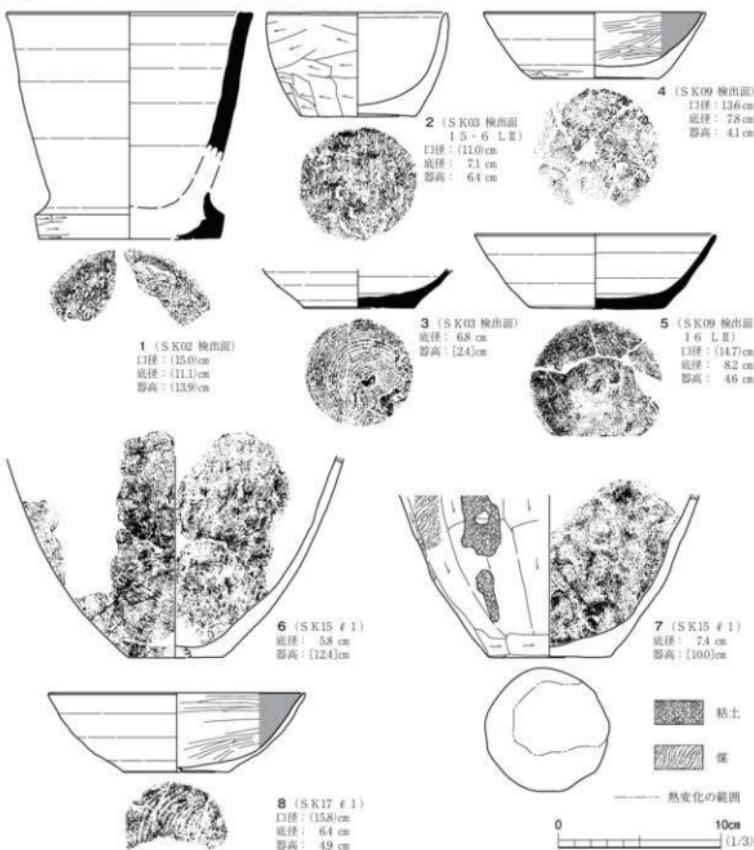


図16 土坑出土遺物

出土遺物が認められず、本遺構の具体的な時期や用途は不明である。

(廣川)

17号土坑 SK 17 (図15・16、写真20)

本土坑は調査区北西部のC 4 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。本遺構から北に約4mには16号土坑、南に約5mには13号土坑が配置されている。

堆積土は単層で、基本土層のL II b を由来とする黒褐色土である。

平面形は長軸約116cm、短軸約86cmの不整な楕円形で、検出面からの深さは最深で14cmである。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はN 45°Wである。

出土遺物は土師器片11点で、そのうち図16-8の土師器杯1点を図示した。8は底部に回転糸切り痕が残り、内面はヘラミガキが施され黒色処理される。器形は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

本遺構の用途は不明であるが、出土遺物から9世紀後半頃のものとみられる。

(廣川)

第6節 溝跡

今回の調査で発見された溝跡は2条である。それらは等高線に直交して南北方向に延びていることから、用排水等に関連する溝跡とみられる。

1号溝跡 SD 01 (図17)

本遺構は、調査区南部のE 7 グリッドに位置し、L III上面で検出された。2号建物跡とは直接の重複関係はないが同地点にあり、西側には落し穴とみられる4・5・6号土坑が配置される。

本遺構の堆積土は単層で、灰褐色砂質土が認められた。全長約5mではほぼ真北方向に直線的に延びており、北端部分がわずかに窪んでいる。最大幅は42cmで、断面はU字状となり、検出面からの深さは12cmほどで、端部の窪みがやや深く20cmを測る。

遺物は土師器の杯、壺類を中心に102点が出土した。細片が多く、図示したのは図17-1の1点である。1は土師器の杯で、底部に回転糸切り痕、内面にはヘラミガキ、黒色処理が認められる。

本遺構の用途は不明であるが、等高線と直交して延びることから用排水の機能を有していたと推測される。時期は、出土遺物から平安時代以降のものとみられる。

(廣川)

2号溝跡 SD 02 (図17、写真21)

本遺構は、調査区北部のD 2・3・4 グリッドに位置し、L III上面で検出された。調査区西部に南北方向に延びる旧沢の北部と重複しており、沢が埋まってからその延長上に掘り込まれ、調査区外へ続いている。なお、旧沢は落し穴とみられる8号土坑と重複しており、埋まった時期は8号土坑の構築以前である。

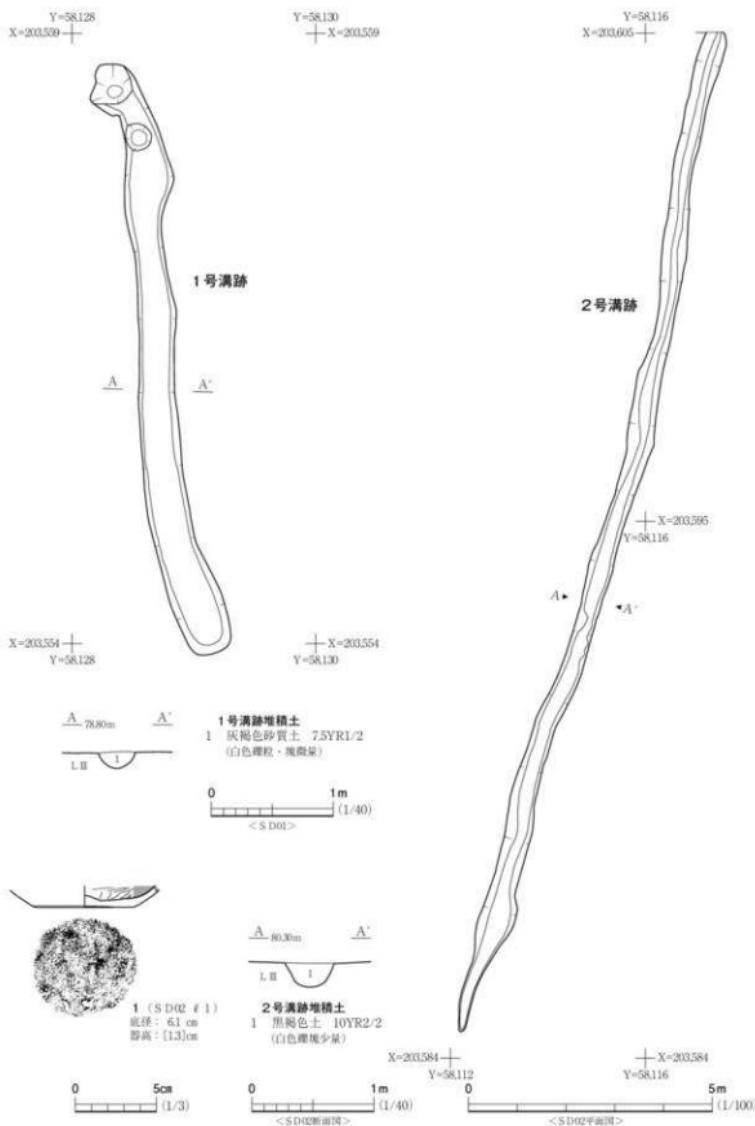


図17 1・2号溝跡・出土遺物

本遺構の堆積土は単層で、L II b由来の黒褐色土である。検出された部分の全長は約21mで、N 20° E方向に直線的に延びている。幅は全体を通して50cmに満たず、断面はU字状であるが凹凸がみられ、深さは検出面から40cm前後である。

出土遺物は土師器片5点で、細片のため図示はできなかった。

本遺構の時期や用途は不明であるが、等高線と直交して延びることから、用排水の機能を有していたと推測される。

(廣川)

第7節 その他の遺構

その他の遺構としては、性格不明遺構1基と小穴群が検出された。1号性格不明遺構は1号建物跡の東隣に配置され、小穴群については一部が調査区北部から確認されるが、1号建物跡と2号建物跡の南東側に集中している。それらは、1・2号建物跡とおよそ同時期のものとみられる。

1号性格不明遺構 S X 01

遺構 (図18、写真23)

本遺構は、調査区中央のF 5グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はない。重機による表土除去の段階から隅丸方形の範囲が確認され、竪穴住居跡を想定して調査を進めたが、底面が一定せず段状に下がっているため用途不明の竪穴状の窪地と判断した。

堆積土は3層に分層した。 ℓ 1・2は自然堆積土で、周囲から流れ込んだものとみられ、炭化材、炭化物粒を多く含んでいる。なお、炭化材2点を樹種同定した結果、コナラ節とヌルデであった。 ℓ 3は底面上に一定の厚さで堆積し、L III塊を斑状に含んでいることから人為的に埋められた層と考えられる。西壁の一部で確認された ℓ 3'は、壁の崩落土と考えられる。

大きさは長軸約400cm、短軸約340cmで、やや南北軸に細長い隅丸方形である。主軸方向はN 20° Wである。深さは北西隅の最深部分で40cmを測るが、南は浅く、北に行くに従って段階的に深くなっている。北西隅の一角は皿状に窪んだ形状となっており、底面には長さ約60cmの角礫が認められた。底面の平たい部分は、若干の凹凸がありながらも南から北へ緩く傾斜している。

遺物 (図18、写真27)

出土遺物は、土師器を中心に130点が出土するが、細片が多い。このうち、3点を図18に示した。1は土師器の杯で、内面黒色処理が施されている。2は綠釉陶器片で、碗の口縁部片である。胎土の緻密な薄手の作りで、暗オーリーブ灰色の釉が認められる。3は篦状石器である。

まとめ

本遺構は、廃絶後に人為的に埋められている。その後、遺物の多くが深い窪地となったところに流れ込んだものとみられる。出土した炭化材2点の放射性炭素年代は9世紀初め頃を示すが、出土遺物は周辺の遺構から出土するものと大きな違いが認められず、少なくとも建物跡や井戸跡が機能

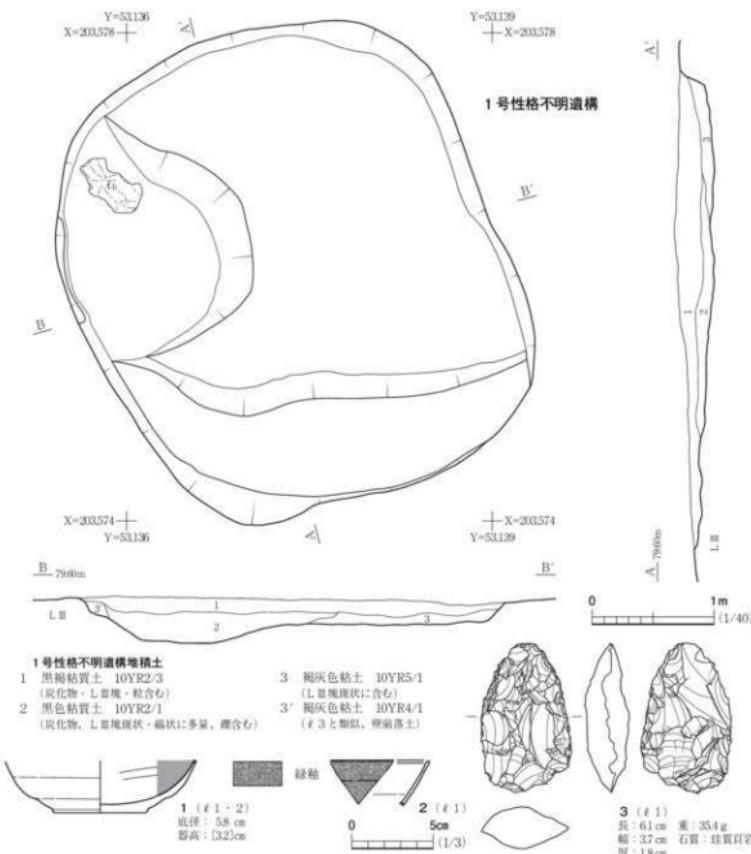


図18 1号性格不明遺構・出土遺物

していた時期には窪地となって残っていたものと考えられる。

(廣川)

小穴群(図19~21、写真24・25)

検出した小穴は62基である。小穴はグリッドごとに番号を付け、表1に、長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土等の所見をまとめた。検出面は大半がL III上面だが、L II中から確認できたものもあった。堆積土はいずれも単層で、黒褐色土を呈するものが多い。なお、D 5 P 1~3、E 6 P 5~9、F 5 P 1、G 6 P 6は欠番とした。

調査区北部の3個以外は、小穴群のまとめりは1号建物跡と2号建物跡の間と、2号建物跡の北

東方向に集中している。それらは1・2号建物跡の柱穴と近似しており、同時期に營まれた同様の建物跡の柱穴とみられ、複数の建物の存在が推察される。また、1号建物跡の南側の一群は、南辺に並行して一列に並ぶものもあるため、庇等の関連施設のものとも考えられる。

出土遺物は、土師器片14点である。この他、木片が2点出土した。このうち3点を図示した。なお、木片2点は建物跡の柱穴から認められたものと同様に柱材の可能性が考えられる。図21-1は赤焼き土器で、内面にコテ当て調整が施される。2は土師器の杯で、内面に単位の細いヘラミガキが密に施され、黒色処理される。1・2とも、底部には回転糸切り痕が認められる。3は筒形土器の細片で、輪積み痕が残される。

(廣川)

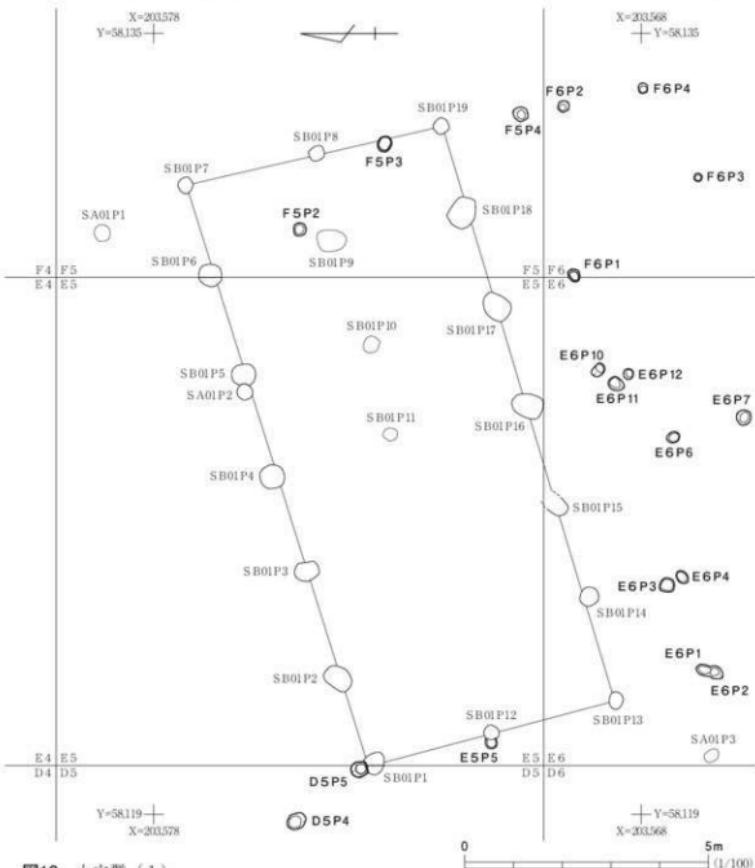


図19 小穴群（1）

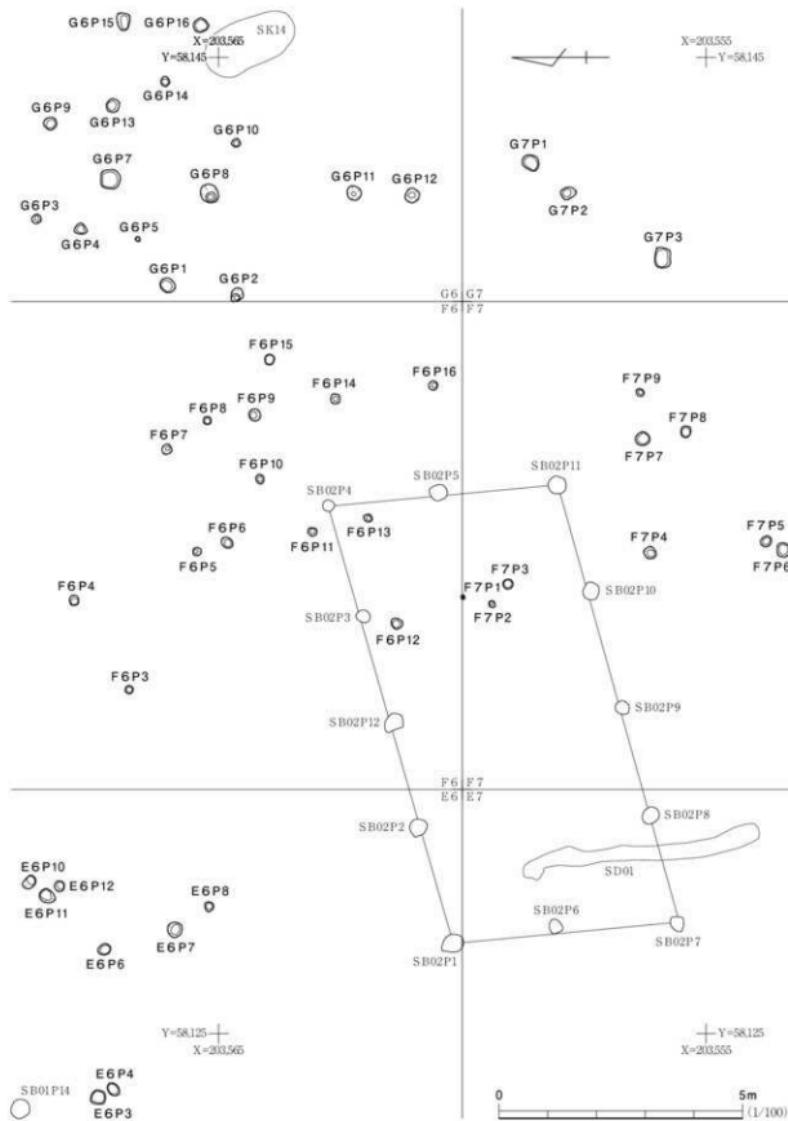


図20 小穴群（2）

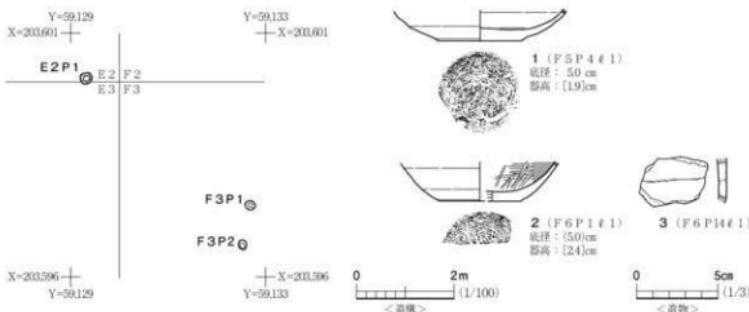


図21 小穴群（3）・出土遺物

表1-1 小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
4	D5	40	32	14	I0YR3-1 黒褐色土(灰白色粘土塊含む)	
5	D5	34	30	25	I0YR3-2 黑褐色土(灰白色粘土塊含む)	
1	E2	24	24	6	I0YR4-1 頂灰土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
5	E5	25	22	21	-	
1	E6	30	23	10	I0YR3-3 硝褐色土(硝褐色土塊、木片含む)	
2	E6	30	27	12	I0YR3-2 黑褐色土(明黄褐色土塊含む)	P3→P2
3	E6	34	32	8	I0YR2-2 黑褐色土(硝褐色土塊)	
4	E6	31	22	8	I0YR3-2 黑褐色土(灰褐色土塊)	
6	E6	28	24	26	I0YR3-2 黑褐色土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
7	E6	32	32	27	I0YR4-1 頂灰土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
8	E6	20	20	21	I0YR4-2 从黃褐色土(黄褐色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
10	E6	30	22	22	I0YR4-1 頂灰土(顕化鉄粒含む)	
11	E6	34	27	24	I0YR4-1 頂灰土(顕化鉄粒含む)	
12	E6	22	30	30	I0YR4-1 頂灰土(顕化鉄粒含む)	
1	F3	22	22	23	I0YR3-3 硝褐色土(顕化鉄粒含む)	
2	F3	20	18	37	I0YR3-2 黑褐色土(顕化鉄粒含む)	
2	F5	26	26	10	I0YR2-2 黑褐色土(顕化鉄粒含む)	
3	F5	34	28	28	I0YR2-2 黑褐色土(顕化鉄粒、灰白色粘土粒含む)	
4	F5	30	28	17	I0YR3-1 黑褐色土(顕化鉄粒含む)	
1	F6	30	24	25	I0YR4-1 黑褐色土(顕化鉄粒、青褐色土粒含む)	
2	F6	25	24	42	I0YR3-1 从褐色土(顕化鉄粒、青褐色土粒含む)	
3	F6	18	18	35	I0YR2-2 黑褐色土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
4	F6	22	22	23	I0YR3-1 黑褐色土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
5	F6	18	18	21	I0YR4-2 从黃褐色土(黄褐色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
6	F6	28	20	19	I0YR4-1 从褐色土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
7	F6	22	20	21	I0YR3-1 黑褐色土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
8	F6	16	16	17	I0YR3-2 黑褐色土(硝褐色土粒、顕化鉄粒含む)	
9	F6	26	24	12	I0YR3-2 黑褐色土(灰白色粘土粒、顕化鉄粒含む)	
10	F6	20	18	31	I0YR3-3 硝褐色土(黄褐色土粒、顕化鉄粒含む)	
11	F6	18	18	20	I0YR3-1 黑褐色土(黄褐色土粒、顕化鉄粒含む)	
12	F6	14	10	18	I0YR4-1 頂灰土(灰白色粘土塊、顕化鉄粒含む)	
13	F6	20	18	38	I0YR2-2 黑褐色土(顕化鉄粒、木片含む)	
14	F6	24	20	26	I0YR3-1 黑褐色土(灰白色粘土粒、青褐色土粒含む)	
15	F6	22	20	7	I0YR4-2 黑褐色土(灰白色粘土塊)	
16	F6	20	20	35	I0YR2-2 黑褐色土(灰白色粘土粒、顕化鉄粒含む)	
1	F7	10	8	20	I0YR3-1 黑褐色土(顕化鉄粒含む)	
2	F7	12	12	16	I0YR3-2 黑褐色土(顕化鉄粒、青褐色土粒含む)	
3	F7	12	10	22	I0YR3-2 黑褐色土(顕化鉄粒、青褐色土粒含む)	
4	F7	28	26	21	I0YR3-1 黑褐色土(顕化鉄粒含む)	
5	F7	24	20	18	I0YR3-2 从黃褐色土(顕化鉄粒含む)	
6	F7	30	30	17	I0YR5-2 从黃褐色土(顕化鉄粒含む)	
7	F7	30	28	22	-	

表1-2 小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
8	F7	24	20	24	-	
9	F7	20	14	32	-	
1	G6	28	32	19	10YR3/3 黒褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
2	G6	32	28	16	10YR3/2 黒褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
3	G6	20	20	32	10YR3/2 黑褐色土(灰白色粘土塊、黄褐色粘土粒)	
4	G6	24	24	37	10YR3/2 黑褐色土(灰白色粘土塊、黄褐色粘土粒)	
5	G6	12	10	10	10YR3/2 黑褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
7	G6	40	40	16	10YR3/3 黑褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
8	G6	42	36	31	10YR3/2 黑褐色土(酸化鉄粒多量含む)	柱頭あり
9	G6	36	26	22	10YR3/2 黑褐色土(炭化物粒、酸化鉄粒多量含む)	
10	G6	18	18	14	10YR4/2 灰褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒多量含む)	
11	G6	30	28	18	-	
12	G6	30	30	18	-	
13	G6	28	26	18	10YR3/3 黑褐色土(炭化物粒、灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
14	G6	20	20	16	10YR3/3 黑褐色土(酸化鉄粒含む)	
15	G6	36	26	20	10YR3/2 黑褐色土(炭化物粒、炭化物粒含む)	
16	G6	30	30	17	10YR4/4 灰褐色土(灰白色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
1	G7	36	32	16	10YR3/3 黑褐色土(灰白色粘土塊、黄褐色粘土塊含む)	
2	G7	32	22	24	10YR3/3 黑褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	
3	G7	42	32	17	10YR3/2 黑褐色土(黄褐色粘土塊、酸化鉄粒含む)	

第8節 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から縄文土器、土師器、須恵器、石製品等が計6,078点出土し、主体となるものは平安時代の土師器、須恵器である。遺物は細片が多く、磨滅しており、器形全体を復元できたものは少ない。

調査区全体に遺物包含層であるL II が広がっており、遺物のほとんどがL II 出土である。出土地点の傾向を見ると、調査区北東部のE 2・3、F 2・3グリッドからの出土量が多く、縄文土器や石製品の大半はこの地点を含む調査区の北部から出土している。平安時代の土師器、須恵器はこの地点の他に、1・2号建物跡と1号井戸跡の周辺となるE 6、F 5~7、G 7グリッド付近に多く、特に井戸跡より北側のF 7グリッドに集中している。また、調査区南東端のI 6グリッドからは、縄文時代晩期と奈良時代の資料が比較的遺存が良好な状態で出土した。

縄文土器（図22、写真32）

図22-1~14は縄文土器である。縄文土器は細片が多く、器面が磨滅したものばかりのため、文様が判別できる数点を図示した。そのため時期の消長は不明であるが、少なくとも前期から晩期の資料を確認することができた。

1~3は爪形文状の刻み目が認められることから、早期中葉~前期後葉に収まる時期のものと考えられる。4は縄压痕が施されることから早期末から前期初頭、5は器面が荒れるものの、ループ文が認められることから前期前葉のものである。6は後期前葉の綱取II式とみられる口縁部片で、口縁部下端に沈線が巡り、そこから懸垂文が描かれるようである。7~9は晩期中葉の大洞C 2式

とみられ、口縁部の周囲には沈線が巡らされている。10は櫛齒状文が施される粗製土器である。

11～13は、他の資料と比べて遺存状態がよく、縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけてのもとのと考えられる。11・12は台付浅鉢の口縁部片とみられ、同一個体の可能性もある。波状口縁となり、口唇部と口縁部に沿った内外面には沈線が施されている。体部の文様は変形工字文が描かれ、下半には磨消繩文が施されている。14はこれらの浅鉢の底部に付くとみられる台の部分で、横位の沈線が認められる。13は平縁の浅鉢の口縁部片で、内面には口縁部に沿って沈線が巡り、外面には沈線で変形工字文が描かれている。

弥生土器（図22、写真32）

図22～15は壺の一部とみられる弥生土器で、弥生時代中期のものである。最大胴径となる体部上半部分には、沈線で横向方に文様が描かれ、磨消繩文が施されている。他に調査区内からは弥生土器と判断できる資料は認められなかった。

土師器（図23～26、写真33～35）

図23～図26－1～3は、奈良時代から平安時代にかけての土師器である。

図23－1～5は非ロクロ成形の杯で、器形と調整技法から8世紀後半頃のものとみられる。器形はいずれも平底で、底面から直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾気味である。内面は、ヘラミガキが施され黒色処理されている。外面は、やや小型の1では体部から底部にかけて縱方向に指ナデが認められるが、2～5は底部から口縁部近くまで手持ちヘラケズリで整形されている。また、これらの胎土は近似しており、白く緻密である。

図23－6～図24－9はロクロ成形の杯類で、内面にヘラミガキが施され黒色処理される一群（図23－6～図24－4）と、ヘラミガキ、黒色処理が認められない一群（図24－5～9）とに大別できる。図23－6は、底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリが施されている。同図7の底部切り離しは不明であるが、体部下半には手持ちヘラケズリが施されている。同図8～20の底部には回転糸切り痕が認められ、底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。遺存状態のよい7～9・11の器形は、底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。図23－21～図24－4は底部の切り離しが回転糸切り、無調整のものである。

図24－5～9は底部に回転糸切りが認められ、内面はコテ当て調整で円滑に仕上げられている。6は底部から緩やかに立ち上がって外傾し、7は器高が低く、底部から大きく開いて外傾し、口縁部がわずかに内湾し、皿状の器形となる。

図24－10～15・17は杯類の高台部分である。10・11・13・14の杯部はヘラミガキが施され、黒色処理されるが、12・15・17には黒色処理が認められない。10・11の高台は短く、12・15の高台は長い。また、12は垂直に立ち上がるが、13～15はハの字状に開いている。17は他のものより厚手となるため、杯ではなく鉢の可能性もある。同図16は柱状高台の付く、小型の耳皿である。底

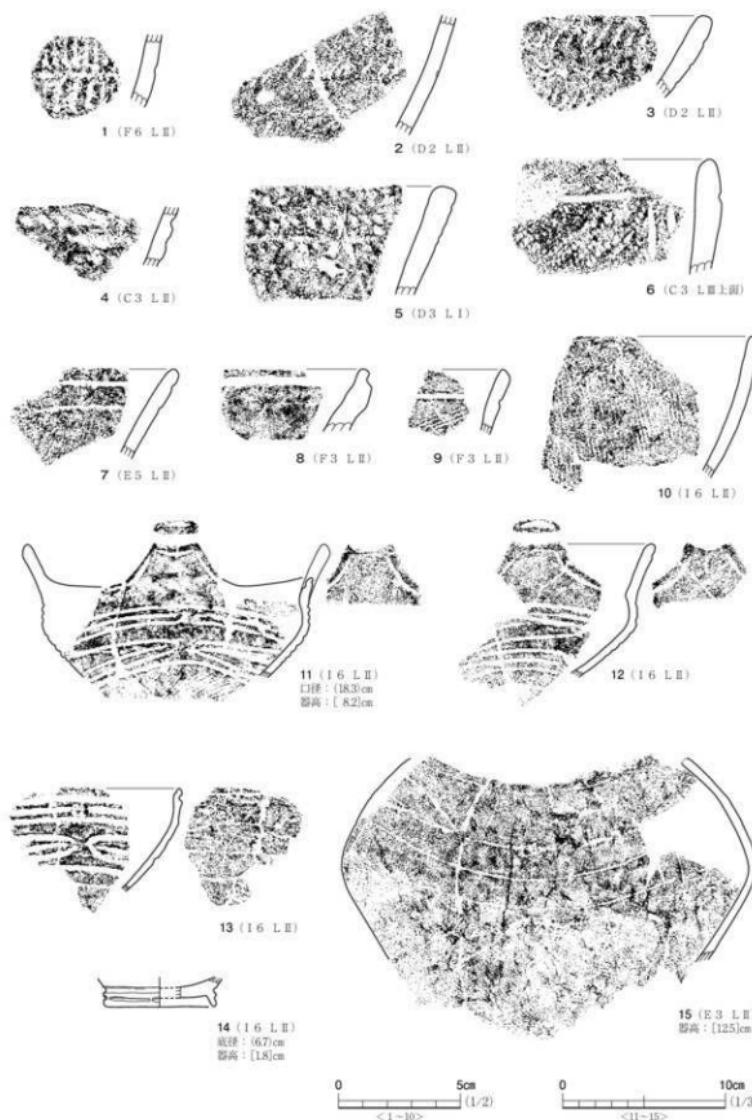


図22 遺構出土遺物（1）

第3編 川原田遺跡

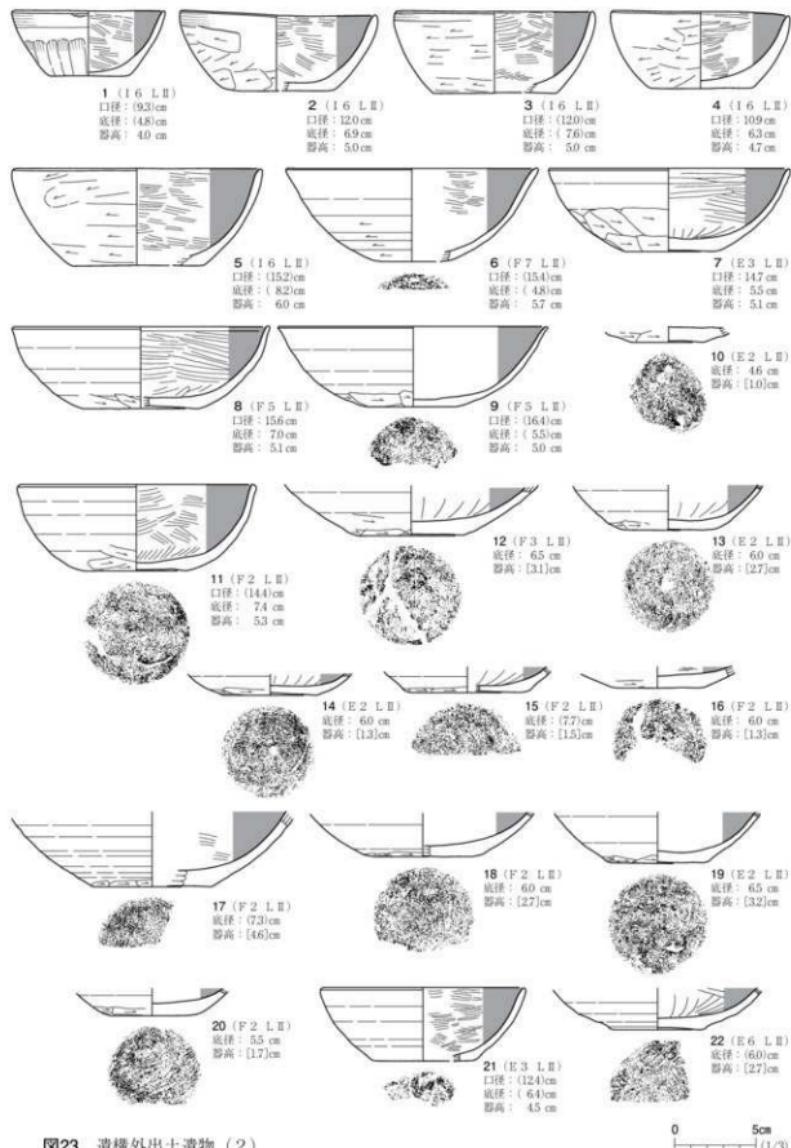


図23 遺構外出土遺物（2）

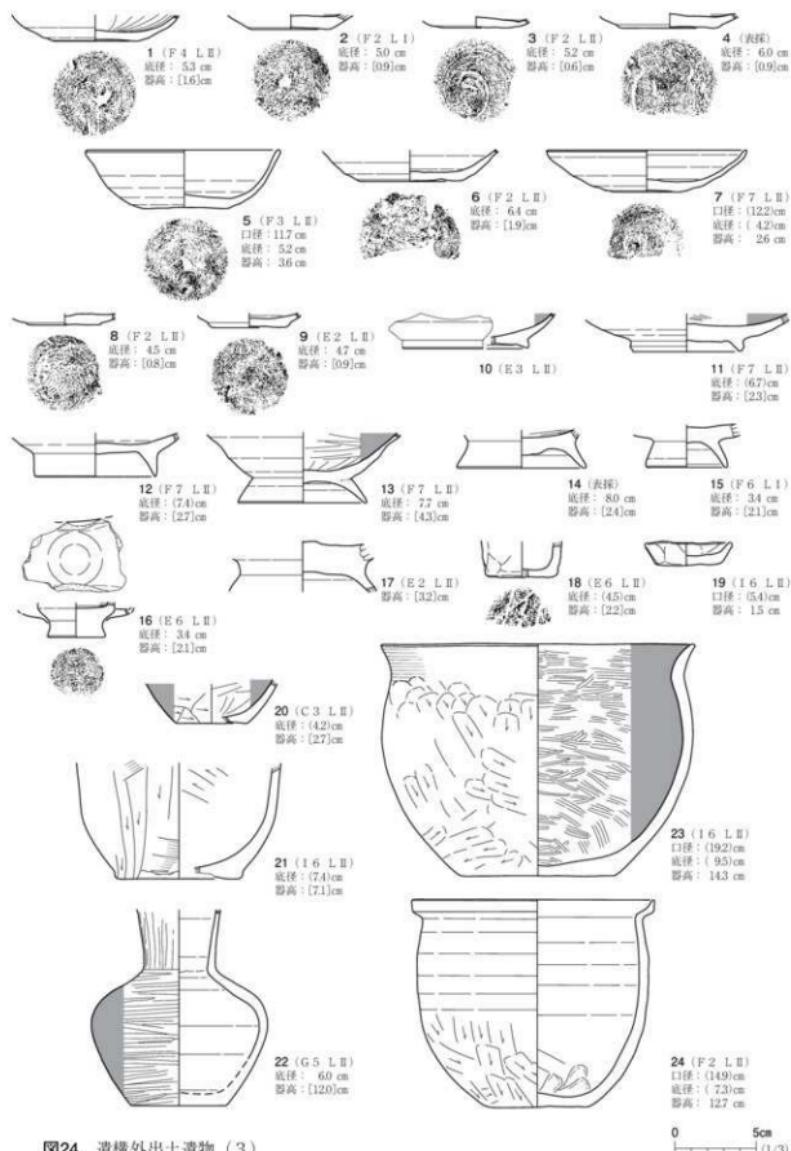


図24 遺構外出土遺物（3）

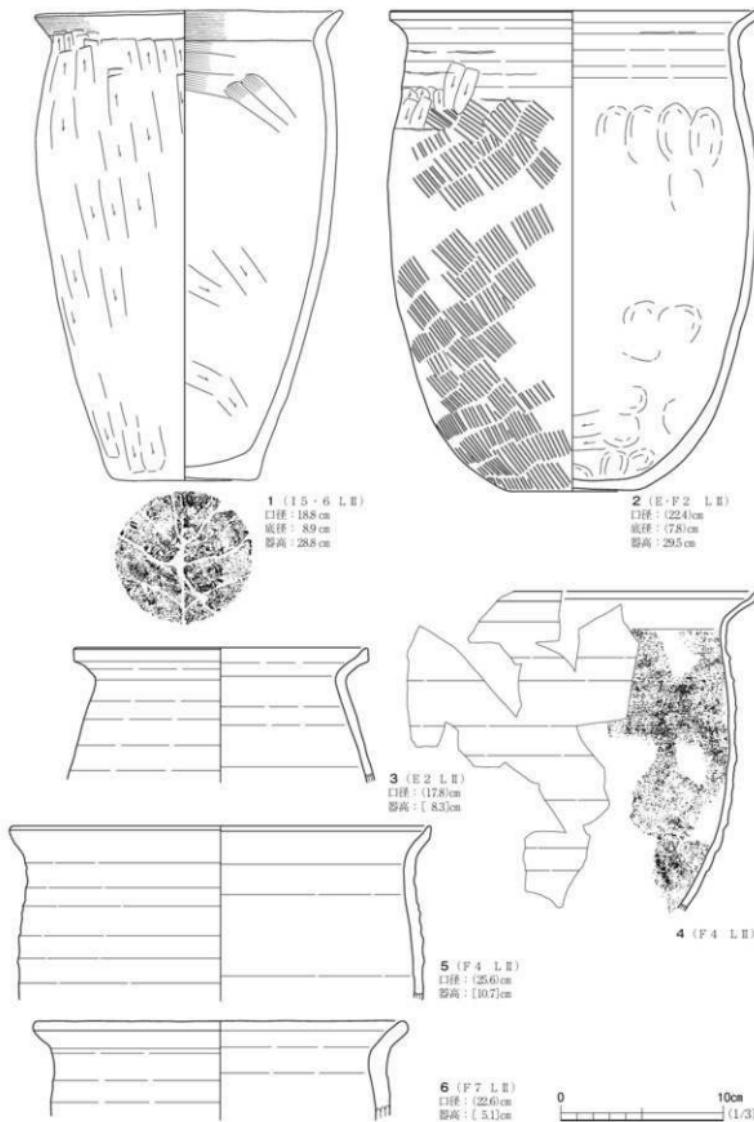


図25 遺構外出土遺物 (4)

部には回転糸切り痕が残る。内面は黒色処理が施されるが、調整は磨滅のため不明瞭である。

図24-18・19は手づくね土器で、18の底部には木葉痕が認められる。20は杯のミニチュア土器で、外面にはケズリ、内面にはミガキが施され、内外面ともに黒色処理される。同図22は須恵器の長頸瓶を模倣したとみられるもので、外面には丹念にミガキが施され、黒色処理が施されている。

図24-21・23・24、図25、図26-1～3は壺で、そのうち図24-21・23、図25-1、図26-3は非クロ成形のもので、他の資料より古い特徴が認められる。図24-23は丸みのある壺で、外面には口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が認められ、図23-2～5の杯と調整技法や胎土が酷似している。図25-1は長胴の壺で、底部には木葉痕が認められる。外面には縱方向にヘラケズリが施され、内面には下方にヘラケズリ、口縁部と周囲にはナデが認められる。図24-24、図25-2～6、図26-1・2はロクロ成形の壺である。図24-24は小型の壺で、外面の体部下半にはヘラケズリ、内面の底部周辺にはヘラナデが認められる。図25-2は出羽壺とも呼ばれる丸底の長胴壺で、外面には底部から体部全体に平行タタキが施され、内面には指オサエが認められる。図26-3は非クロ成形の壺で、口縁部には指オサエが残り、歪んだつくりとなっている。

須恵器（図26・27、写真36）

図26-4～14、図27は須恵器である。図26-4・5は杯で、底部から緩やかに立ち上がって口縁部がわずかに外反する。底部には回転糸切り痕が残り、4の底部周囲には手持ちヘラケズリが施されている。6は長頸瓶の口縁部から頸部にかけての資料である。7～9は瓶類の底部近くで、7・9は回転ヘラケズリが施され、7・8は高台部分が外側に短く張り出している。6・8の表面には灰が被った様子が観察できる。10は土師器の調整技法を有するもので、寸胴の器形の外面には縱方向に密にヘラミガキが施されている。底部には「村」もしくは「札」といった文字とみられる線刻が認められる。

図26-11～14は壺類で、11・12が口縁部、13・14が底部の資料である。13は底部周囲に回転ヘラケズリが認められ、断面三角形の短い高台が付き、14は上げ底状となっている。図27は須恵器の破片で、外面には平行タタキが認められる。内面には、1がタタキメ、2が指当て、3が同心円の當て具痕が認められる。

灰釉陶器（図26、写真36）

調査区内から出土した灰釉陶器は、図26-15の1点である。15は碗の高台部分で、緩やかに湾曲する断面が三日月状の高台が付き、内面には斑状のガラス質の灰釉が観察できる。

土製品（図26、写真36）

図26-16・17は土鉢である。どちらも鉢の部分しか残っていない。17には紐通しの穴が認められる。

第3編 川原田遺跡

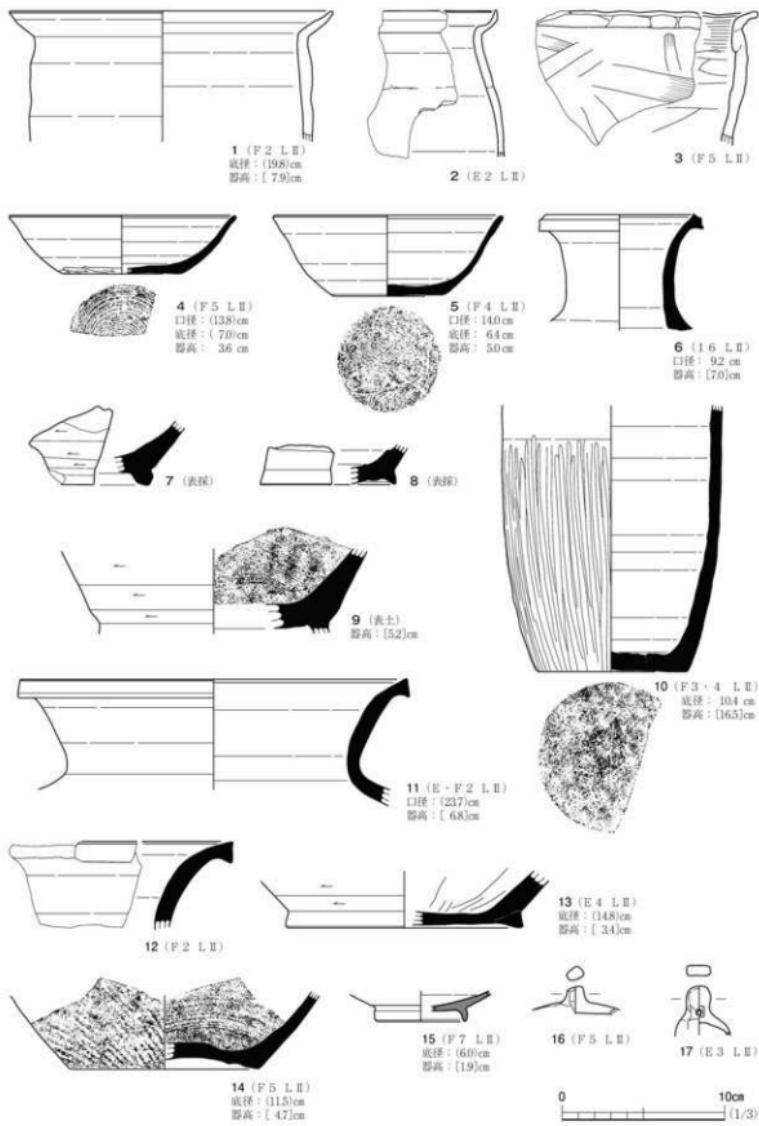


図26 遺構外出土遺物（5）

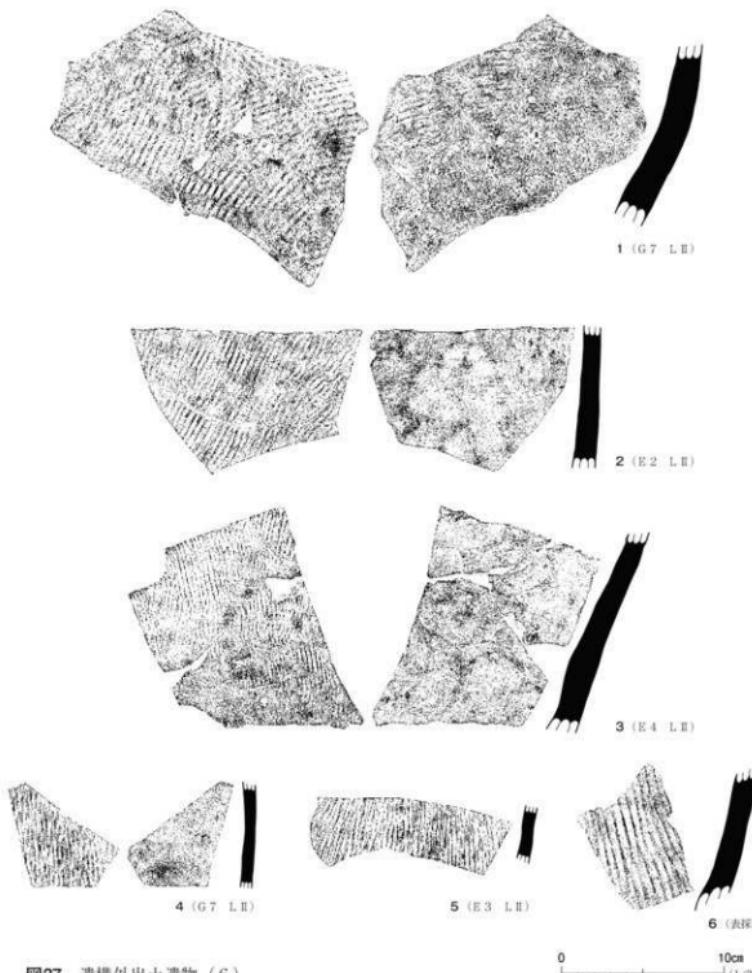


図27 遺構外出土遺物（6）



石製品（図28・29、写真37）

図28・29は石製品である。図示はしなかったが、調査区内からは石英ないし玉髓の石塊が認められ、それら石材に加工痕のあるものも出土している。この種の石材については付近一帯の土壤に含まれている。

第3編 川原田遺跡

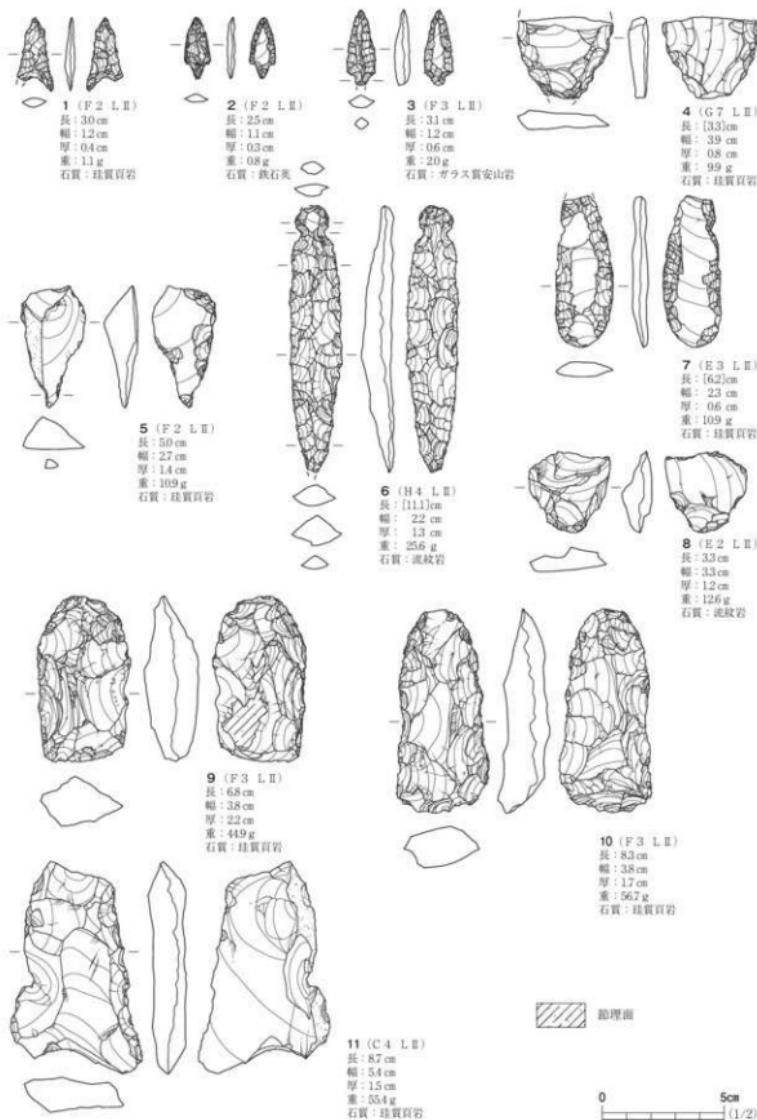


図28 遺構外出土遺物（7）

図28-1～3は石鎌である。1の基部は無茎で抉りがあり、片側が欠けている。2・3の基部は有茎である。4は石槍で、先端からの大半と基部が欠損する。5は石錐である。6・7は縦長の石匙である。6は縦長の剥片の両面を丁寧に加工し、先端が尖った細長い柳葉状の形態となり、やや厚みがある。7はつまみ部分が欠けている。8は搔器で、端部の両面から加工して刃部を作り出している。9・10は箒状石器である。11は削器で、側面には片面から作り出した刃部が認められる。

図29-1は打製石斧で、中央に抉りのある分銅形である。2は磨製石斧を再利用しており、元の基部のところを再調整して刃部を作り出している。3は凹石、4～6は磨石で、4・6の端部には敲打痕が認められる。

(廣川)

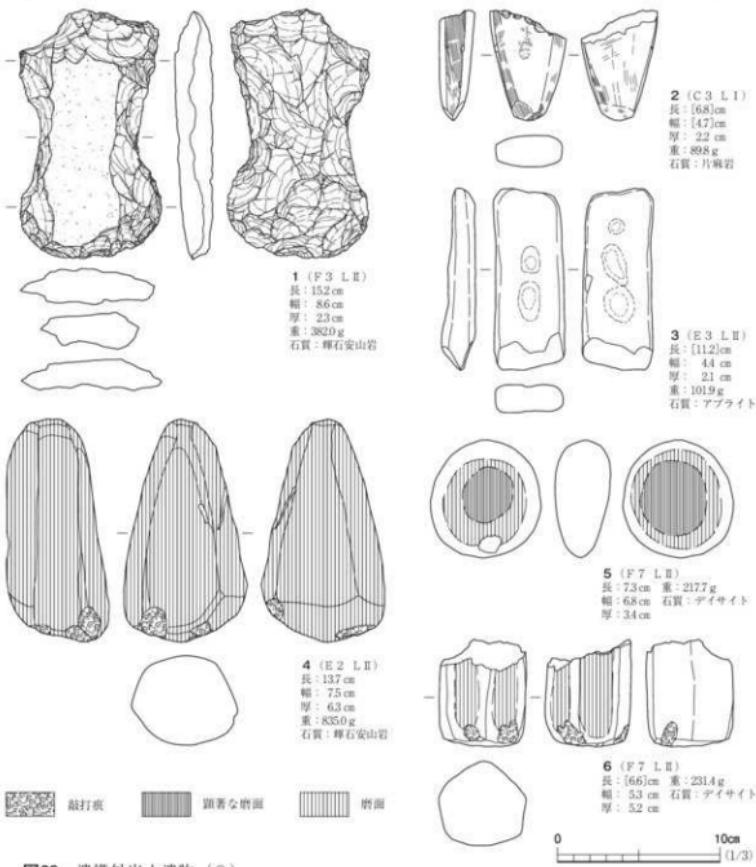


図29 遺構外出土遺物 (8)

第3章 総括

川原田遺跡からは、調査区全域に広がる遺物包含層とともに、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1列、井戸跡1基、土坑17基、溝跡2条、性格不明遺構1基、小穴62基が検出された。今回の調査によつて、縄文時代の落し穴が点在する狩場や、平安時代の掘立柱建物跡で構成される集落等を確認することができた。下記にそれらの概要をまとめる。

縄文時代の遺構は落し穴7基が検出され、調査区の北東隅から南西隅にかけて帶状に分布している。そのうちの3基は、検出面からの深さが約170cmを測り、遺存状態が大変良いことが特筆される。狩場という性質から共伴する遺物は認められなかつたが、遺物包含層からは縄文時代の各時期の遺物が出土しており、調査区外の周辺に生活の痕跡が埋没している可能性がある。

その後、しばらくは出土遺物が途絶えるが、調査区の南東部から奈良時代後半頃のまとまった遺物が出土し、平安時代に入ると掘立柱建物跡や井戸跡等で構成される集落が形成される。検出された掘立柱建物跡は、主屋とみられる板間と土間の空間を有する建物と、やや小さめの側柱のみの建物とが確認され、その他にも多数の柱穴とみられる小穴が存在することから複数の建物が繰り返し建て替えられた様子がうかがわれる。主屋には庇が付いていた可能性もあり、同時期とみられる井戸跡には丁寧な加工が施された井戸枠の部材が残されるなど、地域の相応の有力者が居住していたものとみられる。

平安時代の集落の形成時期は9世紀後半から10世紀前半頃に収まるものとみられ、主体となる遺物包含層から出土する資料の時期とも一致している。建物跡の周囲や遺物包含層から出土する資料には、細片ではあるものの縁軸陶器片や猿投窓とみられる灰釉陶器碗が出土しており、出羽甕とも呼ばれる日本海側に分布する特徴的な器形の土師器甕が認められるなど、出土遺物からも一般集落とはやや異なった様相を示している。また、少數ながら出土した須恵器と土師器にはそれぞれの技法を折衷するものが認められる。

本遺跡は桑折町から福島市飯坂方面へ通じる交通の要衝にあり、検出遺構や出土遺物からはいくつかの興味深い知見が得られた。特に、県内では10世紀以降の集落の調査数が少なく、9世紀後半から10世紀にかけての過渡期の集落の貴重な調査事例となった。
(廣川)

引用・参考文献

- 桑折町史出版委員会 2002 『桑折町史 通史編1』
藤原豊一 1990 「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会
福島県教育委員会 2014 「鶴沼C遺跡」『会津綿貫北道路遺跡発掘調査15』
福島県教育委員会 2016 「福島県内遺跡分布調査報告23」
松井草編 2006 「動物考古学の手引き」独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

第4編 馬場^ば遺跡^ば

遺跡記号 Q R - B B A
所在地 伊達郡桑折町大字成田字馬場・稻山
時代・種類 中近世の居住城
調査期間 平成28年10月27日～11月7日
調査員 廣川紀子・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

馬場遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字成田字馬場・稻山に所在する。地形的には標高60mほどどの低位段丘上に立地し、遺跡及び周辺地は整地され、畑や水田等の耕作地として利用されており、遺跡の北側には工場用地が隣接する。

遺跡から100mほど東には近世の奥州街道に比定される県道353号線が桑折町中心街へと延びており、この県道沿いには併行して調査が行われた新宿遺跡（第5編）や古代・近世の須恵器・陶器の窯跡が点在する。また、南西0.5kmほど離れた聖光学院高等学校の敷地内では、中世の屋敷跡である土井ノ内遺跡が調査されており、遺跡の周辺からは中世の遺跡が複数確認されている。（廣川）

第2節 調査経過

馬場遺跡は、相馬福島道路建設中の工事現場から不時発見された遺跡である。福島県教育委員会では、新発見の遺跡として確認調査を行い、工事予定地となる馬場遺跡の一部では発掘調査が必要

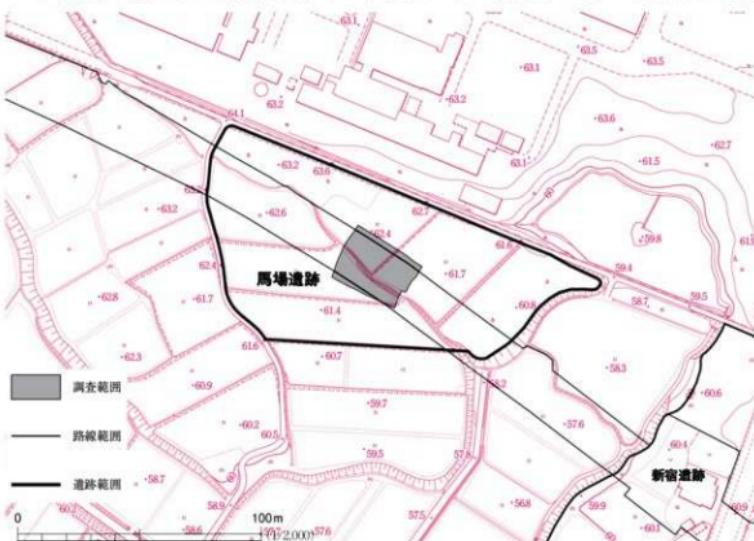


図1 調査区位置図

となった。10月27日付で福島県教育委員会より馬場遺跡600mの発掘調査の指示を受け、急速、調査中の新宿遺跡から調査員、作業員を割いて調査に入った。

調査に係った作業日数は延べ3日である。以下に、調査の経過について記す。

11月1日(火)：発掘器材類を搬入し、遺構検出作業に入る。1～3号土坑、1・2号溝跡を検出し、調査区北東部に小穴群の広がりを確認する。順次、検出遺構の精査及び記録作業を進める。

11月2日(水)：引き続き、遺構検出作業、1号溝跡の精査及び記録を行う。

11月7日(月)：地形測量と並行して、調査区の全体写真を撮影するため清掃作業を行う。全体写真的撮影後、発掘器材類を新宿遺跡へ搬出する。

11月8日(火)：県文化財課及び工事側の立会いの下、引き渡しを行った。

(廣川)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

馬場遺跡は、相馬福島道路を建設中の工事現場から不時発見された遺跡である。工事前までは主に水田等の耕作地として利用されていた。ほぼ平坦な地形である。

今回の調査範囲には3面の水田がかかっており、その間を東西方向に流れている現在の用水路により中央部が破壊されている。

検出された遺構は、土坑3基、溝跡2条、小穴36基で、遺構と周辺から出土した遺物から中近世のものとみられる。

基本土層（図2、写真3）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I・IIの2層に分層した。

L Iは、表土及び盛土層である。周辺一帯は耕作地として圃場整備されており、その際に耕作土として盛られたものとみられる。

L IIは、L I直下から確認される層で、この上面が遺構検出面である。L IIの上には盛土が直接堆積し、遺構内に堆積する土層が確認されないことから、L IIは後世にある程度掘削を受けたものと推察される。L IIの色調は、明赤褐色土(5YR5/8)から灰黄褐色粘土(10YR6/2)にわたり、上半部は赤みが強く、下部になると粘性度が増すようである。含有物は径1mm以下の細砂が斑文状に混じり、径5mm以下の黒色土の偽礫が少量含まれる。場所によっては還元によりグライ化しているところも認められる。

(廣川)

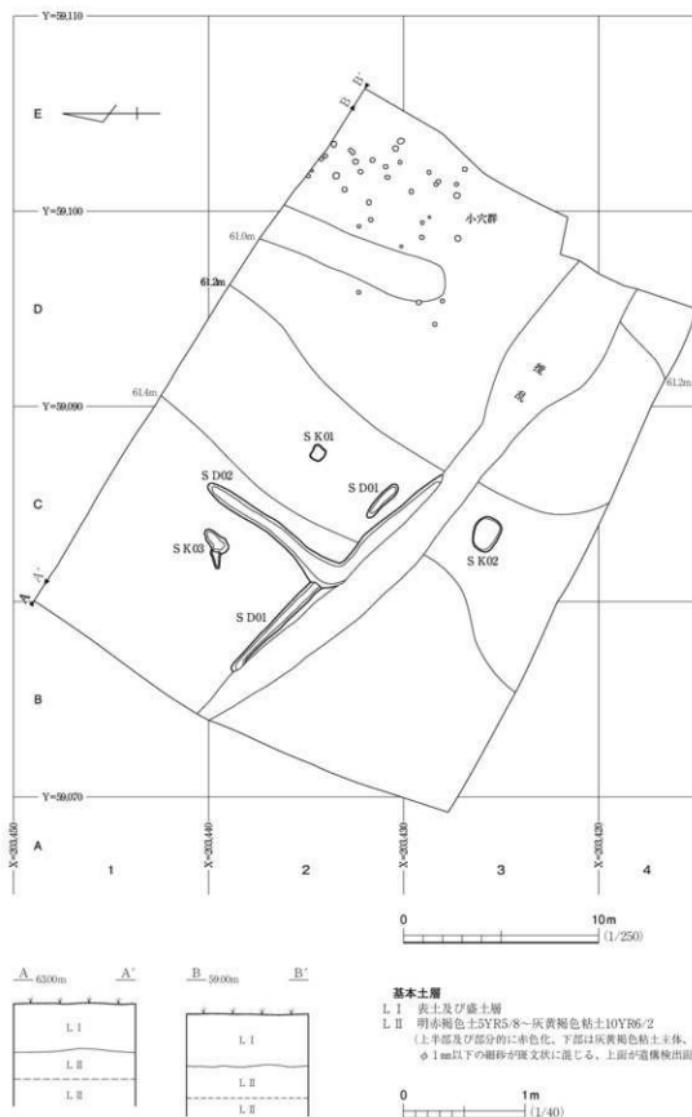


図2 遺構配置図・基本土層

第2節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は3基である。それらは調査区の中央より西側から検出されるが、規格性はなく、用途も不明である。

1号土坑 SK 01 (図3, 写真4)

本土坑は、調査区中央のC 2グリッドに位置し、L II上面で検出された。区画溝とみられる2号溝跡から約4m東側に離れており、重複する遺構はない。

堆積土は単層で、L II粒をわずかに含む黒褐色土である。

平面形は隅丸方形を基調としたもので、北東隅がやや広がっている。大きさは長軸約75cm、短軸約65cmで、深さは検出面から最大15cmを測る。主軸方向はN 60°Wである。周壁はほぼ直立し、北東隅から東壁にかけてはやや緩やかである。底面は平坦である。

本遺構からは出土遺物が認められず、時期や用途は不明である。

(廣川)

2号土坑 SK 02 (図3, 写真4・7)

本土坑は、調査区中央南寄りのC 3グリッドに位置し、L II上面で検出された。調査区内を東西に延びる現代の用水路の搅乱から南に約1.5m離れており、重複する遺構はない。

堆積土はL II塊を斑状に含む褐色粘質土の単層で、人為堆積と考えられる。グラウシ化していた。

平面形は梢円形で、大きさは長軸約175cm、短軸約135cmで、深さは検出面から約35cmである。主軸方向はN 60°Wである。周壁はほぼ直立し、底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦である。

出土遺物は、須恵器片1点と土製品1点である。図3-1は須恵器の高台杯の底部片で、高台部分が剥離した底面には回転糸切り痕が認められる。同図2は橙色の素焼きの土製品で、底面近くから出土した。型押しの獅子頭で、火鉢の表面に付く装飾部分とみられる。大きく見開いた目とへの字状に閉じた口、渦巻き状のたてがみが表現されている。

本土坑の時期の詳細や用途は不明であるが、出土遺物の火鉢の装飾部分から近世以降の所産と考えられる。

(廣川)

3号土坑 SK 03 (図3, 写真4)

本土坑は、調査区北西部のC 1・2グリッドに位置し、L II上面で検出した。1号溝跡から北へ約5m、2号溝跡から西へ約1.5m離れており、重複する遺構はない。

堆積土は2層に分層した。 ℓ 2の褐色粘質土が底面近くに薄くレンズ状に認められ、その上に ℓ 1の灰褐色土が堆積する。

平面形は不整形で、梢円形状の土坑の西側に1段高く舌状の張り出しが付いたような形状であ

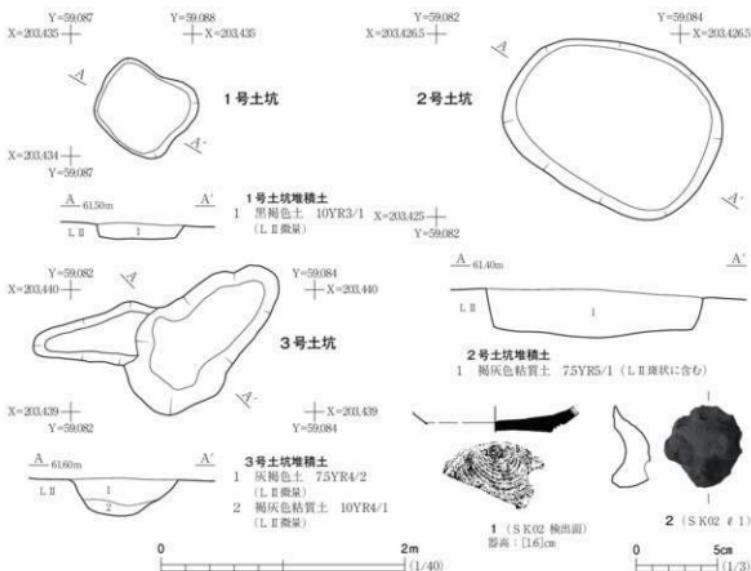


図3 1～3号土坑・出土遺物

る。大きさは全体で約210cmを測るが、張り出し部分を除く楕円形部分では、長軸約150cm、短軸約75cmで、深さは約25cmである。底面はわずかに皿状に窪む。張り出し部分は長さ約90cm、最大幅約50cm、深さは約10cmで、底面はほぼ平坦である。

本遺構から出土遺物は認められず、時期や用途は不明である。

(廣川)

第3節 溝跡

今回の調査で発見された溝跡は2条である。いずれも調査区内を東西に流れていた現代の用水路の搅乱に沿うように、その北側から検出したものである。重複関係があり、1号溝跡が古く、2号溝跡が新しい。

1号溝跡 SD 01 (図4)

本遺構は、調査区中央西寄りのB2・C2グリッドに位置し、L.II上面で検出された。現代の用水路の搅乱のすぐ北側を並行するように延びている。2号溝跡に掘り込まれて途切れるが、東側の延長上で確認した溝跡も本遺構と判断した。西端部は南北方向に屈曲している。

堆積土は単層で、L.II粒をわずかに含んだ黒褐色土である。

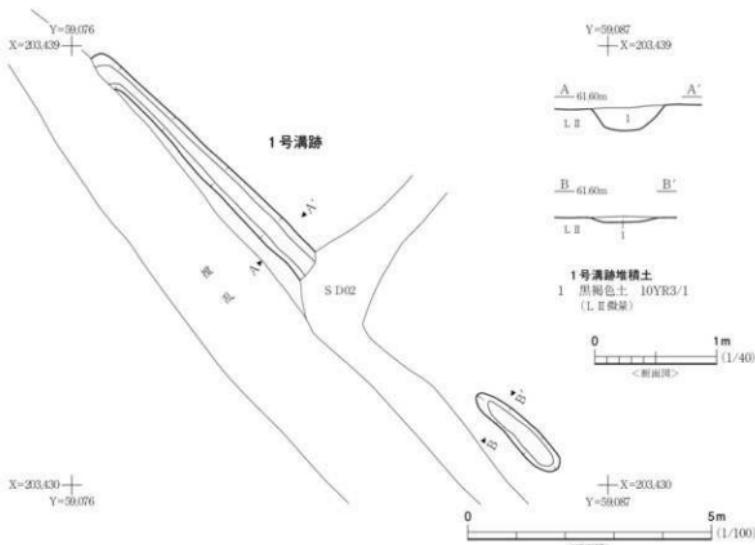


図4 1号溝跡

本遺構は重複する2号溝跡と搅乱に掘り込まれていて、遺存する部分での大きさは長さ約6.5m、最大幅約70cmで、深さは約15cmである。断面形はU字型で、底面はわずかに窪んでいる。延長上に確認された溝跡は長さ約2.0m、最大幅約60cmである。その部分まで含めると、全長は少なくとも長さ13m程度はあったようである。

出土遺物がないため時期の詳細については不明であるが、2号溝跡に先行してつくられた区画溝のようなものと推測される。

(廣川)

2号溝跡 SD 02 (図5)

本遺構は、調査区中央西寄りのC2・3グリッドに位置し、LII上面で検出された。1号溝跡と重複しており、本遺構が新しい。現代の用水路の搅乱に掘り込まれ、全体の形状は不明であるが、その搅乱部分に直交し、そこから直角に折れて搅乱と同じ方向に延びていたようである。

堆積土は単層で、LII粒をわずかに含んだ灰褐色土である。

本遺構の形態は直角に折れたL字形をしており、長さは搅乱に直交する部分で約8.5m、並行する部分で約7.5m、遺存する部分全体では16m程度である。遺存する部分の幅は約80cmで、断面形はU字型で底面は窪んでいる。

出土遺物は、堆積土中より壺器系陶器の細片が1点出土している。表面が灰赤色、断面が灰色で、外面には黒色のガラス質の釉状の付着物が認められる。図示はしなかったが、他にも調査区内から

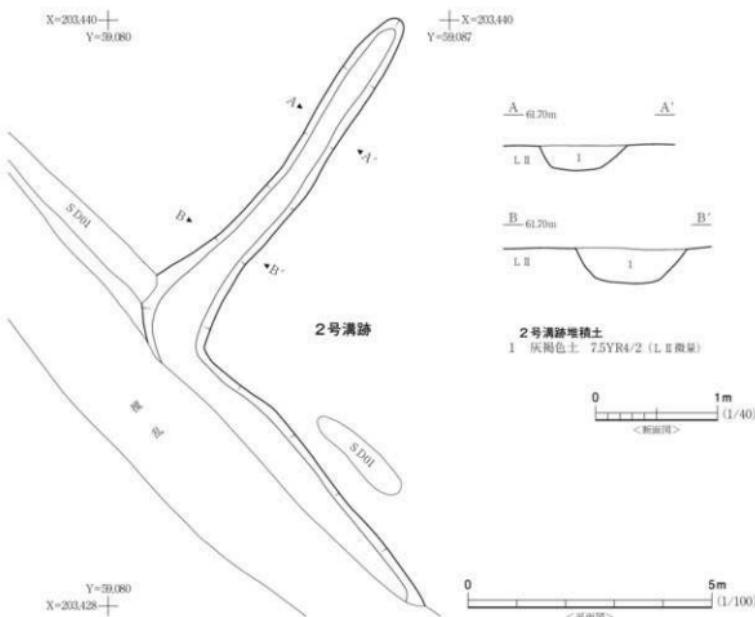


図5 2号溝跡

同一個体の可能性のある細片が出土している。

出土遺物から本遺構の時期は中世以降のものとみられ、直角に折れ曲がる形状から区画溝と考えられる。
(廣川)

第4節 小穴群

調査区東部のE 2・3、D 2・3グリッドにかけて小穴群の広がりを確認できた。検出された小穴は36基で、検出面はL II上面である。重複関係がP 9(旧)→P 8(新)、P 30(旧)→P 29(新)で認められた。これら小穴は建物跡の柱穴跡と考えられるが、同一の建物跡を構成する一群としては確認できなかった。

検出された小穴には番号を付け、挿図中の一覧表に規模と堆積土をまとめた。堆積土についてはすべて単層で、色調と含有物の違いによりA～Eに分類した。
(廣川)

第4編 馬場遺跡

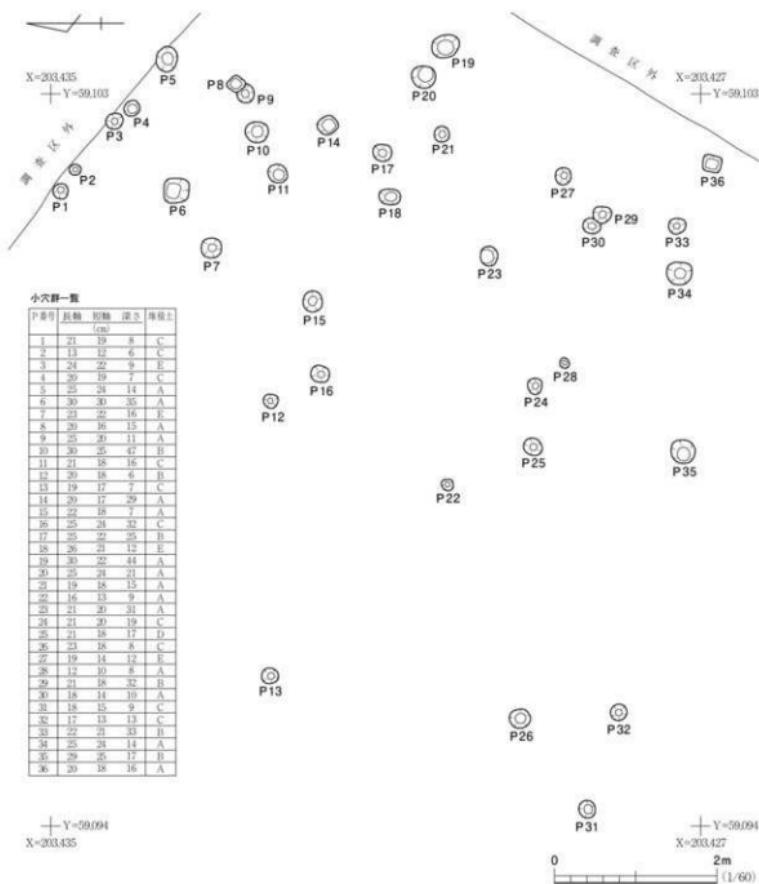


図6 小穴群

表1 小穴堆積土

A	暗褐色土 10YR3/3	L II粒、砂礫、炭化物粒微量	しまりあり
B	黒褐色土 10YR2/2	L II粒少量。L II塊・砂礫、炭化物粒微量	しまりあり
C	褐色土 10YR4/6	L II粒少量。L II塊・砂礫、炭化物粒微量	しまりあり
D	黒色土 10YR1.7/1	L II粒微量	ややしまりあり
E	暗褐色土 10YR3/4	L II粒、砂礫、炭化物粒少量	しまりあり

第5節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は13点で、ほとんどが搅乱として扱った用水路跡からである。それらには土師器、須恵器、中近世の陶器等が含まれ、そのうちの須恵器2点、陶磁器4点を図示した。細片のため図示しなかったが、同じ搅乱からは相馬焼とみられる碗数点も認められた。

遺 物 (図7、写真7)

図7-1・2は須恵器片である。1は壺ないし瓶類の体部下半で底部が欠損している。2は壺の体部片で外面に格子状のタタキ目、内面に同心円状の當て具痕が認められ、全体的にすり減っている。

同図3～5は瓷器系の陶器である。3は鉢の底部、4は壺の口縁部、5は壺の肩部の細片である。5には黒色でガラス質の袖状の付着物が認められる。

同図6は肥前系の染付碗である。内面には矢羽根状の模様が描かれている。

(廣川)

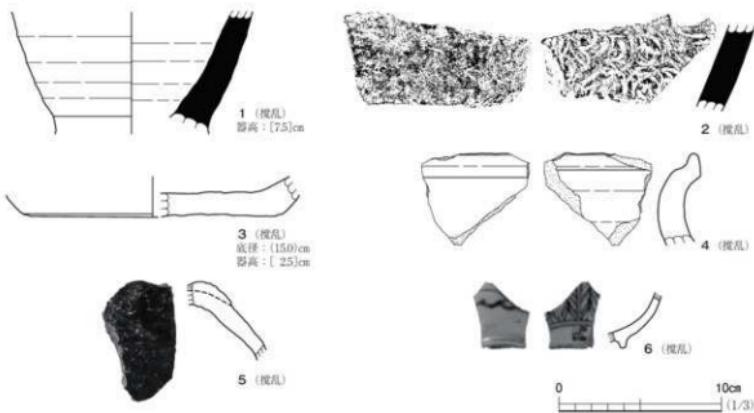


図7 遺構外出土遺物

第3章 総括

馬場遺跡は、工事中の現場から不時発見された遺跡である。調査前の現況は、畑や水田等の耕作地として利用されており、調査区を横断するように東西方向に用水路が延びていた。

本遺跡からは、土坑3基、溝跡2条、小穴36基が検出された。それらの遺構は、周辺から出土する遺物や遺構の特徴により、中世から近世にかけてのものとみられる。本遺跡の東側70~80mの位置には、新宿遺跡(第5編)が立地するが、同遺跡との関連を明確に示すような痕跡は確認されなかった。

検出された2条の溝跡は、重複関係から新旧2時期あるが、いずれも区画溝の性格を有すると考えられる。また、調査区の北東部には、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴36基が集中することから、建て替えながら数時期にわたり居住していた様子が認められる。

なお、遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけての須恵器が生産された伊達市伊達窯跡や桑折町成田前窯跡、近世とされる伊達市瀬戸場窯跡、桑折町赤坂窯跡が知られている。本遺跡からの出土遺物は乏しいが、これらの窯跡との関係が考えられるものも出土している。 (廣川)

引用・参考文献

桑折町史出版委員会 2002 『桑折町史 通史編1』

第5編 新宿遺跡

遺跡記号	QR-SNZ
所在地	伊達郡桑折町大字成田字新宿・稻山
時代・種類	縄文時代の狩場、古代の集落跡 中世の居住域、中近世の道路
調査期間	平成28年10月17日～平成29年1月27日
調査員	菅原祥夫・渡邊春喜・廣川紀子 枝松雄一郎・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

新宿遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字成田字新宿・樅山に所在する。遺跡は、標高60mほどの低位段丘上に立地し、北から南へ舌状に延びる丘陵頂部の平坦な地形となっており、現況では宅地や耕作地として利用されている。また、丘陵下の低地帯には水田が広がっており、そこからの比高差は4~6m程度である。

遺跡の東側には、旧伊達町方面から桑折町中心街へ抜ける県道353号線が南北方向へ延びる。この県道353号線は近世の奥州街道に比定されており、瀬上宿のあった福島市瀬上地区方面から旧伊達町内を通り、桑折宿のあった桑折町中心街を通って伊達郡国見町方面へ続いている。遺跡付近の段丘崖や開析谷には、奈良・平安時代の須恵器窯跡や近世頃とされる陶器窯跡が点在している。本遺跡の南側には、赤坂窯跡が隣接し、東側の段丘崖には桑折台遺跡が周知の遺跡として確認されている。また、桑折町内をはじめとする周辺一帯には中世の遺跡や館跡が数多く存在する。（廣川）

第2節 調査経過

新宿遺跡の調査は、9月8日付で福島県教育委員会より1850m²の発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ68日である。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

10月第2週：13日（木）から調査終盤となった川原田遺跡から器材類の移動を始め、14日（金）にプレハブ・トイレを設置して調査準備に取りかかる。

10月第3週：17日（月）に調査区内に重機を搬入して建物基礎等の撤去を開始し、19日（水）から調査区南部の表土除去作業に入る。

10月第4週：24日（月）から作業員を雇用し、重機による表土除去作業と並行して遺構検出作業を行なう。1号堀跡、2号溝跡と小穴群の広がりを確認する。

11月第1週：表土除去、遺構検出の両作業とも順調に推移する。1号道跡、1号住居跡を確認する。
1日（火）より作業員の一部が馬場遺跡の調査に移る。

11月第2週：8日（火）には馬場遺跡の調査から作業員が戻り、表土除去作業が終了する。10日（木）に基本土層図を作成する。

11月第3週：1号住居跡、1号堀跡、2号溝跡を中心にして遺構の精査・記録を進める。17日（木）に連絡所用プレハブを作業員駐車場近くへ移設する。

11月第4週：各遺構の精査・記録を継続する。

12月第1週：2日（金）に排土置き場内に器材倉庫用プレハブを設置する。

第5編 新宿遺跡

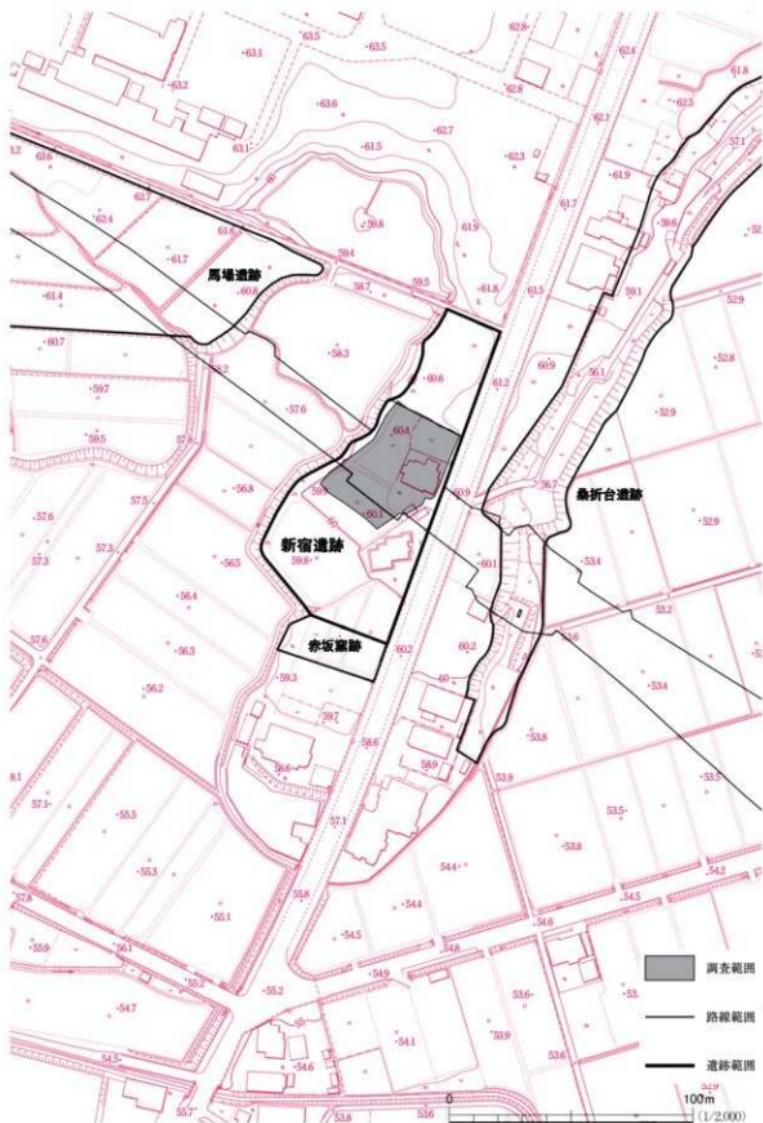


図1 調査区位置図

12月第2週：1号堀跡の路面を確認し、記録する。8日(木)にプレハブに発電機を設置する。

12月第3週：降雪により作業が進まず、2号住居跡、小穴群等の調査区北部の遺構精査に集約する。

12月第4週：年内の調査は、1号堀跡、1号道跡を残してほぼ終了する。22日(木)には年末年始の作業休みに向け、調査区内の安全対策を徹底する。

1月第2週：10日(火)より年明け後の作業を再開する。積雪のため除雪と排水を繰り返しながら、1号堀跡の路面下の部分を掘り下げる。11日(水)に地形測量を行う。

1月第3週：週の前半は1号堀跡の底面を確認し、週の後半は1号道跡の側溝部分を掘り下げる。

1月第4週：1号堀跡と1号道跡の重複関係を確認し、平面図を作成する。26日(木)の空中写真撮影に向け、除雪と排水を行う。27日(金)に調査区内を片づけ、器材類を撤収する。

1月第5週：31日(火)に県文化財課及び工事側の立会いの下、引き渡しを行った。 (廣川)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

新宿遺跡は北から南へと舌状に延びる丘陵頂部の平坦部分に立地し、畑や水田等の耕作地として利用されている。今回の調査区の範囲は、県道353号線の西側に隣接した箇所で、調査前現況は宅地、畑、水田等である。

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑6基、道跡3条、堀跡1条、溝跡2条、小穴群である。これらの遺構と出土遺物から、遺跡の時代・性格は縄文時代の狩場、古代の小規模集落、中世の街道筋に営まれた居住域、中世から近世にかけての道跡と考えられる。

基本土層（図2、写真6）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～IIIに分層した。

調査区内は、中央部及び北部が宅地とその周りの畠地となっており、南部が水田に利用されていた。そのため、基本土層は調査区壁を利用して北部と南部の2箇所で確認を行った。北側の調査区境には土手状の高まりが分厚い盛土として認められ、南部の水田では北部で確認されたL I・IIの堆積土が認められず、現水田耕作土とみられる灰色粘質土がL III上に厚く堆積している。

L IIIは調査区内全体で確認できる基盤層で、L III上面が検出面である。検出された住居跡や柱穴とみられる小穴の一部では深さが数cmと浅いことから、圃場整備等で掘削が繰り返され、その後にL I・IIが堆積したものと推察される。L IIIは粘性度が強く、調査区北部ではにぶい橙色粘質土(7.5YR6/4)から橙色粘質土(7.5YR6/6)、南部ではにぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)から明褐色粘質土

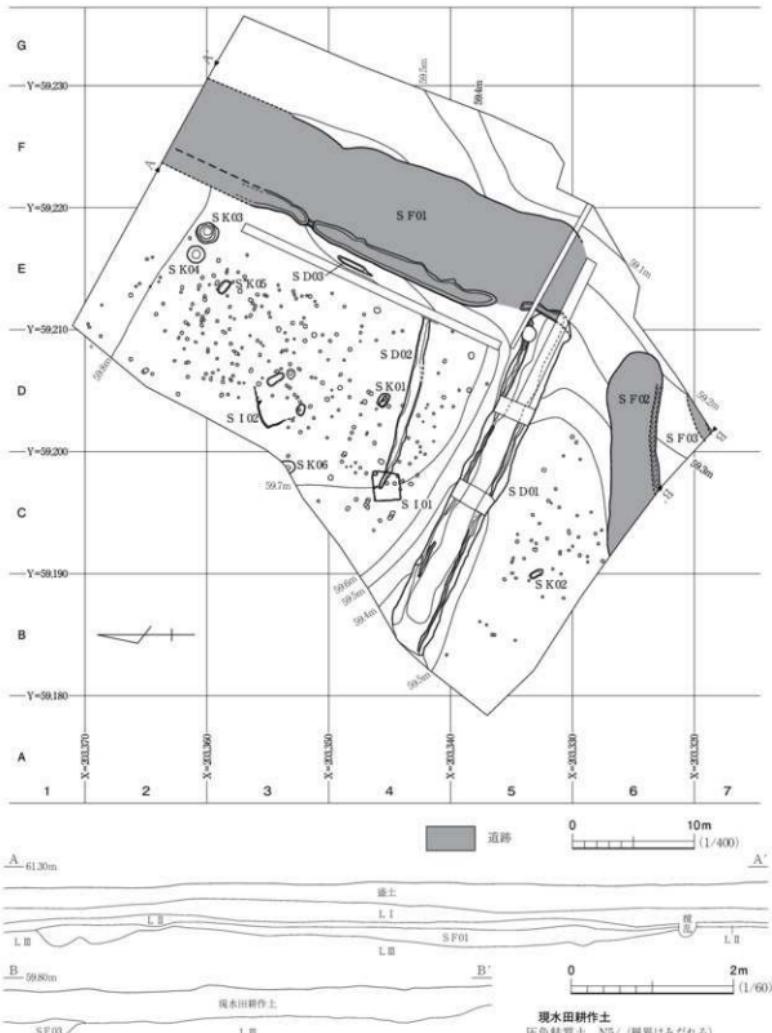


図2 遺構配置図・基本土層

(7.5YR5/6)と確認された。L III上面から20~30cm下位では灰白色粘質土として認められ、採取された白色粘土は土器づくりに適しないものである。

(廣川)

第2節 堅穴住居跡

今回の調査で発見された堅穴住居跡は2軒である。宅地等の造成の影響を受けており、遺存状態はよくない。そのうちの1号住居跡は1辺約2mの小型のもので、もう一方の2号住居跡からは近隣の須恵器窯とみられる焼き窓のある須恵器杯が出土している。時期が不明であり、それらの窓跡との関係は判断できないが、調査区の北端からは粘土探査坑2基が確認されている。2軒の堅穴住居跡は、周囲から検出された小穴群より先行して築かれており、中世の居住域として展開する以前に営まれた古代の小規模集落を構成していたものと考えられる。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図3、写真3)

本遺構は、調査区中央西寄りのC4グリッドに位置する。検出面はL III上面である。1辺約2mの小型の住居跡で、後世に床面近くまで掘削され、周壁はほとんど残っていない。およそ東西方向に延びる2号溝跡と重複し、本遺構が新しい。また、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴



図3 1号住居跡

が多数検出されるが、その一部が本遺構を掘り込んでつくられている。同じ堅穴住居跡の2号住居跡は北東方向に約8mほど離れている。

遺構内堆積土は、わずかに床面上に堆積する2層を確認した。そのうち ℓ 2は壁際にのみ認められる。検出面からの深さは5cm程度で、わずかに残る周壁は直立する。床面は平坦で、貼り床等は認められなかった。

本遺構の平面形は歪んだ方形で、南壁は約2mだが、北壁は約2.4mとやや長い。主軸方向はほぼ真北を示す。北東隅には貯蔵穴とみられるP1が認められた。P1は長軸約38cm、短軸約34cmの南北にやや細長い楕円形で、深さ約15cmを測り、底面は平らで周壁はほぼ直立している。

カマドは北壁の中央に付設されていた。その遺存状態は悪く、長軸約30cm、短軸約20cmの楕円形の燃焼面と、その西側に北壁から18cmほど張り出したカマド袖の一部が確認されたのみである。東側のカマド袖は認められなかった。燃焼面上に残されたカマド内堆積土には焼土が多く含まれ、その部分を取り除くと、燃焼面の西部から直径約10cmの浅い窪み状のP2が検出された。P2はカマドに付随する支脚等の痕跡とみられる。

出土遺物は、土師器杯や須恵器壺・瓶類等の9点が出土したが、細片のため図示しなかった。

まとめ

本遺構の遺存状態は悪く、出土遺物も乏しいため、時期の詳細については不明であるが、今回の調査で確認された2号住居跡とは同時期ないしそれほど時期を隔てずに営まれたものと推測される。本遺構は、小型の住居跡であるため、一般的な居住用というよりも作業小屋のようなものであったと考えられる。

(廣川)

2号住居跡 S I 02

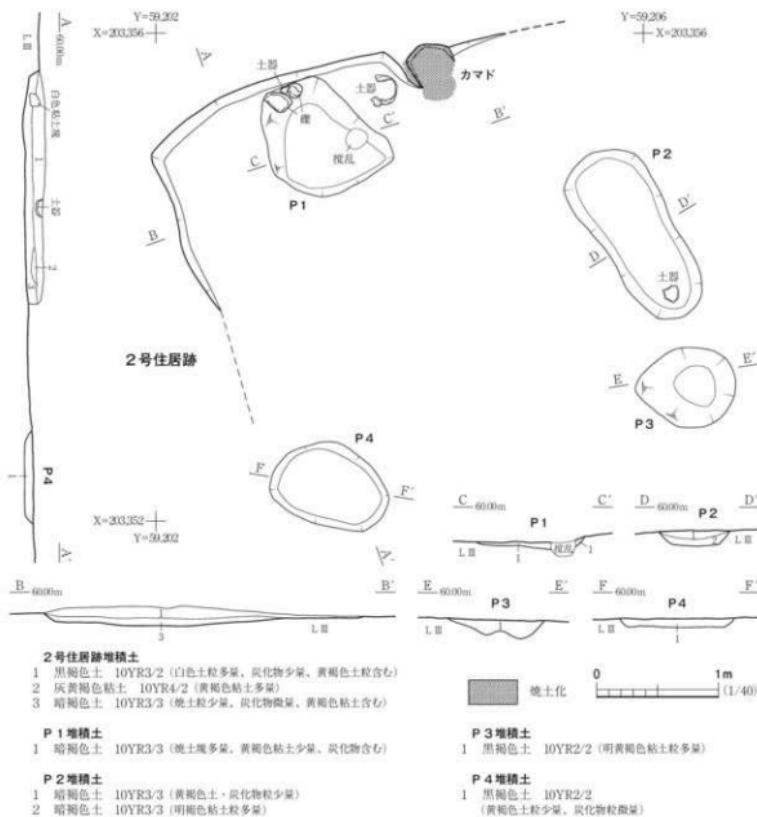
遺構(図4・5、写真8・9)

本遺構は、調査区中央西寄りのD3グリッドに位置する。検出面はⅢ上面である。後世の掘削により、周壁は北西隅しか残っていないが、その周囲からある程度まとまった遺物が出土した。それらには焼き歪みのある須恵器杯が含まれており、付近の須恵器窯から直接入手したものと推察される。遺跡が所在する一帯の基盤層には土器づくりに良好な灰白色粘土が含まれており、調査区の北端からは粘土採掘坑2基が検出され、本遺構内の堆積土中からも白色粘土塊が認められている。

本遺構の東側には、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が検出され、同じ堅穴住居跡で小型の1号住居跡は南西方向に約8m離れている。また、本遺構から西方向には縄文時代の落し穴とみられる6号土坑が検出されている。

遺構内堆積土は、住居跡の北西隅で3層を確認した。 ℓ 2の灰黄褐色粘土は部分的に認められるもので、 ℓ 3は北西隅の床面上に厚さ5~10cm程度で水平に堆積している。 ℓ 3は掘形とみられるP2の堆積土に近いため、部分的に貼り床が残ったものかもしれない。

本遺構は、北壁部分で3mほどしか残らないが、北西隅から約2.5mのところにカマドが設置さ

**図4 2号住居跡 (1)**

れているため、一辺約5mの方形の住居跡と推測される。掘形とみられるP2～4の配置からも4～5m四方の住居跡が想定される。カマドの西側には貯蔵穴とみられるP1が検出された。長軸約100cm、短軸約80cmの不整な方形の窪み状のもので、壁の立ち上がりは北・東壁のみでわずかに認められ、底面は平坦である。北壁には数個の石が認められた。

カマドは、カマド袖が部分的に残されており、東部では15cm、西部では40cmほど張り出し、その間が熱を受けて赤変している。燃焼面はカマド袖間の約35cm、奥壁からの約45cmの範囲で確認された。カマド堆積土は3層に分層した。 ℓ 1は燃焼部に堆積した土、 ℓ 2はカマドの袖を構成していた土が崩れて再堆積した土も含まれる可能性があるため、カマド堆積土として扱った。 ℓ 3はカマド袖の構築土である。

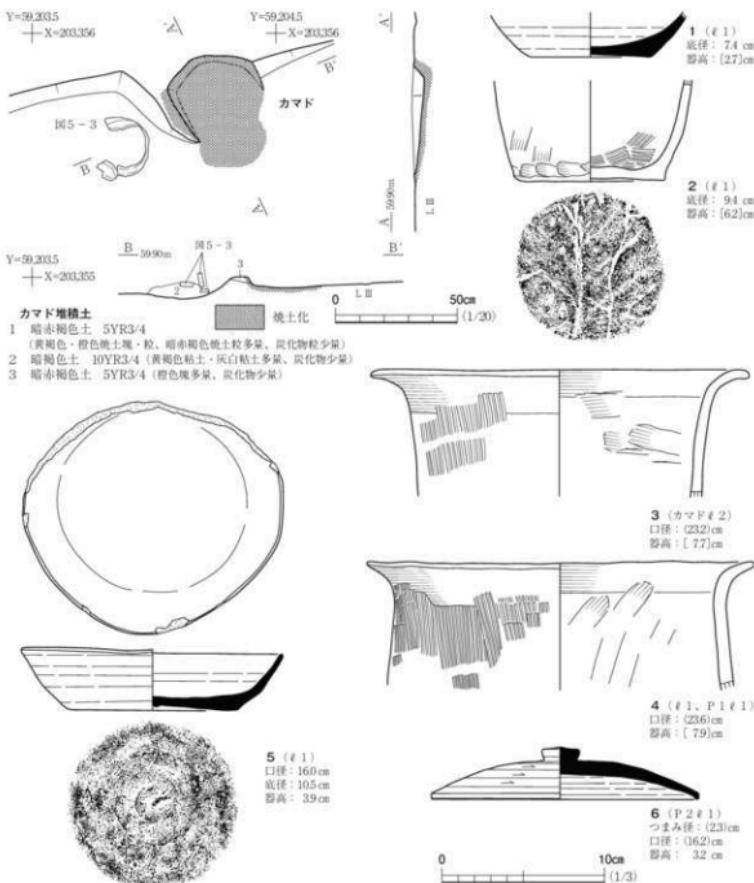


図5 2号住居跡(2)・出土遺物

P 2～4は住居跡の掘形の痕跡とみられ、P 2は東壁沿いに、P 3とP 4はそれぞれ南東隅と南西隅から検出された。P 2が長軸約150cm、短軸約60cm、P 3が長軸約80cm、短軸約70cm、P 4が長軸約100cm、短軸約70cmで、深さがそれぞれ10～15cmに収まる。P 2～4の堆積土は近似するが、含有物や色調が若干異なる。なお、P 2からは須恵器蓋が出土した。

遺物(図5、写真20)

遺物は、カマド脇やP 1の貯蔵穴を中心に土師器片や須恵器片が出土している。そのうち図示したもののは、遺存状態の良い6点である。

図5-2~4は土師器甕である。2は底部周間に指ナデ、内面にハケメが施され、底部には木葉痕が認められる。また、内面の数箇所で種子圧痕状のものが観察できた。3はカマド脇に口縁部が下に伏せられて出土したものである。3・4とも口縁部が外湾し、外面にはハケメ、内面にはナデが施されている。1・5は須恵器の杯であるが、1は赤褐色を呈し、5は焼き歪みが認められ、周辺の須恵器甕で生産された焼き損じとみられる。どちらも底部には回転ヘラ切り痕が認められる。5は底部が大きく、体部が直線的に短く立ち上がっている。6は須恵器の蓋で外面にヘラケズリが施され、全体的に平たいつくりとなっている。低い宝珠状のつまみが付き、端部がわずかに屈曲する。

まとめ

本遺構の遺存状態は悪いが、カマドの付く竪穴住居跡である。出土遺物から8世紀後半頃のものと考えられる。本遺跡の周辺には複数の窯跡が存在するが、当該期のものとしては、伊達市瀬戸場に所在する伊達窯跡群が知られる。8世紀後半から9世紀にかけての古代信夫郡の須恵器生産を担っていた。本遺構から出土した須恵器は、胎土や焼成がこの伊達窯跡群から出土した資料と酷似することから、伊達窯産とみられる。また、出土遺物の中には須恵器の焼き損じ品が含まれるため、本遺跡を営んだ人々が何らかの生産に関わっていた可能性も考えられる。

(廣川)

第3節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は6基である。形態的な特徴から、3・4号土坑は粘土採掘坑、6号土坑は縄文時代の落し穴とみられる。1・2・5号土坑の用途は不明であるが、主軸方向や形態に類似点が認められる。

1号土坑 SK01(図6、写真10)

本土坑は調査区中央のD4グリッドに位置し、LⅢ上面より検出した。重複する遺構はないが、本遺構の南約1.5mには2号溝跡が東西方向に延びており、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は7層に分層した。自然堆積とみられ、ℓ2~7が段階的に堆積したところで、ℓ1が全体を覆っている。ℓ1~3は黒褐色粘質土で、基本土層中からは確認できなかったが、圃場整備等による開削以前には本遺構周辺に堆積していたと考えられる。

平面形は長軸約120cm、短軸約80cmの不整な長方形ないし橢円形で、検出面からの深さは最深で70cmを測る。主軸方向はN60°Wである。底面は不整な橢円形状に一段下がっており、その中央がさらに丸く窪んでいるが、周壁は垂直に立ち上がる。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑である2・5号土坑が確認されており、何らかの関連性が考えられる。

(廣川)

2号土坑 SK 02 (図6、写真10)

本土坑は調査区南部のB 5・C 5グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はないが、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は3層に分層し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積とみられる。

平面形は長軸約116cm、短軸約48cmの長方形ないし梢円形で、検出面からの深さは最深で50cmを測る。主軸方向はN 30°Wである。底面は平坦で、周壁は直立する。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑が他に2基確認されており、特に5号土坑とは主軸方向、規模や形態が近似している。両遺構間は34mほど離れているものの、何らかの関連性が考えられる。

(廣川)

3号土坑 SK 03 (図6、写真10)

本土坑は調査区北部のE 2・3グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はないが、西側に並んで4号土坑が配置される。東側約3mには1号道路が南北方向に延びており、南西方向に約5m離れて5号土坑があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は6層に分層した。全体的に基盤層中の白色粘土塊を含んでおり、褐灰色粘質土と黒褐色土ないし黒褐色粘質土が交互に堆積している。 ℓ 6はグライ化している。

平面形は長軸約180cm、短軸約170cmの歪んだ円形で、検出面からの深さは最深で140cmを測る。基盤層の白色粘土層を約110cm掘り込んでいる。底面は皿状に窪み、周壁は緩やかに立ち上がるが、北東部では一部抉れている。

遺物は、土師器・須恵器の細片3点のほか、図7-1に図示した円石1点が出土した。1は丸みのある扁平な石英安山岩製で、片側が欠けている。中央部にはわずかな凹みが認められる。

本遺構は基盤層の白色粘土層を深く掘り込んでいることから、白色粘土の採取を目的とした粘土採掘坑と考えられる。また、本遺跡の周辺には古代、近世の窯跡が確認されており、調査区内からは中世陶器の焼き損じ品が出土する。そのため、本遺構はそれらの窯跡との関連が指摘できる。(廣川)

4号土坑 SK 04 (図6、写真10)

本土坑は調査区北部のE 2グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はないが、東側に並んで3号土坑が配置される。東側約5mには1号道路が南北方向に延びており、南西方向に約2.5m離れて5号土坑があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は7層に分層した。 ℓ 1～6は黒褐色土を基調としており、全体的に黄褐色ないし浅黄色の粘土塊・粒を含んでいる。 ℓ 7の褐色粘質土は、底面上に厚く堆積する。

平面形は直径140cm前後の円形で、検出面からの深さは最深で70cmである。基盤層の白色粘土層を約50cm掘り込んでいる。底面は皿状に窪み、周壁は緩やかに立ち上がる。

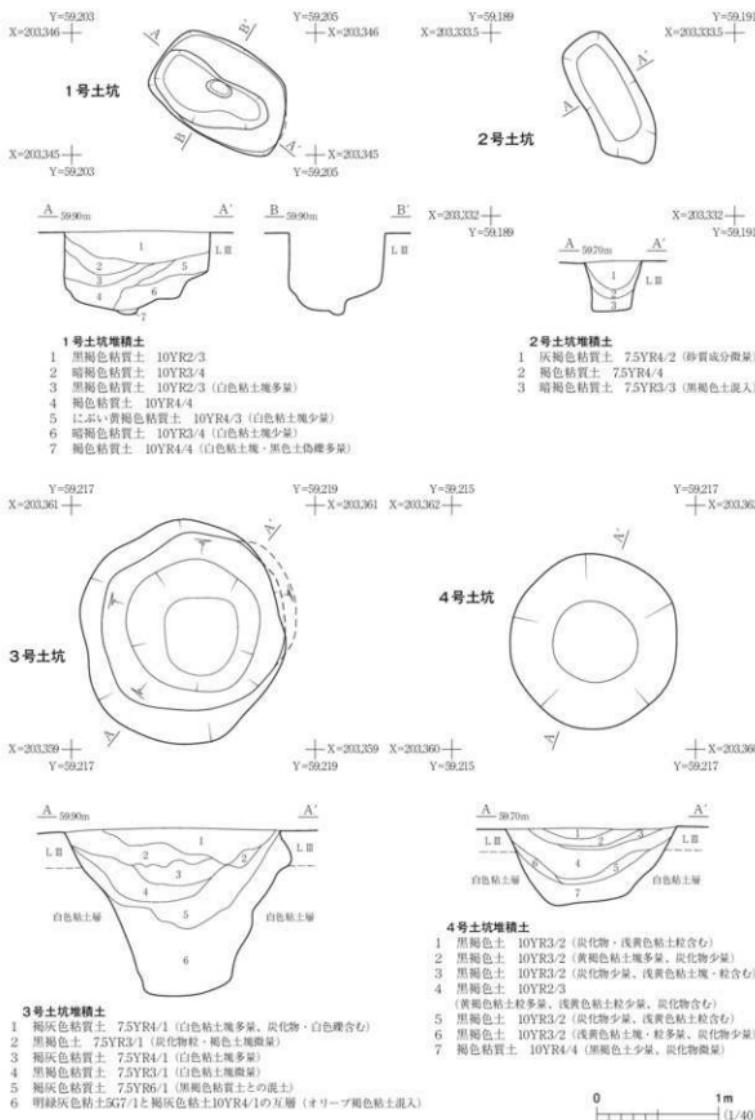


図6 1～4号土坑

出土遺物は図示しなかったが、剥片石器1点が出土した。

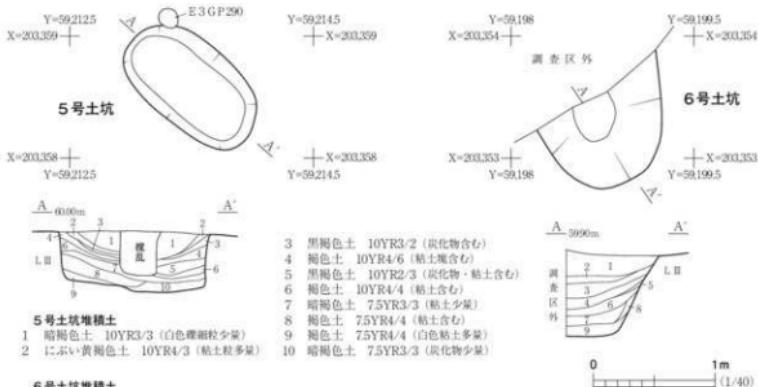
本遺構は基盤層の白色粘土層を深く掘り込んでいることから、白色粘土の採取を目的とした粘土採掘坑と考えられる。また、本遺跡の周辺には古代、近世の窯跡が確認されており、調査区内からは中世陶器の焼き損じ品が出土する。そのため、本遺構は3号土坑と同様にそれらの窯跡との関連が指摘できる。

(廣川)

5号土坑 SK 05 (図7、写真10)

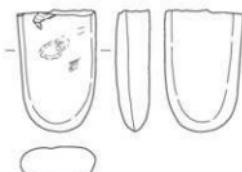
本土坑は調査区北側のE 3 グリッドに位置し、L III上面より検出した。重複する遺構はないが、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は10層に分層した。レンズ状堆積を示すことから自然流入土とみられ、黒褐色土ないし暗褐色土と基盤層由来の崩落土が交互に堆積している。



6号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (燒土粒・黃褐色土粒微量)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (黃褐色土粒含む)
- 3 黑褐色土 10YR3/2 (炭化物微量、灰白色粘土・粒含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (灰白色粘土・少量、炭化物微量)
- 5 黄褐色粘質土 10YR4/4 (黄褐色粘土粒多量)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色粘土粒含む)
- 7 暗褐色土 10YR3/4 (黄褐色粘土含む)
- 8 黄褐色粘土 10YR5/6
- 9 黑褐色土 10YR3/2 (黄褐色粘土多量)



1 (SK 03 ②)
長: 7.5cm
幅: 4.8cm
厚: 2.1cm
重: 121.4g
石質: 石英安山岩

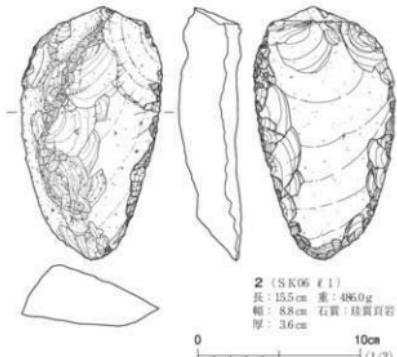


図7 5・6号土坑・出土遺物

平面形は長軸約124cm、短軸約68cmの長方形ないし楕円形で、検出面からの深さは最深で50cmを測る。主軸方向はN 50°Wである。底面はほぼ平坦で、周壁は直立する。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。調査区内からは本遺構と同様の方形状の土坑が2基確認されており、特に主軸方向、規模や形態が近似する2号土坑とは何らかの関連性が考えられる。(廣川)

6号土坑 S K 06 (図7、写真10・21)

本土坑は調査区西端のC 3グリッドに位置し、L III上面より検出した。形態的な特徴から落し穴と考えられるが、北西部の大半は調査区外に延びている。重複する遺構はなく、本遺構の東に約3mには2号住居跡があり、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。

堆積土は9層に分層し、旧表土由来の黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積している。ℓ 5とℓ 8は周壁の崩落土で、壁際に薄く堆積する。これ以外の層は、周囲からの自然流入土とみられる。

平面形は長軸約150cm以上の長楕円形と推定され、遺存する部分で長軸方向が約70cm、短軸約110cmである。検出面からの深さは最深で70cm前後である。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。

出土遺物はℓ 1から出土した削器1点で、図7-2に図示した。2は珪質頁岩製で、大きめの縦長剥片の両側を細かく加工して刃部を作り出している。背面には自然面が残り、腹面には打痕が認められる。

本遺構は縄文時代の落し穴とみられるが、時期の詳細については不明である。付近からも縄文時代とみられる石器や剥片が出土しており、当時の狩場と考えられる。(廣川)

第4節 道 跡

今回の調査で発見された道跡は3条である。試掘調査の段階で、近世の奥州街道に比定される県道353号線と並行する道路の一部が確認されていたが、今回の調査によりその道路と枝道とみられる2号道跡と3号道跡の一部が検出された。また、道跡の西側に直交して設置されている堀跡は、ある時期に埋め戻され、1号道跡の枝道として再利用されていたようである。1号道跡と1号堀跡の周囲から検出された小穴群は、当時の街道筋に営まれた建物跡の柱穴とみられる。

1号道跡 S F 01

遺構 (図8、写真11・12)

本遺構は、調査区東部のE 3~5、F 2~5グリッドにかけて位置する。検出面はL III上面である。調査区東側に隣接し、およそ南北方向に延びている県道353号線と並行するものとみられるが、道跡の南側部分は宅地等の造成で確認できなかった。2号道跡、3号道跡は本遺構の枝道と考えられるため、本遺構の南側もそれらの方向に延びていたものと推測される。1号堀跡は本遺構と重複し、本遺構の一部を掘り込んでつくられている。

第5編 新宿遺跡

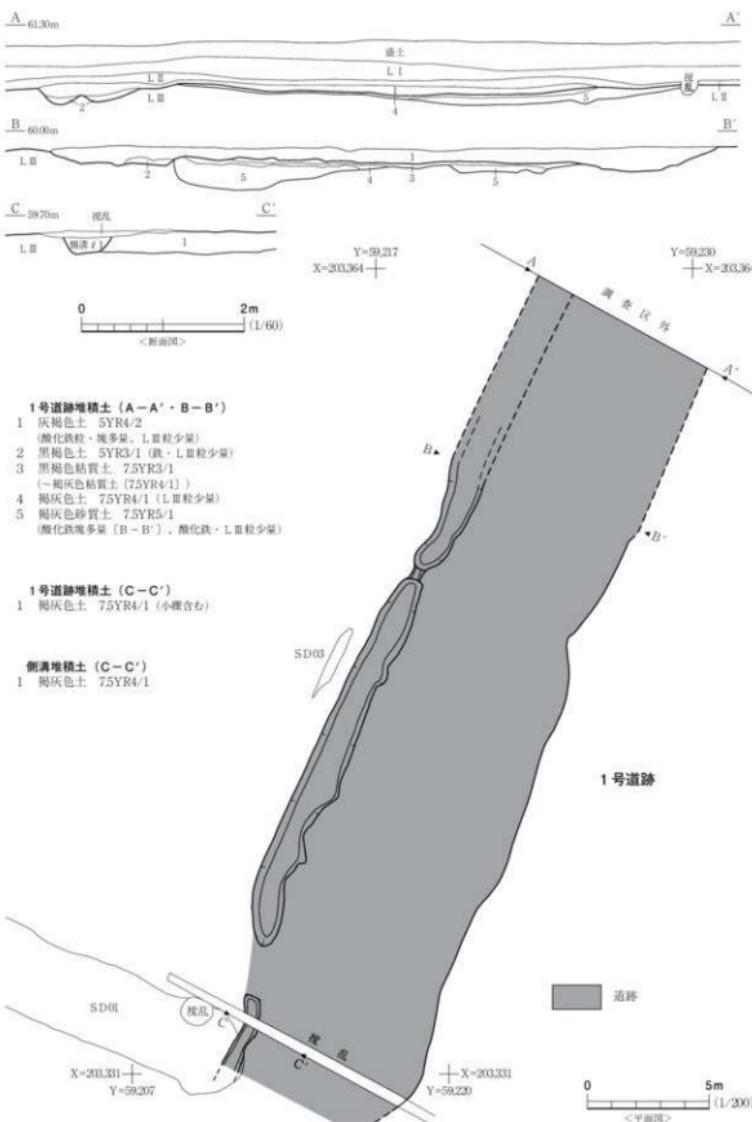


図8 1号道路

堆積土は5層に分層した。 ℓ 5は掘形内に堆積する砂質土で、この上面が最初の路面とみられる。ただし、使用時には幾度となく補修や改修が加えられていたものと考えられ、 ℓ 5の堆積が認められず、 ℓ 4のみが確認できた部分があるなど一定していない。 ℓ 3は ℓ 4・5上に薄く堆積するため、道として使用された最終段階に堆積したものとみられる。 ℓ 2は側溝内堆積土で、底面近くに薄く堆積する。側溝は西端部分でしか確認できなかったが、図8の断面図B-B'では東端部で ℓ 3が途切れ、U字状の窪みが認められることから東端にも設置されていた可能性がある。

本遺構の規模は、調査区内で確認できた範囲内では全長約35m、幅が8m前後である。およそ南北方向に直線的に延びており、主軸方向はN 20° Eである。確認できた西端部分の側溝の規模は、幅約150cm、検出面からの深さは最深で25cm前後である。断面は横長のU字形であるが、北端ではW字形となるため補修が繰り返され新旧があった可能性も考えられるが、面的には追認できなかつた。なお、枝道として利用されていた1号堀跡が埋められた後、断面図C-C'に示す幅60cm、深さ20cm程度の小規模な側溝が掘り込まれたようである。

遺 物 (図9、写真21)

出土遺物は30点で、そのうち6点を図示した。ほとんどが側溝部分から出土している。

図9-1は須恵器の高台付杯で、高台が外側に短く張り出し、杯部には回転ヘラ切り状の痕跡が認められる。同図2~4は、壺系とみられる中世陶器の細片である。2はこね鉢とみられる鉢の底部近くで、内面には使用による摩耗が認められる。外面にはヘラケズリ、底部周辺に指ナデが認められ、内面の指ナデは強く押し付けられている。3は壺の肩部で、粘土紐の積み上げ痕が認めら

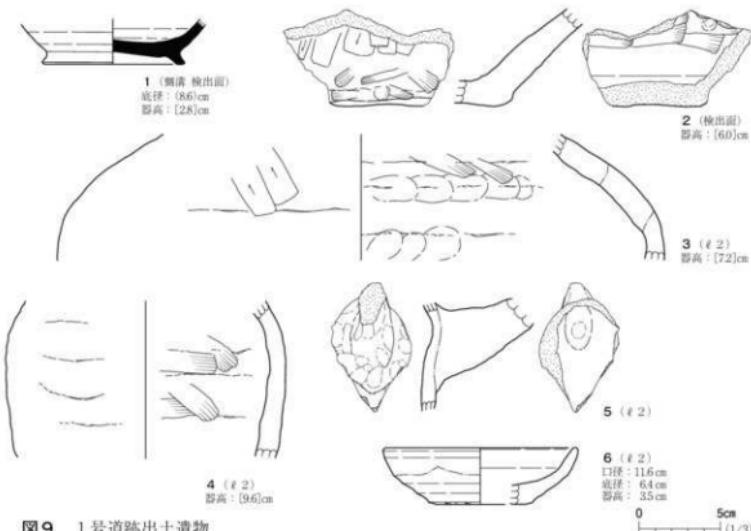


図9 1号道路出土遺物

れ、内面では粘土紐のつなぎめを指で押さえながら調整しているようである。4は壺とみられる肩部から体部上半部分で、内外面とも粘土紐の積み上げ痕が認められ、内面には横方向の指ナデが観察される。2・3の器面は橙色ないし灰赤色であるが、4は黒っぽく、色調・質感とも須恵器に近い。

同図5・6は近世陶器で、福島市飯坂町に所在する岸窯跡からは同様のものが出土している。5は手付水注の把手の部分とみられ、手づくねで成形されており、釉が完全に溶けきららず黄色っぽく変色している。6は小型の丸皿で、外面の上半部分と内面全体に灰色の釉がかけられ、外面の釉は2次的な被熱で発砲している。底部はほとんど残らないが、部分的にヘラケズリが認められる。

まとめ

本遺構は、宅地等の造成で掘削を受けしており、出土遺物も乏しい。そのため時期の詳細については不明であるが、中近世の陶器片が出土しており、重複する1号堀跡の年代観から古代末から中世にかかる時期には存在していたようである。近世の奥州街道に比定される県道353号線のすぐ西側を並行していることから、近世以前の本地域の主要な幹線道路と推察され、その候補としては古代の東山道、中世の奥六郡に通じる奥の大道が考えられる。

(廣川)

2・3号道跡 S F 02・03

遺構 (図10、写真13)

本遺構は、調査区東部のC 6、D 6・7グリッドにかけて位置する。検出面はL III上面である。1号道跡の南側部分が遺存しないため、本遺構との重複関係は確認できなかった。1号道跡が当該地域の主要幹線道路と推察されるため、本遺構の2・3号道跡はある時期の枝道と考えられる。2号道跡は西方向に調査区外へと延びており、地形に則して丘陵下に続くものとみられる。3号道跡は調査区南端から側溝部分の一部分を確認したのみである。

遺構内堆積土は還元作用を受け、一部グライ化する。側溝堆積土も含め2号道跡で7層、3号道跡で4層に分層した。2号道跡の側溝 ℓ 1~4は側溝内堆積土で南端にのみ確認された。2号道跡の掘形内には、 ℓ 1~3がおよそ水平に堆積する。 ℓ 1はしまりが認められたことから、 ℓ 1上面は路面だった可能性もあるが、上部が現水田耕作土により削られているため判然としない。3号道跡の ℓ 1は掘形内堆積土、側溝 ℓ 1~3は西端に認められた側溝内堆積土である。

2号道跡の規模は、調査区内で確認できた範囲で全長約17m、幅4m前後である。南端に側溝が認められ、幅50cm前後、検出面からの深さ約30cmを測り、断面形がU字ないしV字となる。3号道跡は、調査区の南東隅から調査区の東壁に沿って約4m確認できた。西端の側溝部分とみられ、幅約80cm、検出面からの深さ約35cmで、断面はU字状である。

遺物 (図10)

出土遺物はほとんどなく、1点を図示した。

図10-1は2号道跡の側溝部分から出土したもので、須恵器の壺とみられる肩部の資料である。内面には当て具痕が認められる。

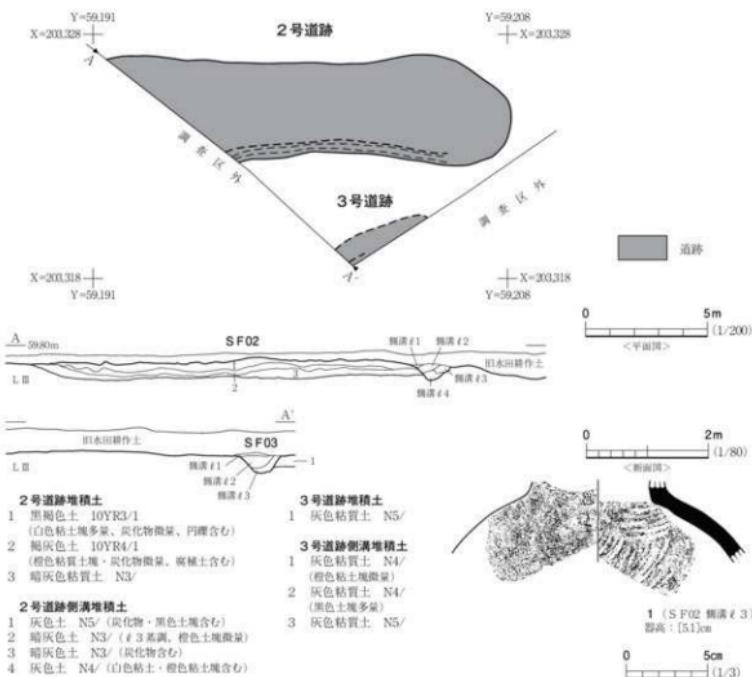


図10 2・3号道路・出土遺物

まとめ

本遺構は、耕作地等の造成で掘削を受けており、出土遺物も乏しい。そのため、時期の詳細は不明であるが、2・3号道路ともに1号道路の枝道と考えられる。2号道路と3号道路との関係は判然としないが、同時期に使用されたのではなく、枝道がつくり替えられたものである可能性もある。

(廣川)

第5節 堀 跡

今回の調査では堀跡ないし溝跡3条が確認された。堀跡は、他に検出された溝跡2条とは規模や用途が異なり、防御的な機能を有するものと判断したため1号堀跡として報告する。

1号堀跡は、南北に延びる1号道路の西側に南北を分断するように設置されるが、程なくして埋められて1号道路の枝道として活用されている。これらの道路の周囲には建物跡の柱穴が多数検出されている。

1号堀跡 S D 01

遺構 (図11、写真14~16)

本遺構は、調査区南寄りのB4・5、C4・5、D5、E5グリッドにかけて位置する。検出面はLⅢ上面で、1号道跡と重複する。本遺構には防御性を高めた堀としての側面と、1号道跡の枝道としての側面とが認められ、それらの機能ごとに少なくとも2時期に分けることができる。当初は堀として、北から南へ延びる舌状の丘陵地がやや括れる部分に設置されており、1号道跡を境に丘陵頂部の西側を南北に分断していた。その後に埋め戻され、その部分が枝道として再利用されるようである。1号道跡と本遺構の丁字路沿いには掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっているが、それらは道跡と重複しないことから、本遺構が通路として再利用された時期のものとみられる。

本遺構の堆積土は12層に分層した。道跡としての路面がℓ6上面となり、その前後の層で大別できる。本遺構は、はじめ断面が台形ないし箱形に掘り込まれるが、その底面上には基盤層由來のℓ10~12の明褐灰色ないし褐灰色の粘質土が厚く堆積している。ℓ10~12には周囲からの自然流入の形跡が認められないことから、掘り込んですぐに埋め戻され、断面をV字状に整えている可能性が考えられる。ℓ7~9はその後に堆積した自然堆積土で、それらが堆積し浅くなったところで、ℓ6の黒褐色砂質土で埋められて路面を形成している。ℓ6の砂質土は、水はけの悪く滑りやすい基盤層の粘質土とは異なり、道としての機能を意識して外部から持ち込まれたものとみられる。ℓ5は道の両端に認められた側溝内の堆積土である。ℓ4は路面上に薄く堆積することから、使用時に堆積したものとみられる。ℓ2はLⅢ塊が斑状に含まれるため人為堆積土と考えられ、道としての利用が途絶えた段階で埋められたものとみられる。

本遺構の規模は、全長約30.4mで、幅が開口部分で約3.2~3.6m、底面ではややばらつくが、約12~16mである。1号道跡に直交しており、主軸方向はN25°Eである。底面は部分的に凹凸が認められるがおおよそ平たくなっている。周壁は、東西端がやや緩やかであるが南北端は急傾斜で立ち上がっている。検出面から底面までの深さは、12m程度である。後世の造成で掘削を受けていたため不明だが、掘り上げた土砂を土壘状に盛っていたものと想定すると、相応の規模となるものとみられる。

道としては、両端に側溝をもつ構造のものとみられるが、北西部では一部分しか確認できなかつた。道幅はおよそ2.6~2.8mである。側溝幅は約10~50cmとばらつきがあるが、深さは10~20cm程度でありわりはない。路面は平坦に整えられている。

遺物 (図12)

遺物片は94点出土した。土師器・須恵器等の細片が多く、そのうち4点を図示した。

図12-1は須恵器の高台付杯で、高台が垂直に貼り付けられている。2はロクロ成形のかわらけとみられる細片で、路面構築土のℓ6から出土している。3は瓷器系の中世陶器とみられる片口

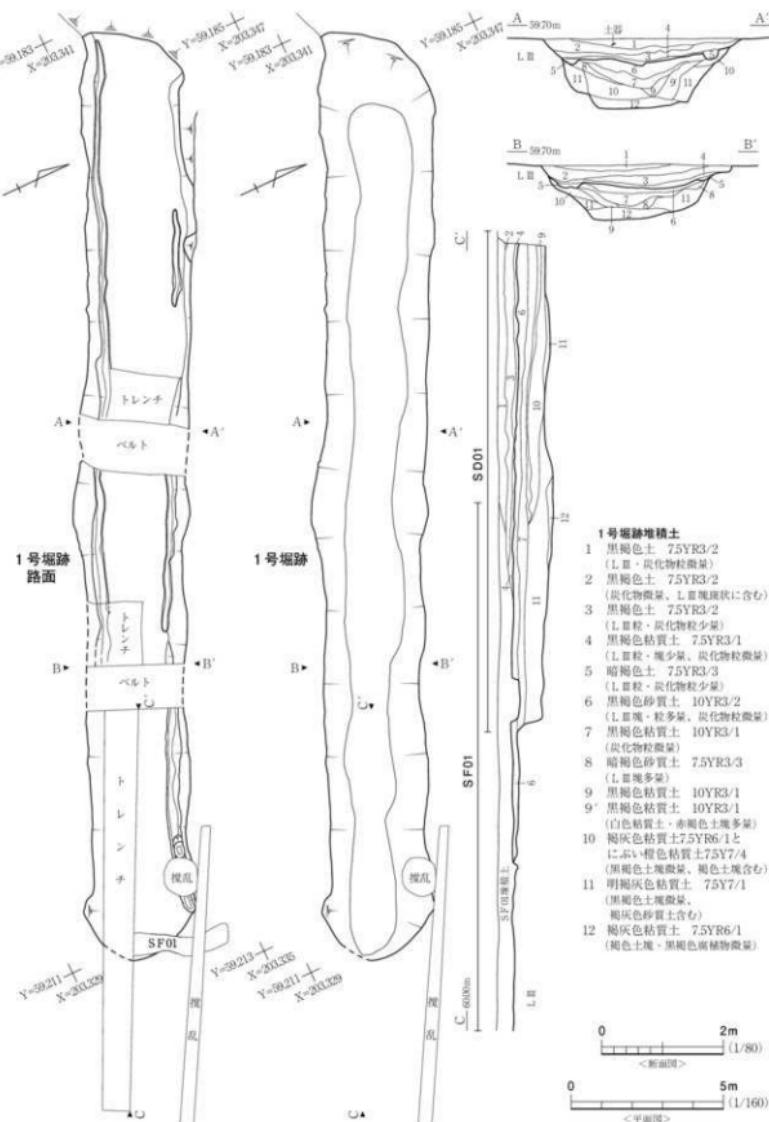


図11 1号堀跡

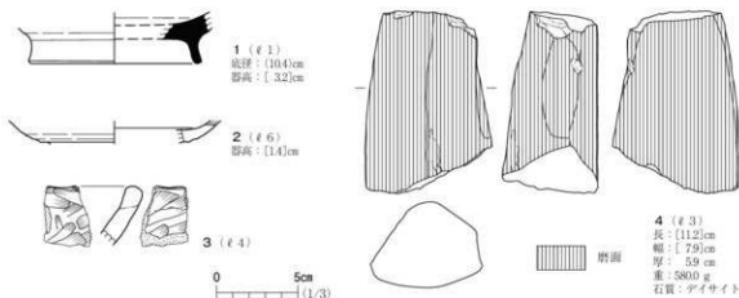


図12 1号堀跡出土遺物

の鉢で内外面に指ナデが認められる。4は磨石で、欠けた両端を除き、全面に磨面が認められる。

まとめ

本遺構は、路面の構築土よりかわらけが出土することから、少なくとも枝道として再利用された時期は古代末以降と考えられる。時期の詳細については不明であるが、出土遺物は少なく、堆積土の状況からも堀としての使用期間は短いものと推察される。1号道路の枝道としてとして整備された後は、道脇に複数の建物が立ち並ぶようである。本遺構の消長からは、堀が設置されるような緊張関係から一転、街道筋の居住域として展開される様子がうかがわれる。

(廣川)

第6節 溝 跡

今回の調査で発見された溝跡は2条である。2条の溝跡の性格や時期は不明であるが、2号溝跡は重複する1号住居跡に先行してつくられている。また、3号溝跡は1号道路の側溝の外側に平行している。

2号溝跡 SD 02 (図13、写真17)

本遺構は、調査区中央のC 4・D 4・E 4グリッドにかけて東西方向に延びており、L III上面で検出された。1号道路に直交するように延びているが、東端部分は建物の基礎等により擾乱を受け確認できなかった。西端部分は1号住居跡と重複し、本遺構が先行してつくられている。本遺構の周囲には小穴群が広がっているが、重複関係は確認できなかった。

本遺構は東西方向へ直線的に延びており、西端部分は1号住居跡に掘り込まれているため底面近くしか残っていない。主軸方向はN 72° Wである。全長は遺存する部分で14.6m、最大幅約100cm、深さは20cm程度である。断面は西端近くではU字状であるが、他の部分では底面はほぼ平坦で、そこからわずかに直線的に立ち上がる。堆積土はℓ 1の黒褐色粘質土を基調とし、B-B'、C-C'ではレンズ状堆積することから自然堆積とみられる。

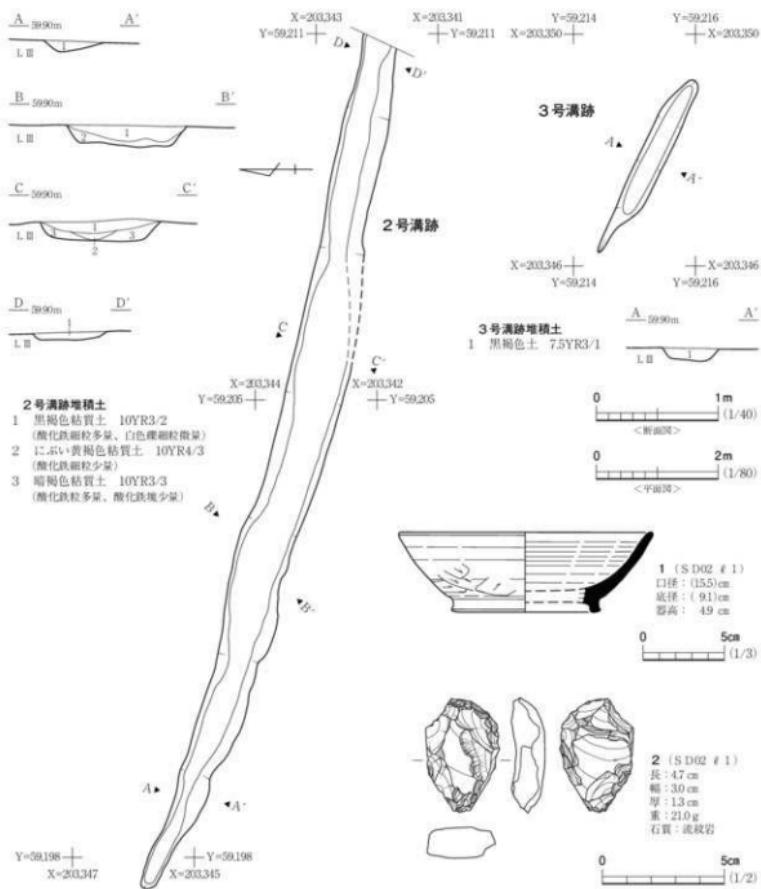


図13 2・3号溝跡・出土遺物

出土遺物は、土師器・須恵器の小片等13点で、そのうち2点を図示した。図13-1は須恵器の高台付杯で、短い高台が付き、体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。内面にはロクロ目が密に入っており、外面の体部下半にはヘラケズリが認められる。2は流紋岩の剥片石器で、石槍の未完成とみられる。

本遺構は、等高線に沿って、直線的に延びることから区画溝のようなものと考えられる。時期の詳細については不明であるが、重複する1号住居跡と出土遺物から奈良時代以前の所産とみられる。

(廣川)

3号溝跡 SD 03 (図13)

本遺構は、調査区中央北寄りのE 4グリッドに位置し、LⅢ上面で検出された。1号遺跡の側溝の外側に平行するように延びており、1号遺跡と関連するものとみられる。他の遺構との重複関係は認められなかった。

本遺構は1号遺跡と平行しておよそ南北方向に延びており、主軸方向はN 20° Eである。全長は最長で320cm、最大幅約40cm、深さは10cm程度である。底面はほぼ平坦で、そこから緩やかに立ち上がっている。堆積土は ℓ 1の黒褐色土の単層である。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期や用途は不明である。1号遺跡の側溝の外側に約60cm離れて平行するため、道路と同時期に機能していたものとみられる。

(廣川)

第7節 小穴群

小穴群は、遺跡の西側から多数検出されるが、遺跡や堀跡と重複するものはない。それらの小穴は、堀跡が枝道として利用されていたころの街道筋に存在した建物跡の柱穴とみられ、遺跡や堀跡に並行して直線的に並ぶものも認められる。小穴は、総じて浅いことから、耕作地や宅地として造成を受け、消失したものも少なくないと推測される。なお、P 1・2・6・53・61・71・88・98・101・105・112～116・118・181・244は欠番とした。

小穴群 (図14～16、写真18・19)

検出した小穴は322基である。小穴は番号を付け、表1・2に長軸(cm)、短軸(cm)、深さ(cm)、堆積土等の所見をまとめた。堆積土はいずれも単層でA～Cに大別でき、含有物の違いにより、それらを1～3に分別した。検出面はLⅢ上面である。

遺物 (図17、写真22・23)

出土遺物は土師器・須恵器等の細片が多い。遺物が出土した遺構については、表1の備考欄に記した。図示したものは、P 142、P 243から出土した瓷器系の中世陶器3点とP 310から出土した石器1点である。このうち、P 142とP 243は直線距離で約7.4m離れているが、出土した資料はどちらも同一個体の可能性が考えられる壺ないし壺の細片とみられ、器形や色調が近似している。

P 142はD 4グリッドに位置し、1号土坑のすぐ北側に配置されるもので、長軸約40cmと他の小穴より大きめのものである。P 243は調査区西端のC 3グリッドに位置し、落し穴とみられる6号土坑の北西方向に位置し、周囲には他の小穴が少ない。小穴の配置図からは、建物跡等の同一の遺構にはならないものとみられる。

図17-1・2はP 142より出土した壺ないし壺で、1は口縁部、2は底部である。1の口縁部は短く外湾し、口唇部のすぐ内側にはU字状の段が認められる。表面には自然釉が認められ、内面の頸部のつなぎ部分には指オサエ痕が連続して残されている。内面には部分的に焼きハゼが認めら

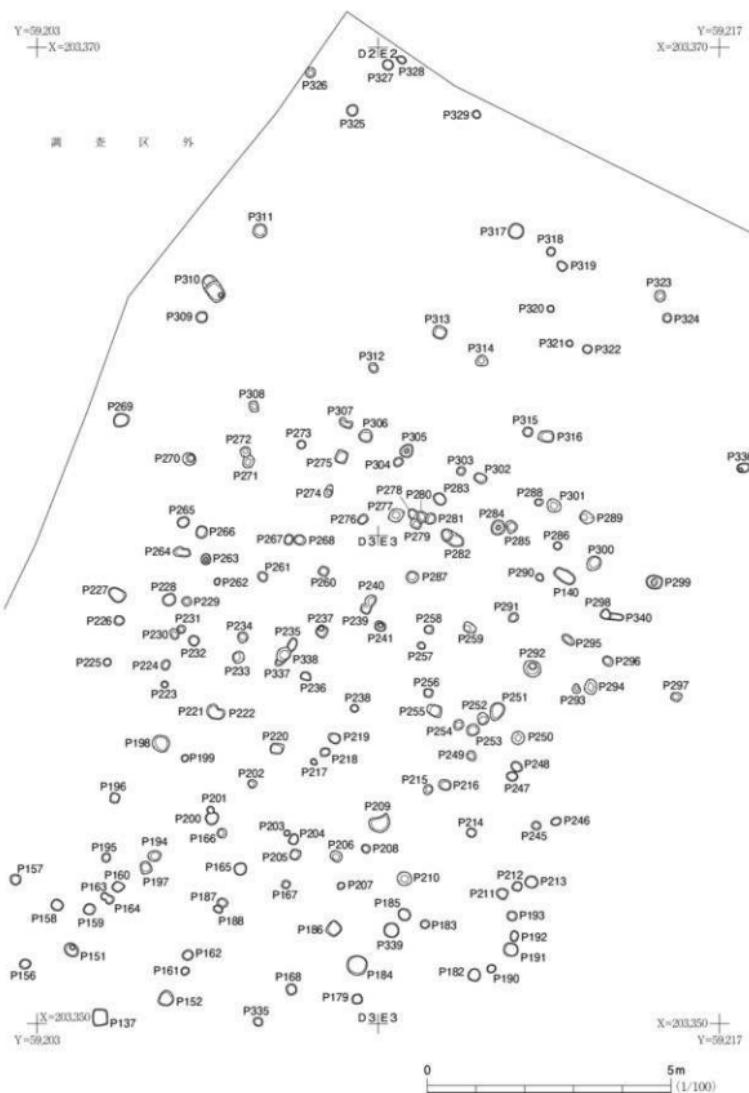


図14 小穴群（1）

第5編 新宿遺跡

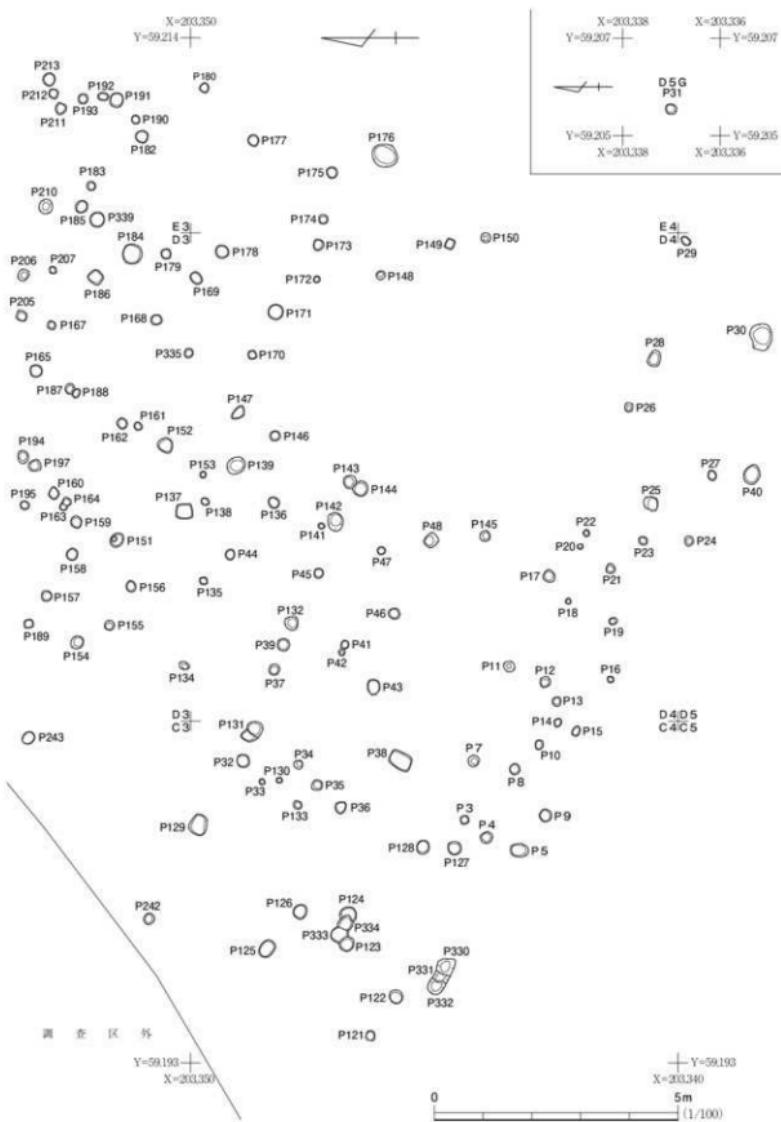


図15 小穴群(2)

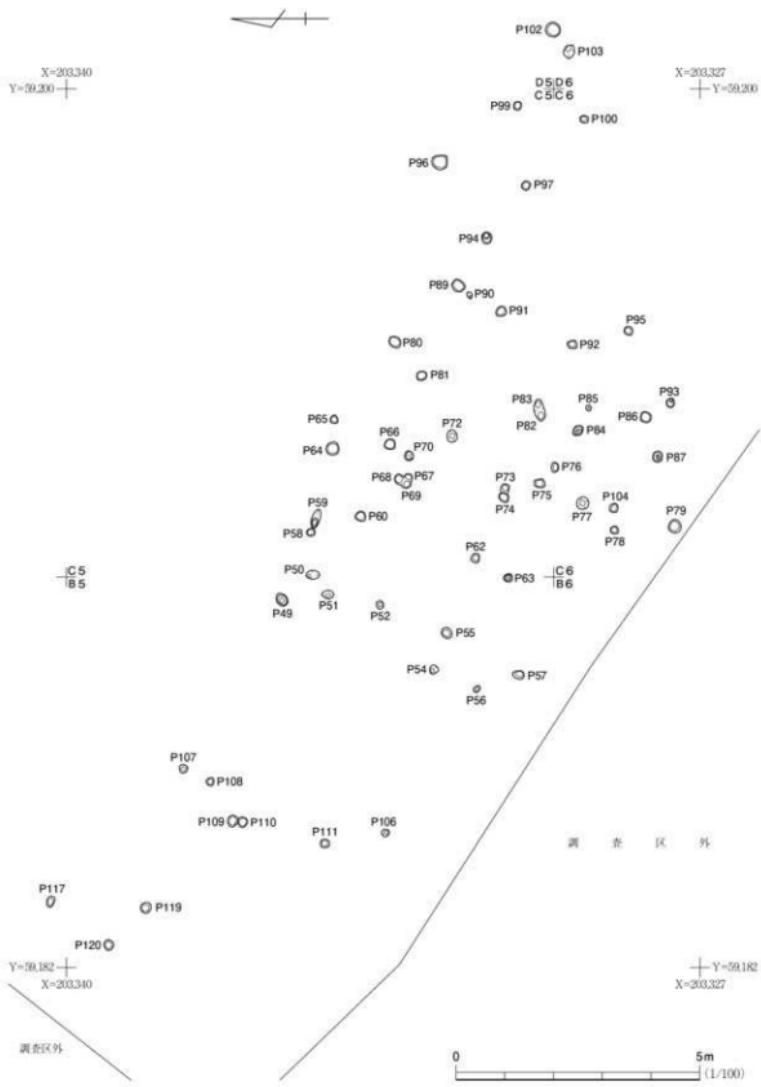


図16 小穴群（3）

表1-1 小穴群一覧

P番号	グリッド	長袖(cm)	短袖(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考	P番号	グリッド	長袖(cm)	短袖(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
3	C4	16	18	5	B2		89	C3	29	24	3	B2	
4	C4	24	23	21	C2	白色粘土含む	90	C5	16	11	6	B2	
5	C4	36	27	16	A3		91	C3	31	29	3	B2	
7	C4	22	21	29	C2	白色粘土含む	92	C6	22	17	13	C2	柱根あり
8	C4	25	22	15	A2	赤褐色土に含む	93	C6	21	17	11	C2	
9	C4	25	24	18	C1		94	C5	25	20	20	A3	柱根あり
10	C4	21	17	7	A2	白色粘土含む	95	C6	19	17	8	C3	
11	D4	23	22	40	C2	柱根あり	96	C5	33	30	4	B2	
12	D4	23	22	13	C3		97	C5	19	16	4	C3	
13	D4	21	18	22	A2	柱根あり	99	C5	20	16	3	A2	
14	C4-D4	30	16	3	C2		100	C6	20	15	3	C2	柱根あり
15	C4	22	15	8	C3		102	D5-D6	32	29	-	B2	柱根あり
16	D4	15	14	15	C2		103	D6	29	22	14	B2	柱根あり
17	D4	35	34	40	C2	柱根あり、土層部灰土	104	C6	20	19	13	A2	
18	D4	14	12	16	C3		106	B5	17	15	8	B2	
19	D4	18	16	13	C3	鰐谷土含む	107	B5	18	18	3	-	
20	D4	14	11	19	C2	柱根あり	108	B5	18	16	3	-	
21	D4	21	18	13	B2	柱根あり	109	B5	25	20	-	-	
22	D4	14	11	13	B2		110	B5	22	20	-	-	
23	D4	20	18	12	B2	柱根あり	111	B5	17	15	9	B3	
24	D5	21	19	20	C2		117	B4	17	13	18	C3	
25	D4	32	28	22	C2		119	B5	23	20	-	C3	
26	D4	19	17	9	C2		120	B5	22	19	-	C3	
27	D5	22	19	7	C2?		121	C4	22	18	24	C7?	
28	D4	34	24	9	C2	柱根あり	122	C4	30	28	14	C3	柱根あり
29	D5	24	16	3	B2		123	C4	31	28	29	C3	白色粘土含む*P333-P123
30	D5	54	40	22	B2		124	C4	(35)	34	8	C3	*P121→P334
31	D5	24	21	12	C2		125	C4	37	30	11	-	柱根あり
32	C4	27	24	12	A1 or C3	鰐谷部灰土、柱根あり	126	C4	30	28	15	A2	柱根あり
33	C4	13	12	2	B2		127	C4	28	27	13	-	
34	C4	23	20	27	C2	柱根あり	128	C4	29	27	20	-	
35	C4	22	21	10	C2		129	C3-C4	42	30	20	A2	柱根あり
36	C4	25	22	14	A2		130	C4	14	12	14	C2	
37	D4	24	21	15	B2	土層部灰土	131	C4	43	36	11	C9	
38	C4	48	33	10	B2	柱根あり	132	C4	29	27	23	C1	
39	D4	29	26	13	B2	柱根あり	133	C4	19	18	13	B2	
40	D5	40	34	6			134	D3	22	18	26	C1	
41	D4	17	17	13	C1	炭化物粒含む、柱根あり	135	D4	18	16	9	A1	
42	D4	15	13	16	C2		136	D4	26	22	14	A2	
43	D4	31	25	19	B2	L3Ⅲ層含む	137	D3-D4	32	26	8	B2	地下含む
44	D4	24	20	6	B2	柱根あり	138	D4	16	15	8	B2	
45	D4	21	19	23	C2	柱根あり	139	D4	40	32	22	C2	
46	D4	25	22	7	B2		140	E3	47	22	30	-	
47	D4	18	17	6	B2		141	D4	16	12	11	A1	
48	D4	27	24	3	B2		142	D4	40	28	21	C1	中世鰐谷部灰土
49	B5	29	22	10	B2		143	D4	29	24	15	A2	
50	B5-C5	28	18	11	B2		144	D4	31	30	28	A2	土層部灰土
51	B5	26	16	13	B2		145	D4	23	22	26	B2	
52	B5	17	15	11	-		146	D4	22	22	11	B2	
54	B5	16	10	10	B3	柱根あり	147	D4	35	22	8	B2	
55	B5	23	20	18	B2		148	D4	47	22	30	-	
56	B5	16	11	12	B2		149	D4	21	12	11	A1	
57	B5	26	17	28	B2?		150	D4	21	20	20	B2	
58	C5	16	15	23	B3		151	D3	31	26	25	B1	
59	C5	43	17	22	C2		152	D3	33	30	22	B1	
60	C5	24	22	12	I1 C3, I2 A2		153	D4	16	13	8	C2	
61	C5	20	18	15	A3		154	D3	28	25	13	C1	
63	B5-C5	19	16	10	I1 A2, I2 B2		155	D3	23	20	19	C2	
64	C5	30	26	7	B2		156	D3	25	19	17	C2	
65	C5	17	16	10	C2	柱根あり	157	D3	23	23	18	B1	
66	C5	18	22	14	C2 or D2		158	D3	26	24	8	B1	土層部灰土
67	C5	(16)	6	6	C3	*P72-68-69東側	159	D3	29	22	18	C3	土層部灰土
68	C5	(20)	3	3	B2	*P72-68-69東側	160	D3	21	20	12	B3	柱根あり
69	C5	(20)	10	10	C3	*P72-68-69東側	161	D3	18	16	6	A1	
70	C5	22	20	11	B2	柱根あり	162	D3	21	22	7	C1	
72	C5	26	22	14	-		163	D3	21	16	19	C1	塗装部出土*P163→P264
73	C5	(21)	17	6	C2	*P72-17-172	164	D3	26	16	19	B1	*P72-17-174
74	C5	18	24	7	C2	*P72-17-172	165	D3	26	17	10	B1	隕石?
75	C5	22	17	13	C2	柱根あり	166	D3	21	30	18	B1	
76	C5-C6	22	15	8	B2		167	D3	18	17	15	A1	
77	C6	26	25	23	-		168	D3	25	22	14	A1	
78	C6	18	17	5	B2		169	D4	28	22	11	B1	
79	C6	28	26	30	A3		170	D4	18	17	6	B2	
80	C5	28	22	18	B3	柱根あり	171	D4	33	31	7	-	
81	C5	23	19	15	C3	柱根あり	172	D4	16	12	6	B2	
82	C5	(24)	8	-	-	*P82-X3東側	173	D4	23	21	8	C1	
83	C5	(23)	27	7	B2	柱根あり*P82-83系複	174	E4	20	20	13	C1	
84	C6	25	19	27	C3		175	E4	24	22	12	C2	
85	C6	11	10	6	B2		176	E4	55	46	11	B3	
86	C6	26	22	4	B1		177	E4	27	28	15	B3	
87	C6	23	20	20	C3								

表1-2 小穴群一覧

P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考	P番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
178	D4	28	28	6	C1		261	E8	25	18	9	A2	
179	D6	21	20	3	B?		262	D8	26	13	4	C2	
180	E4	18	17	3	B?		263	D8	23	20	34	A1	
182	E3	22	25	9	B1		264	D8	27	16	12	C2	柱底あり
183	E3	18	17	8	B1		265	D8	26	21	14	C1	
184	D3	42	41	15	B1		266	D2	28	24	20	A2	
185	E3	27	24	14	B3		267	D9	23	19	3	A1	
186	D3	30	29	23	B3		268	D3	26	21	14	A3	柱底あり
187	D3	22	23	10	R2	*P187→P188	269	D2	33	28	21	C1	柱底あり
188	D3	20	15	19	R?	*P187→P188	270	D2	31	28	22	C3	柱底あり
189	D3	20	18	8	A1		271	D2	25	23	33	C3	
190	E3	19	18	7	C2		272	D2	22	21	24	C2	
191	E3	31	27	9	C2		273	D2	19	18	10	A1	土師器出土
192	E3	23	18	10	-		274	D2	27	15	20	C3	
193	E3	23	21	7	B3		275	D2	31	15	24	C2	
194	D3	28	26	9	-		276	D2	24	23	20	A1	須恵器出土
195	D3	30	19	6	B3		277	E2	35	36	25	C2	柱底あり
196	D3	22	23	14	A1		278	E2	21	19	22	A1	
197	D3	25	22	8	C1		279	E2	35	19	36	C2	
198	D3	37	35	5	C3		280	E2	26	20	15	C1	
199	D3	16	15	13	C3		281	E2	25	30	14	C1	
200	D3	29	26	14	C3	*P200→201	282	E2-E3	51	25	14	C2	
201	D3	116	14	13	R2	*P200→201	283	E2	29	24	31	B3	
202	D3	20	18	13	C1		284	E2	32	28	23	C3	
203	D3	15	13	12	C2		285	E2	27	20	25	C2	柱底あり
204	D3	23	19	17	C3		286	E3	18	18	7	-	
205	D3	23	20	19	C3		287	E3	26	22	28	C2	柱底あり
206	D3	25	21	32	R2		288	E2	16	19	12	-	
207	D3	15	13	3	-		289	E2	31	23	23	-	
208	D3	18	17	12	C2		290	E3	19	14	4	A2	
209	D3-E3	43	40	9	-		291	E3	23	19	21	A1	柱底あり
210	E3	30	26	31	C1		292	E3	28	33	17	C2	柱底あり
211	E3	25	25	5	-		293	E3	30	16	9	-	
212	E3	19	18	8	R2		294	E3	31	26	16	B1	
213	E3	27	25	2	A1		295	E3	33	17	10	B3	
214	E3	20	18	11	R?		296	E3	23	19	8	C2	
215	E3	22	17	10	-		297	E3	22	18	10	B2	
216	E3	25	20	18	C1		298	E3	22	22	23	-	
217	D3	15	11	8	A2		299	E3	32	28	36	A2	須恵器出土
218	D3	19	19	7	C3		300	E3	32	28	29	B7	柱底あり
219	D3	27	21	10	-		301	E2	32	26	8	B2	
220	D3	27	20	33	B2		302	E2	26	20	22	C2	
221	D3	23	21	21	B1	柱底あり*P221・222重複	303	E2	17	17	10	A1	
222	D3	31	31	25	B1	柱底あり*P221・222重複	304	E2	22	19	6	A1	
223	D3	16	15	7	R2		305	E2	29	36	24	A1	
224	D3	22	18	17	B2		306	D2	28	24	16	A1	
225	D3	17	15	33	B3		307	D2	30	13	9	C2	
226	D3	22	21	8	B2?		308	D2	25	21	8	C	
227	D3	37	25	7	R2		309	D2	23	23	22	A3	土師器・埴輪器出土
228	D3	30	26	4	C2		310	D2	58	33	30	C3	石製品出土
229	D3	21	20	15	A1		311	D2	27	24	8	C2	
230	D3	24	18	19	A3		312	D2	22	20	8	B2	
231	D3	17	16	18	C1		313	E2	32	26	31	C3	
232	D3	22	22	9	C3		314	E2	37	24	15	C2	
233	D3	24	24	29	C3		315	E2	22	20	17	B2	
234	D3	22	22	17	B2		316	E2	34	23	19	A3	
235	D3	17	19	19	C2		317	E2	33	32	9	A?	柱底あり
236	D3	24	18	14	C?		318	E2	20	18	16	B1	
237	D3	25	22	25	R2		319	E2	24	19	12	C2	柱底あり
238	D3	19	17	5	B1		320	E2	15	14	6	C2	
239	D3	21	18	14	-		321	E2	16	15	8	B2	
240	D3	20	21	17	A1		322	E2	18	9	C3		
241	D3-E3	26	25	35	A2?		323	E2	25	24	7	C1	
242	C3	22	23	10	-		324	E2	20	20	5	B?	
243	C3	28	24	30	-		325	E2	24	23	7	C2	
244	E3	19	18	7	C?	柱底あり、電石か? 中空骨器出土	326	E2	22	20	24	C3	
245	E3	23	17	10	-		327	E2	22	21	7	C?	
246	E3	24	20	8	A1		328	E2	22	27	4	B2	
248	E3	25	23	6	C1		329	E2	25	17	5	C2	
249	E3	23	20	10	C1		330	C4	35	(24)	26	A3	地土・炭化材含む ●P232-P233-P230
250	E3	27	26	46	A3		331	C4	30	(30)	30	C2	白色粘土含む●P232-P231-P230
251	E3	40	28	6	-		332	C4	33	(30)	23	A2	●P232-P233-P230
252	E3	26	24	22	-		333	C4	(35)	(35)	23	C3	白色粘土含む●P232-P231-P234
253	E3	27	26	13	C2		334	C4	34	33	80	C3	●P124・335-P230
254	E3	21	23	11	A3		335	D3-D4	21	20	49	B?	
255	E3	30	23	34	A2		336	E2	25	20	19	C2	
256	E3	20	18	12	B1		337	D3	25	15	17	C3	
257	E3	17	15	9	C2		338	D3	(35)	(37)	19	C3	
258	E3	21	18	21	A3		339	E3	32	30	11	C1	
259	E3	28	23	15	B2		340	E3	34	15	21	C2	

表2 小穴堆積土

A	10YR3/1 黒褐色土	1 2 3	炭化物粒含む LⅢ粒含む 炭化物粒・LⅢ粒含む
B	10YR4/2 灰褐色土	1 2 3	炭化物粒含む LⅢ粒含む 炭化物粒・LⅢ粒含む
C	10YR3/3 暗褐色土	1 2 3	炭化物粒含む LⅢ粒含む 炭化物粒・LⅢ粒含む

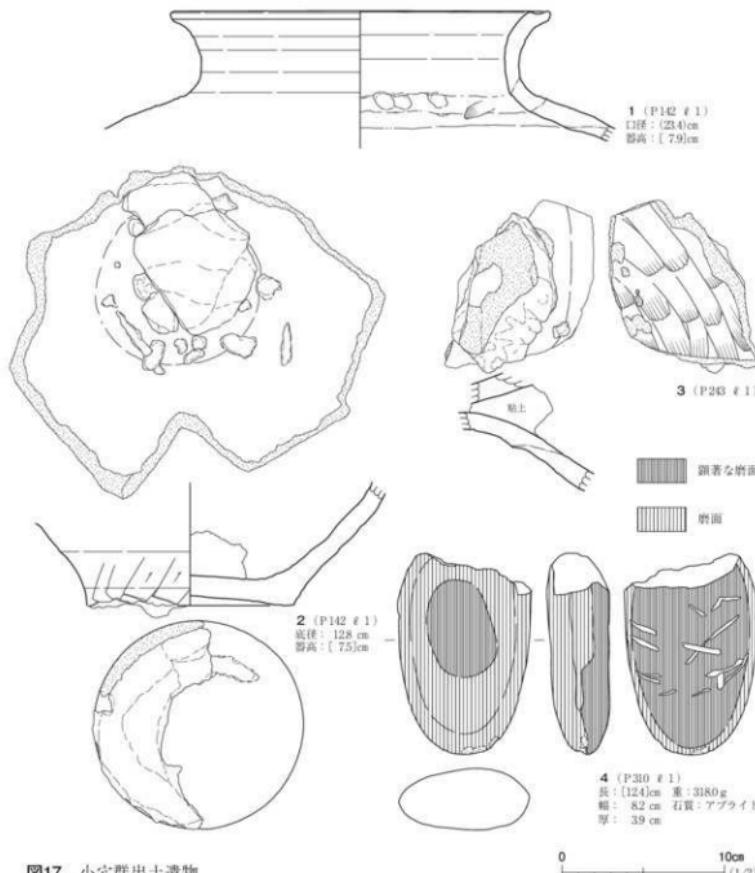


図17 小穴群出土遺物

れる。2は底部から緩やかにふくらみを持って立ち上がっており、底部周辺にはヘラケズリが認められる。焼き損じ品とみられ、底部には三日月状に焼き台が付着し、内面には拳大の粘土塊がそのまま残された状態で焼成されている。

同図3はP243より出土した同じく壺ないし壺の肩部片であるが、粘土塊が貼りつき、別の体部片とともに焼成された状態である。外面には1と同様の自然釉が認められる。また、内面には焼きハゼがあり、同じP243から出土した他の体部片にも確認できた。

図17-1～3の3点は、どれも外面が灰褐色を呈し、にぶい黄橙色の自然釉が認められるものである。本遺跡の周辺に当該期の窯跡は確認されていないが、焼き損じ品であるため、それらの流入経路を考えると付近に生産の場が存在する可能性が考えられる。

同図4は磨石で、丸みのある平たい形状をしており、表面全体に磨面が認められる。(廣川)

第8節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物として図示したものは図18の2点である。擾乱から出土しており、どちらも近世以降のものであるが、本遺跡は近世の所産である奥州街道、赤坂窯跡が隣接しているため報告することとする。

1は岸窯跡産とみられる小型の壺で、口縁部が短く直立する。釉が完全に溶けきらず淡黄色となつておらず、同じく岸窯跡産とみられる1号道路から出土した手付水注(図9-5)の釉に近似する。

2は土鉢である。時期は不明であるが、現在も民芸品として親しまれている「まさる」の土鉢部分とみられる。この付近では堤人形系の玩具「まさる」が生産されている。(廣川)

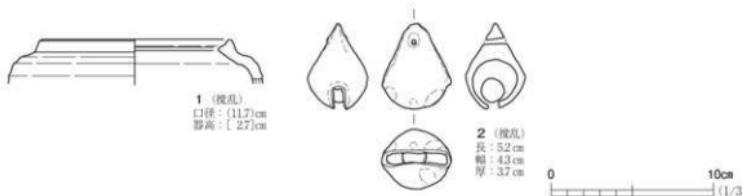


図18 遺構外出土遺物

第3章 総括

新宿遺跡からは、堅穴住居跡2軒、土坑6基、道跡3条、堀跡1条、溝跡2条、小穴群が検出された。今回の調査によって、縄文時代の狩場、奈良時代の小規模集落、中世の街道筋の居住域、中世から近世にかけての街道を確認することができた。下記に各時代の概要をまとめる。

縄文時代の遺構としては落し穴1基を検出したのみであるが、調査区内からは縄文時代の石器類が出土することから、調査区外の周辺で生活の痕跡が存在している可能性がある。

奈良時代になると、遺跡周辺の段丘崖や開析谷といった地形を利用して伊達市(旧伊達町)に所在する伊達窯跡に代表される須恵器窯の操業が開始され、奈良時代から平安時代にかけての一大生産地となる。調査区内からも、それらの窯跡とみられる須恵器片が認められる。この時期の遺構としては、8世紀後半頃の所産と考えられる堅穴住居跡2軒が検出された。そのうちの1軒からは、焼き損じとみられる須恵器杯が出土し、これについても付近の窯跡のものと推察される。

中世の遺構は、道跡、堀跡、小穴群である。このうち1号道跡は、調査区東側に隣接する近世の奥州街道に比定される県道353号線に平行して南北方向に延びている。そのため、1号道跡はその前段階の主要な幹線道路と考えられ、中世の奥六郡に通じる「奥の大道」が想定される。堀跡はこの道跡の西側に直交するように検出され、遺跡が立地する丘陵地のやや括れた部分に掘り込まれている。堆積状況から、堀として機能していた期間は短いものと推察され、出土遺物から、古代末には埋め戻されて主要道路への枝道として整備されている。

その後、1号道跡及び枝道の周辺には建物跡の柱穴とみられる小穴群の広がりが認められ、街道筋には複数の建物が建ち並んでいたようである。また、小穴の一部からは焼き損じの中世陶器片が出土した。調査区内からは古代以降の粘土採掘坑が検出され、基盤層からは良質な粘土が採取されることから、付近一帯には周知の古代や近世の窯跡以外にも未発見の窯跡が存在する可能性がある。

1号道跡は、出土遺物から近世初頭頃までは機能していたものと考えられ、近世に入り奥州街道が整備されて役割を終えたものとみられる。一方、主要道路としての始まりについては、堀跡との関係から古代末には機能していたようである。伊達郡国見町では古代の東山道とみられる道跡が調査されているが、本遺構についてもその可能性を指摘しておきたい。

(廣川)

引用・参考文献

- 伊達町教育委員会 1983 「伊達窯跡群詳細分布報告」伊達町文化財調査報告書第2集
- 伊達町教育委員会 1987 「伊達窯跡調査報告」伊達町文化財調査報告書第3集
- 国見町教育委員会 2010 「阿津賀志山防風指定調査概報2」国見町文化財調査報告第17集
- 福島市教育委員会 1998 「岸窯跡」福島市埋蔵文化財報告書第111集

付 編 自然科学分析

第1章 沼ヶ入遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社 加速器分析研究所

第1節 樹種同定

1. 試料

沼ヶ入遺跡は、伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡の河岸段丘上に位置する。本遺跡では中世とされる掘立柱建物跡が検出され、柱痕から建築材の可能性がある炭化材片が出土したことから、当時の木材利用状況を調査する目的で、炭化材4点の樹種同定を行った(表1)。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、13~14世紀頃の年代値が示されている(付編第1章第2節参照)。

2. 分析方法

炭化材はステンレス剥刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

3. 結果

同定結果を表1に示す。本遺跡の炭化材は4試料のうち3点がクリ、1点はイネ科と同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で單列ないし時々2細胞幅となる。

・イネ科 (Poaceae)

破片が小さく茎の外側輪郭が不明であるが、確認できた維管束は原生木部腔と一对の後生木部道管と師部からなり、外側を纖維組織が取り囲んでいる。

全体がもろく断面が小さいため、横断面内の維管束の配置等が不明でイネ科との同定にとどめる。草本であるため、放射断面と接線断面は柔細胞が並んでいる。

4. 考察

本遺跡の炭化材は4点中3点がクリで、いずれも掘立柱建物跡の柱痕から出土したことから建築部材にクリが使われていた可能性がある。また、1点はイネ科であったが、イネ科のタケアキ科やヨシ、ススキなど住居構築材として使われるイネ科が多い。

福島県の中世の柱材の分析結果としては、戦国~江戸初期とされる麻生館遺跡で13点中5点、蛭館遺跡で5点中3点にクリが使われ、針葉樹よりも利用比が高い(伊東ほか 2012)。本遺跡の結果からも、中世において柱材としてクリを頻繁に利用していたことがうかがえる。

※)本分析は、古代の森研究室の協力を得て行った。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社

表1 出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種
DT-NGI2-01	SB03	P6柱痕	クリ
DT-NGI2-02	SB03	P7柱痕	クリ
DT-NGI2-03	SB03	P9柱痕	イネ科
DT-NGI2-04	SB03	P15柱痕	クリ

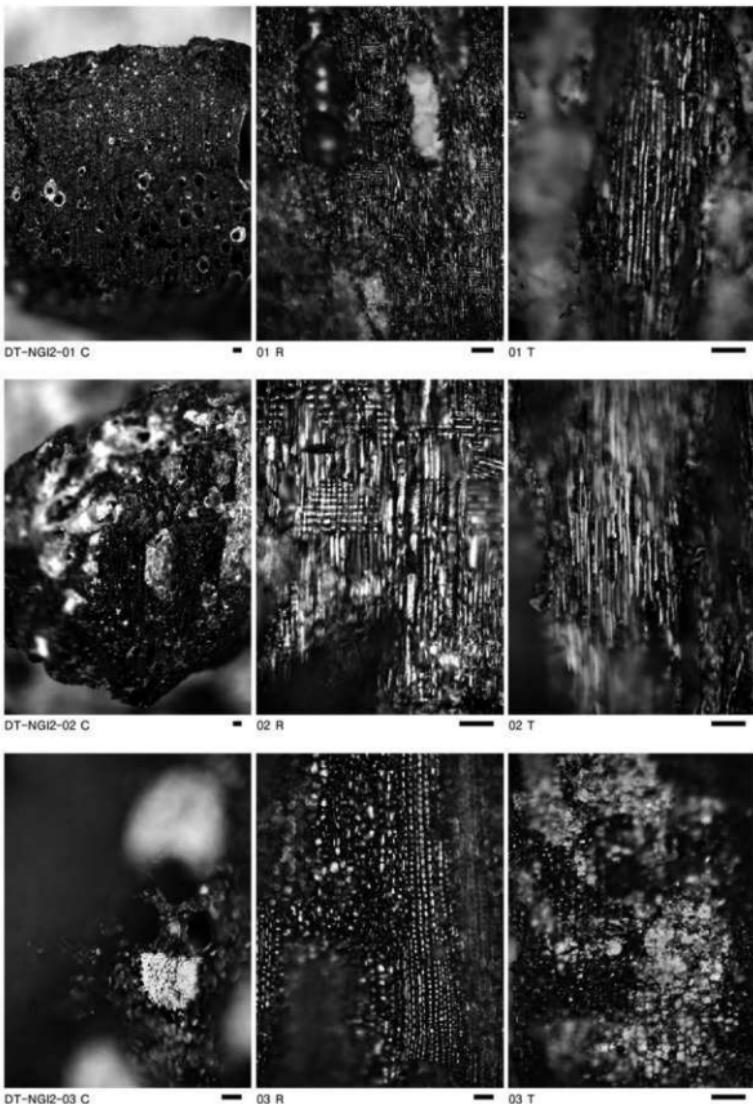


図1 出土炭化材の顕微鏡写真（1）

C：横断面 R：放射断面 T：接線断面 スケール：0.1mm

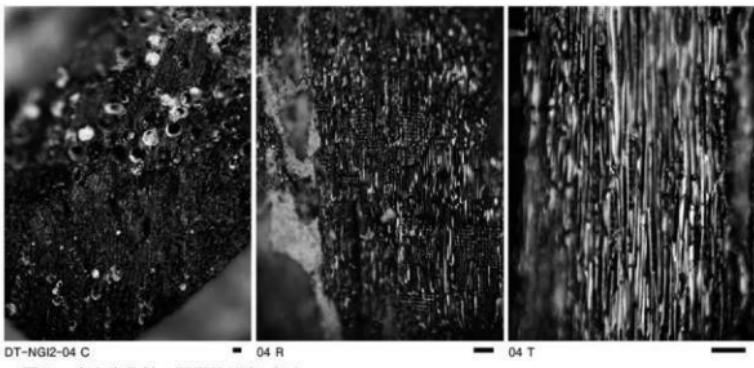


図2 出土炭化材の顕微鏡写真（2）

C:横断面 R:放射断面 T:接縫断面 スケール:0.1mm

第2節 放射性炭素年代測定

1. 測定対象試料

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市靈山町下小国字沼ヶ入、御渡（北緯37°45'57"、東經140°35'23"）に所在し、河岸段丘上に立地する。測定対象試料は、掘立柱建物跡柱痕の堆積土から出土した炭化材4点である（表2）。なお、これらの試料を対象に樹種同定も実施されている（付編第1章第1節参照）。

2. 測定の意義

建物の年代を考えるための補助資料とする。

3. 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 处理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。

AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行

う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表2に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1 mmのカソードによるハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した

値である(表2)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。

(4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代

については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表3に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表2・3に示す。

3号建物跡の柱痕出土試料4点の¹⁴C年代は、 $670 \pm 20\text{yrBP}$ (DT-NGI2-01)から $620 \pm 20\text{yrBP}$ (DT-NGI2-03, DT-NGI2-04)の狭い範囲に集中する。暦年較正年代(1σ)は、最も古いDT-NGI2-01が1285～1381calADの間に2つの範囲、最も新しいDT-NGI2-03が1300～1394calADの間に3つの範囲で示される。4点は近い値となり、重なる範囲もある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years calBP. *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料No.	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	(試料No.の頭部「DT-NGI2-」を省略記)	
						$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161644	01	SB01 P6柱痕	炭化材	AAA	-25.71 ± 0.21	670 ± 20	92.03 ± 0.26
IAAA-161645	02	SB01 P7柱痕	炭化材	AAA	-24.40 ± 0.21	660 ± 20	92.14 ± 0.26
IAAA-161646	03	SB01 P9柱痕	炭化材	AAA	-26.16 ± 0.25	620 ± 20	92.61 ± 0.26
IAAA-161647	04	SB01 P15柱痕	炭化材	AAA	-25.87 ± 0.21	620 ± 20	92.54 ± 0.26

表3 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値)及び曆年較正年代

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	pMC (%)	曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲
IAAA-161644	680 ± 20	91.90 ± 0.20	667 ± 22	1285calAD - 1300calAD (39.6%) 1369calAD - 1381calAD (28.6%)	1278calAD - 1313calAD (52.6%) 1357calAD - 1389calAD (42.8%)
IAAA-161645	650 ± 20	92.26 ± 0.26	657 ± 22	1287calAD - 1306calAD (31.0%) 1364calAD - 1386calAD (37.2%)	1281calAD - 1318calAD (45.6%) 1352calAD - 1390calAD (49.8%)
IAAA-161646	640 ± 20	92.39 ± 0.25	616 ± 22	1300calAD - 1325calAD (27.9%) 1345calAD - 1369calAD (26.9%) 1381calAD - 1394calAD (13.4%)	1295calAD - 1399calAD (95.4%)
IAAA-161647	640 ± 20	92.38 ± 0.26	622 ± 22	1299calAD - 1320calAD (27.9%) 1350calAD - 1370calAD (26.0%) 1380calAD - 1392calAD (14.3%)	1292calAD - 1330calAD (37.4%) 1338calAD - 1398calAD (58.0%)

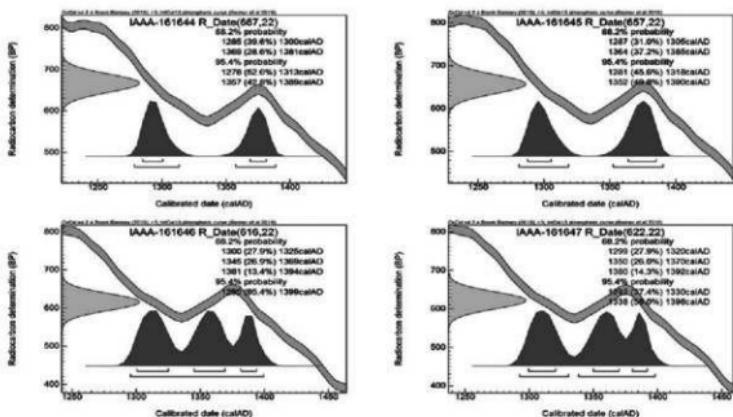


図3 曆年較正年代グラフ

OxCal v4.2.4 (Bronk Ramsey (2013); r5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013))

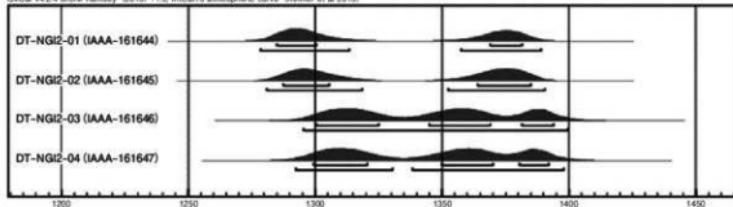


図4 マルチプロット図

第2章 上ノ台館跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社 加速器分析研究所

第1節 樹種同定

1. 試料

上ノ台館跡は、伊達市靈山町下小国字上ノ台の丘陵上に位置する。本遺跡では土坑及び木炭窯跡が検出され、遺構の底面から炭化材が出土したことから、当時の燃料材などの木材利用状況を調査する目的で炭化材16点の樹種同定を行った(表4)。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、1号土坑の試料はModern、2号土坑の試料は7~8世紀頃、1号木炭窯跡の試料は13世紀前半を主とする年代値が示されている(付録第2章第2節参照)。

2. 分析方法

炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

3. 結果

同定結果を表4に示す。1号土坑から出土した炭化材3点はすべてマツ属複維管束亜属、2号土坑から出土した炭化材3点はすべてクリ、1号木炭窯跡から出土した炭化材10点は、クヌギ節6点、コナラ節3点、クリ1点に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*)

早材部から晚材部への移行はやや急で、早材部と晚材部の境界付近に垂直樹脂道が多く見られる。放射組織は柔細胞の上下に放射仮道管があり、放射柔細胞の分野壁孔は窓状で放射仮道管の内壁が鋸歯状

に突出する。接線断面で見られる放射細胞に、しばしば水平樹脂道が含まれるもののが確認できる。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で單列ないし時々2細胞幅となる。

・コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Pinus*)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で、2~3ミリ程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で單列と多細胞幅の広放射組織がある。

・コナラ属クヌギ節 (*Quercus sect. Aegilops*)

年輪最初に大きな道管が數列配列し、その後徐々に径を減じて波状に厚壁の円い小道管が配列する環孔材で、横断面に広放射組織が見える。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で單列と多細胞幅の広放射組織がある。

4. 考察

1号土坑から出土した炭化材はすべてModernで、1950年以降のものであった。2号土坑から出土した炭化材はすべてクリであり、比較的締まった炭であることから燃料材として焼成された可能性が高い。また、1号木炭窯跡から出土した炭化材はクヌギ節が多く、コナラ節とクリも見られる。これらの樹種は、炭の原料として古代~中世にかけて選択的に使われていたと推測される。

南相馬市の割田H遺跡では古墳末~平安時代と

される製鉄炉跡や木炭窯跡で大量の炭化材が同定されており、コナラ節とクヌギ節が圧倒的に多い。また割田C遺跡ではクリが卓越した木炭窯跡も確認されている(伊東ほか 2012)。

※)本分析は、古代の森研究室の協力を得て行った。

表4 出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種	試料番号	遺構	層位	樹種
DT-KNT-01	SK01	底面	マツ属複縫管束型属	DT-KNT-09	SC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-02	SK01	底面	マツ属複縫管束型属	DT-KNT-10	SC01	底面	コナラ節
DT-KNT-03	SK01	底面	マツ属複縫管束型属	DT-KNT-11	SC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-04	SK02	底面	クリ	DT-KNT-12	SC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-05	SK02	底面	クリ	DT-KNT-13	SC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-06	SK02	底面	クリ	DT-KNT-14	SC01	底面	クヌギ節
DT-KNT-07	SC01	底面	コナラ節	DT-KNT-15	SC01	底面	コナラ節
DT-KNT-08	SC01	底面	クヌギ節	DT-KNT-16	SC01	底面	クリ

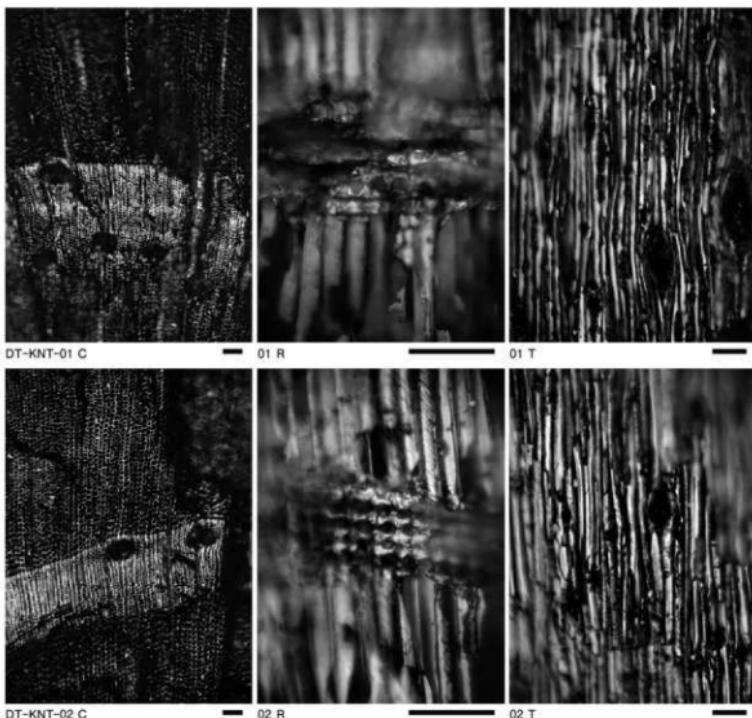


図5 出土炭化材の顕微鏡写真（1）

参考文献

伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 「木の考古学 出土木製品用材データベース」海青社

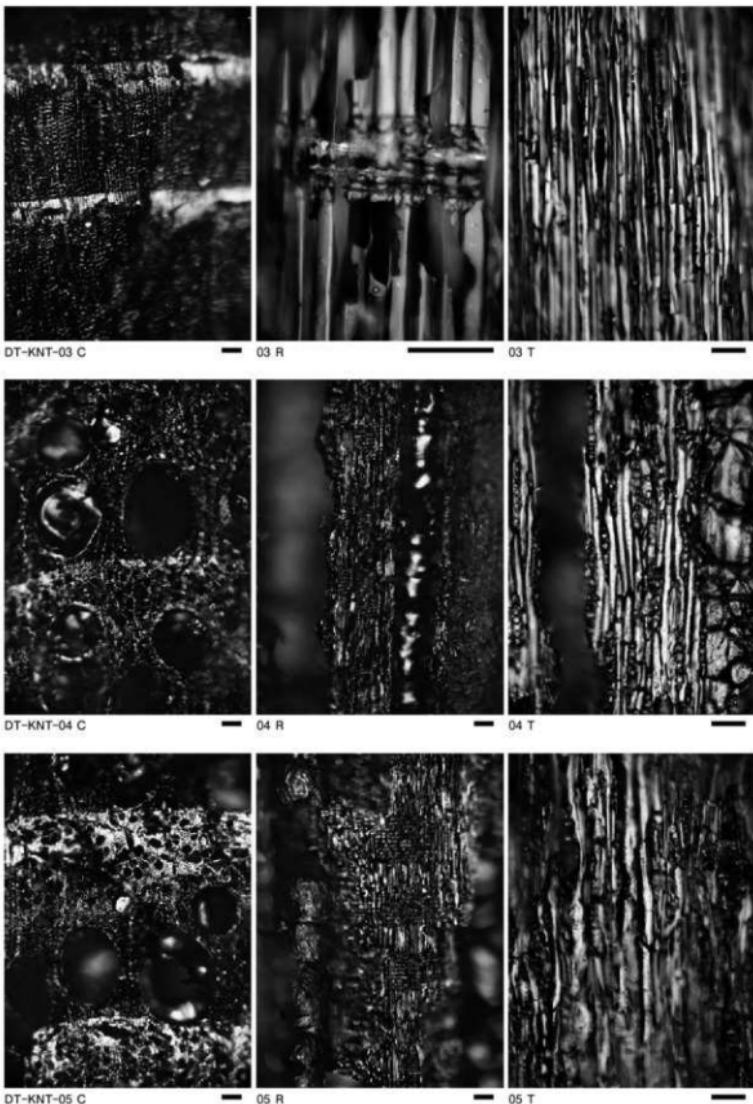


図6 出土炭化材の顕微鏡写真（2）

C：横断面 R：放射断面 T：接線断面 スケール：0.1mm

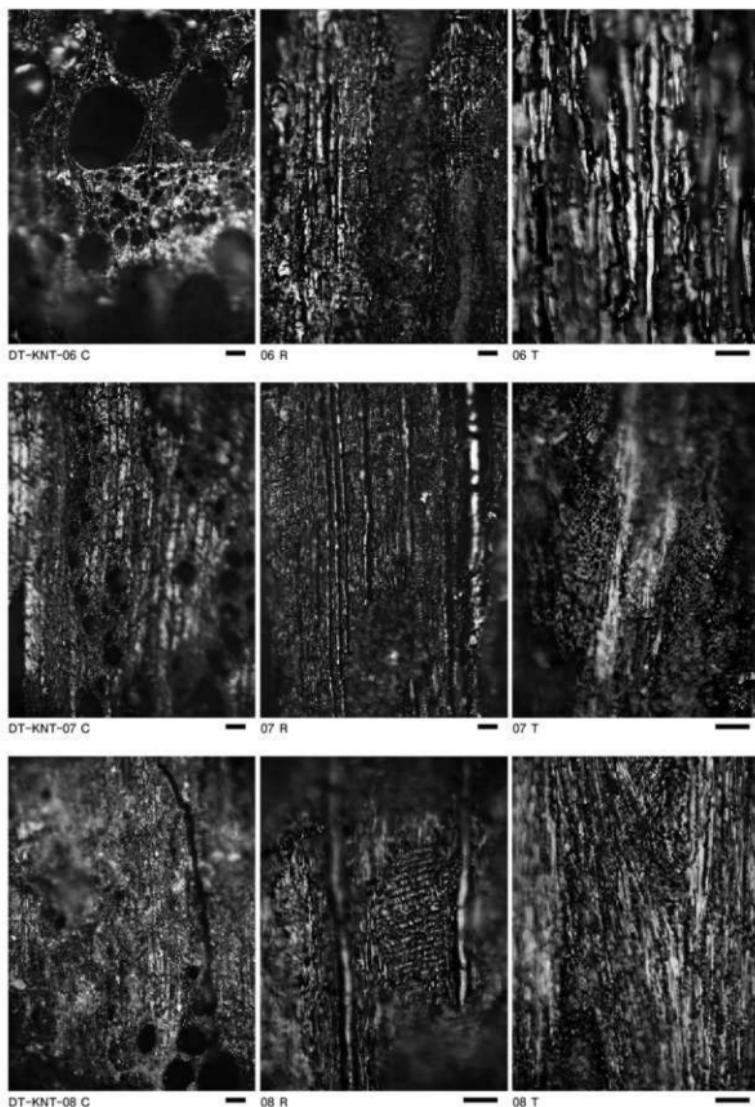


図7 出土炭化材の顕微鏡写真（3）

C：横断面 R：放射断面 T：接縫断面 スケール：0.1mm

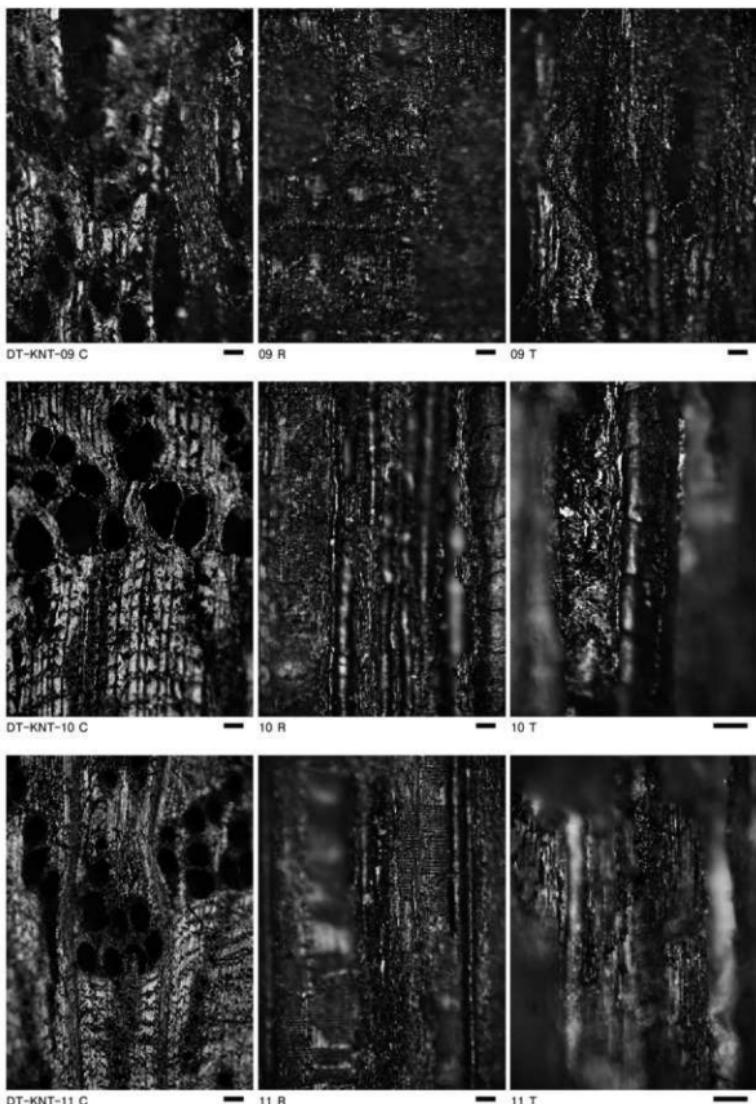


図8 出土炭化材の顕微鏡写真（4）

C：横断面 R：放射断面 T：接縫断面 スケール：0.1mm

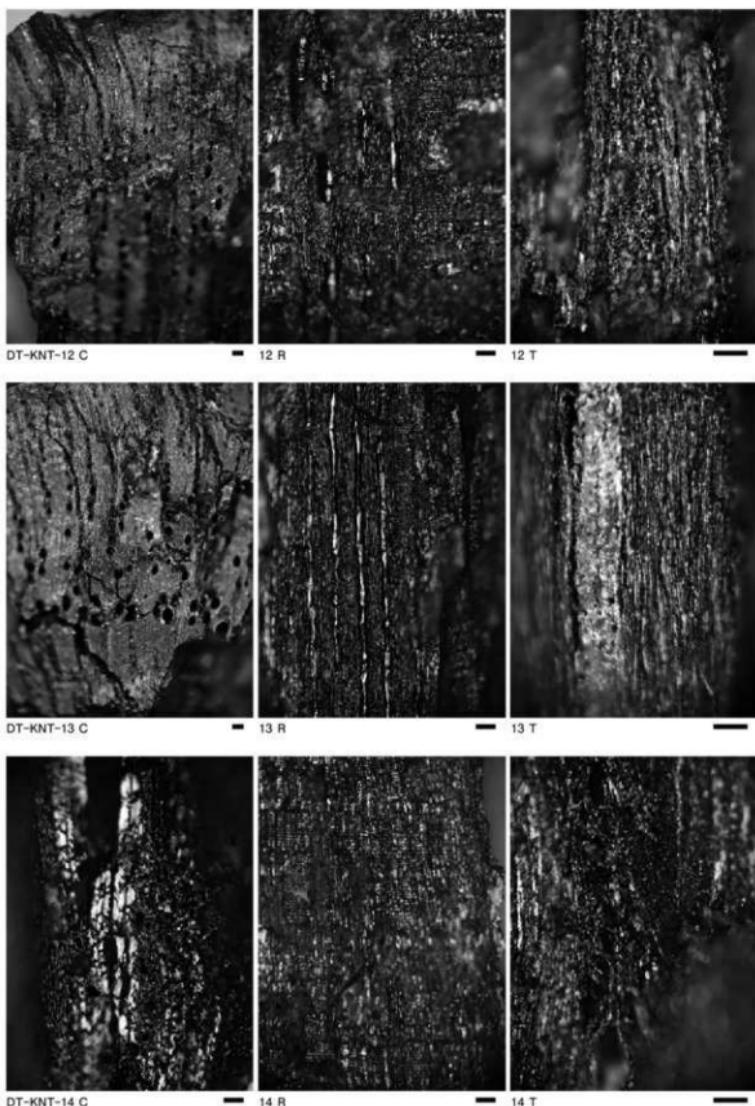


図9 出土炭化材の顕微鏡写真（5）

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接縫断面 スケール: 0.1mm

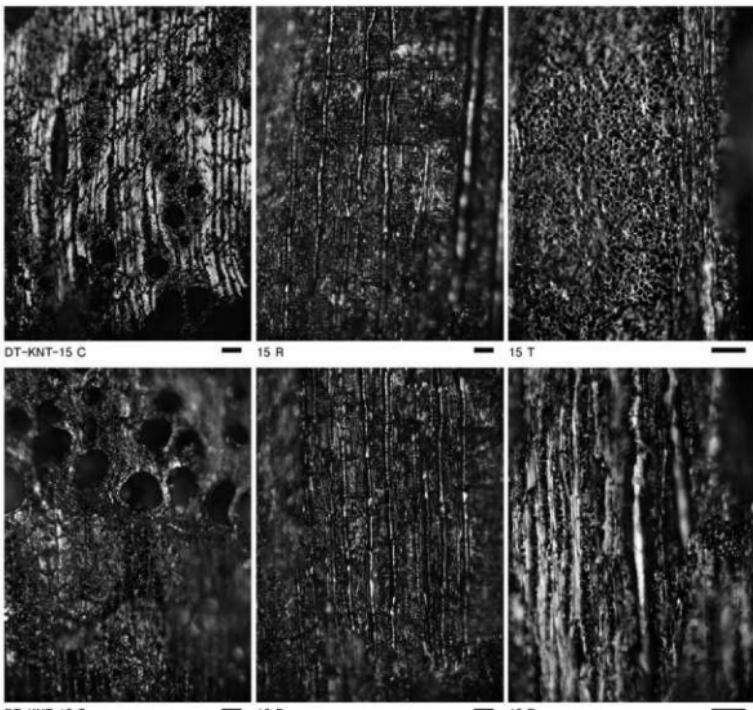


図10 出土炭化材の顕微鏡写真（6）

C : 横断面 R : 放射断面 T : 接縫断面 スケール : 0.1mm

第2節 放射性炭素年代測定

1. 測定対象試料

上ノ台館跡は、福島県伊達市靈山町下小国字上ノ台(北緯 $37^{\circ}46'12''$ 、東経 $140^{\circ}35'14''$)に所在し、丘陵上に立地する。測定対象試料は、土坑、木炭窯跡から出土した炭化材16点である(表5)。なお、同一試料を対象に樹種同定も実施されている(付編第2章第1節参照)。

2. 測定の意義

土坑、木炭窯跡の年代を考えるための補助資料とする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 处理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1

M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表5に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(‰)で表した値である(表5)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表6に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表5・6に示す。

1号土坑出土試料3点の¹⁴C年代は、すべてModernとなっており、1950年以降の炭化材と考えられる。

2号土坑出土試料3点の¹⁴C年代は、DT-

KNT-04, 05が 1300 ± 20 yrBP、DT-KNT-06が 1290 ± 20 yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、DT-KNT-04が $672 \sim 764$ calAD、DT-KNT-05が $667 \sim 764$ calAD、DT-KNT-06が $680 \sim 765$ calADの間に各々2つの範囲で示される。3点の値は重なる範囲が多く、ほぼ同年代を示している。

1号木炭塗跡出土試料10点の ^{14}C 年代は、 830 ± 20 yrBP(DT-KNT-10, 14, 15)から 780 ± 20 yrBP(DT-KNT-12, 13)の狭い範囲に集中する。暦年較正年代(1σ)は、最も古いDT-KNT-10が $1190 \sim 1249$ calADの範囲、最も新しいDT-KNT-12が $1228 \sim 1272$ calADの間に2つの範囲で示される。

すべての試料の値が13世紀前半頃を中心に重なり合っている。

試料の炭素含有率はすべて70%前後の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), pp.337–360.
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years calBP. *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869–1887.
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3), pp.355–363.

表5 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料No.	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP)	(試料No.の頭部「DT-KNT-」を省略記)
						pMC (%)	
IAAA-161648	01	SK01底面	炭化材	AAA	-26.84 ± 0.27	Modern	175.45 ± 0.40
IAAA-161649	02	SK01底面	炭化材	AAA	-26.72 ± 0.23	Modern	181.44 ± 0.40
IAAA-161650	03	SK01底面	炭化材	AAA	-26.38 ± 0.21	Modern	148.54 ± 0.34
IAAA-161651	04	SK02底面	炭化材	AAA	-26.63 ± 0.19	1,300 ± 20	85.09 ± 0.24
IAAA-161652	05	SK02底面	炭化材	AAA	-25.75 ± 0.28	1,300 ± 20	85.03 ± 0.21
IAAA-161653	06	SK02底面	炭化材	AAA	-24.19 ± 0.27	1,290 ± 20	85.19 ± 0.22
IAAA-161654	07	SC01底面	炭化材	AAA	-25.18 ± 0.21	800 ± 20	90.52 ± 0.25
IAAA-161655	08	SC01底面	炭化材	AAA	-26.74 ± 0.19	810 ± 20	90.43 ± 0.25
IAAA-161656	09	SC01底面	炭化材	AAA	-25.99 ± 0.21	800 ± 20	90.47 ± 0.25
IAAA-161657	10	SC01底面	炭化材	AAA	-24.24 ± 0.23	830 ± 20	90.18 ± 0.25
IAAA-161658	11	SC01底面	炭化材	AAA	-26.84 ± 0.20	790 ± 20	90.60 ± 0.25
IAAA-161659	12	SC01底面	炭化材	AAA	-25.00 ± 0.30	780 ± 20	90.80 ± 0.25
IAAA-161660	13	SC01底面	炭化材	AAA	-25.84 ± 0.19	780 ± 20	90.70 ± 0.26
IAAA-161661	14	SC01底面	炭化材	AAA	-28.45 ± 0.23	830 ± 20	90.21 ± 0.25
IAAA-161662	15	SC01底面	炭化材	AAA	-23.54 ± 0.20	830 ± 20	90.23 ± 0.25
IAAA-161663	16	SC01底面	炭化材	AAA	-24.37 ± 0.24	790 ± 20	90.64 ± 0.25

表6-1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 未補正值)及び暦年較正年代

[参考値]

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲 (yrBP)	2σ 暦年代範囲
	pMC (%)			
IAAA-161648	Modern	174.80 ± 0.39	Modern	
IAAA-161649	Modern	180.80 ± 0.39	Modern	
IAAA-161650	Modern	148.12 ± 0.33	Modern	
IAAA-161651	1,310 ± 20	84.91 ± 0.24	1,296 ± 22	672calAD – 710calAD (44.9%) 746calAD – 764calAD (23.3%) 739calAD – 769calAD (33.0%)
IAAA-161652	1,320 ± 20	84.90 ± 0.21	1,302 ± 20	667calAD – 710calAD (47.3%) 746calAD – 764calAD (20.7%) 741calAD – 768calAD (30.0%)
IAAA-161653	1,270 ± 20	85.33 ± 0.21	1,287 ± 20	680calAD – 712calAD (39.8%) 744calAD – 765calAD (28.4%) 737calAD – 769calAD (36.3%)
IAAA-161654	800 ± 20	90.49 ± 0.25	800 ± 22	1,223calAD – 1,257calAD (68.2%) 1,208calAD – 1,272calAD (95.4%)
IAAA-161655	840 ± 20	90.10 ± 0.25	808 ± 22	1,220calAD – 1,256calAD (68.2%) 1,190calAD – 1,268calAD (95.4%)

表6-2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 未補正値)及び曆年較正年代

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲	[参考値]
	Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-161656	820 ± 20	90.28 ± 0.25	804 ± 22	1222calAD - 1256calAD (68.2%)	1193calAD - 1198calAD (1.1%) 1205calAD - 1217calAD (94.3%)	
IAAA-161657	820 ± 20	90.33 ± 0.25	830 ± 22	1190calAD - 1249calAD (68.2%)	1167calAD - 1258calAD (95.4%)	
IAAA-161658	820 ± 20	90.26 ± 0.25	793 ± 22	1224calAD - 1261calAD (68.2%)	1215calAD - 1273calAD (95.4%)	
IAAA-161659	770 ± 20	90.8 ± 0.24	775 ± 21	1228calAD - 1231calAD (5.8%) 1245calAD - 1272calAD (62.4%)	1221calAD - 1276calAD (95.4%)	
IAAA-161660	800 ± 20	90.55 ± 0.25	784 ± 22	1225calAD - 1233calAD (17.0%) 1243calAD - 1263calAD (51.2%)	1218calAD - 1274calAD (95.4%)	
IAAA-161661	880 ± 20	89.57 ± 0.25	827 ± 22	1192calAD - 1198calAD (5.1%) 1205calAD - 1254calAD (63.1%)	1168calAD - 1259calAD (95.4%)	
IAAA-161662	800 ± 20	90.49 ± 0.25	826 ± 22	1193calAD - 1197calAD (4.0%) 1205calAD - 1255calAD (64.2%)	1169calAD - 1259calAD (95.4%)	
IAAA-161663	780 ± 20	90.75 ± 0.24	789 ± 21	1224calAD - 1236calAD (23.2%) 1241calAD - 1263calAD (45.0%)	1217calAD - 1272calAD (95.4%)	

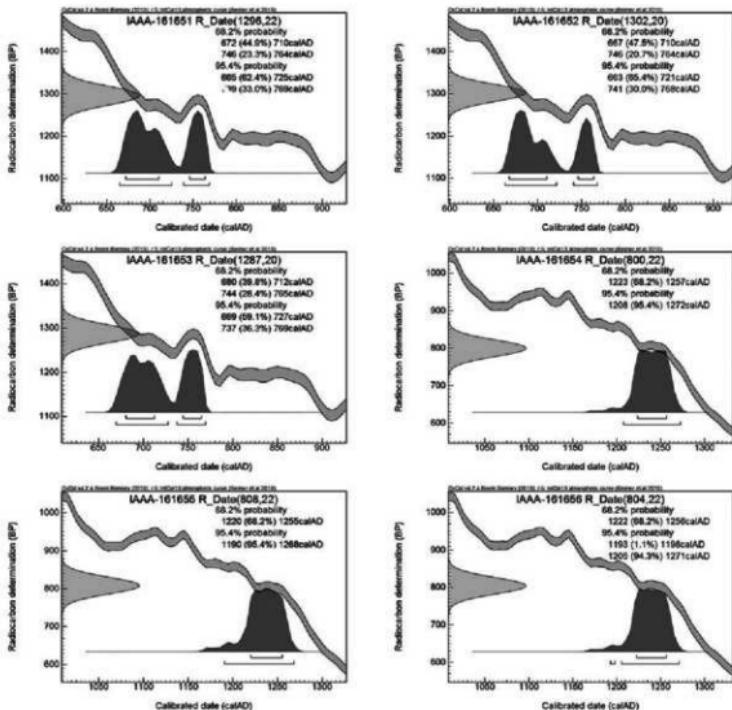


図11 曆年較正年代グラフ（1）

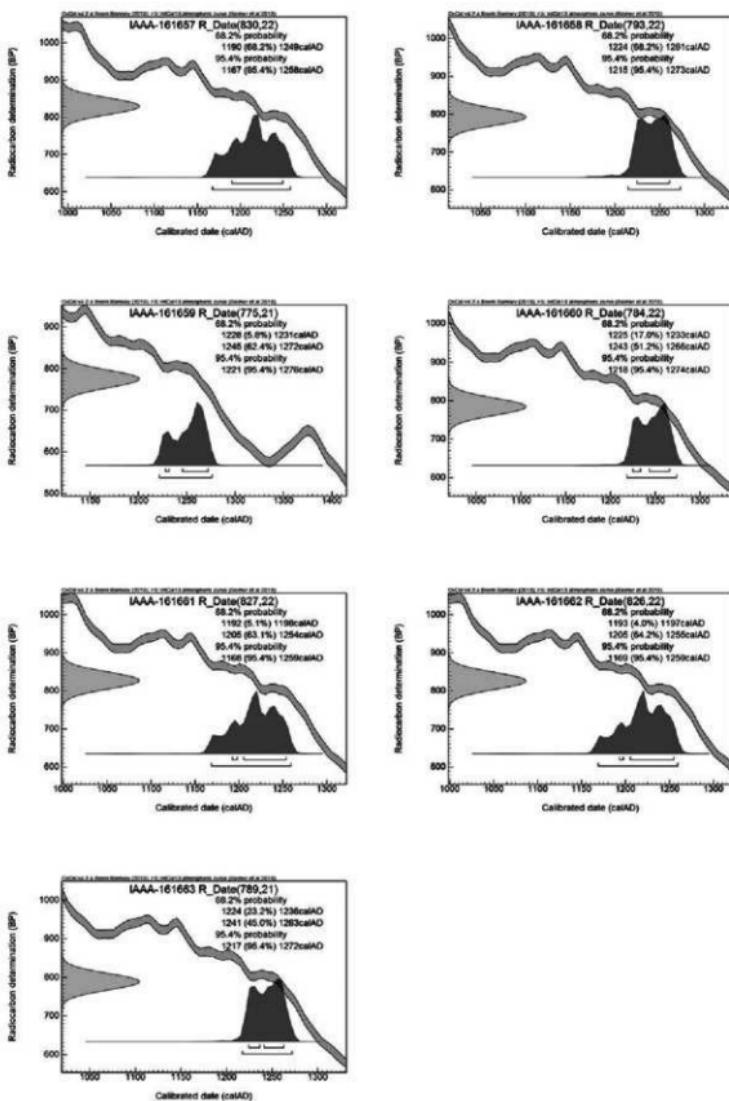


図12 历年較正年代グラフ（2）

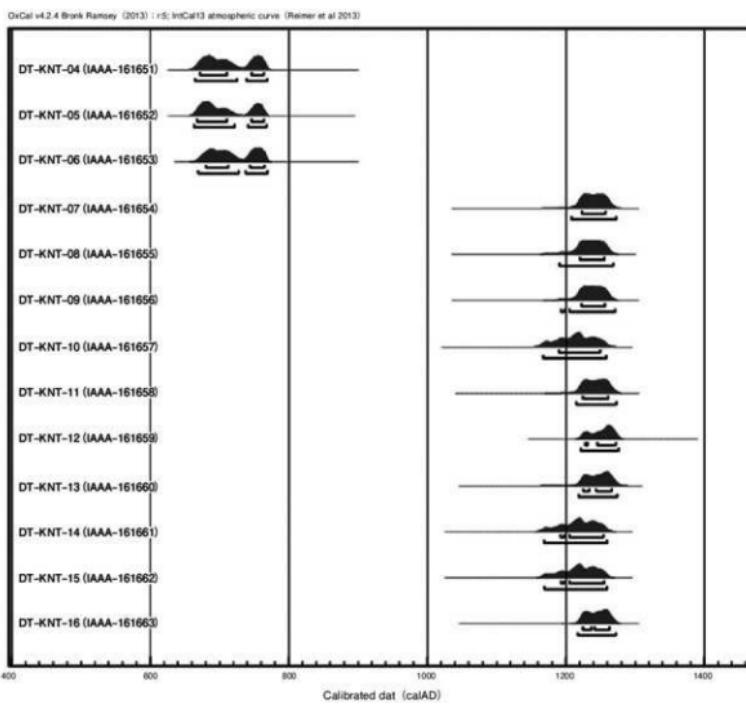


図13 マルチプロット図

第3章 川原田遺跡出土加工材と炭化材の自然科学分析

株式会社 加速器分析研究所

第1節 樹種同定

1. 試料

川原田遺跡は桑折町大字松原字川原田のに位置する。本遺跡では柱列跡及び掘立柱建物跡の柱痕に柱材が残っており、また井戸跡に井戸枠の構築材が残っていた。さらに、掘立柱建物跡の柱穴及び用途不明遺構からは炭化材片が出土した。そこで当時の土木建築材などの木材利用状況を調査する目的で、合計15点の木材や炭化材を対象に樹種同定を行った。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、9~10世紀頃の年代値が示されている(付編第3章第2節参照)。

2. 分析方法

木材試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取しガムクロラールでプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察・同定を行った。炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、同定を行った。同定は現生標本ならびに島地ほか(1982)を参考にした。

3. 結果

同定結果を表7に示す。1号柱列跡の柱材3点、1号掘立柱建物跡の柱材5点はすべてクリ、2号掘立柱建物跡の柱材1点はコナラ節、炭化材1点はニレ属、1号井戸跡の井戸枠材のうち、2点はクリ、1点はニレ属、1号性格不明遺構の炭化材のうち、1点はコナラ節、1点はスルデに同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で単列ないし時々2細胞幅となる。

・コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で2~3mm程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は單一で、放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

・ニレ属 (*Ulmus*)

年輪はじめに1~2列大きな道管が配列し、急に径を減じて小道管が斜線状、接線状に接合してやや規則的に配列する環孔材で軸方向柔細胞は周囲状。道管側壁は交互壁で穿孔板は單一、小道管内にはらせん肥厚が見られる。放射組織は平伏細胞のみの同性で比較的整った紡錘形で6~7細胞幅である。

・スルデ (*Rhus javanica* L.)

年輪はじめにやや大きい道管が数列配列し、徐々に径を減しながらやや斜線状に短く連なって配列する環孔材である。本試料はかなり小径で枝と思われ、早材部道管がそれほど大きくななく小道管もまばらである。道管の穿孔板は單一で小道管内壁にらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞の上下に直立細胞が数段ある異性で1~3細胞幅と細く、直立細胞の單列部を介して多列部とつながっている放射組織がある。

4. 考察

本遺跡では、平安時代の9世紀から10世紀頃と

みられる柱列や建物の柱9点中8点にクリが使われ、1点はコナラ節であった。また井戸枠材3点のうち2点はクリが使われ、1点はニレ属であった。東北地方では、縄文時代に比べて柱材にクリが用いられる比率は低下するものの、4割程度を占め、コナラ節も1割程度使われている(伊東ほか 2012)。本遺跡の同定結果もこの傾向に調和的であった。また本遺跡の井戸枠材には、クリのほかにニレ属が使われている。ニレ属は、井戸枠材に頻繁に使われるケヤキに構造が似ていることから、井戸枠材として用いられた可能性も考えられる。炭化材は、柱穴と性格不明遺構から検出されているため、建築部材か

燃料材か限定はできないが、ニレ属やコナラ節は建築部材や燃料材として有用である。1点出土したヌルデは炭材にも利用されるが、本遺跡で出土した試料は樹皮が付いている上、極めて細く、用材としては焚き付けの可能性がある。

*本分析は、古代の森研究会の協力を得て行った。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品 用材データベース』海青社
島地謙・伊東隆夫 1982 『図説 木材組織』地球社

表7 出土加工材と炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	試料形態	樹種	試料番号	遺構	層位	試料形態	樹種
QR-KHD-01	S A01	P1柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-09	SB02	P1柱痕	柱材	コナラ節
QR-KHD-02	S A01	P2柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-10	SE01	#6	井戸枠	クリ
QR-KHD-03	S A01	P3柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-11	SE01	#5	井戸枠	クリ
QR-KHD-04	SB01	P1柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-12	SE01	#3	井戸枠	ニレ属
QR-KHD-05	SB01	P3柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-13	SB02	P7柱痕	炭化材	ニレ属
QR-KHD-06	SB01	P4柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-14	SX01	#1	炭化材	コナラ節
QR-KHD-07	SB01	P8柱痕	柱材	クリ	QR-KHD-15	SX01	#2	炭化材	ヌルデ
QR-KHD-08	SB01	P16柱痕	柱材	クリ					



図14 出土加工材の顕微鏡写真（1）

C: 横断面 R: 放射断面 T: 接線断面 スケール: 0.1mm

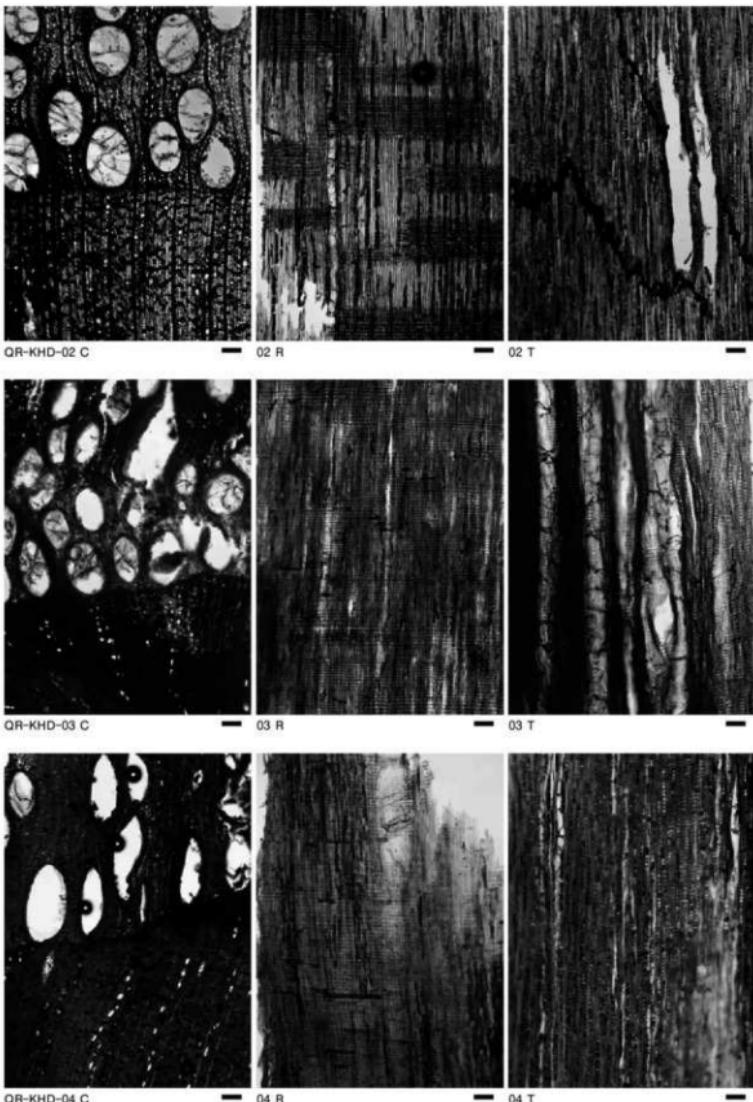


図15 出土加工材の顕微鏡写真（2）

C：横断面 R：放射断面 T：接線断面 スケール：0.1mm

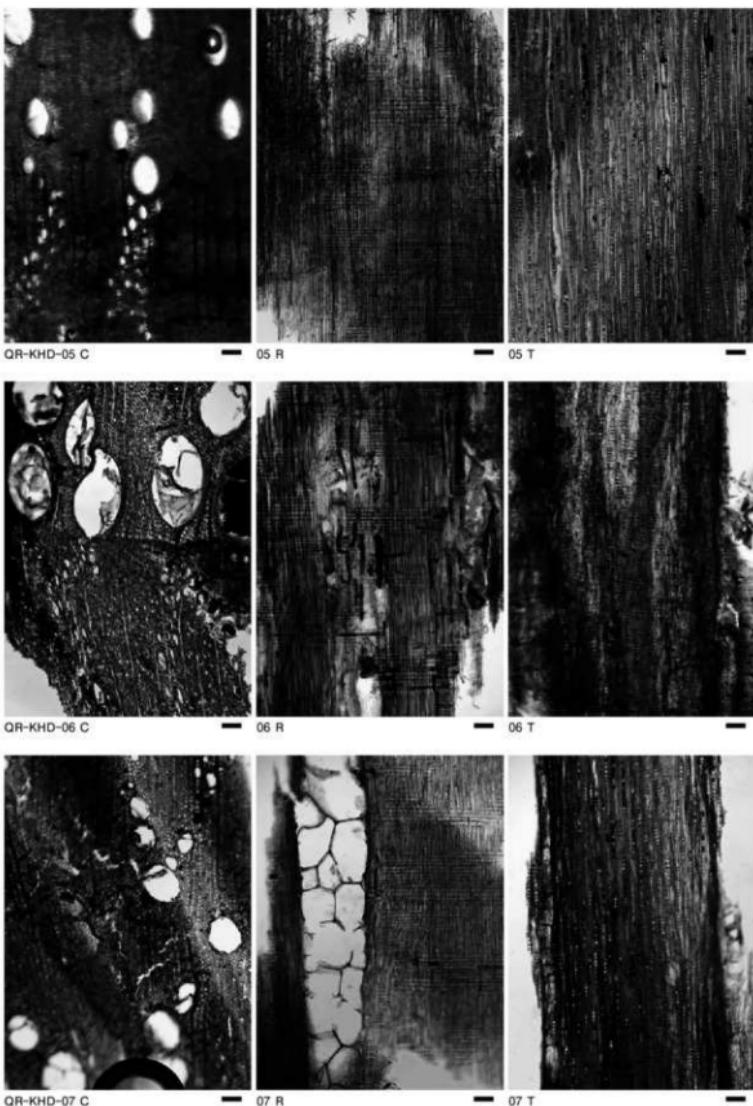


図16 出土加工材の顕微鏡写真（3）

C : 横断面 R : 放射断面 T : 接縫断面 スケール : 0.1mm

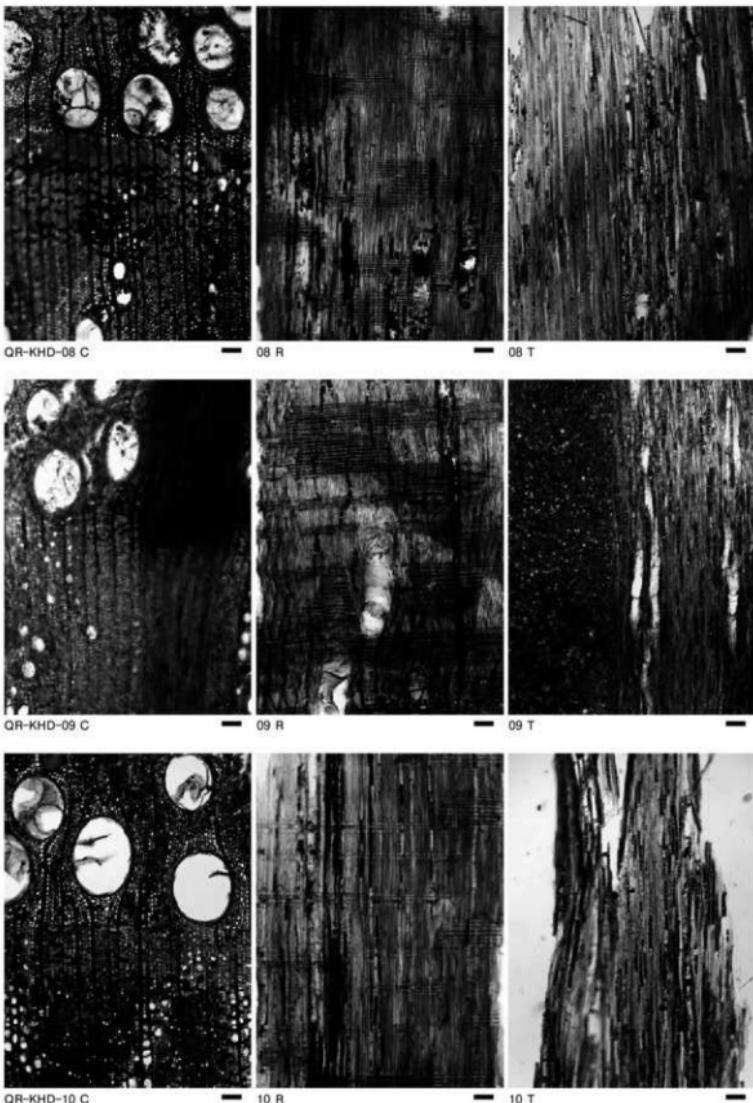


図17 出土加工材の顕微鏡写真（4）

C : 横断面 R : 放射断面 T : 接縫断面 スケール : 0.1mm

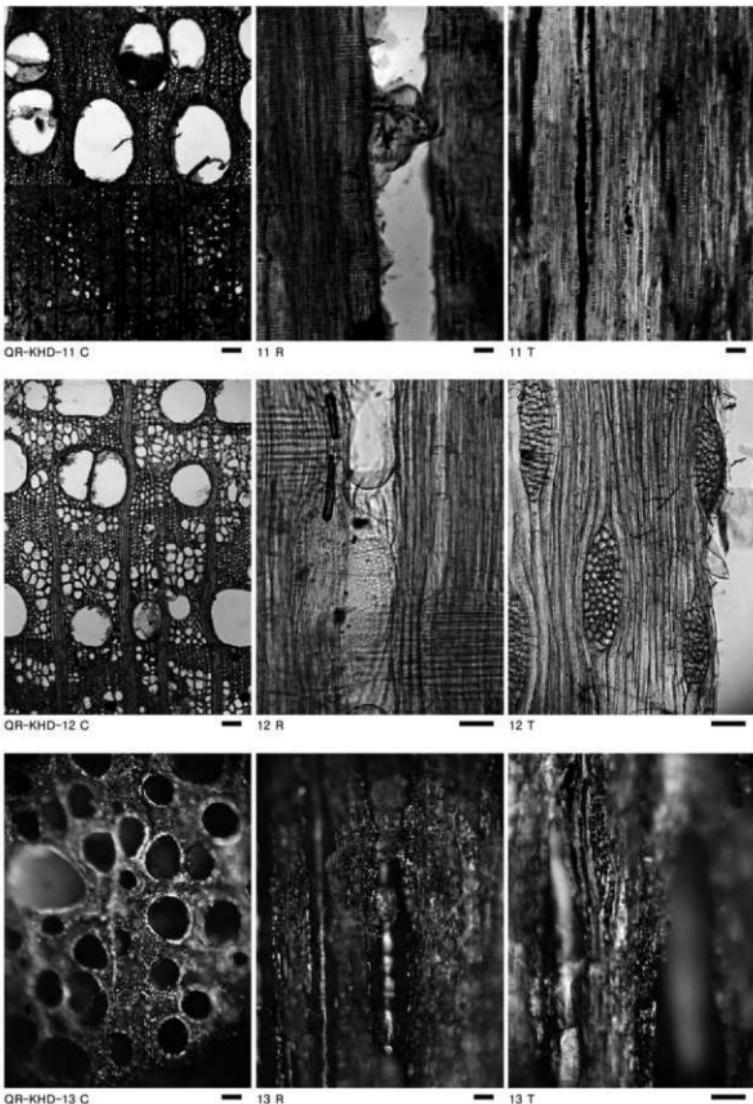


図18 出土加工材と炭化材の顕微鏡写真

C : 横断面 R : 放射断面 T : 接線断面 スケール : 0.1mm

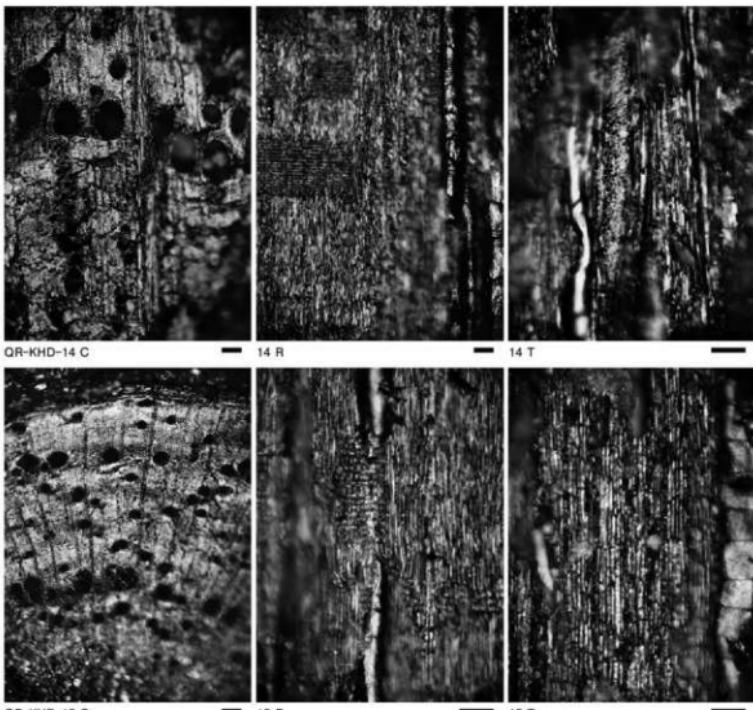


図19 出土炭化材の顕微鏡写真

C : 横断面 R : 放射断面 T : 接縫断面 スケール : 0.1mm

第2節 放射性炭素年代測定

1. 測定対象試料

川原田遺跡は、福島県桑折町大字松原字川原田に所在する。測定対象試料は、柱列跡、掘立柱建物跡等の遺構から出土した木片、炭化材の合計15点である(表8)。QR-KHD-01~09は柱材、QR-KHD-10~12は井戸枠材である。なお、同一試料を対象に樹種同定も実施されている(付編第3章第1節参照)。

2. 測定の意義

柱列跡、掘立柱建物跡等の年代を考えるための補助資料とする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、

超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表5に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹³C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシェウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

(1) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表5)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Suiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表8に、補正していない値を参考値として表9に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代

の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表8に、補正していない値を参考値として表9に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表9に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表8・9に示す。

試料15点の¹⁴C年代は、 $1200 \pm 20\text{yrBP}$ (QR-KHD-12)から $1080 \pm 20\text{yrBP}$ (QR-KHD-11)の狭

い範囲に集中する。曆年較正年代(1σ)は、最も古いQR-KHD-12が775~868calADの間に2つの範囲、最も新しいQR-KHD-11が901~995calADの間に2つの範囲で示される。9~10世紀頃の間で年代値が重なり合う試料が多い。遺構ごとに見ても、年代値のまとまりは良い。

試料の炭素含有率はすべて40%を超えるおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表8 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料No	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	(試料Noの頭部「QR-KHD-」を省略表記)		
						$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり pMC (%)	
IAAA-161673	01	S A01 P1柱痕	木片	AAA	-23.87 ± 0.22	1,160 ± 20	86.60 ± 0.23	
IAAA-161674	02	S A01 P2柱痕	木片	AAA	-27.22 ± 0.26	1,110 ± 20	87.12 ± 0.25	
IAAA-161675	03	S A01 P3柱痕	木片	AaA	-26.65 ± 0.25	1,140 ± 20	86.72 ± 0.24	
IAAA-161676	04	S B01 P1柱痕	木片	AAA	-27.23 ± 0.24	1,100 ± 20	87.19 ± 0.24	
IAAA-161677	05	S B01 P3柱痕	木片	AAA	-23.38 ± 0.22	1,110 ± 20	87.09 ± 0.25	
IAAA-161678	06	S B01 P4柱痕	木片	AAA	-27.98 ± 0.18	1,140 ± 20	86.75 ± 0.24	
IAAA-161679	07	S B01 P8柱痕	木片	AAA	-25.60 ± 0.26	1,090 ± 20	87.27 ± 0.25	
IAAA-161680	08	S B01 P16柱痕	木片	AAA	-25.15 ± 0.22	1,120 ± 20	87.02 ± 0.24	
IAAA-161681	09	S B02 P1柱痕	木片	AAA	-25.11 ± 0.28	1,150 ± 20	86.70 ± 0.24	
IAAA-161682	10	SE01 #6	木片	AAA	-26.13 ± 0.25	1,120 ± 20	86.97 ± 0.24	
IAAA-161683	11	SE01 #5	木片	AAA	-26.51 ± 0.20	1,080 ± 20	87.41 ± 0.24	
IAAA-161684	12	SE01 #3	木片	AAA	-25.96 ± 0.28	1,200 ± 20	86.12 ± 0.24	
IAAA-161685	13	S B02 P7柱痕	炭化材	AaA	-25.07 ± 0.22	1,160 ± 20	86.57 ± 0.24	
IAAA-161686	14	S X01 #1	炭化材	AaA	-23.75 ± 0.30	1,140 ± 20	86.76 ± 0.24	
IAAA-161687	15	S X01 #2	炭化材	AAA	-26.35 ± 0.19	1,150 ± 20	86.63 ± 0.23	

表9-1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値)及び曆年較正年代

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	曆年較正用 pMC (%)	1 σ 曆年年代範囲 (yrBP)	2 σ 曆年年代範囲	
IAAA-161673	1,140 ± 20	86.80 ± 0.23	1,156 ± 21	778calAD - 790calAD (8.9%) 827calAD - 841calAD (6.9%) 864calAD - 900calAD (30.7%) 922calAD - 949calAD (21.7%)	776calAD - 905calAD (67.3%) 917calAD - 967calAD (28.1%)
IAAA-161674	1,140 ± 20	86.73 ± 0.24	1,107 ± 22	898calAD - 925calAD (32.3%) 944calAD - 975calAD (35.9%)	891calAD - 987calAD (95.4%)
IAAA-161675	1,170 ± 20	86.43 ± 0.23	1,144 ± 21	880calAD - 904calAD (23.1%) 918calAD - 966calAD (45.1%)	777calAD - 791calAD (4.8%) 805calAD - 843calAD (7.3%) 860calAD - 974calAD (83.3%)
IAAA-161676	1,140 ± 20	86.79 ± 0.24	1,101 ± 22	900calAD - 922calAD (29.0%) 948calAD - 980calAD (39.2%)	891calAD - 990calAD (95.4%)
IAAA-161677	1,080 ± 20	87.38 ± 0.25	1,110 ± 23	897calAD - 927calAD (33.4%) 943calAD - 974calAD (34.8%)	890calAD - 987calAD (95.4%)
IAAA-161678	1,190 ± 20	86.22 ± 0.24	1,142 ± 22	881calAD - 904calAD (21.9%) 917calAD - 966calAD (46.3%)	777calAD - 791calAD (4.3%) 805calAD - 843calAD (6.7%) 860calAD - 975calAD (84.3%)
IAAA-161679	1,300 ± 20	87.17 ± 0.24	1,093 ± 22	901calAD - 921calAD (25.1%) 951calAD - 987calAD (43.1%)	892calAD - 995calAD (95.4%)

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), pp.337 - 360.
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years calBP. *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869 – 1887.
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3), pp.355 – 363.

表9-2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 未補正値)及び曆年較正年代

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	曆年較正用 pmC (%)	曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年較正範囲	2 σ 曆年較正範囲	[参考値]
IAAA-161680	1,120 ± 20	86.99 ± 0.24	1,117 ± 22	895calAD - 928calAD (35.7%) 941calAD - 969calAD (32.5%)	887calAD - 984calAD (95.4%)	
IAAA-161681	1,150 ± 20	86.68 ± 0.23	1,146 ± 21	879calAD - 903calAD (24.8%) 919calAD - 964calAD (43.4%)	777calAD - 791calAD (5.5%) 805calAD - 843calAD (8.7%) 860calAD - 972calAD (81.2%)	
IAAA-161682	1,140 ± 20	86.77 ± 0.23	1,121 ± 21	894calAD - 906calAD (14.2%) 916calAD - 931calAD (17.8%) 938calAD - 968calAD (36.1%)	886calAD - 983calAD (95.4%)	
IAAA-161683	1,110 ± 20	87.14 ± 0.24	1,080 ± 22	901calAD - 921calAD (18.9%) 953calAD - 995calAD (49.3%)	897calAD - 926calAD (25.1%) 942calAD - 1017calAD (70.3%)	
IAAA-161684	1,220 ± 20	85.95 ± 0.24	1,200 ± 22	775calAD - 778calAD (2.6%) 789calAD - 868calAD (65.6%)	760calAD - 880calAD (95.4%)	
IAAA-161685	1,160 ± 20	86.56 ± 0.23	1,158 ± 21	778calAD - 790calAD (10.0%) 827calAD - 841calAD (7.9%) 864calAD - 899calAD (32.1%) 924calAD - 945calAD (18.2%)	776calAD - 904calAD (70.9%) 918calAD - 965calAD (24.5%)	
IAAA-161686	1,120 ± 20	86.98 ± 0.23	1,141 ± 21	884calAD - 903calAD (20.5%) 919calAD - 964calAD (47.7%)	777calAD - 790calAD (3.7%) 807calAD - 842calAD (49%) 862calAD - 975calAD (86.8%)	
IAAA-161687	1,180 ± 20	86.39 ± 0.23	1,153 ± 21	778calAD - 790calAD (7.4%) 830calAD - 838calAD (3.5%) 867calAD - 901calAD (29.7%) 920calAD - 953calAD (27.6%)	776calAD - 794calAD (9.0%) 800calAD - 906calAD (52.5%) 915calAD - 968calAD (33.9%)	

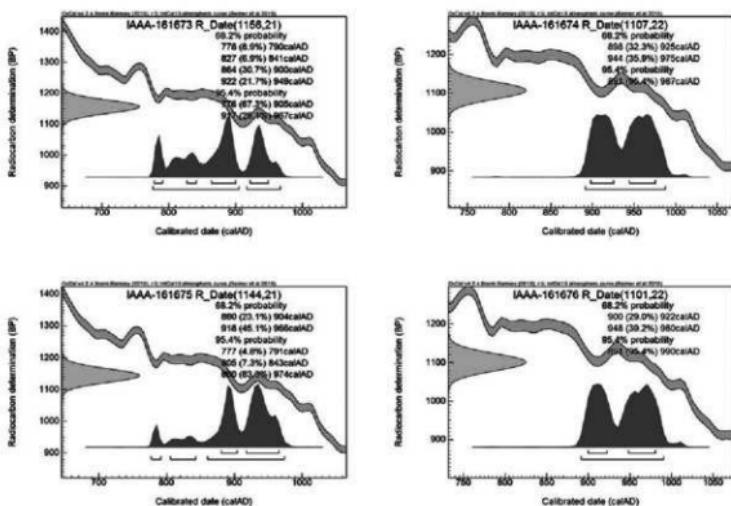


図20 曆年較正年代グラフ（1）

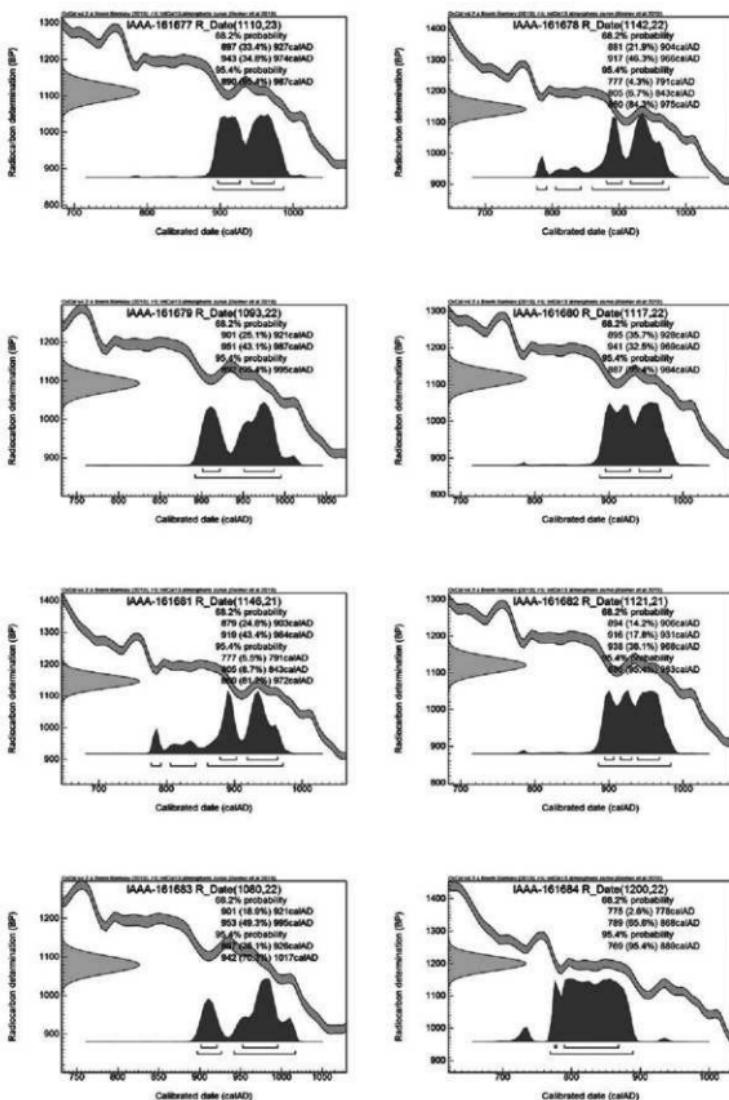


図21 历年校正年代グラフ（2）

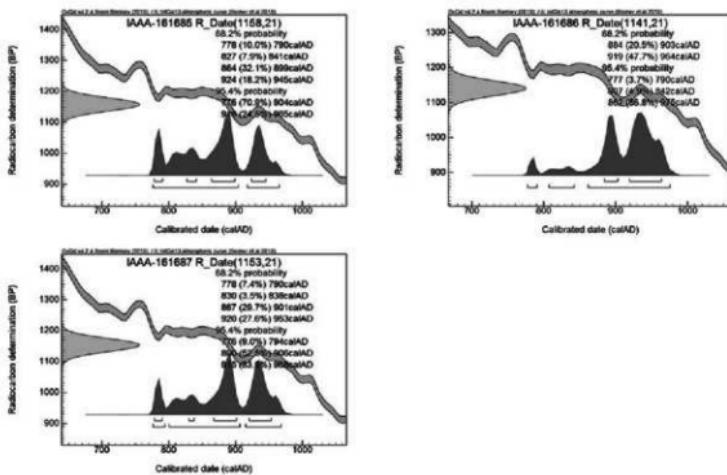


図22 暦年較正年代グラフ（3）

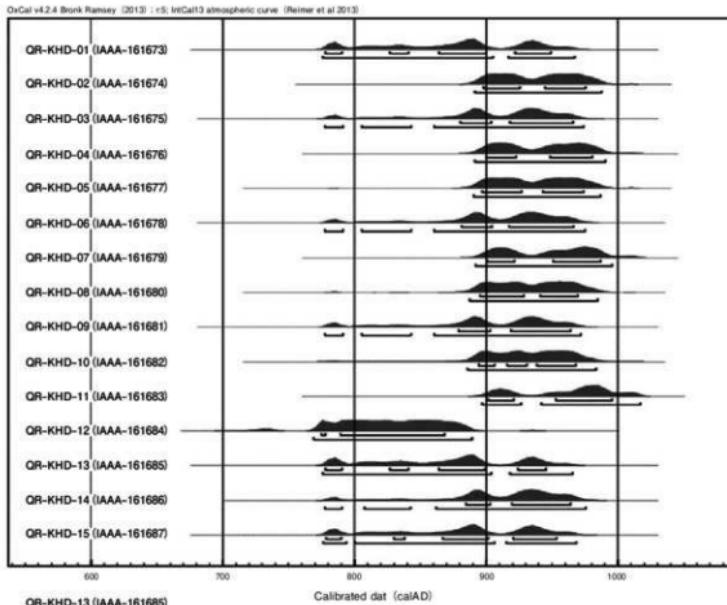


図23 マルチプロット図

写 真 図 版

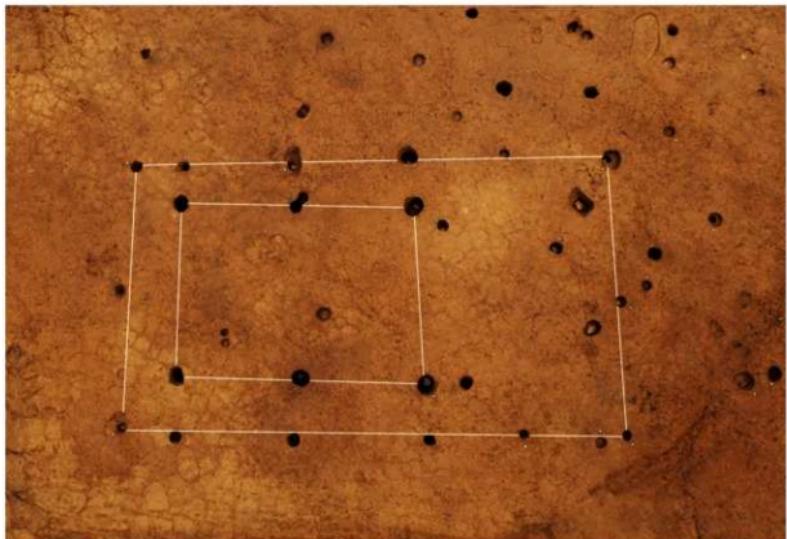
第 1 編 沼ヶ入遺跡 (2 次調査)



1 調査区遠景（西から）



2 調査区全景（上空西から）



3 3号建物跡全景（上空西から）



4 3号建物跡全景（南から）

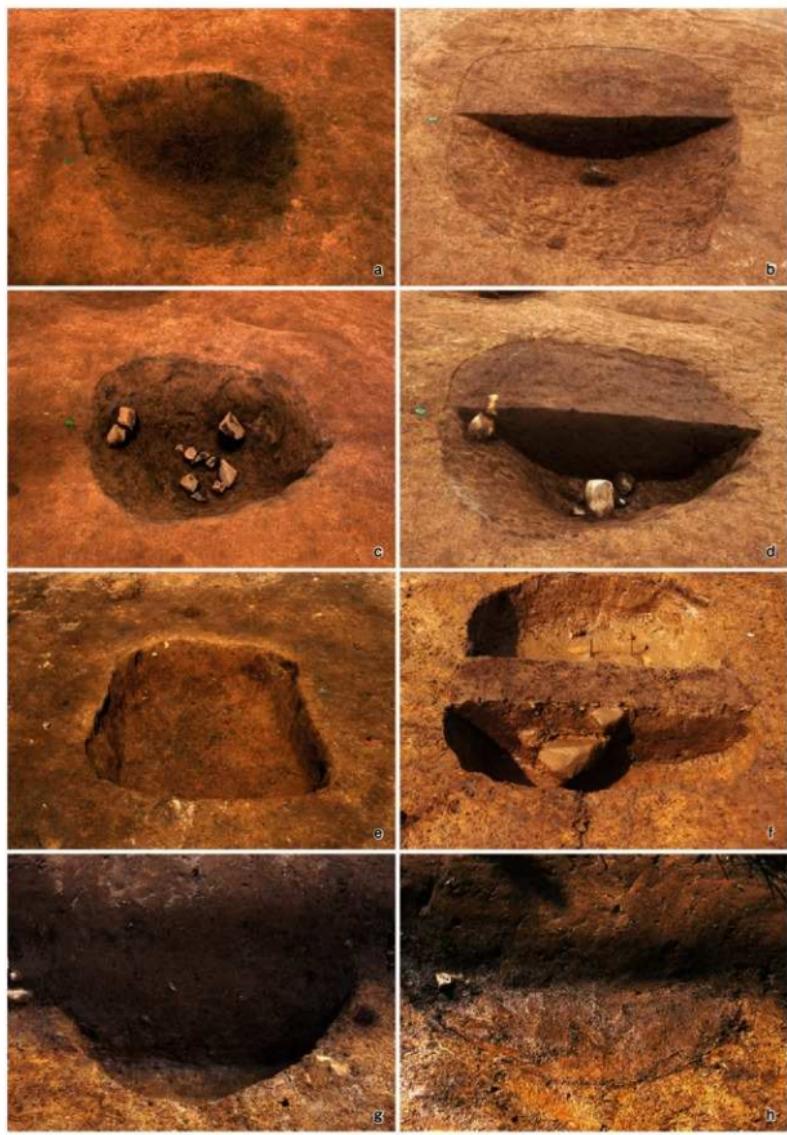


5 3号建物跡検出（北西から）



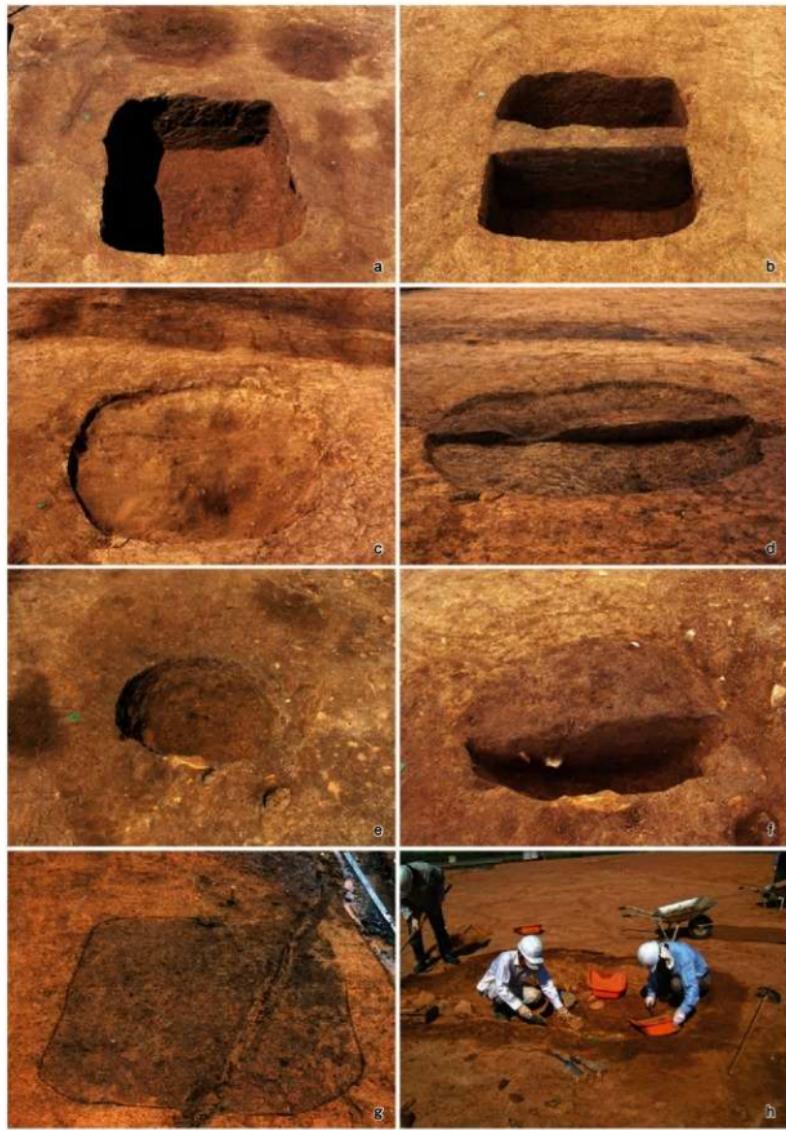
6 3号建物跡

a P 4断面（南から） b P 12断面（南から）
c P 18断面（南から） d 作業風景（南から）



7 10～13号土坑

- | | |
|-------------------|----------------|
| a 10号土坑全貌（南から） | b 10号土坑断面（北から） |
| c 11号土坑全貌（南から） | d 11号土坑断面（北から） |
| e 12号土坑全貌（南から） | f 12号土坑断面（北から） |
| g 13号土坑全貌・断面（北から） | h 13号土坑検出（北から） |



8 14～17号土坑

a 14号土坑全景（南から）	b 14号土坑断面（南から）
c 15号土坑全景（南から）	d 15号土坑断面（南から）
e 16号土坑全景（南から）	f 16号土坑断面（南から）
g 17号土坑横面（西から）	h 17号土坑作業風景（南から）

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）



9 17号土坑全景（西から）



10 17号土坑断面（西から）



11 17号土坑断面（南から）



12 1号溝跡全景（南から）

第1編 沼ヶ入遺跡（2次調査）



13 1号溝跡

a 1号溝跡南端（南から） b 1号溝跡断面（南から）
c 1号溝跡D-F'断面（南東から） d 1号溝跡E-E'断面（南東から）

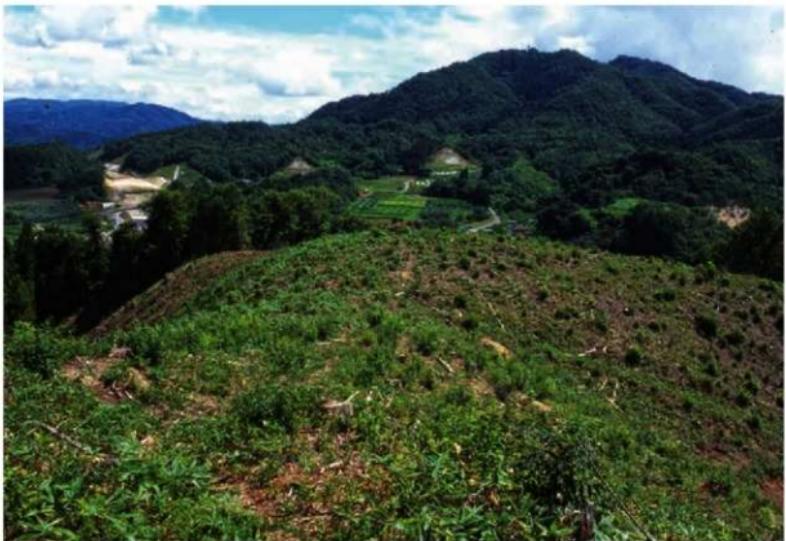


14 基本土層、作業風景

a 基本土層C-C'断面（東から） b 基本土層B-B'断面（西から）
c 作業風景（南から） d 作業風景（南西から）

写 真 図 版

第2編 上ノ台館跡 (1次調査)



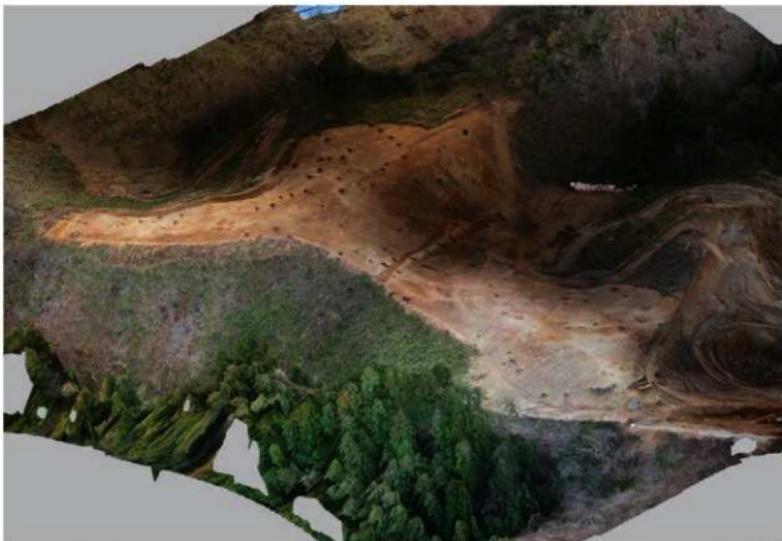
1 調査前状況（北から）



2 表土剥ぎ（北から）



3 調査区全景（上空南から）



4 調査区遠景（東から）

幸賀量の合成写真



5 調査区遠景（上空西から）

幸賀量の合成写真



6 1号木炭窯跡全景（南から）



7 1号木炭窯跡断ち割り全景（南東から）



8 1号木炭窯跡検出状況（東から）



9 1号木炭窯跡

a 断面（東から）
b 断面（南から）
c 作業風景（南から）
d 作業風景（南東から）

第2編 上ノ台跡（1次調査）



10 1～3号土坑

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a 1号土坑全貌（南から） | b 1号土坑断面（南から） |
| c 2号土坑全貌（南から） | d 2号土坑断面（東から） |
| e 3号土坑全貌（東から） | f 3号土坑断面（東から） |
| g 3号土坑作業風景（東から） | h 3号土坑作業風景（東から） |



11 1号溝跡検出状況（北から）

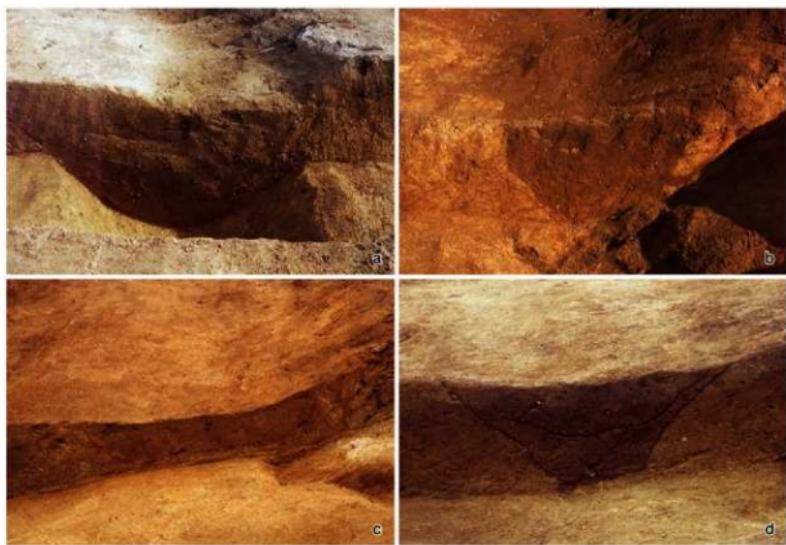


12 1号溝跡全景（北から）

第2編 上ノ台跡（1次調査）



13 1号溝跡尾根頂部（東から）



14 1号溝跡

a A - A' 断面 (西から)
b E - E' 断面 (西から)
c F - F' 断面 (西から)
d G - G' 断面 (西から)



15 1号溝跡西部検出状況（東から）



16 1号溝跡西部（北東から）

第2編 上ノ台跡（1次調査）



17 1号溝跡作業風景



18 1号溝跡



19 2号溝跡全景（東から）



20 2号溝跡

a 断面（東から）
c 作業風景（北から）
b 作業風景（東から）
d 作業風景（北東から）

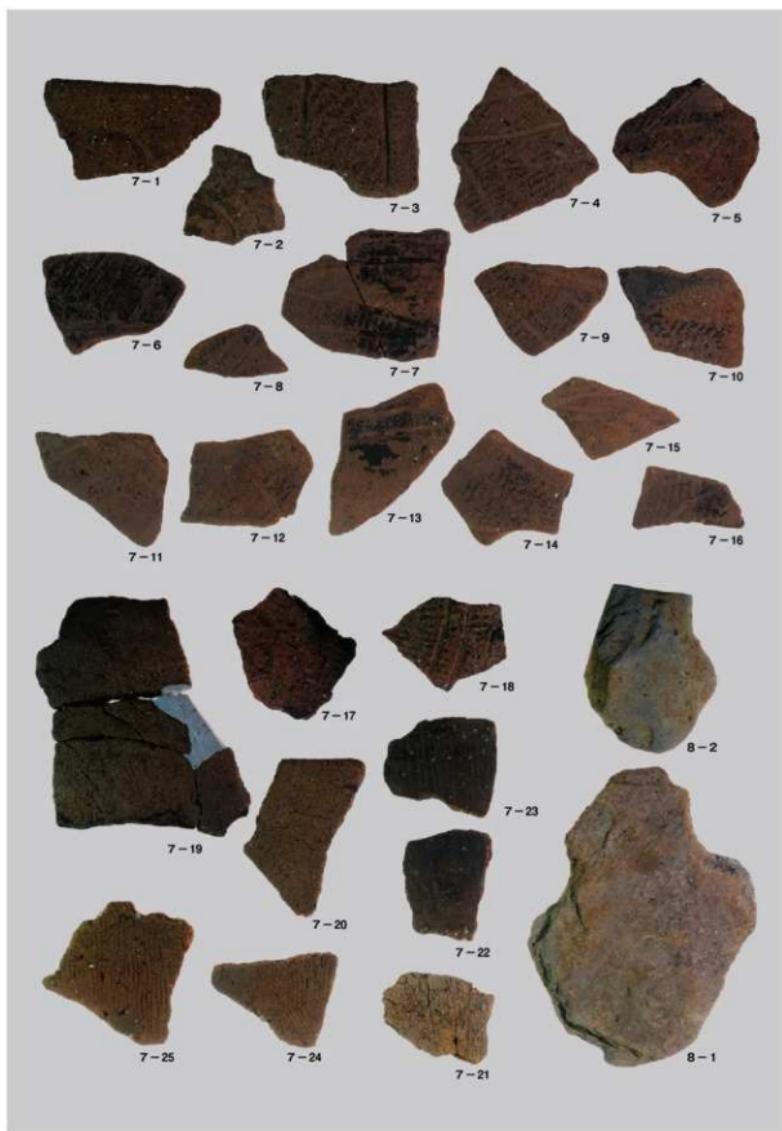


21 2号溝跡全景（北東から）



22 1号遺物包含層

a 全景（東から）
b 横面（北から）
c 作業風景（北から）
d 作業風景（北から）



23 1号遗物包含层出土遗物

写 真 図 版

第3編 川原田遺跡



1 調査区遠景（東から）



2 調査区遠景（西から）

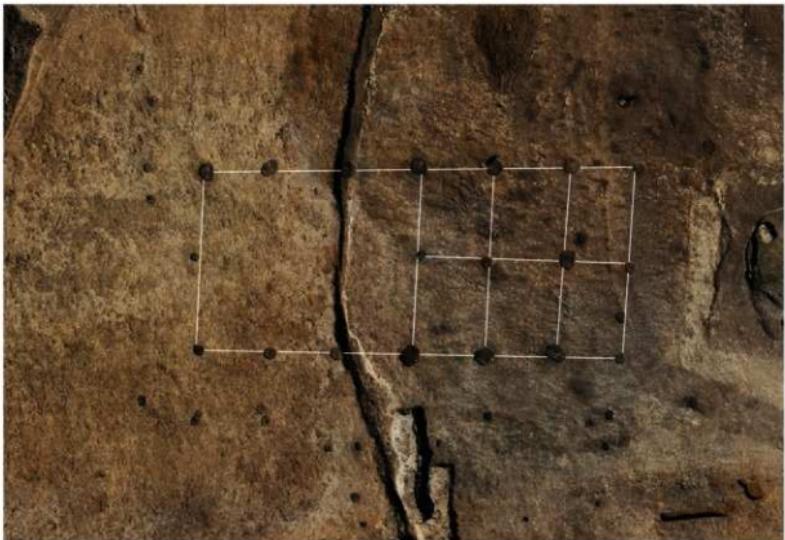


3 調査区全景（上空東から）



4 基本土層

a A-A'断面（南から）
b B-B'断面（南から）



5 1号建物跡検出（上空南から）



6 1号建物跡全景（南から）



7 1号建物跡 柱穴 (1)



8 1号建物跡 柱穴（2）

a: P 8断面（南から） b: P 8全景（南から）
c: P 13断面（南から） d: P 13全景（南から）
e: P 14断面（南から） f: P 14全景（南から）
g: P 17断面（南から） h: P 17全景（南から）



9 1号建物跡 柱穴 (3)



10 2号建物跡検出（上空南から）

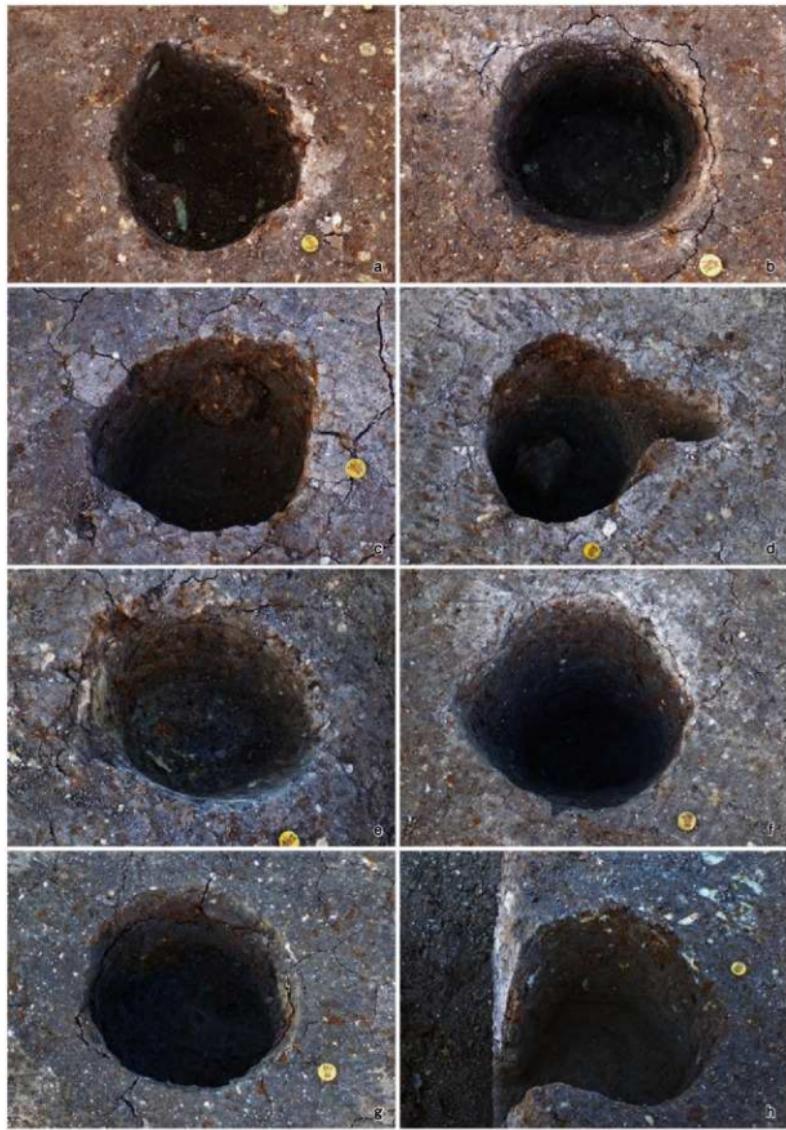


11 2号建物跡全景（南から）



12 2号建物跡 柱穴 (1)

a P 1 横面 (南から)
b P 1 全景 (南から)
c P 2 横面 (南から)
d P 3 全景 (南から)
e P 3 横面 (南から)
f P 5 全景 (南から)
g P 6 横面 (南から)
h P 6 全景 (南から)



13 2号建物跡 柱穴 (2)

a P 2 全景 (南から)
b P 4 全景 (南から)
c P 7 全景 (南から)
d P 8 全景 (南から)
e P 9 全景 (南から)
f P 10 全景 (南から)
g P 11 全景 (南から)
h P 12 全景 (南から)



14 1号柱列跡

a 梢出 (南から)
b P 1 斜面 (南から)
c P 1 全景 (南から)
d P 2 斜面 (南から)
e P 2 全景 (南から)
f P 3 斜面 (南から)
g P 3 全景 (南から)



15 1号井戸跡全景（東から）



16 1号井戸跡全景（北西から）



17 1号井戸跡

a 掘出（東から）
b 井戸枠（東から）
c 横棟木（東から）
d 横板（北西から）
e AA'断面（南東から）
f AA'断面（北東から）
g BB'断面（北から）
h 摄影（北から）



18 1~5・7号土坑

a 1号土坑全貌 (南から)	b 2号土坑全貌 (南東から)
c 3号土坑全貌 (北から)	d 7号土坑全貌 (南から)
e 4号土坑断面 (西から)	f 4号土坑全貌 (南から)
g 5号土坑断面 (西南から)	h 5号土坑全貌 (南から)



19 6・8~11号土坑

a 6号土坑断面 (西から)
b 6号土坑全貌 (南から)
c 8号土坑断面 (南から)
d 8号土坑全貌 (北東から)
e 9号土坑全貌 (西から)
f 10号土坑全貌 (北から)
g 11号土坑断面 (北から)
h 11号土坑全貌 (西から)



20 12~17号土坑

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a 12号土坑断面（北から） | b 12号土坑全景（東から） |
| c 13号土坑全景（南東から） | d 15号土坑全景（南から） |
| e 14号土坑断面（南東から） | f 14号土坑全景（南東から） |
| g 16号土坑全景（南から） | h 17号土坑全景（東から） |



21 2号溝跡（南から）



22 遺構外遺物出土状況

a I 6グリッド遺物出土状況（南から）
c E 3グリッド遺物出土状況（北西から）

b I 6グリッド遺物出土状況（南西から）
d 作業風景（南から）



23 1号性格不明遺構

a 全景 (南から)
 b 鋸面 (南から)
 c 断面 (西から)
 d 検出 (南から)
 e 作業風景 (南から)



24 小穴群検出状況（上空東から）



25 小穴群全景（南東から）



26 遺構內出土遺物（1）



27 遺構内出土遺物（2）



28 1号井戸跡出土遺物（1）

第3編 川原田遺跡



29 1号井戸跡出土遺物（2）



11-4



12-1

12-1 侧面

30 1号井戸跡出土遺物 (3)



31 1号井戸跡出土遺物（4）



22-11



22-12



22-13



22-15

32 遺構外出土遺物（1）



33 遺構外出土遺物（2）



23-9



23-12



24-5



24-7



24-13



24-16

34 遺構外出土遺物（3）



24-22



24-23



25-1



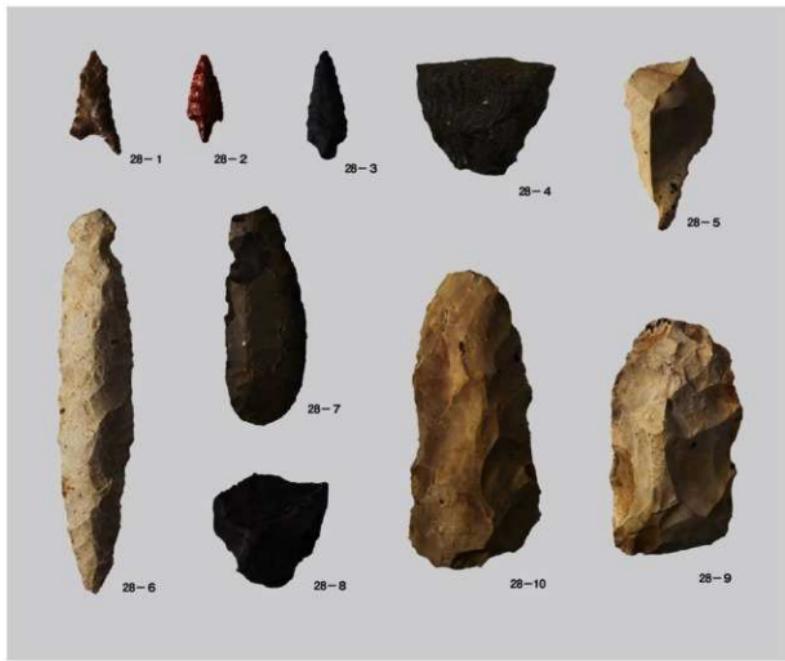
25-2

35 遺構外出土遺物（4）



36 遺構外出土遺物（5）

第3編 川原田遺跡



37 遺構外出土遺物（6）

写 真 図 版

第4編 馬場^{ばば}遺跡



1 調査区全景（南西から）



2 調査区全景（南東から）

第4編 馬場遺跡



3 基本土層

a A-A' 断面（南西から）
b B-B' 断面（南西から）



4 1～3号土坑

a 1号土坑全貌（南から） b 3号土坑全貌（南から）
c 2号土坑断面（南から） d 2号土坑全貌（南から）



5 小穴群（北から）



6 調査前風景（西から）



7 出土遺物

写 真 図 版

第5編 新宿 遺跡



1 調査区遠景（南東から）



2 調査区遠景（西から）



3 調査区遠景（南西から）



4 調査区遠景（北から）



5 調査区全景（上空東から）



6 基本土層（南から）



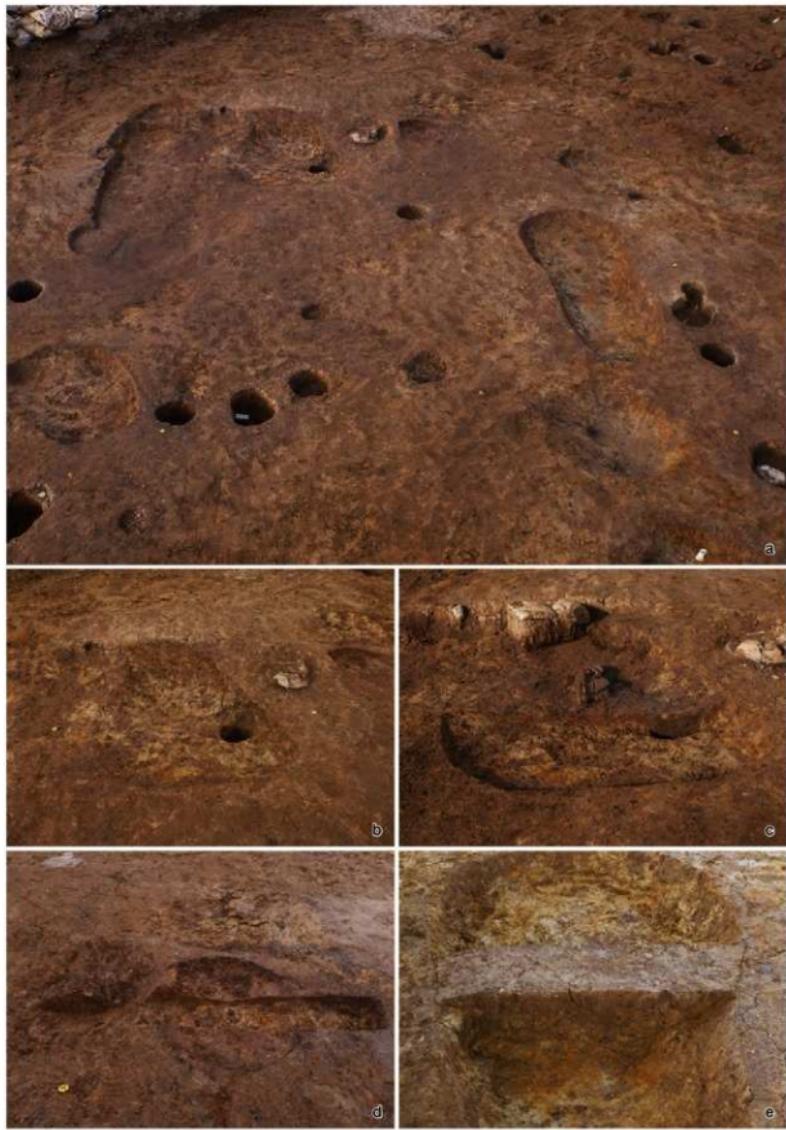
7 1号住居跡

a 全景（南から）
b 断面（南から）
c 断面（東から）
d カマド断面（南から）
e カマド全景（南から）



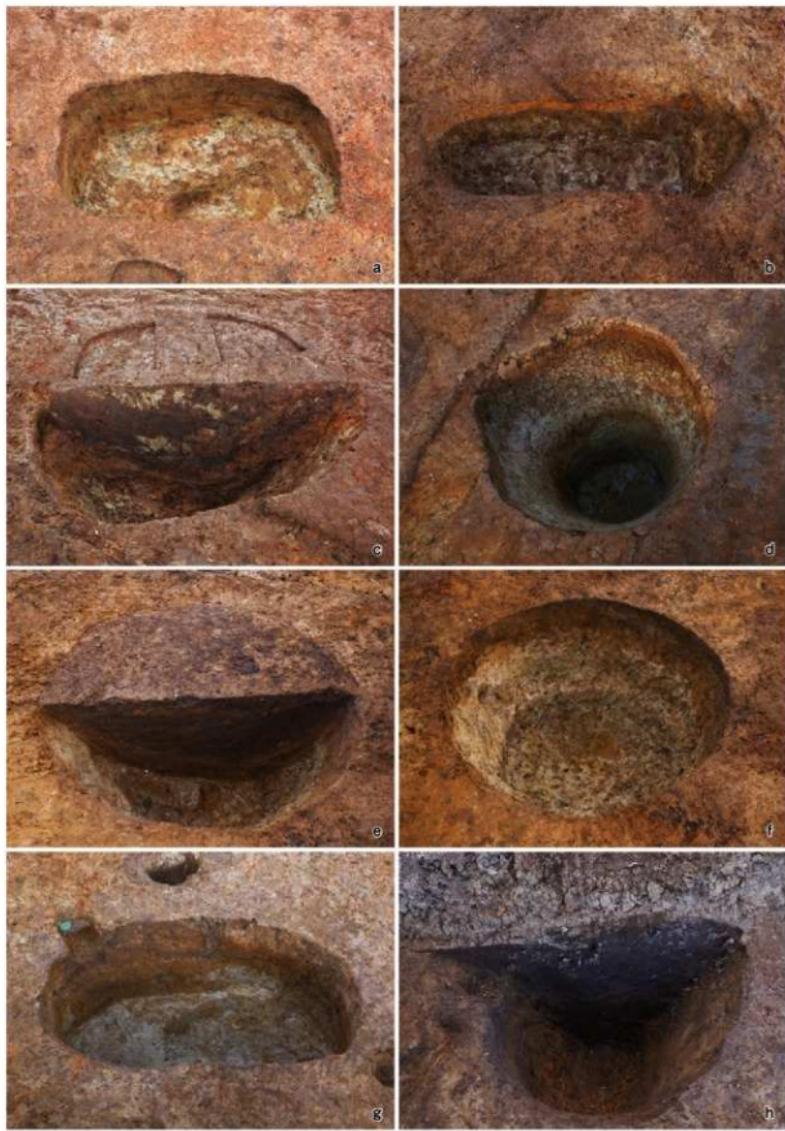
8 2号住居跡（1）

a 全景（南から）
b 断面（南東から）
c 断面（北東から）
d カマド検出（北東から）
e カマド断面（北東から）



9 2号住居跡（2）

a 掘削（南から）
b P 1 全景（南東から）
c P 1 断面（東から）
d カマド断面掘り（北東から）
e P 2 断面（東から）



10 1～6号土坑

- | | |
|----------------|-----------------|
| a 1号土坑全景 (南から) | b 2号土坑全景 (南西から) |
| c 3号土坑断面 (西から) | d 3号土坑全景 (南から) |
| e 4号土坑断面 (西から) | f 4号土坑全景 (北西から) |
| g 5号土坑全景 (南から) | h 6号土坑全景 (南東から) |



11 1号道路（1）

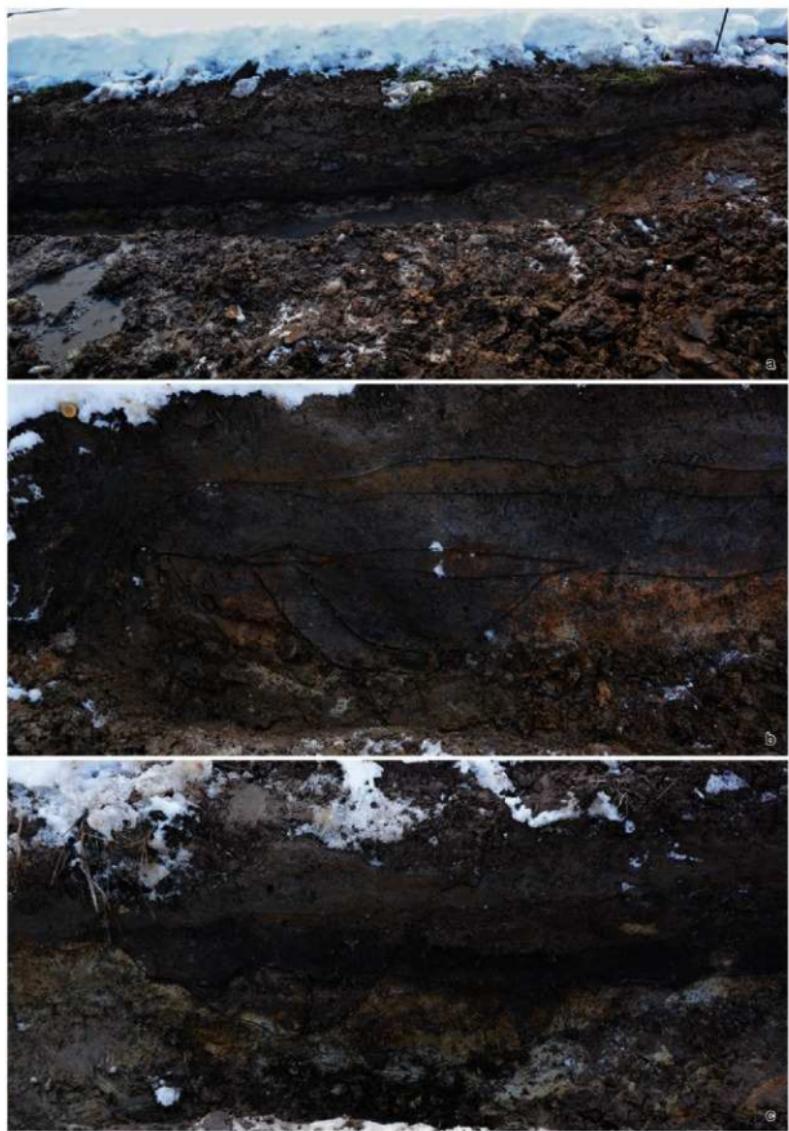
a 全景（南から）
b 倒溝検出（南から）
c 作業風景（南西から）
d B-B' 西側断面（南東から）
e B-B' 東側断面（南東から）



12 1号道路 (2)

a AA'断面(南から)
b BB'断面(南から)
c CC'断面(南西から)

第5編 新宿遺跡



13 2・3号道路

a 2号道路西側断面（北東かた）
b 2号道路側溝断面（北東かた）
c 3号道路側溝断面（北東かた）



14 1号堀跡（1）

a 路面全景（東から）
b 路面西側全景（東から）



15 1号掘跡（2）

a 路面西側溝検出（東から）
b 路面中央側溝検出（南西から）
c 路面中央側溝検出（西から）
d 路面西側断ち削り（西から）
e 路面中央断ち削り（東から）



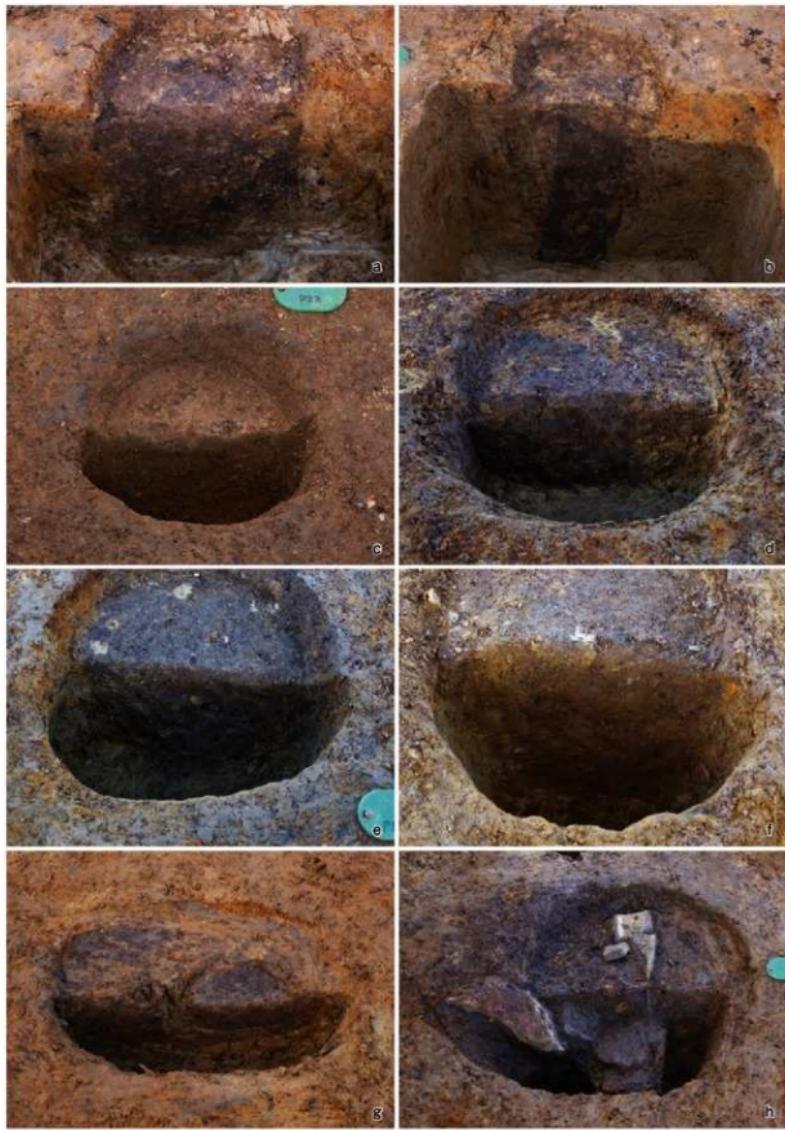
16 1号掘跡（3）

a 路面東側全景（東から）
b B'B'断面（西から）
c C'C'断面（南西から）
d 完掘全景（南西から）



17 2号溝跡

a 全景（東から）
b AA'断面（東から）
c CC'断面（東から）
d BB'断面（東から）
e DD'断面（東から）



18 小穴群 (1)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a P4 全景 (南から) | b P11 断面 (南から) |
| c P22 断面 (南から) | d P54 断面 (南東から) |
| e P55 断面 (南東から) | f P57 断面 (南東から) |
| g P125断面 (南から) | h P142断面 (南東から) |



19 小穴群（2）

- a P 148断面（東から）
b P 165全景（東から）
c P 219断面（南から）
d P 243遺物出土坑足（南東から）
e P 243全景（南東から）
f P 309全景（北から）
g P 123・333断面（東から）
h P 333・334・124断面（南から）



20 2号住居跡出土遺物



21 6号土坑・1号道路出土遺物



22 小穴群出土遗物（1）



23 小穴群出土遺物（2）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いっぽんこくどう115ごうそまふくしまどうろいせきはくつちょうさほうこく6						
書名	一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第523集						
編著者名	曾原祥夫 渡邊春喜 横松暁彦 廣川紀子 枝松雄一郎 由井文栄						
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財團 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL024-534-2733						
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111						
発行年月日	2018年2月28日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号						
沼ヶ入 (2次調査)	福島県伊達市盡山村 下小国字沼ヶ入・海渡	07213 00656	37°45'57"	140°35'23"	20160627 ~ 20160909	4,000m ²	道路(一般国道115号相馬福島道路)建設に伴う記録保存調査
上ノ台館跡 (1次調査)	福島県伊達市盡山村 下小国字上ノ台	07213 00654	37°46'12"	140°35'14"	20160801 ~ 20161209	8,700m ²	
川原田	福島県伊達郡桑折町 大字松原字川原田	07301 00103	37°49'46"	140°29'49"	20160516 ~ 20161027	3,700m ²	
馬場	福島県伊達郡桑折町 大字成田字馬場・福山	07301 00105	37°49'42"	140°30'28"	20161027 ~ 20161107	600m ²	
新宿	福島県伊達郡桑折町 大字成田字新宿・福山	07301 00104	37°49'39"	140°30'33"	20161017 ~ 20170127	1,850m ²	
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
沼ヶ入 (2次調査)	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡 1棟 土坑 8基	かわらけ	1次調査に続き、中世室町期の掘立柱建物跡などが発見され、屋敷地の全体像がほぼ判明した。		
上ノ台館跡 (1次調査)	城館跡	中世	木炭窯跡 1基 土坑 3基 溝跡(掘切) 2条 平場 1箇所	繩文土器 石器 土器 師 器 須恵器 土器 土坑 1基 溝跡 2条 穴 36基	中世城館跡に伴う遺構としては、尾根を分断する掘切と平場が発見された。他に繩文時代の捨て場、落し穴、平安時代の木炭焼成施設も確認された。		
川原田	狩場 集落 遺物包含層	縄文時代 古代 縄文~古代	掘立柱建物跡 2棟 井戸跡 1基 土坑 17基	土器 須恵器 土器 土坑 3基 溝跡 2条 穴 36基	縄文時代の狩場や平安時代の集落跡が確認された。平安時代の井戸跡は、井戸枠の一部が遺存していた。		
馬場	居住域	中・近世		土坑 3基 溝跡 2条 穴 36基	溝跡、土坑、小穴群が検出され、中世から近世にかけての居住域が確認された。		
新宿	狩場 集落 居住域 道	縄文時代 古代 中世 中世	堅穴住居跡 2軒 道跡 3条 堀跡 1条	須恵器 中世陶器 須恵器 中世陶器 近世陶器	奈良時代の小規模集落と、中世の道跡や堀跡及び街道筋の居住域とみられる多数の小穴群が確認された。		
要約	沼ヶ入遺跡と上ノ台館跡は、中村街道を挟んで向かい合う位置関係にある。沼ヶ入遺跡は中世室町期の屋敷跡、上ノ台館跡は中世城館跡であり、密接な関連で存在したと考えられる。 伊達郡桑折町の川原田遺跡は平安時代中頃の集落跡、新宿遺跡は「奥の大道」とみられる中世的主要道路と当時の居住域である。また、新宿、馬場遺跡の周辺には古代の須恵器窯跡、近世の陶器窯跡が点在し、窯跡との関連資料が出土している。						

*総面積度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第523集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 6

沼ヶ入遺跡（2次調査）

上ノ台館跡（1次調査）

川原田遺跡

馬場遺跡

新宿遺跡

平成30年2月28日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 (〒960-8115) 福島県福島市山下町1-25
発 行	福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団 (〒960-8116) 福島市春日町5-54
印 刷	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所 (〒960-8584) 福島市黒岩字桜平36 八幡印刷株式会社 (〒970-8026) いわき市平字田町82-13